鹿角市文化財調査資料72

特別史跡
大湯環状列石

発掘調査報告書(19)

2003－3

秋田県鹿角市教育委員会

ＰＬ１　大湯環状列石・調査区全景

序

特別史跡大湯環状列石は、昭和６年の発見以来、環状列石のもつ特異な形態が縄文時代の精神文化を解く大きな手がかりとなるべく注目され、これまでに研究者や遺跡を訪れる多くの方々を魅了してきました。

鹿角市教育委員会では、これまでの地道な調査と保護活動を行ってこられた先人の思いを胸に、昭和59年より本格的な発掘調査を行ってまいりました。「光陰矢のごとし」と申しますが、以来、調査も早19年目を迎え、遺跡保存を最優先とした調査へと移行している中で、平成15年度で調査も20年目といういわば成人式を迎えようとしております。この節目の年に大湯環状列石の調査も今、生まれ変わろうとし、遺跡解明へのより貴重な資料収集を行っていく方針であります。

本報告書は、このことを踏まえて行った調査成果をまとめたものであり、縄文文化の研究、文化財保存の資料としてご活用して頂ければ幸いに存じます。

終わりに、発掘調査ならびに環境整備に際し、多大なご協力とご指導を賜わりました文化庁・秋田県教育委員会・関係機関各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の調査につきましても一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

鹿角市教育委員会

教育長　織田育生

例　　言

1．本報告書は、平成14年度に国ならびに秋田県の補助を得て実施した特別史跡大湯環状列石発掘調査の成果をまとめたものである。

2．調査の概要については、機会あるごとに公表してきたが、本報告書を正式なものとする。

3．本報告書の執筆は、花海が行った。

4．出土資料等の鑑定・分析については、下記の方々に依頼・委託した。

石器類の石質鑑定 …… 秋田県立小坂高等学校　教諭　鎌　田　健　一

出土土器破片及び史跡周辺出土粘土の胎土分析 ……

㈱大館分析技術センター　主任　田　村　英　雄

5．土層・土器等の色調の記載には『新版　標準土色帖』（日本色彩研究所）を使用した。

6．遺物の実測、拓本、トレース等の一連の作業は、調査員の指導のもとに調査補助員、整理作業員が行った。

7．本報告書に掲載した図版にはスケールを付した。なお写真図版については任意の縮尺とした。

8．本報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の「毛馬内」を使用した。

9．本報告書に使用した用語については、統一するように努めたが、数度にわたり使用されるものについては簡略しているものもある。なお、図版ならびに写真図版で下記のような記号を使用した。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＢ…建物跡　ＳＫ…土坑　ＳＫ(Ｆ)…フラスコ状土坑

ＳＫ(Ｔ)…Ｔピット　ＳＸ(ｆ)…焼土遺構　ＳＸ(Ｓ)…配石遺構・配石列

Pit…柱穴状ピット　ＳＤ…溝状遺構　（　）内数字は重複関係にある遺物点数

…遺構確認面以下の土層　…焼土　…柱痕　…礫群　…磨面

10．発掘調査並びに報告書作成にあたって、下記の方々よりご指導・ご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

阿部義平、遠藤正夫、本中　眞、坂井秀弥、岡田康博、平澤　毅、葛西　励、熊谷常正
小林達雄、沢田正昭、鈴木克彦、富樫泰時、高田和徳、田中哲雄、林　謙作、村越　潔
安村二郎、成田滋彦、中村良幸、佐藤智雄、岡村道雄、戸村正己

本　文　目　次

序

例　言

本文目次

図版・写真図版・表目次

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地 …… 1

2．遺跡の層序と地形 …… 3

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項 …… 9

2．調査の方法 …… 10

3．調査の経過 …… 10

第Ⅲ章　D_9区縄文時代

検出遺構と出土遺物

1．竪穴住居跡 …… 13

2．柱穴状ピット …… 25

3．焼土遺構 …… 30

4．土　坑 …… 35

(1)　Tピット …… 35

(2)　土　坑 …… 35

(3)　フラスコ状土坑 …… 36

5．礫　群 …… 51

6．遺構外出土遺物 …… 53

(1)　土　器 …… 53

(2)　石　器 …… 74

(3)　土製品 …… 80

(4)　石製品 …… 84

第Ⅳ章　G_3区縄文時代

検出遺構と出土遺物

1．焼土遺構 …… 85

2．土　坑 …… 86

(1)　Tピット …… 86

(2)　フラスコ状土坑 …… 88

3．遺構外出土遺物 …… 89

(1)　土　器 …… 89

(2)　石　器 …… 92

(3)　土製品 …… 94

(4)　石製品 …… 95

第Ⅴ章　歴史時代の遺構

1．竪穴住居跡・土坑 …… 96

2．道路状遺構 …… 99

3．遺構外出土遺物 …… 100

第Ⅵ章　自然科学的調査 …… 101

調査区出土土器破片及び

史跡出土粘土の胎土分析

第Ⅶ章　調査のまとめ …… 103

参考文献 …… 106

報告書抄録 …… 109

写真図版 …… 110

図版・写真図版・表目次

図　版　目　次

第１図　遺跡の位置と立地 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　D_9区基本層序 …… 5
第４図　G_3区基本層序(1) …… 6
第５図　G_3区基本層序(2) …… 7
第６図　G_3区地形復元図 …… 8
第７図　D_9区遺構配置図 …… 11
第８図　D_9区第１号竪穴住居跡実測図 …… 14
第９図　D_9区第２号竪穴住居跡実測図 …… 15
第10図　D_9区第３号竪穴住居跡実測図 …… 17
第11図　D_9区第４号竪穴住居跡実測図 …… 18
第12図　D_9区第５号竪穴住居跡実測図 …… 20
第13図　D_9区第６号竪穴住居跡実測図 …… 21
第14図　D_9区第７号竪穴住居跡実測図 …… 22
第15図　D_9区第８号竪穴住居跡実測図 …… 23
第16図　D_9区第２号竪穴住居跡出土土器実測図(1) … 24
第17図　D_9区第５号、７号、８号竪穴住居跡出土土器実測図(2) … 25
第18図　D_9区竪穴住居跡出土土器拓影図 … 26
第19図　D_9区竪穴住居跡出土遺物実測図(1) … 27
第20図　D_9区竪穴住居跡出土遺物実測図(2) … 28
第21図　D_9区竪穴住居跡出土遺物実測図(3) … 29
第22図　D_9区竪穴住居跡出土遺物実測図(4) … 30
第23図　D_9区柱穴状ピット実測図 …… 30
第24図　D_9区柱穴状ピット断面図(1) …… 31
第25図　D_9区柱穴状ピット断面図(2) …… 32
第26図　D_9区焼土遺構実測図 …… 34
第27図　D_9区Ｔ－ピット実測図 …… 35
第28図　D_9区土坑実測図 …… 36
第29図　D_9区第１号、２号、４号、５号フラスコ状土坑、第３号土坑実測図 …… 37
第30図　D_9区フラスコ状土坑実測図 …… 39
第31図　D_9区フラスコ状土坑出土土器実測図(1) … 40
第32図　D_9区フラスコ状土坑出土土器実測図(2) … 41
第33図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図(1) … 42
第34図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図(2) … 43
第35図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図(3) … 44
第36図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図(4) … 45
第37図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図(5) … 46
第38図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図(1) … 47
第39図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図(2) … 48
第40図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図(3) … 49
第41図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図(4) … 50
第42図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図(5) … 51
第43図　D_9区礫群実測図(1) …… 52
第44図　D_9区礫群実測図(2) …… 53
第45図　D_9区土器片出土分布状況 …… 54
第46図　D_9区復元可能土器出土分布状況 … 55
第47図　D_9区遺構外出土土器実測図(1) …… 61
第48図　D_9区遺構外出土土器実測図(2) …… 62
第49図　D_9区遺構外出土土器実測図(3) …… 63
第50図　D_9区遺構外出土土器拓影図(1) …… 65
第51図　D_9区遺構外出土土器拓影図(2) …… 66
第52図　D_9区遺構外出土土器拓影図(3) …… 67
第53図　D_9区遺構外出土土器拓影図(4) …… 68
第54図　D_9区遺構外出土土器拓影図(5) …… 69
第55図　D_9区遺構外出土土器拓影図(6) …… 70
第56図　D_9区遺構外出土土器拓影図(7) …… 71
第57図　D_9区遺構外出土土器拓影図(8) …… 72
第58図　D_9区遺構外出土土器拓影図(9) …… 73
第59図　D_9区石器出土分布状況 …… 75
第60図　D_9区遺構外出土石器実測図(1) …… 77
第61図　D_9区遺構外出土石器実測図(2) …… 78
第62図　D_9区遺構外出土石器実測図(3) …… 79
第63図　D_9区土製品出土分布状況 …… 80
第64図　D_9区遺構外出土土製品実測図 …… 81
第65図　D_9区遺構外出土土器片利用土製品拓影図 … 82

第66図　D_9区遺構外出土土器片利用土製品拓影図 … 83
第67図　D_9区石製品出土分布状況…… 84
第68図　D_9区遺構外出土石製品実測図…… 84
第69図　G_3区焼土遺構実測図 ……85
第70図　G_3区Ｔ－ピット実測図…… 87
第71図　G_3区フラスコ状土坑実測図 ……88
第72図　G_3区遺構外出土土器拓影図…… 91
第73図　G_3区遺構外出土石器実測図 ……93
第74図　G_3区遺構外出土土製品実測図 ……95
第75図　D_9区第10号竪穴住居跡実測図…… 96
第76図　D_9区第11号竪穴住居跡実測図…… 97
第77図　D_9区第12号竪穴住居跡実測図…… 98
第78図　D_9区第13号、14号竪穴住居跡実測図… 99
第79図　G_3区第１号、２号溝状遺構実測図… 100
第80図　D_9区遺構外出土土器実測図 …… 100

写真図版目次

PL１　大湯環状列石調査区全景
PL２　万座環状列石、G_3区、D_9区全景 … 110
PL３　G_3区、D_9区全景 ……111
PL４　D_9区遺構確認状況……112
PL５　D_9区遺構確認状況……113
PL６　D_9区Ａトレンチ、第１・４号竪穴住居跡 …114
PL７　D_9区Ｃトレンチ、第２号竪穴住居跡、土坑遺構確認状況 ……115
PL８　D_9区Ｉトレンチ、第３・７号竪穴住居跡 …116
PL９　D_9区Ｃトレンチ、フラスコ状土坑、竪穴住居跡、作業風景、現地説明会風景 ……117
PL10　D_9区第６号竪穴住居跡遺物出土状況、実測状況 ……118
PL11　D_9区第２号竪穴住居跡出土土器(1)…119
PL12　D_9区第１・２号竪穴住居跡出土石器　120
PL13　D_9区第２号竪穴住居跡出土石器……121
PL14　D_9区第３・４・５号竪穴住居跡出土石器　122
PL15　D_9区第２・５号竪穴住居跡出土土器、石器 123
PL16　D_9区第１・２号竪穴住居跡出土土器 …124
PL17　D_9区第２号竪穴住居跡、第１号土坑、遺構内出土土器(2) …125
PL18　D_9区第２号土坑出土土器(4)……126
PL19　D_9区第２号土坑出土土器(3)……127
PL20　D_9区第１号土坑出土土器……128
PL21　D_9区第１号土坑出土土器、石器……129
PL22　D_9区第２号土坑出土土器……130
PL23　D_9区第１号土坑出土土器……131
PL24　D_9区第１・２号土坑出土土器 ……132
PL25　D_9区第２号土坑、遺構外出土石器…133
PL26　D_9区第２号土坑、遺構内出土土器、石器、土製品 …134
PL27　D_9区第２・４号土坑、第６・７号フラスコ状土坑出土土器…135
PL28　D_9区第２号土坑出土石器、土製品…136
PL29　D_9区土坑出土土製品、石製品……137
PL30　D_9区遺構外出土土器……138
PL31　D_9区遺構外焼土跡出土土器……139
PL32　D_9区遺構外出土土器(1)……140
PL33　D_9区遺構外出土土器(2)……141
PL34　D_9区遺構外出土土器(3)……142
PL35　D_9区遺構外出土土器(4)……143
PL36　D_9区遺構外出土土器(5)……144
PL37　D_9区遺構外出土土器(6)……145
PL38　D_9区遺構外出土土器(7)……146
PL39　D_9区遺構外出土土器(8)……147
PL40　D_9区遺構外出土土器(9)……148
PL41　D_9区遺構外出土土製品、石製品……149
PL42　D_9区遺構外出土土器片利用土製品…150
PL43　G_3区フラスコ状土坑、Ｔ－ピット…151
PL44　G_3区遺構確認状況、Ｔ－ピット……152
PL45　G_3区遺構確認状況……153
PL46　G_3区遺構外出土土器……154
PL47　G_3区遺構外出土、石器、土製品……155

表　目　次

第１表　D_9区柱穴状ピット一覧表…… 33
第２表　遺構外出土土器（復元、図化土器）観察表 … 64

第Ⅰ章　遺跡の環境

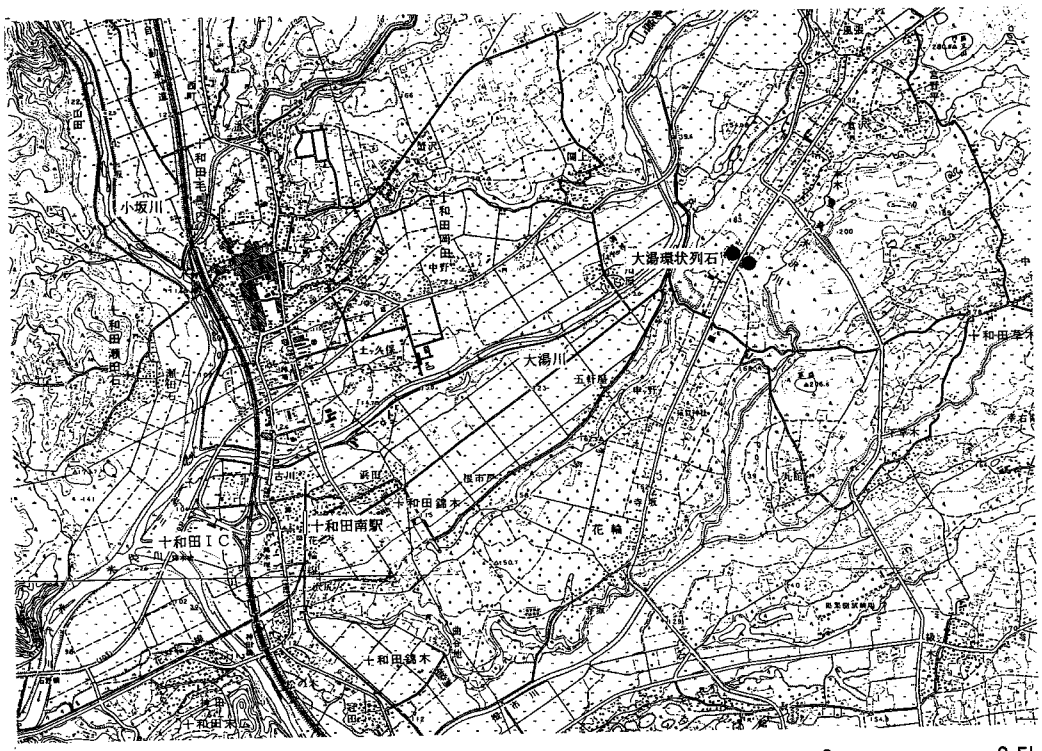
1．遺跡の位置と立地（第１図、２図）

鹿角市は秋田県の北東部に位置し、豊かな自然を有する十和田八幡平国立公園の南玄関口として、数多くの人々に親しまれてきた。東方の奥羽山脈、西方の高森山地と山々に囲まれた美しい鹿角盆地を一望すると、至る所に段丘地形を有する複雑な地形が形成されていることがわかる。

これらの段丘は、十和田湖の度重なる火山活動と鹿角盆地のほぼ中央を流れる米代川を本流とする多くの支流による浸食によって形成されたもので、沖積面との比高差30m程の舌状台地を作り出している。この舌状台地上の至る所に縄文時代をはじめとする多くの遺跡が点在し、その数は現在416ヵ所を数える。

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部に位置し、大湯川と豊真木沢川の浸食によってつくり出された全長5.6km、幅0.5～1.0km、標高150m～190mの舌状台地、通称「中通台地」のほぼ中央部に立地している。

遺跡に立つと、鹿角盆地を取り囲む山並みを四方に見渡すことができ、自然の営みや季節の



第１図　遺跡の位置と立地　　0　2.5km

F6区
D9区
F1区
F5区
G3区
D1区
F4区
F3区
D2区
D3区
F2区
D5区
D4区
E4区
D8区
万座環状列石
G2区
D6区
D7区
G1区
C1区
E1区
B2区
B4区
B1区
B3区
A1区
A2区
A3区
0
200m

第2図　調査区位置図

移り変わり、天体の動き等が一目で感じとることができる。また、遺跡ののる台地斜面の至るところには今でも豊かな水量を保つ涌き水が点在し、夏から秋にかけて、肥沃な黒土の栄養分を充分に吸い上げたクリやツノハシバミといった堅果類の甘い香りが遺跡全体を覆う。台地西側下には豊かな川の幸や白鳥等の渡り鳥が飛来する大湯川が流れるなど、縄文時代の景観をそのまま体感することができる。

大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後口に所在し、ＪＲ東日本鉄道花輪線・十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田ＩＣの北東3.7km、北緯40度16分20秒、東経140度48分49秒の地点である。

発掘調査区は、万座環状列石周辺南西側地区（G_3区）及び西側台地縁辺部（D_9区）であり、史跡の公有化以前は果樹園、雑種地であった。（花 海）

2．遺跡の層序と地形

遺跡の層序（第３図）

各調査地の基本層序は下記のとおりである。

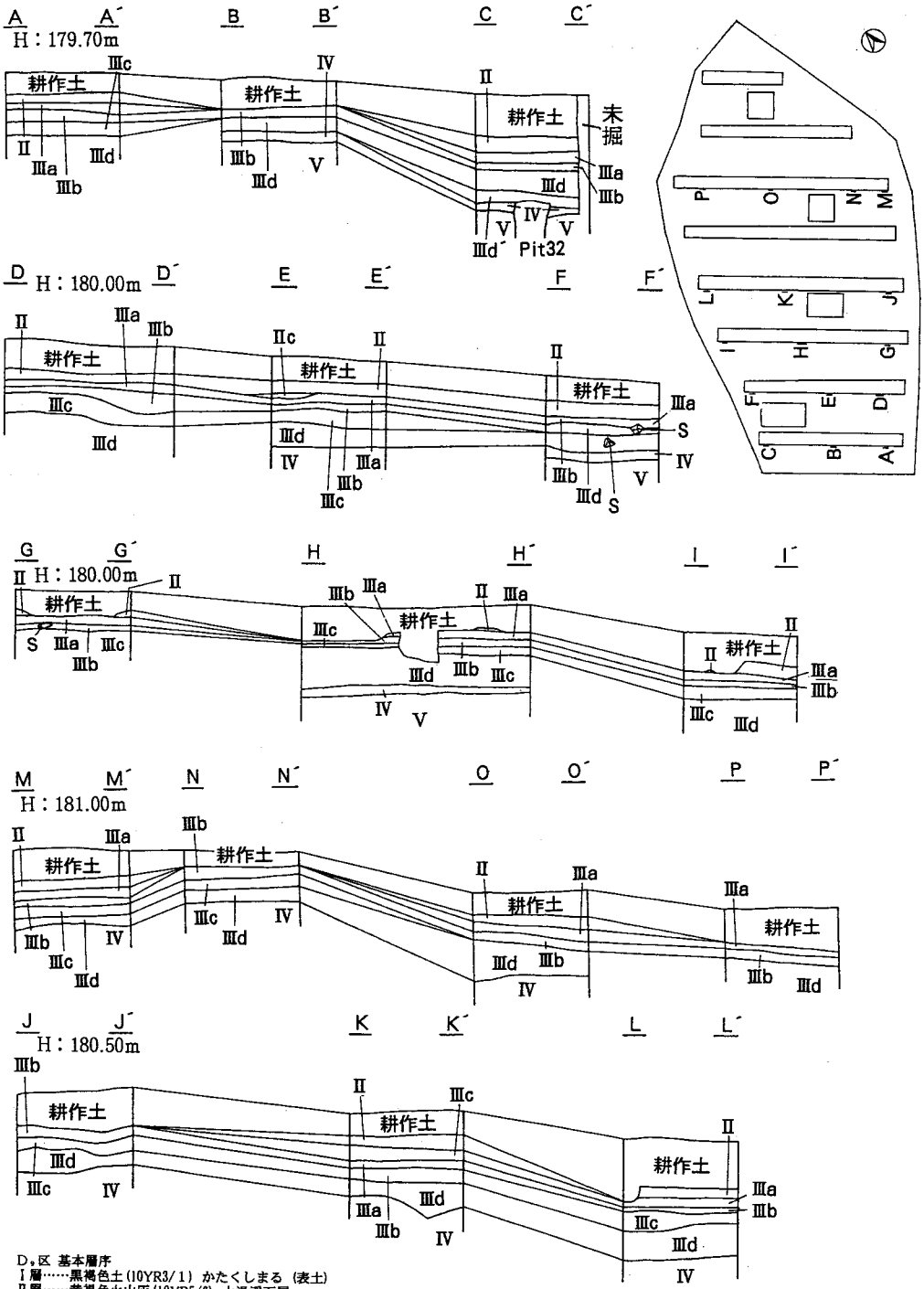
第Ⅰ層は、大湯浮石層までの堆積層で、６cm～50cmの厚さで各調査区に堆積する耕作土である。第Ⅱ層は、大湯浮石層（十和田ａ降下火山灰）で各調査区にみられるが、後世の撹乱により消失している地域もある。色調や粒子の粗細によって分層することが出来る。Ⅱａ層は粒子の極めて細かな火山灰層、Ⅱｂ層は粒径 0.5cm～４cmの明黄褐色の浮石（軽石）層である。層の厚さはⅡａ層で平均４cm程、Ⅱｂ層で平均10cm程を測る。なお、Ⅱ層は一括図化した。

第Ⅲ層は、大湯浮石層から地山漸位層（第Ⅳ層）までの堆積層で、色調・堅さ・混入物の量によって４層に分層することができる。Ⅲａ層は混入物をほとんど含まない黒色土層で、堅く締まっている。Ⅲｂ層も黒色土層であるが、堅さや粗密度からⅢａ層とは区別される。Ⅲａ、Ⅲｂ層ともに遺物包含層である。Ⅲｃ層は、極暗褐色土層でチョコレート色に近い色調である。縄文時代後期中葉の遺構である環状配石遺構は本層が構築面である。Ⅲｄ層は、地山粒を少量含んだ黒褐色土層で、遺物包含層及び縄文時代後期前葉の遺構確認面である。万座・野中堂環状列石は本層が構築面である。また本調査地では、これまで確認されてきたⅢｃ層よりⅢｄ層に近いがⅢｄ層とは異なる暗褐色のⅢｄ′層が広範囲にみられ、遺構確認に苦慮した。Ⅲｄ′層は、これまでの調査でも確認されてきたが、特に遺構分布域に多くみられる傾向がある。遺構構築との関連が示唆される層である可能性がある。

第Ⅳ層は、地山直上の暗褐色土層で地山ブロックを多量に含み、本調査によって確認された大半の竪穴住居跡の床面が本層となっている。第Ⅴ層は、申ケ野火山灰と呼ばれる黄褐色土層で、十和田火山の火砕流にあたる。Ｔピット、フラスコ状土坑等の遺構の掘り込みはすべてこ

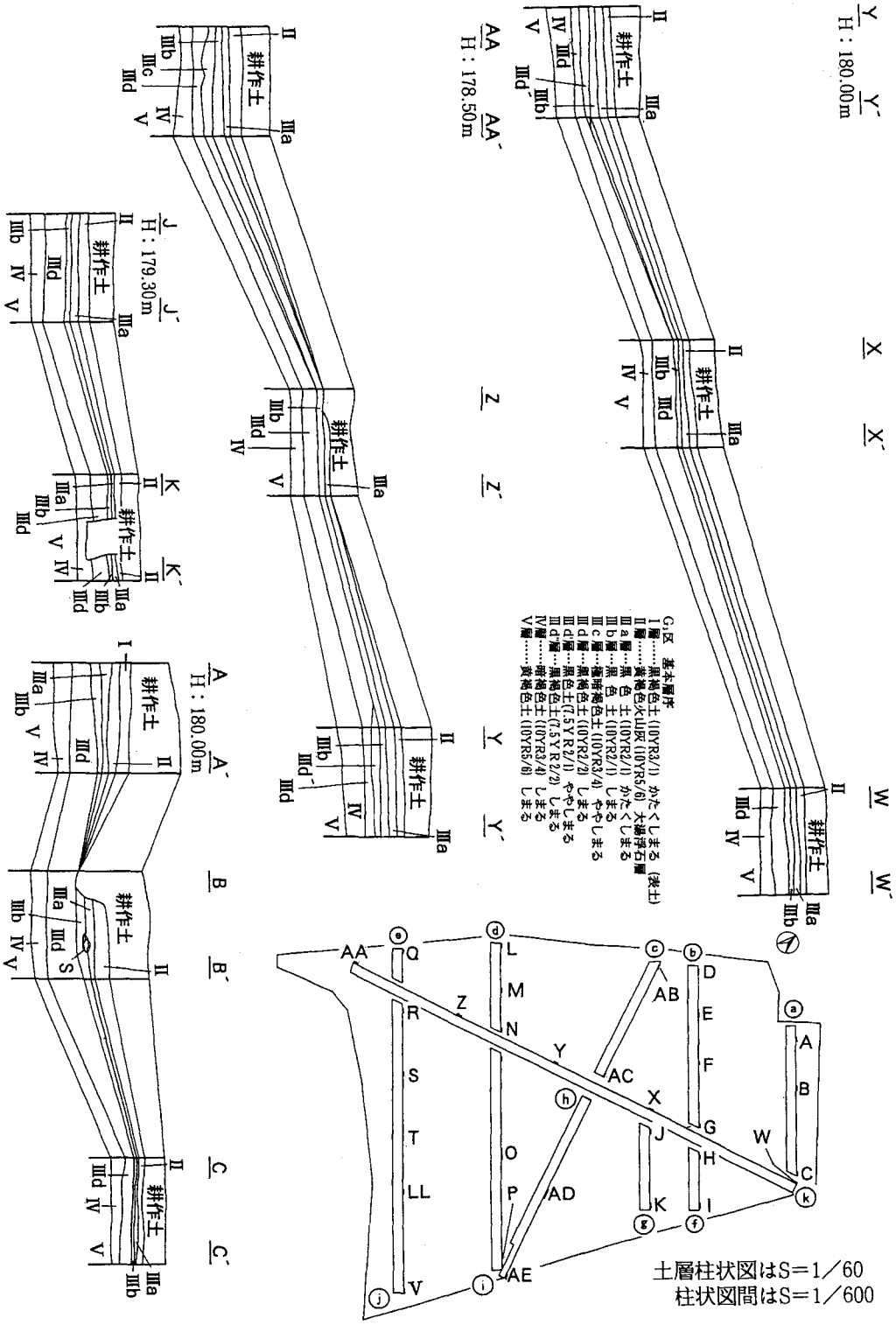
の層まで達している。

調査地は全体的にもともとは起伏に富んでいたものと判断され、縄文時代の遺構構築方法は各遺構の性格・用途にあわせた地形利用をしていたものと思われる。

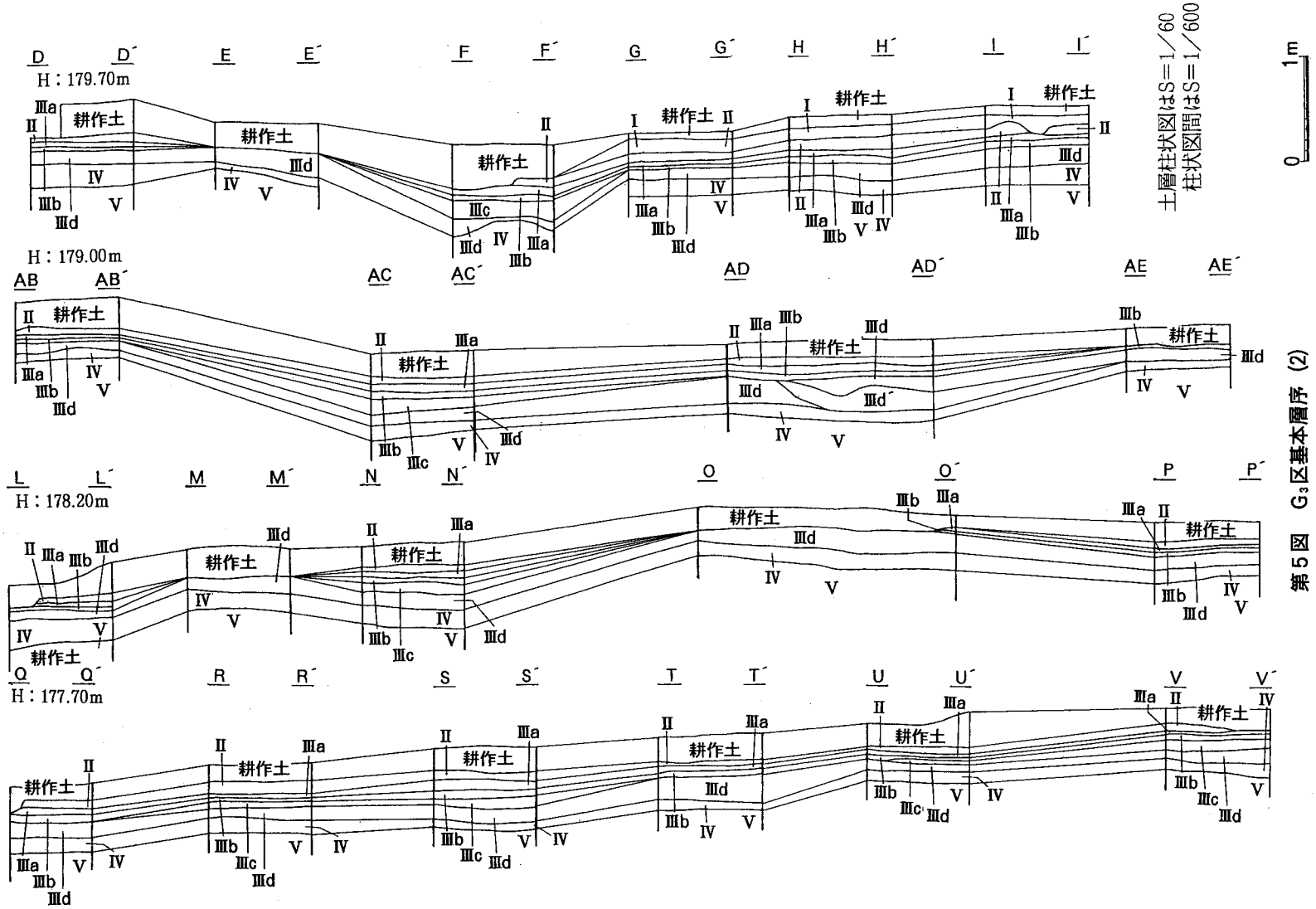


第３図　D₉区基本層序

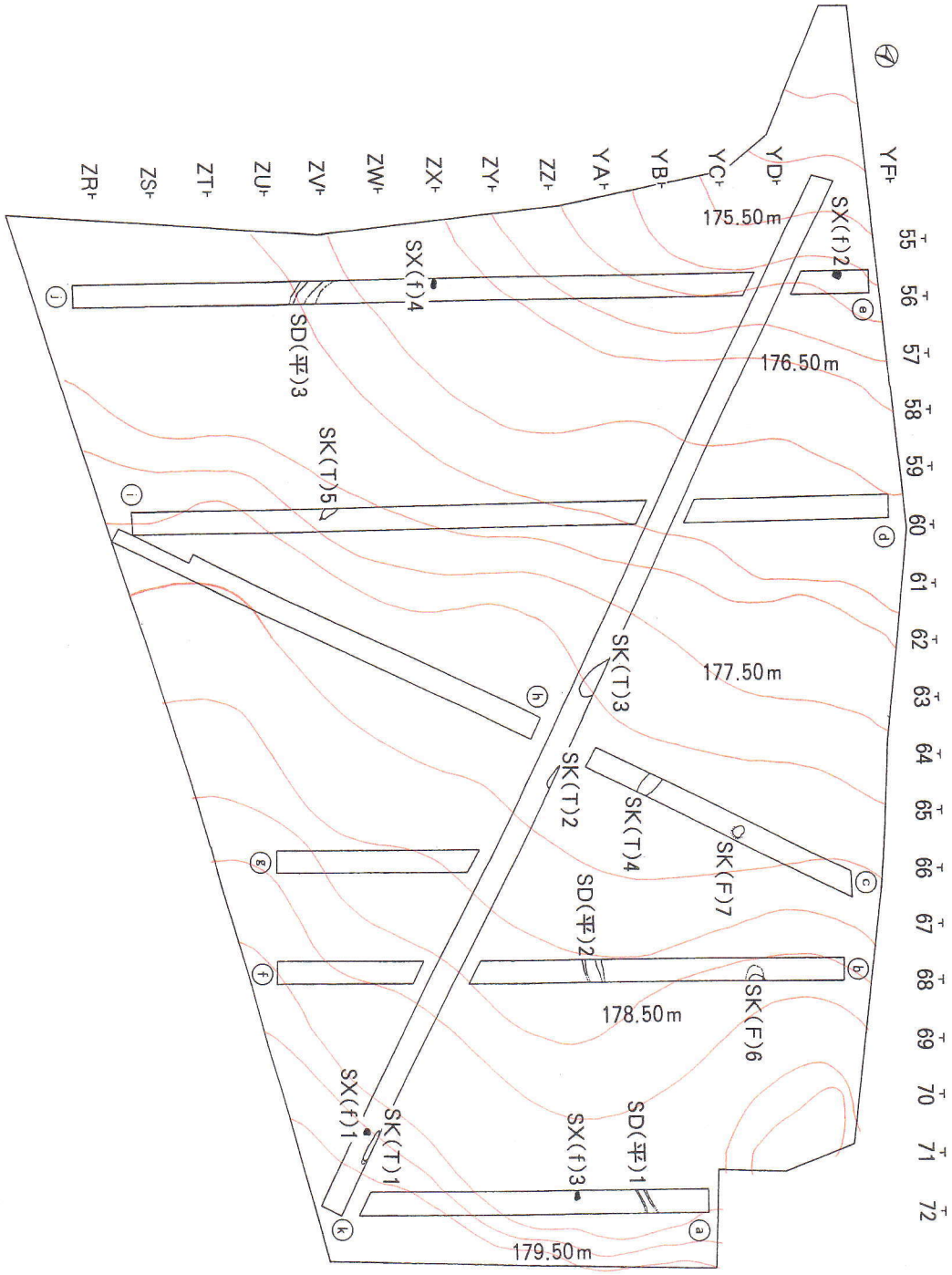
0　2m



第４図　G₃区基本層序（1）



第5図　G₃区基本層序 (2)



第６図　G₃区地形復元図

0　20m

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項

1．遺　跡　名　　特別史跡大湯環状列石（遺跡番号：123）

2．調査目的　　万座環状列石周辺南西側地区及び西側台地縁辺部の遺構・遺物分布状況及び旧地形の把握を目的とした。

3．調　査　地　　鹿角市十和田大湯字万座26番地ほか（調査地名：G_3区、D_9区）

4．発掘調査面積　　G_3区・785㎡　D_9区・760㎡　　合 計 1,545㎡

5．調査期間　　発掘調査　　平成14年５月21日～平成14年11月６日

埋め戻し作業　　平成14年11月29日

整理・報告書作成　　平成14年10月１日～平成15年３月31日

6．調査主体者　　鹿角市教育委員会

7．調査担当者　　鹿角市出土文化財管理センター

主任　花　海　義　人

8．調査参加者　　調査指導　　武　藤　祐　浩（秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室学芸主事）

調 査 員　　鎌　田　健　一（秋田県立小坂高等学校　教諭）

佐　藤　　樹　（秋田県文化財保護管理指導員）

調査補助員　　松田　隆史、柳沢　和仁、村木　一裕、村木　弘一

発掘調査作業員

三浦　茂雄、大森　勝次、高嶋　　剛、宮沢　カヨ、柳沢　千晶

木村　キン、柳沢恵美子、苗代沢ノブ、兎沢サツ子、柳沢　ミネ

木村千鶴江、柳舘　愛子、安村　ヨコ、児玉　フデ、高村　サツ

田中美千栄、田中　栄子、成田由紀子、関　　イサ、宮沢トミエ

柳沢　勝江、奈良　公一、赤坂　惇一

整理作業員

福島美紀子、黒沢　文子、柳沢　千晶、田中　栄子、高嶋　　剛

9．事　務　局　　鹿角市教育委員会　生涯学習課

課　　長　　成　田　喜代美

班　　長　　秋　元　信　夫

主　　事　　上　田　　学

10．協 力 機 関　　文化庁文化財部記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、㈱大館分析技術センター
財団法人秋田県資源技術開発機構金属鉱業研修技術センター

2．調査の方法

調査区内のグリッドについては、第１次発掘調査以来のＮ－49°－Ｗを基準線とし、万座環状列石内に打設した基準杭より延長し、５ｍ単位の方眼を設定した。グリッドの名称は、アルファベッドと算用数字の組合せとし、西側の杭をもってグリッド名とした。

調査区域については、遺跡保存を熟慮しトレンチ堀調査を主体とし、一部重要箇所については面的に調査した。

Ⅱ層（大湯浮石層・十和田ａ下降火山灰）から遺物包含層については人力により分層発掘とし、極力上層での遺構の確認に努めたが、一部第Ⅳ層または第Ⅴ層まで掘り下げ、遺構を確認した地域もある。

確認された遺構については、発見順に番号を付したが精査の結果遺構として認定できなかったものもあり欠番としている。遺構の精査は、後々に調査データを残すこと、また遺構の保護を考慮したことから、半裁及び土層観察用ベルトを多用するに留めた。

また、基本層序についても土層観察用ベルトを残すことに努めた。

遺構の実測図の作成については、グリッド杭を利用し、簡易遣り方測量を行い、縮尺１／20・１／10で図化した。

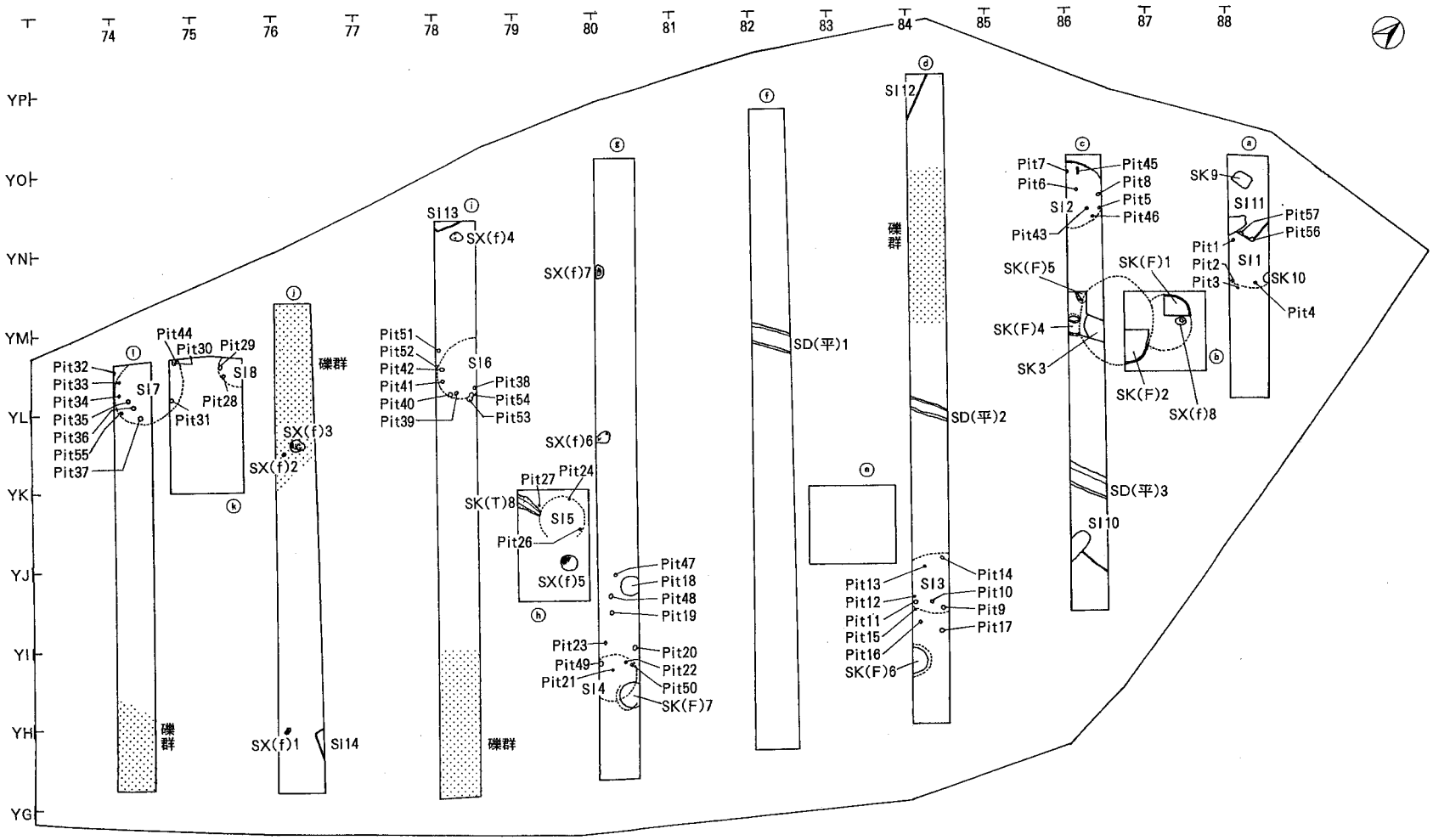
遺物の取り上げについては、やむをえない場合を除き出土地点・出土層位・出土状況を図化し取り上げた。なお、完形土器、復元可能土器については出土層位・出土地点・出土状況を観察し、写真撮影後、収納した。

写真撮影については、小型一眼レフカメラ２台を使用し、調査の各段階ごとにカラー・リバーサルフィルムに収めた。（花 海）

3．調査の経過

特別史跡大湯環状列石第19次発掘調査は平成14年５月21日より開始し、現地でのすべての調査を終えたのは平成14年11月６日である。

５月21日、調査作業員に事務連絡並びに調査目的・方法を説明後、G_3区のⅡ層面での遺構確認作業を開始、その後Ⅱ層除去作業に移行する。事前の調査準備に充分な時間をかけたため、スムーズに作業に取りかかることができた。５月29日にはⅡ層面除去作業がほぼ終了し、道路状遺構を検出する。６月５日にはⅢａ～ｂ層の除去作業がほぼ終了した。６月10日にはⅢｄ層～Ⅳ層面までの除去作業がほぼ終了し、Ｔピット、フラスコ状土坑が検出しはじめる。調査区



第７図　D_8区遺構配置図

全体の遺構確認終了後、遺構精査へと移行、並行して遺物取り上げ・記録を行う。G_3区と並行して航空撮影の準備のため野中堂環状列石内の配石表出作業も行う。７月中旬頃にはG_3区の調査がほぼ終了したことから、D_9区の調査準備に移行する。調査は例年にない雨天の多さにやや遅れ気味となる。７月24日からいよいよD_9区の調査開始。８月２日には雨天のため延期していたG_3区の全体写真撮影を行い、G_3区の調査を終了した。８月５日にはⅡ層除去作業がほぼ終了し、歴史時代の竪穴住居跡が発見される。竪穴住居跡１基の精査を行う。８月中旬には調査地南部のⅢa～b層面の除去作業がほぼ終了し、遺物が出土しはじめる。並行して遺物取り上げ・記録作業を行う。９月に入ると、ようやく気候が安定し、作業もはかどる。９月中旬にはⅢa～b層面の除去作業がほぼ終了し、数多くの遺物が出土し始めると共に、焼土遺構が発見される。10月に入るとまたもや雨天に見舞われ、作業がやや遅れた。10月５日にはⅢd層面での遺構確認をはじめ、遺構が少ないことから念のためⅣ層面まで掘り下げることとした。中旬頃には基本層序の浅い区域から炉跡が次々と発見され、予想外の展開に現場が騒然となる。このため、調査区域を若干広げることとした。10月20日にはD_9区に住居跡が集中することが判明し、同時にＴピット、フラスコ状土杭を検出、夥しい数の遺構が出土した。このため、調査期間が延期となった。今年は例年になく早い時期からの降雪で調査は厳しさを増した。調査が終了したのは、11月６日であった。11月７～８日、特別史跡大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、現地視察、調査指導があった。翌９日には現地説明会を開催、寒空を吹き飛ばすかのように、約70人余りの考古学ファンの熱気に調査地が包まれた。　　(花 海)

第Ⅲ章　D_9区縄文時代検出遺構と出土遺物

D_9区において、確認された縄文時代の遺構は竪穴住居跡８軒、柱穴状ピット４個、焼土遺構８基、Ｔピット１基、フラスコ状土坑６基、土坑２基、礫群である。また、遺構内・外より復元可能土器13個体、縄文土器破片5,765点、石器793点、土製品61点、石製品17点の出土があった。

１．竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第８図、18図１～６、19図１～12）

〈遺構の位置と確認〉調査区北東端のＹＯ・ＹＮ－88グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。

〈重複関係〉第10号土坑、第11号竪穴住居跡（歴史時代）と重複し、新旧関係は（旧）ＳＫ10→本遺構→ＳＩ11（新）となる。

〈平面形・規模〉大部分が未発掘のため詳細は不明であるが、予想される規模・平面形は径3.6mの円形を呈するものと考えられる。

〈堆積土〉１ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を若干掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は40cmを測る。

〈柱穴〉ピット１、２、４を主柱穴とする円形の柱配置である。

〈炉〉ほぼ中央部に位置する。床面を10cm程掘り窪め、20～40cm大の川原石を円形に設置している。炉の規模は70cm×70cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。

〈出土遺物〉覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片55点、石鏃２点、磨石１点、凹石５点、敲石４点、剥片２点、板状石製品（凝灰質泥岩）１点が出土した。

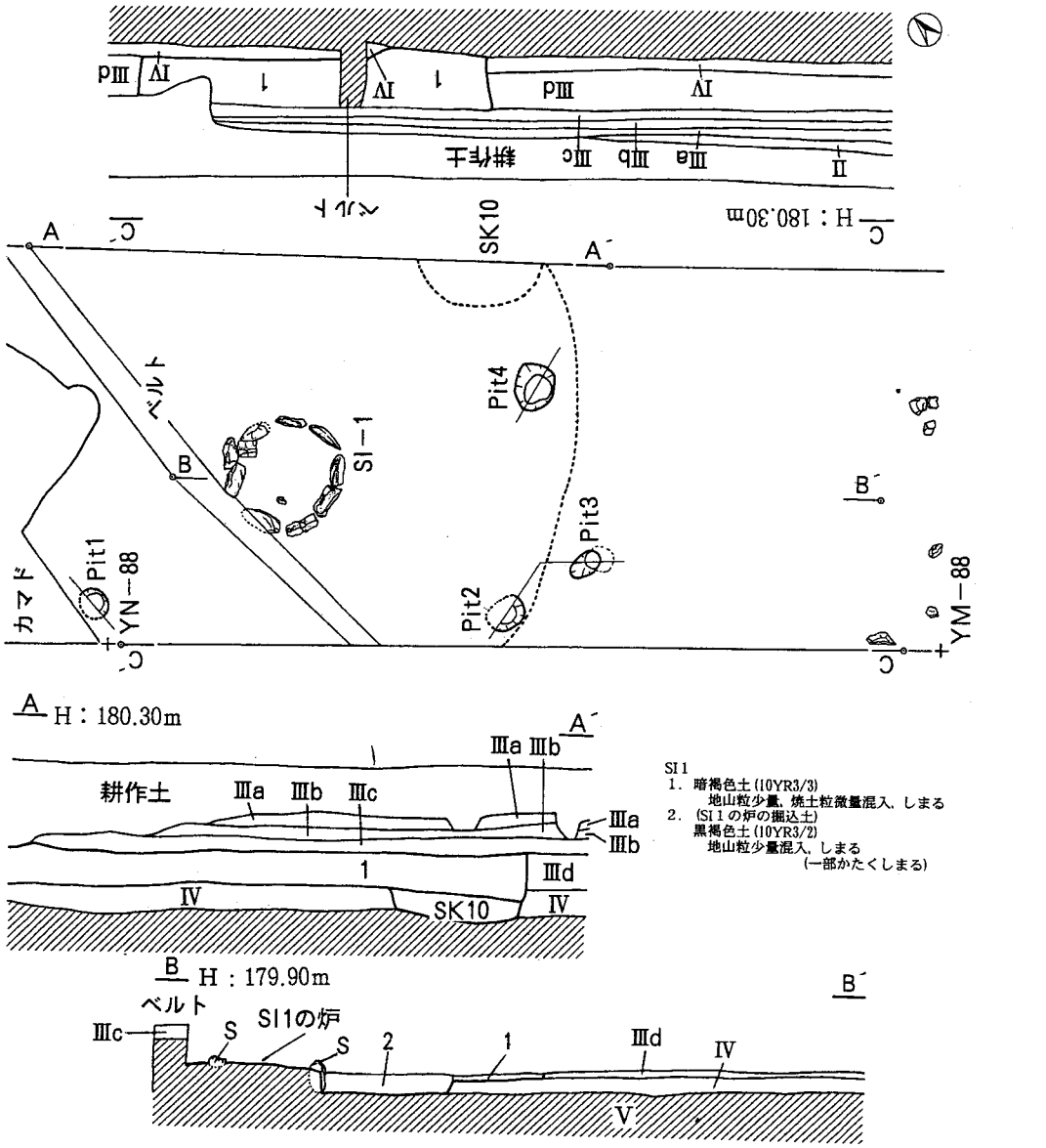
〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

第２号竪穴住居跡（第９図、16図、18～20図）

〈遺構の位置と確認〉調査区北端のＹＯ・ＹＰ－86グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉半部が未発掘のため詳細は不明であるが、予想される規模・平面形は径4.2mの円形を呈するものと考えられる。



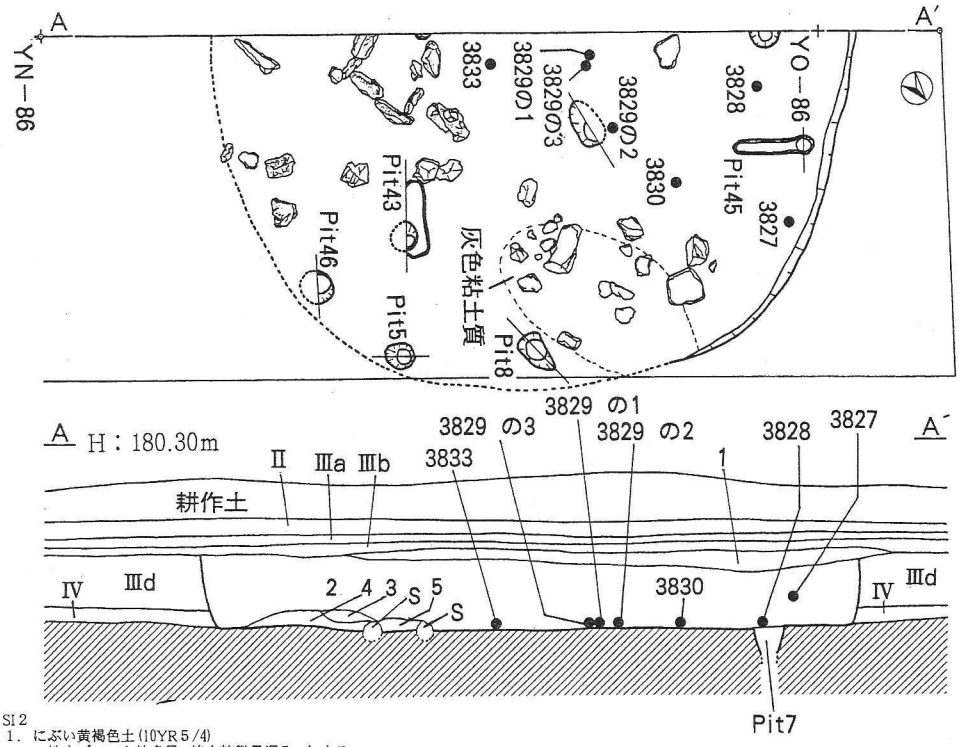
第８図　D_9区第１号竪穴住居跡実測図

〈堆積土〉５ブロックの人為堆積である。１層は本遺構を覆うような状況で確認された。

〈床面・壁〉Ⅳ層を若干掘り込み、Ⅴ層面を床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、西側壁高は48cm、北側壁高は42cmを測る。

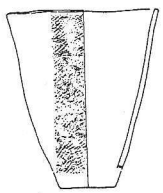
〈柱穴〉ピット５、７、８、43～46を主柱穴とする円形の柱配置である。

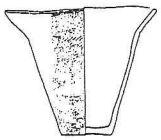
〈炉〉中央部より南寄りに位置する。床面直上に、10～28cm大の川原石を方形に設置している。炉の規模は60cm×70cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に

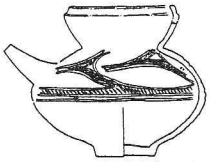


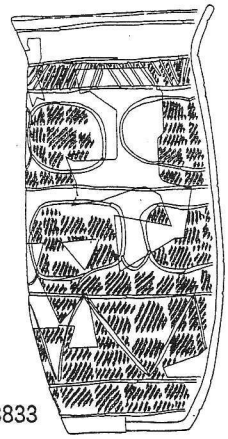
SI2
1．にぶい黄褐色土(10YR5/4)
　地山ブロック粒多量、焼土粒微量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック粒少量混入、しまる
3．黒褐色土(10YR2/2)　焼土粒少量混入、しまる
4．黒褐色土(10YR2/2)　地山粒少量混入、しまる
5．浅黄橙色土(7.5YR8/6)　焼土

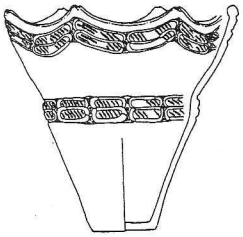
0　1m

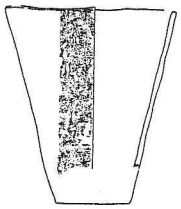

P－3827


P－3828

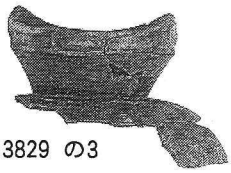

P－3829 の1


P－3833


P－3829 の2


P－3830

S＝任意


P－3829 の3

第９図　D_9区第２号竪穴住居跡実測図

最大厚８cmの焼土が、また、炉付近に最大厚14cmの焼土が散在していた。なお、北東部床面には灰状の粘質土が確認されている。

〈出土遺物〉床直より復元可能土器６点、土器破片25点、凹石７点、覆土中より土器破片528点、石鏃１点、石錐１点、石匙１点（破損品）、掻器５点、磨石２点、凹石22点、敲石５点、石皿２点、剥片36点、土器破片利用土製品２点が出土した。第16図１、２、３、４、５、６、７は、床直から出土したものである。１は胴部下半までＬ縄文が施文されている深鉢形土器で、器高は推定31.8cm、口径は28.0cmを測り、色調はにぶい赤褐色である。２は「アサガオ状」を呈し、口縁部がキャリパー状に立ち上がる深鉢形土器で、胴部全体にＬＲ縄文が施文される。器高は 20.6cm、口径は24.5cm、底径は8.0cmを測り、色調はにぶい黄橙である。３は深鉢形土器で、器面全体にＲＬ縄文が施文されている。器高は28.8cm、口径は24.7cmを測り、色調は浅黄橙である。４は底部付近に孔を有する円筒状の有孔土器で、口縁部から底部にかけて横位方向の沈線による区画がなされ、上位には沈線間に斜状及びＶ字状の沈線文が、中位沈線間には隅丸方形状の沈線文、また、下位は三角形状の沈線文がそれぞれ施文され、沈線間にはＬＲ縄文による磨消縄文が展開される。器高は34.3cm、口径は16.5cm、底径は10.0cmを測り、色調は黒褐色である。５は注口土器で、注口部は破損している。無文研磨された器面には沈線による三角文が幾何学的に施文され、沈線間には短刻線が充填される。器高は12.2cm、口径は8.3cm、底径は4.7cmを測り、色調は黒褐色である。６は山形口縁の深鉢形土器で、口縁部内側はやや肥厚となり、山形状の口唇部には刻目が施されている。口縁部及び胴部には沈線文による２段の楕円形文が横位に連結し、沈線間には条の細かいＲＬ縄文が施文されている。器高は17.2cm、口径は18.8cm、底径は7.2cmを測り、色調は黒褐色である。ＰＬ11－７は破損品であるが、山形状口縁の壺形土器と考えられる。口縁部に入組み風の隆帯が付加され、胴部には沈線文によるクランク状文が施文され、沈線間には短刻線が充填されている。口縁 部径は12.5cm、口頸部径は7.0cmを測り、色調は暗褐色である。

〈構築時期〉構築時期は床直出土遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。

第３号竪穴住居跡（第10図、18図、21図）

〈遺構の位置と確認〉調査区東部のＹＫ・ＹＪ－84グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

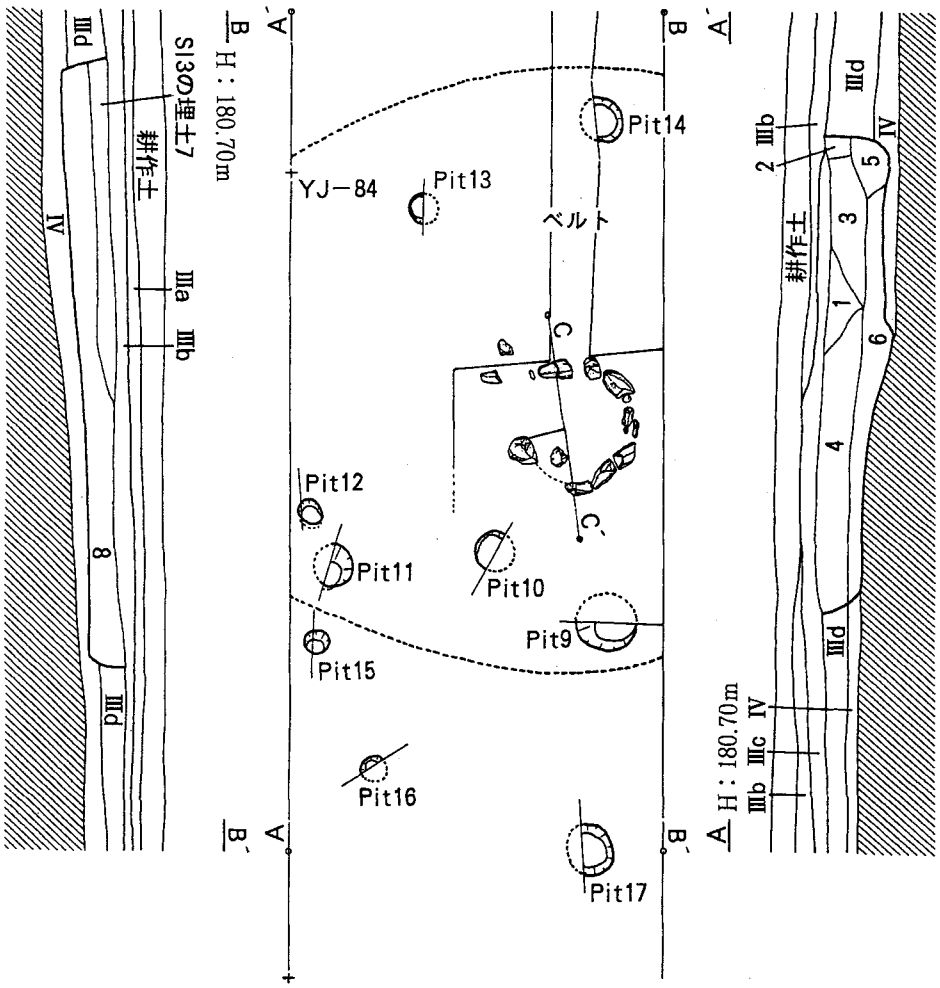
〈平面形・規模〉大部分が未発掘のため詳細は不明であるが、予想される規模・平面形は径3.7mの円形を呈するものと考えられる。

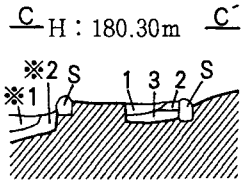
〈堆積土〉６ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を若干掘り込み、床面としている。床面北側では、貼床が確認された。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は東側で24cm、北側で40cmを測る。

〈柱穴〉ピット9、10、11、12、13、14を主柱穴とする。

〈炉〉中央部やや東寄りに位置する。床面を10cm程掘窪め、10～40cm大の川原石を円形に設





SI3－炉
1．黄橙色土(10YR7/8)
　地山ブロック粒、焼土粒多量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR2/2)
　地山粒、焼土粒少量混入、しまる
3．暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒、焼土粒微量混入、しまる
※1．(SI3の埋土の9)
　黒褐色土(10YR3/2)
　地山粒少量混入、しまる
※2．(SI3の埋土の10)
　褐色土(10YR4/4)
　地山ブロック粒少量混入、しまる

SI3
1．黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
2．黒色土 (10YR2/1) 地山粒微量混入、しまる
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　地山粒多量、焼土粒微量混入、しまる
4．にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　地山ブロック粒多量、焼土粒微量混入、しまる
5．黒褐色土(10YR3/2)
　地山粒、焼土粒物少量混入、しまる
6．にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　地山ブロック粒多量混入、かたくしまる
7．黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
8．暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量混入、しまる

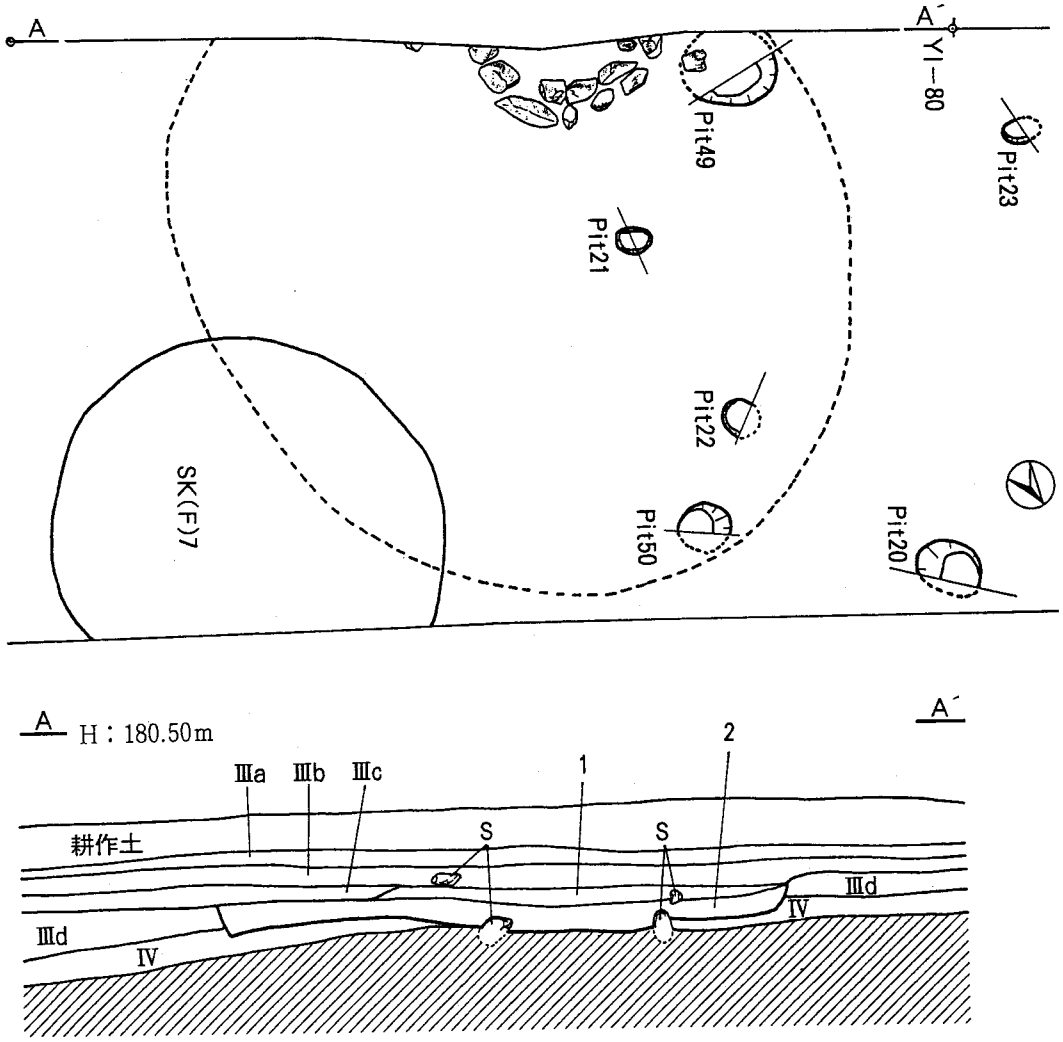
0　1m

第10図　D_9区第3号竪穴住居跡実測図

置している。炉の規模は80cm×80cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に最大厚12cmの焼土が確認された。

〈出土遺物〉覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片１点、凹石４点が出土した。

〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。



SI4
1．暗褐色土(10YR3/4) 地山粒少量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR2/3) 地山粒、焼土粒少量混入、しまる

第11図　D₉区第４号竪穴住居跡実測図

0　1m

第４号竪穴住居跡（第11図、21図）

〈遺構の位置と確認〉調査区南部のＹＩ－80グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構は第７号フラスコ状土坑と重複し、新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、およそ規模・平面形は径2.9mの円形を呈するものと考えられる。

〈堆積土〉２ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を若干掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は12cmを測る。

〈柱穴〉ピット21、22、49、50を主柱穴とする。

〈炉〉中央部より西寄りに位置する。10～28cm大の川原石を円形に設置している。炉の規模は42cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に焼土は確認されなかった。

〈出土遺物〉覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片14点、石鏃１点、凹石１点が出土した。

〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

第５号竪穴住居跡（第12図、17図、18図、21図）

〈遺構の位置と確認〉調査区南西部中央寄りのＹＫ－79グリッドに位置する。Ⅲｄ層上面でプランを確認した。

〈重複関係〉第８号Ｔピットと重複し、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、規模・平面形は径2.94mの円形を呈するものと考えられる。

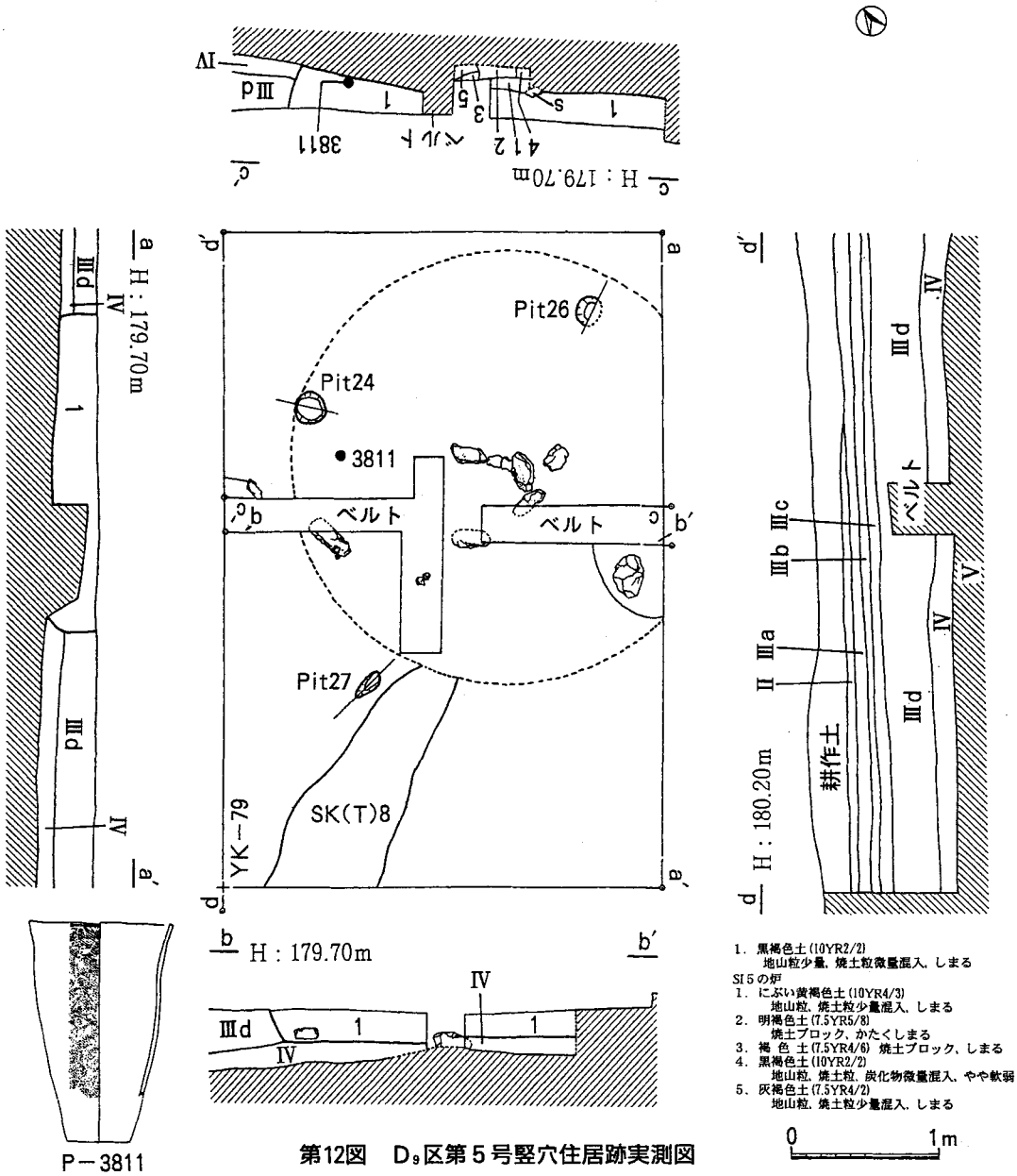
〈堆積土〉１ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を若干掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は28～32cmを測る。

〈柱穴〉ピット24、26、27が主柱穴と考えられる。

〈炉〉ほぼ中央部に位置する。床面を16cm程堀窪め、18～30cm大の川原石を円形に設置していたと考えられる。炉の規模は70cm×70cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に最大厚16cmの焼土粒が微量混入した堆積土が確認された。

〈出土遺物〉覆土中より復元可能土器１点、縄文時代後期前葉の土器破片91点、石匙１点、掻器２点、磨製石斧１点、磨石１点、凹石４点、敲石１点、石刀（緑色凝灰岩）１点が出土した。第17図７は深鉢形土器で器面にＬＲ縄文が施文されている。器高は36.4cm、口径24.6cm、



第12図　D_9区第５号竪穴住居跡実測図

底径は推定10.8cmを測り、色調はにぶい黄橙である。

〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

第６号竪穴住居跡（第13図、22図）

〈遺構の位置と確認〉調査区南西部のＹＭ−78グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、規模・平面形は短軸径2.84m、長軸4.0mの楕円形を呈するものと考えられる。

〈堆積土〉１ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を掘り込み、Ⅴ層面を床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。

〈柱穴〉ピット38～42、51～54が主柱穴と考えられる。

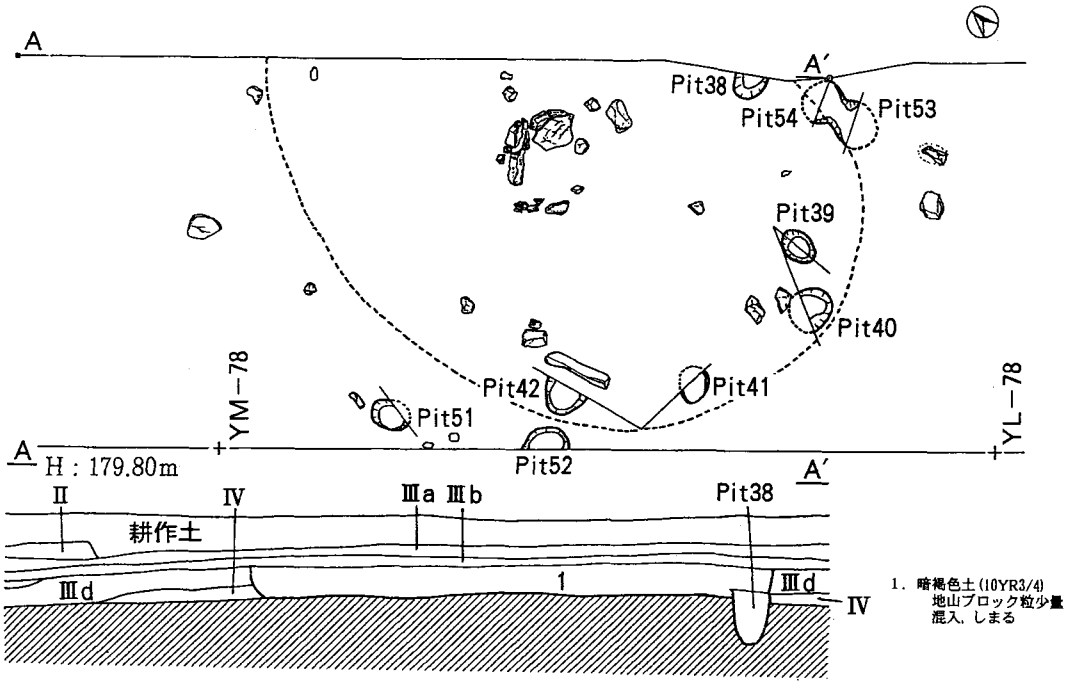
〈炉〉ほぼ中央部に位置する。５～30cm大の川原石を円形に設置している。炉の規模は66cm×60cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。

〈出土遺物〉覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片70点、石鏃１点、磨石１点、凹石２点、敲石１点が出土した。

〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

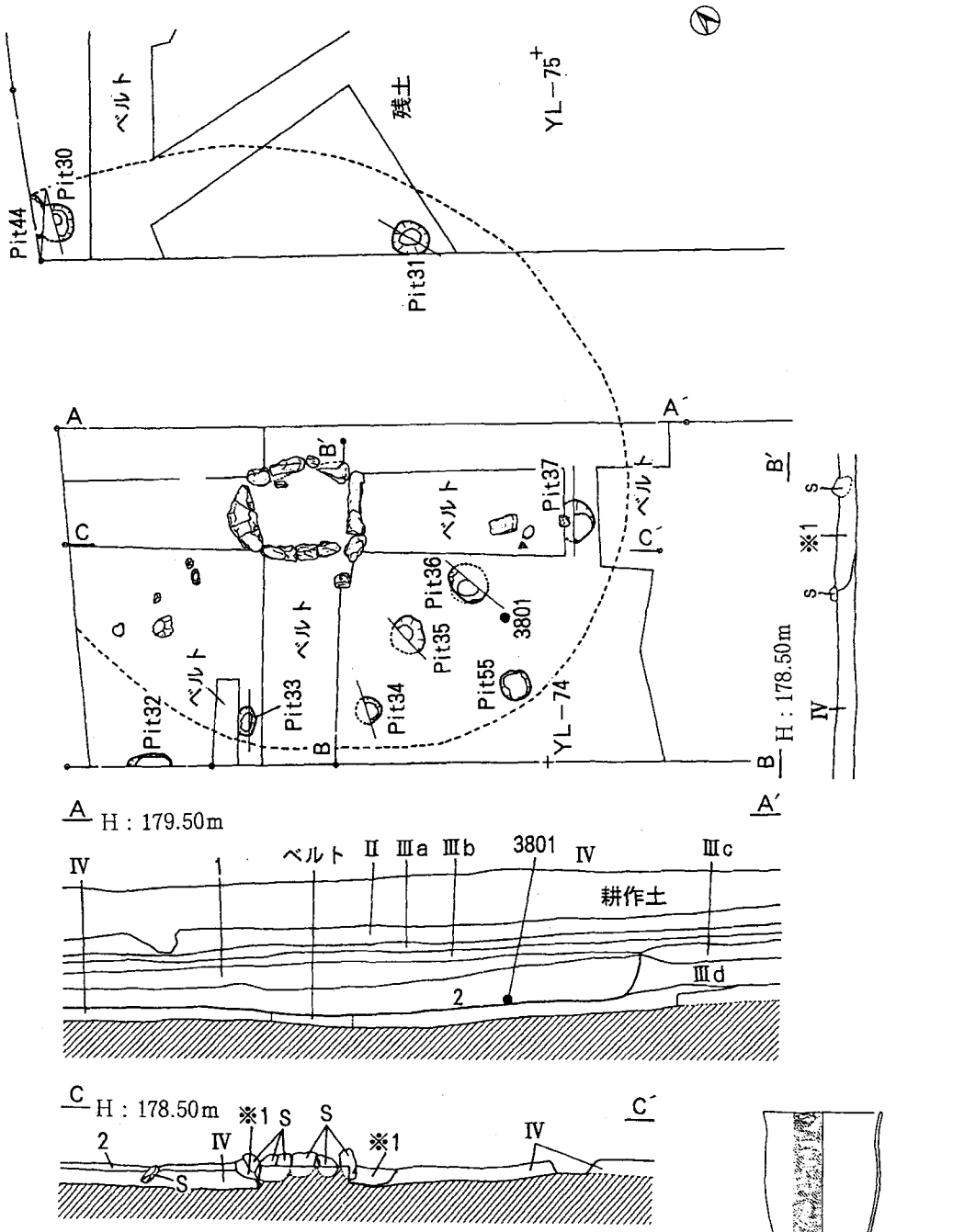
第７号竪穴住居跡（第14図、17図、22図）

〈遺構の位置と確認〉調査区南西端のＹＭ・ＹＬ－74グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。



第13図　D₉区第６号竪穴住居跡実測図

0　1m



SI7
1．黒褐色土(10YR2/2)
　地山粒、焼土粒、微量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR3/2)
　地山粒少量、焼土粒、炭化粒微量混入、しまる

SI7
1．黒褐色土(10YR3/1)
　地山粒、焼土粒、炭化粒微量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒、炭化粒微量混入、しまる

SI7－炉
※1．（S17の炉の掘込土）
　黒褐色土(10YR2/2)
　地山粒微量混入、かたくしまる

S＝任意
P－3801

0　1m

第14図　D₉区第7号竪穴住居跡実測図

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、規模・平面形は短軸径4.0m、長軸5.0mの楕円形を呈するものと考えられる。

〈堆積土〉２ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は32cmを測る。

〈柱穴〉ピット30～37、44、55を主柱穴とする円形の柱配置である。

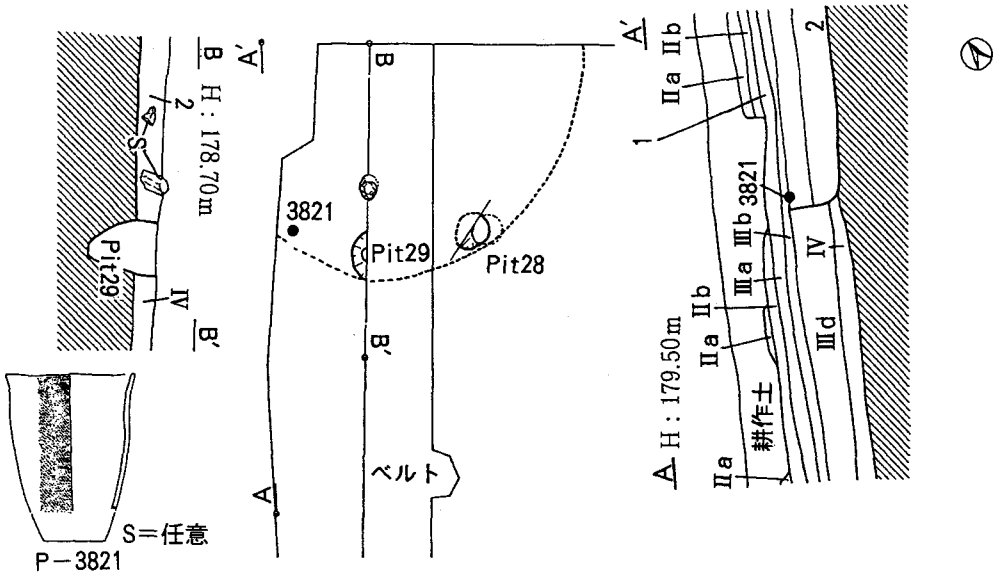
〈炉〉中央部よりやや西寄りに位置する。床面を12cm程掘り窪め、10～50cm大の川原石を楕円形状に設置している。炉の規模は72cm×94cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内より焼土は検出されなかった。

〈出土遺物〉床直より石鏃１点、凹石１点、覆土中より復元可能土器１点、縄文時代後期前葉の土器破片50点、石鏃１点、掻器２点、磨石１点が出土した。第17図８は深鉢形土器で器面にはＬＲ縄文が施文されている。器高は34.6cm、口径20.6cm、底径は推定8.4cmを測り、色調はにぶい黄橙である。

〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第８号竪穴住居跡（第15図、17図、22図）

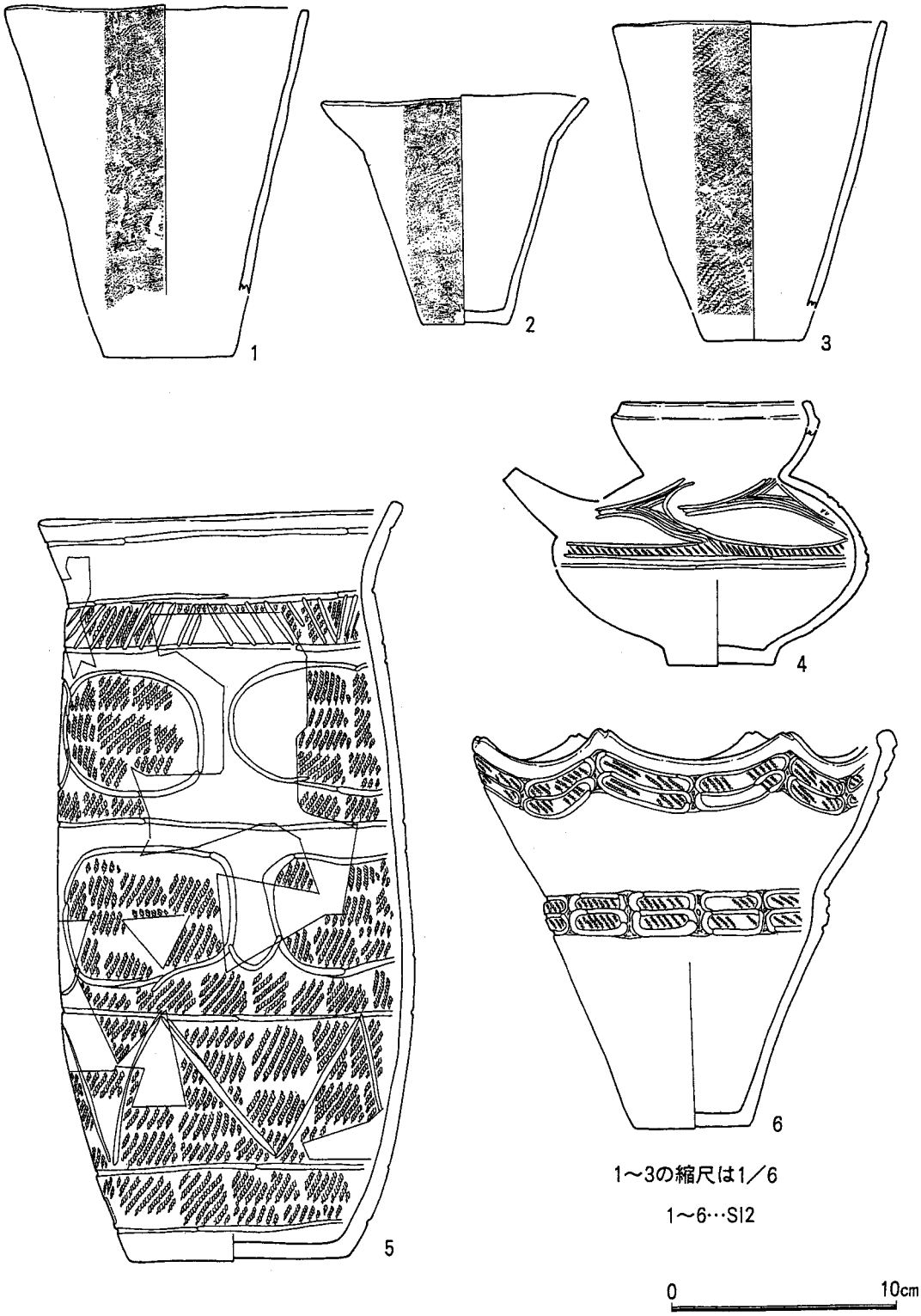
〈遺構の位置と確認〉調査区南西部のＹＭ－75グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確



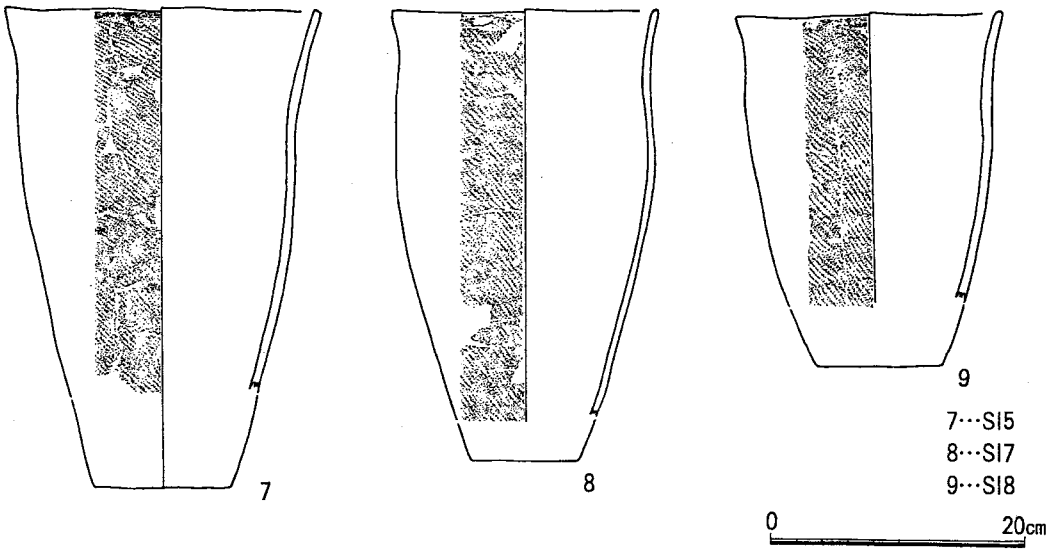
SI8
1．黒褐色土（10YR3/2）地山粒、炭化粒微量混入、ややしまる
2．黒褐色土（10YR2/2）地山粒、炭化粒微量混入、しまる

第15図　D₉区第８号竪穴住居跡実測図

0　1m



第16図　D_9区第２号竪穴住居跡出土土器実測図（1）



第17図　D₉区第５号、７号、８号竪穴住居跡出土土器実測図（2）

認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲｄ層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉遺構の一部のみの確認ため詳細は不明である。

〈堆積土〉確認される堆積土は２ブロックの人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉Ⅳ層を掘り込み、Ⅴ層面を床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は34cmを測る。

〈柱穴〉ピット28、29が主柱穴と考えられる。

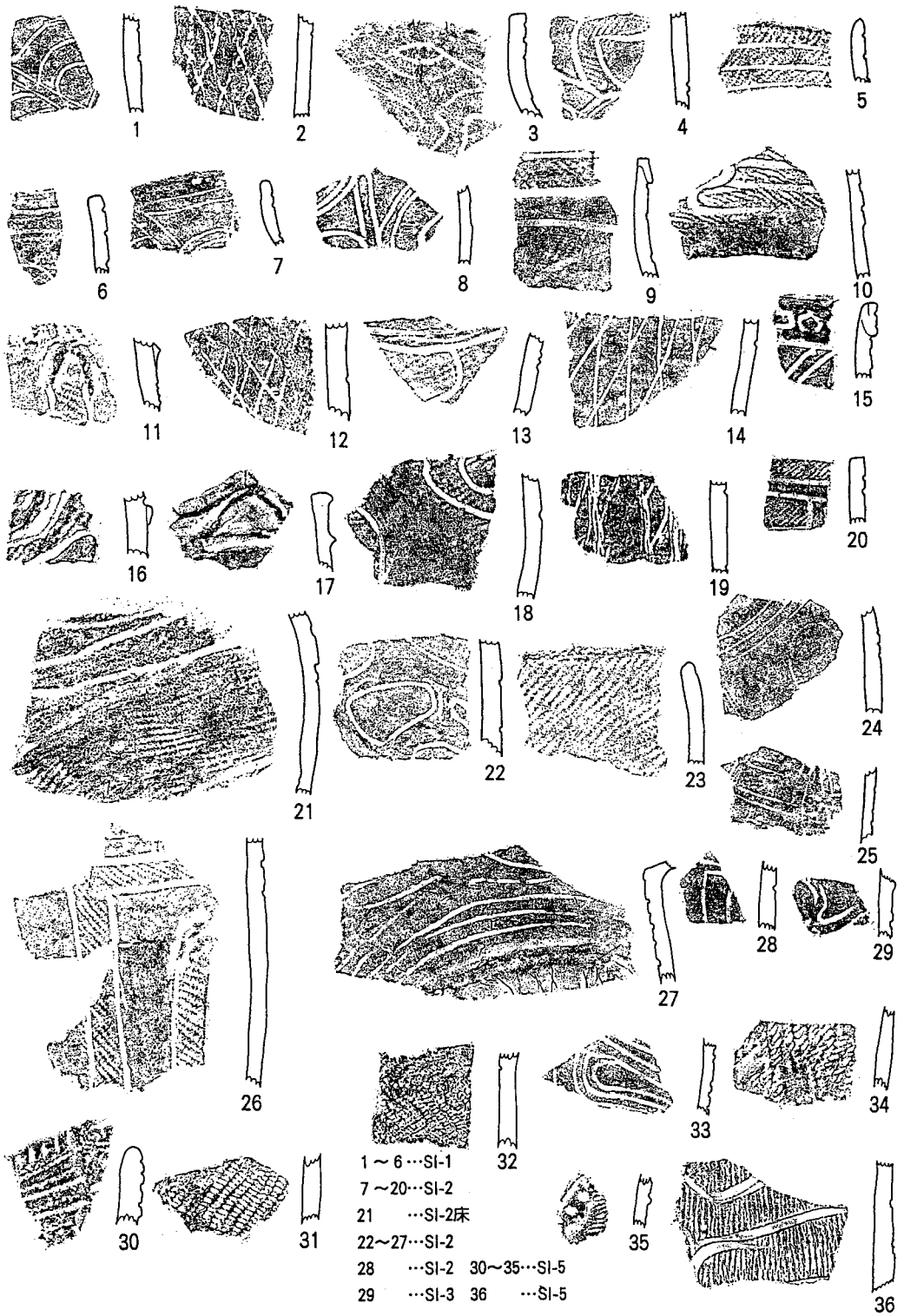
〈炉〉確認されなかった。

〈出土遺物〉覆土中より復元可能土器１点、掻器１点が出土した。第17図９は深鉢形土器で器面には結節ＬＲ縄文が施文されている。器高は26.8cm、口径21cm、底径は推定10cmを測り、色調はにぶい黄橙である。

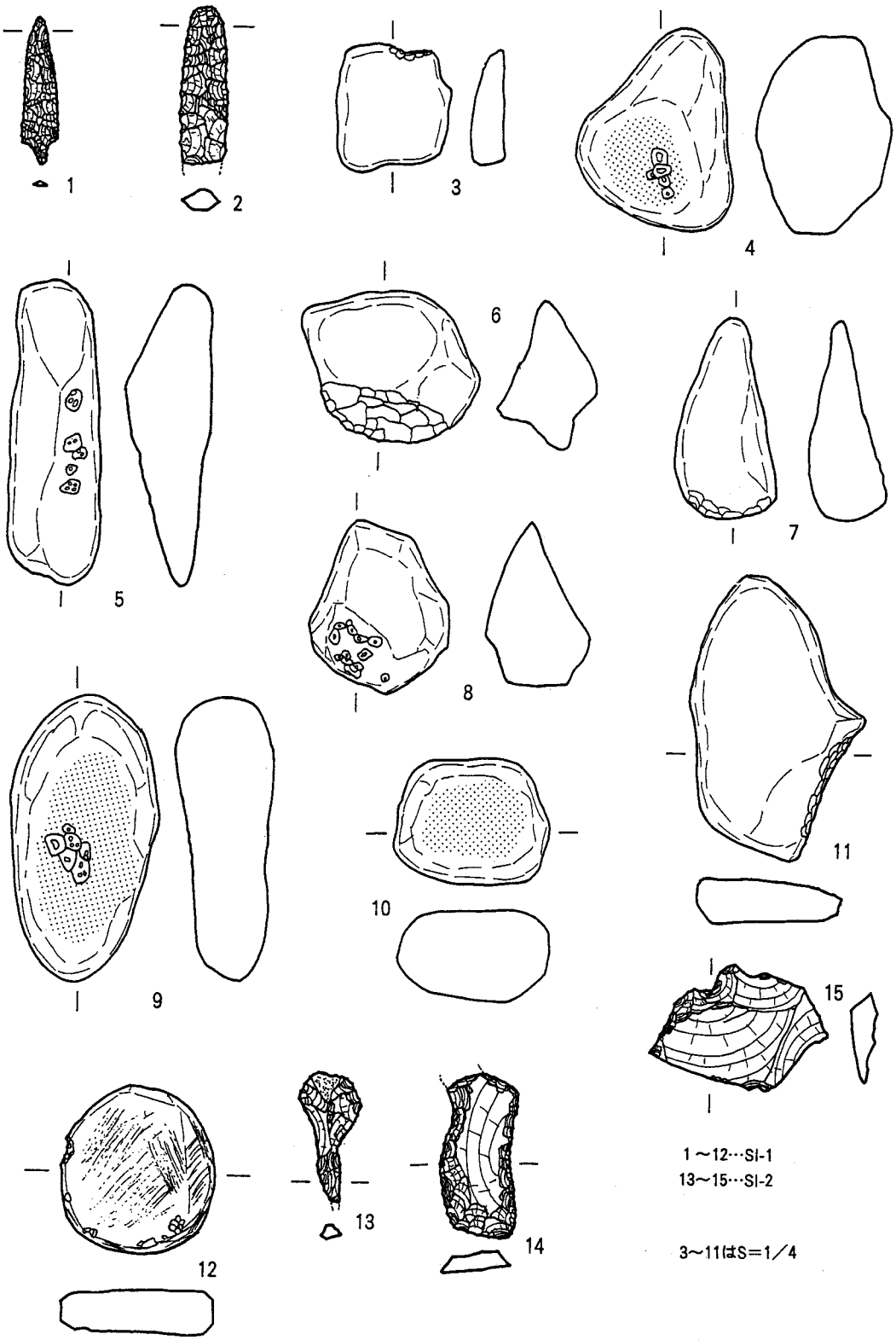
〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

２．柱穴状ピット（第23図～25図、第１表）

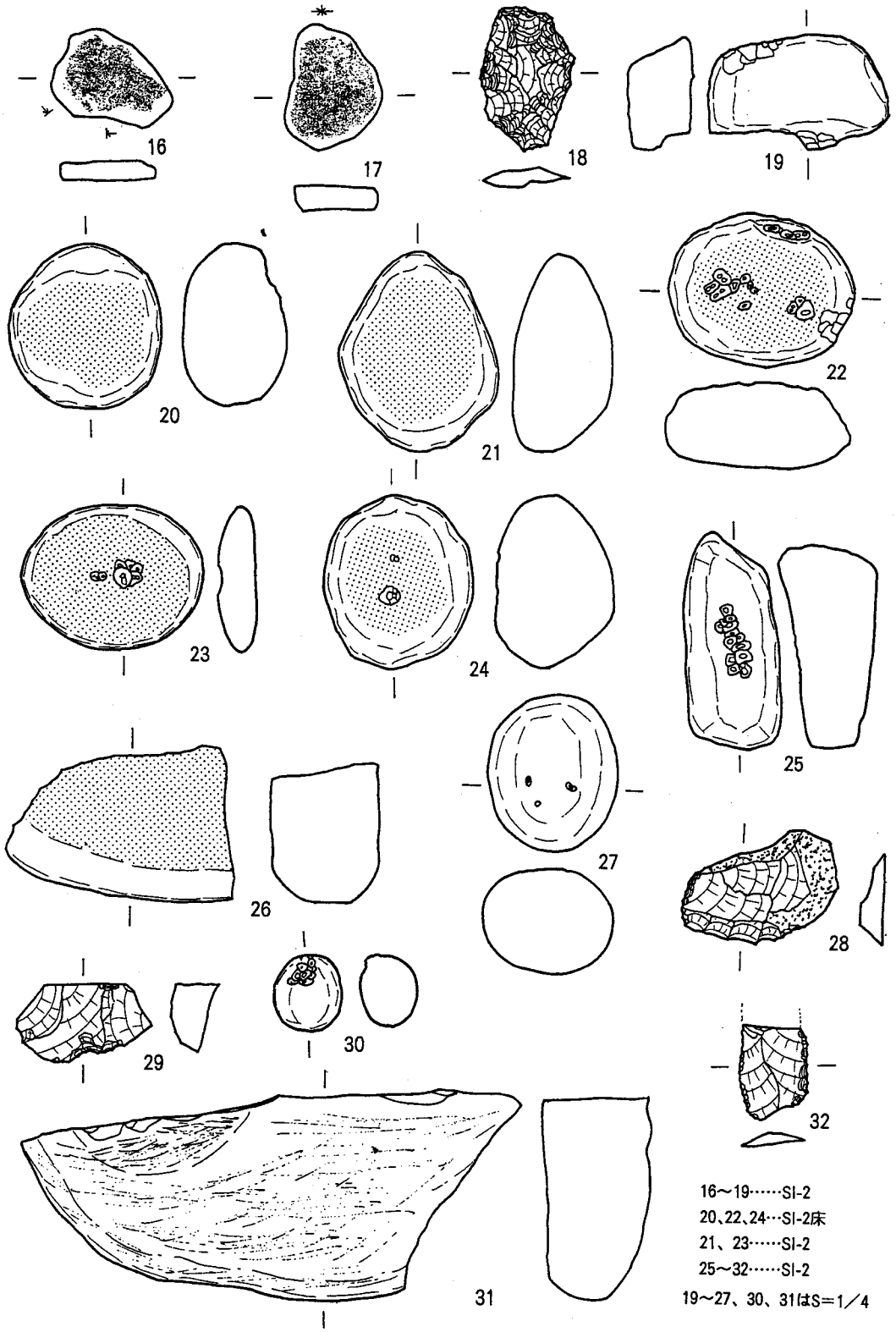
Ｄ₉区からは７個の柱穴状ピットが確認された。それらは、調査区西部のＹＪ－80グリッドで検出した。柱穴状ピットの規模は径22cm～118cm、深さ16cm～150cm（推定）を測る。確認される柱痕径は、12cm～64cmである。



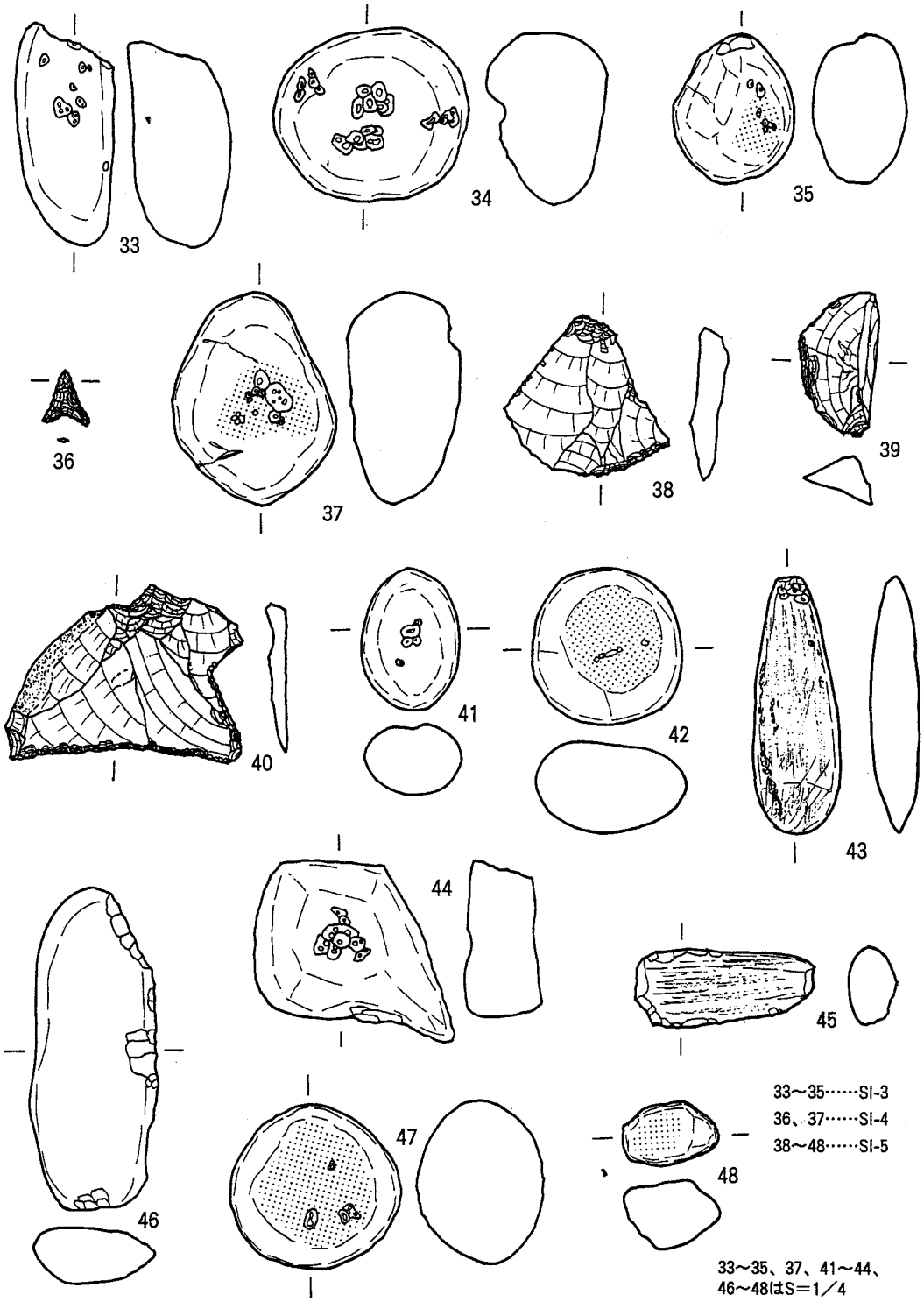
第18図　D_9区竪穴住居跡出土土器拓影図



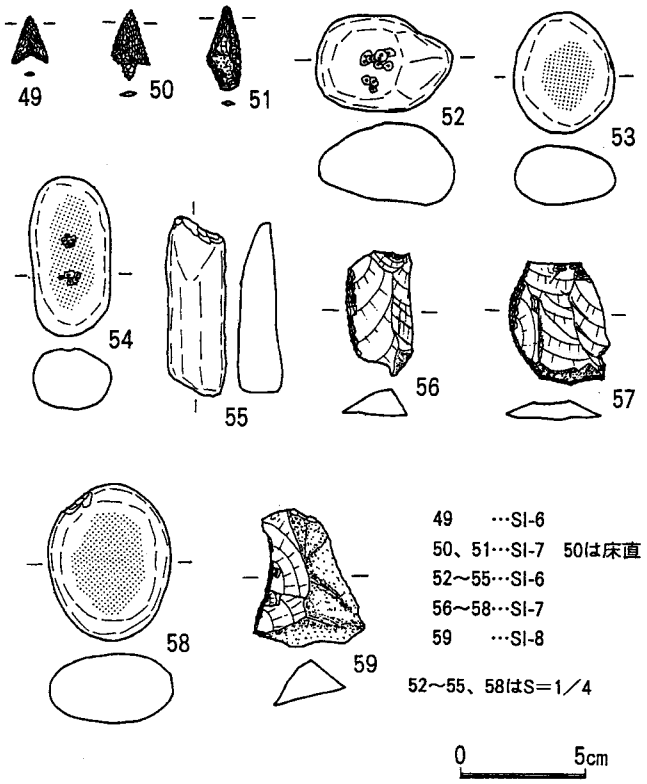
第19図　D₉区竪穴住居跡出土遺物実測図（1）



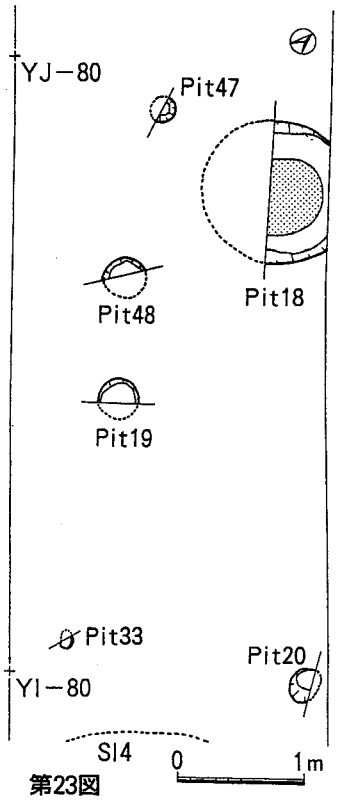
第20図　D_9区竪穴住居跡出土遺物実測図（2）



第21図　D_9区竪穴住居跡出土遺物実測図（3）　0　5cm



第22図 D₉区竪穴住居跡出土遺物実測図 (4)



第23図
D₉区柱穴状ピット実測図

3．焼土遺構（D₉区）

焼土遺構は調査区南西部、及び北東部に点在している。本調査区では８基が確認された。

第１号焼土遺構（第26図）

調査区南西部南寄りＹＨ～ＹＩ－76グリッド、Ⅲｄ層上面で確認。焼土範囲は(44)×30cmである。

第２号焼土遺構（第26図）

調査区南西部のＹＬ－76グリッド、Ⅲｂ層上面で確認。焼土範囲は16×11cmである。

第３号焼土遺構（第26図）

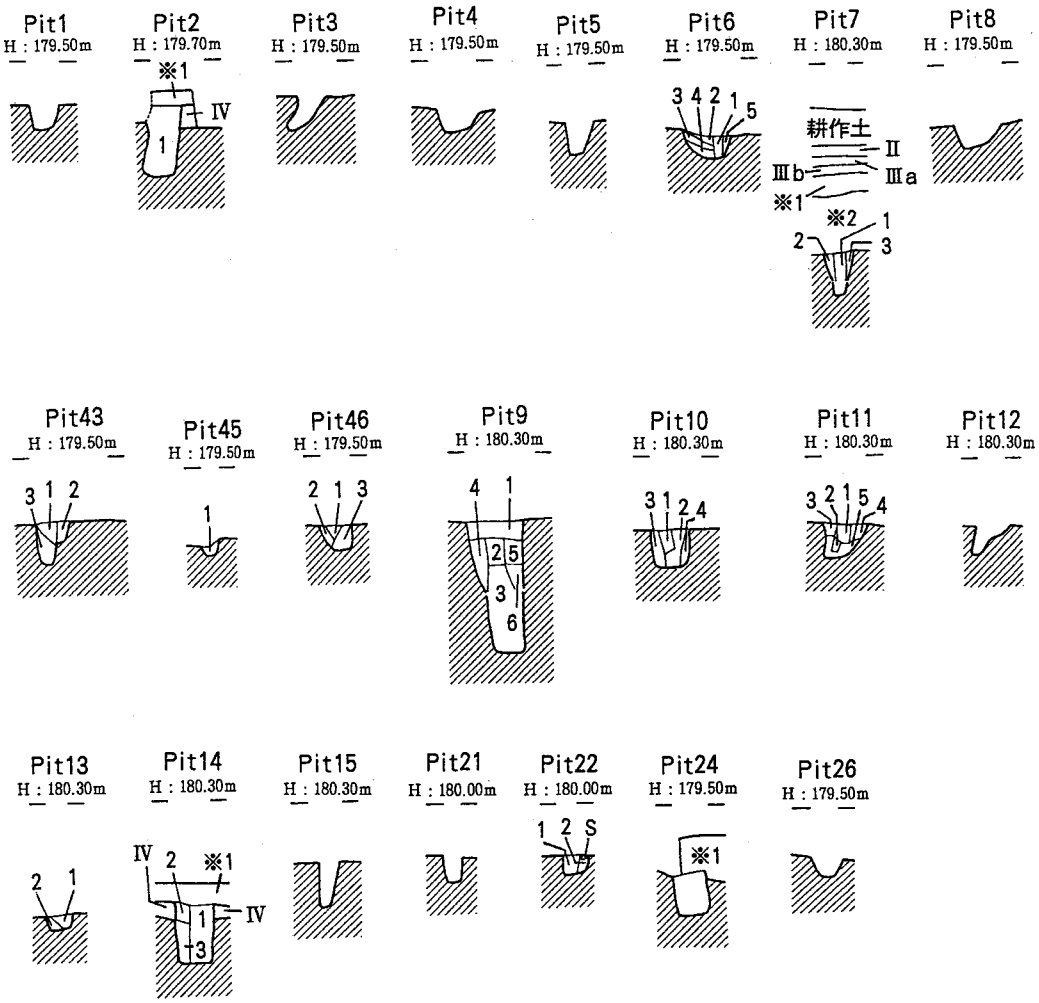
調査区南西部のＹＬ－76グリッド、Ⅲｄ層上面で確認。焼土範囲は92×79cmである。

第４号焼土遺構（第26図）

調査区南西部西寄りのＹＯ－78グリッド、Ⅲｄ層上面で確認。焼土範囲は78×58cmである。

第５号焼土遺構（第26図、48図）

調査区南西部中央寄りのＹＫ－79グリッド、Ⅲｄ層上面で確認。焼土範囲は108×108cmであ



Pit 2
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
※1.（SI1の埋土の1）
暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量、焼土粒微量混入、しまる

Pit 6
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒少量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒多量混入、しまる
4. 黒 色 土(10YR2/1) 地山粒微量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit 7
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒多量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒多量混入、しまる
※1.（SI2の埋土の1）
にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山ブロック粒多量、焼土粒微量混入、しまる
※2.（SI2の埋土の2）
黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit 9
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、ややしまる
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒少量混入、ややしまる
4. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる
6. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit10
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、やや軟弱
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒少量混入、しまる
4. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、ややしまる

Pit11
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、ややしまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
4. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit13
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、ややしまる
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山ブロック粒少量混入、ややしまる

Pit14
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
3. 黒 色 土 (10YR2/1) 地山粒微量混入、しまる
※1.（SI3の埋土の8）
暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量混入、しまる

Pit22
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit24
※1.（SI5の埋土の1）
黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量、焼土粒微量混入、しまる

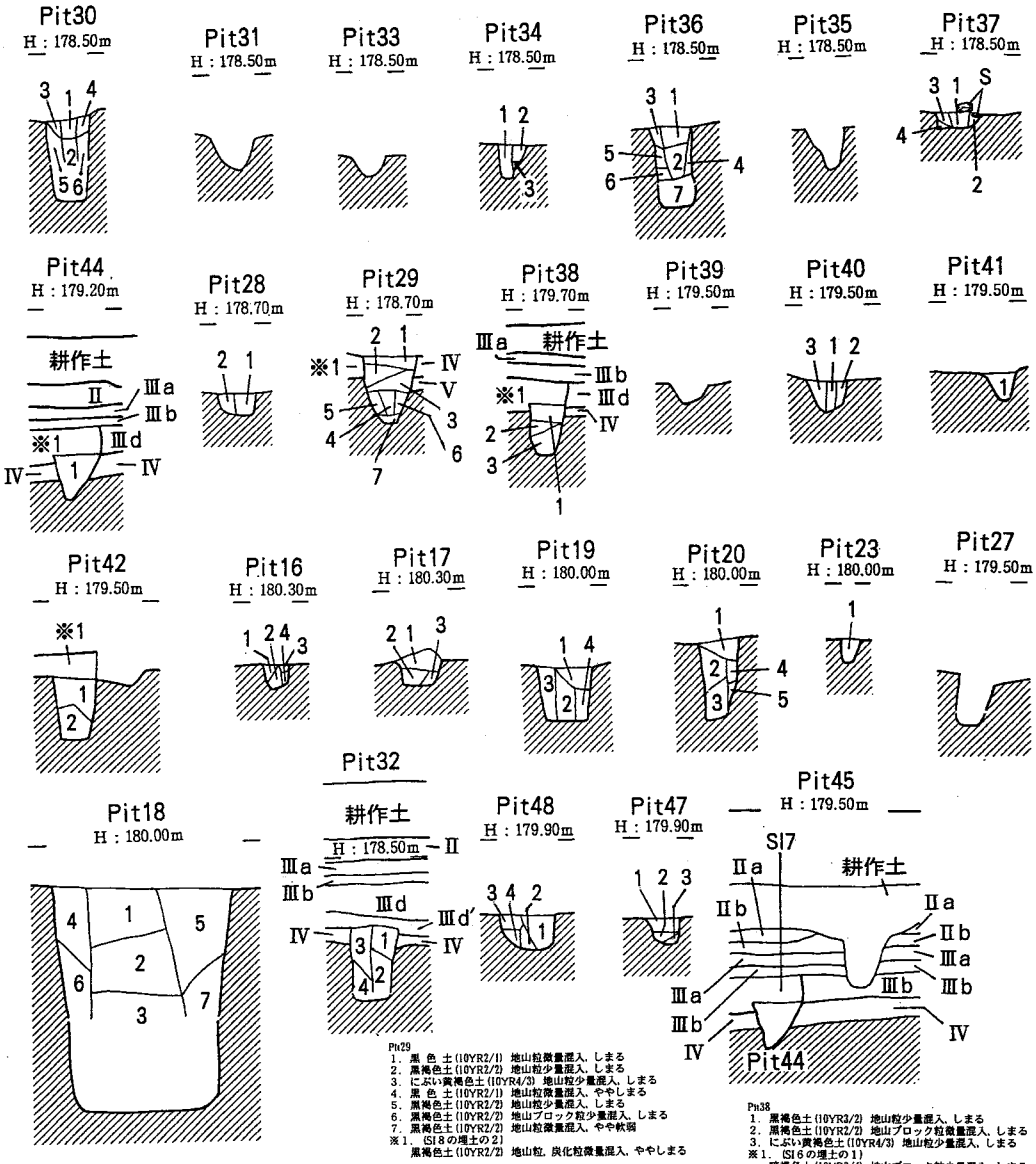
Pit43
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、やや軟弱

Pit45
1. 黒 色 土(10YR1.7/1) 地山粒微量混入、やや軟弱

Pit46
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/3) 地山粒微量混入、しまる
3. 暗褐色土(10YR3/4) 地山粒少量混入、しまる

第24図　D_9区柱穴状ピット断面図（1）

0　1m



Pit16
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒微量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、ややしまる
4. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit17
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒少量混入、しまる
2. 黒 色 土(10YR2/1) 地山粒微量混入、ややしまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit18
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒少量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる
4. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる
6. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒多量混入、かたくしまる
7. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒多量混入、かたくしまる

Pit19
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、ややしまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
4. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit20
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、ややしまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒少量混入、やや軟弱
4. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒多量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit23
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit28
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、ややしまる
2. 黒 色 土(10YR2/1) 地山粒微量混入、ややしまる

Pit29
1. 黒 色 土(10YR2/1) 地山粒微量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒少量混入、しまる
4. 黒 色 土(10YR2/1) 地山粒微量混入、ややしまる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
6. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒少量混入、しまる
7. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、やや軟弱
※1. (SI8の埋土の2)
黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、炭化粒微量混入、ややしまる

Pit30
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒多量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
6. にぶい黄褐色土(10YR4/4) 地山ブロック粒多量混入、しまる

Pit32
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量、炭化物微量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、炭化物微量混入、ややしまる
3. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、炭化物微量混入、ややしまる
4. 暗褐色土(10YR3/3) 地山粒、焼土粒、炭化物微量混入、しまる

Pit34
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる

Pit36
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、炭化物微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒、炭化物少量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒、炭化物微量混入、しまる
4. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、しまる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、炭化物微量混入、しまる
6. 暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量、炭化物微量混入、しまる
7. 黒 色 土(10YR2/1)
地山ブロック粒少量、炭化物微量混入、しまる

Pit37
1. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒微量混入、しまる
4. 黒 色 土 (10YR2/1) 地山粒微量混入、しまる

Pit38
1. 黒褐色土(10YR3/2) 地山粒少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック粒微量混入、しまる
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒少量混入、しまる
※1. (SI6の埋土の1)
暗褐色土(10YR3/4) 地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit40
1. 黒褐色土(10YR2/2)
地山ブロック粒少量、炭化物微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、ややしまる
3. 黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック粒少量混入、ややしまる

Pit41
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit42
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山ブロック粒多量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入、やや軟弱
※1. (SI6の埋土の1)
暗褐色土(10YR3/4) 地山ブロック粒少量混入、しまる

Pit44
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒、炭化粒少量混入、ややしまる
※1. (SI7の埋土の1)
黒褐色土(10YR3/1) 地山粒、焼土粒、炭化粒微量混入、しまる

Pit47
1. 暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量、炭化粒微量混入、しまる
2. 黄褐色土(10YR5/6) 地山粒多量混入、ややしまる
3. 暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量混入、しまる

Pit48
1. 暗褐色土(10YR3/4)
地山ブロック粒少量、炭化粒微量混入、しまる
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山粒多量混入、ややしまる
3. 暗褐色土(10YR3/3) 地山粒少量混入、しまる
4. 黄褐色土(10YR5/8) 地山粒微量混入、しまる

0　1m

第25図　D9区柱穴状ピット断面図 (2)

第１表　D_9区柱穴状ピット一覧表

（備考欄にはピット対応の住居番号を記した。）

ピット番号	グリット	規模（cm）長径×短径×深さ	備考	ピット番号	グリット	規模（cm）長径×短径×深さ	備考
Pit 1	ＹＯ－８８	23×不明×16	ＳＩ－１	Pit 38	ＹＭ－７８	不明×19×28	ＳＩ－６
Pit 2	ＹＮ－８８	(19)×(18)×16	ＳＩ－１	Pit 39	ＹＭ－７８	25×20×12	ＳＩ－６
Pit 3	ＹＮ－８８	21×13×22	ＳＩ－１	Pit 40	ＹＭ－７８	(29)×27×22	ＳＩ－６
Pit 4	ＹＮ－８８	29×23×14	ＳＩ－１	Pit 41	ＹＭ－７８	24×(19)×20	ＳＩ－６
Pit 5	ＹＯ－８６	(18)×(17)×20	ＳＩ－２	Pit 42	ＹＭ－７８	不明×(30)×40	ＳＩ－６
Pit 6	ＹＯ－８６	30×不明×19	ＳＩ－２	Pit 43	ＹＯ－８６	(18)×(18)×26	ＳＩ－２
Pit 7	ＹＯ－８６	20×不明×(30)	ＳＩ－２	Pit 44	ＹＭ－７４	(32)×不明×31	ＳＩ－７
Pit 8	ＹＯ－８６	(29)×(15)×13	ＳＩ－２	Pit 45	ＹＯ－８６	(53)×(10)×9	ＳＩ－２
Pit 9	ＹＪ－８４	37×(35)×45	ＳＩ－３	Pit 46	ＹＯ－８６	(22)×(20)×16	ＳＩ－２
Pit 10	ＹＪ－８４	(25)×(24)×24	ＳＩ－３	Pit 47	ＹＪ－８０	23×(19)×16	
Pit 11	ＹＪ－８４	29×(25)×21	ＳＩ－３	Pit 48	ＹＪ－８０	(37)×(32)×22	
Pit 12	ＹＪ－８４	16×14×17	ＳＩ－３	Pit 49	ＹＩ－８０	(41)×(32)×不明	ＳＩ－４
Pit 13	ＹＪ－８４	18×(18)×9	ＳＩ－３	Pit 50	ＹＩ－８０	23×(22)×不明	ＳＩ－４
Pit 14	ＹＫ－８４	(27)×(26)×40	ＳＩ－３	Pit 51	ＹＭ－７８	26×23×不明	ＳＩ－６
Pit 15	ＹＪ－８４	16×15×27	ＳＩ－３	Pit 52	YM－77~78	(30)×(29)×不明	ＳＩ－６
Pit 16	ＹＪ－８４	16×(16)×16	ＳＩ－３	Pit 53	ＹＭ－７８	(32)×30×不明	ＳＩ－６
Pit 17	ＹＪ－８４	(33)×(30)×(23)	ＳＩ－３	Pit 54	ＹＭ－７８	29×(25)×不明	ＳＩ－６
Pit 18	ＹＪ－８０	(118)×116×(179)		Pit 55	ＹＭ－７４	22×22×不明	ＳＩ－７
Pit 19	ＹＪ－８０	35×(34)×36					
Pit 20	YI~YJ－80	30×不明×52	ＳＩ－４				
Pit 21	ＹＩ－８０	16×11×17	ＳＩ－４				
Pit 22	ＹＩ－８０	(17)×16×12	ＳＩ－４				
Pit 23	ＹＪ－８０	(16)×11×14	ＳＩ－４				
Pit 24	ＹＫ－７９	20×不明×27	ＳＩ－５				
欠番							
Pit 26	ＹＫ－７９	19×13×12	ＳＩ－５				
Pit 27	ＹＫ－７９	22×9×23	ＳＩ－５				
Pit 28	ＹＭ－７５	25×(21)×17	ＳＩ－８				
Pit 29	ＹＭ－７５	33×不明×45	ＳＩ－８				
Pit 30	ＹＭ－７４	27×(25)×(55)	ＳＩ－７				
Pit 31	ＹＭ－７４	28×24×20	ＳＩ－７				
Pit 32	ＹＭ－７４	(31)×不明×49	ＳＩ－７				
Pit 33	ＹＭ－７４	21×(15)×12	ＳＩ－７				
Pit 34	ＹＭ－７４	19×(17)×21	ＳＩ－７				
Pit 35	ＹＭ－７４	(27)×(24)×27	ＳＩ－７				
Pit 36	ＹＭ－７４	30×(25)×(53)	ＳＩ－７				
Pit 37	ＹＬ－７４	(30)×不明×10	ＳＩ－７				

る。本遺構より、第48図７の台付土器が斜倒立状検出した。

第６号焼土遺構（第26図）

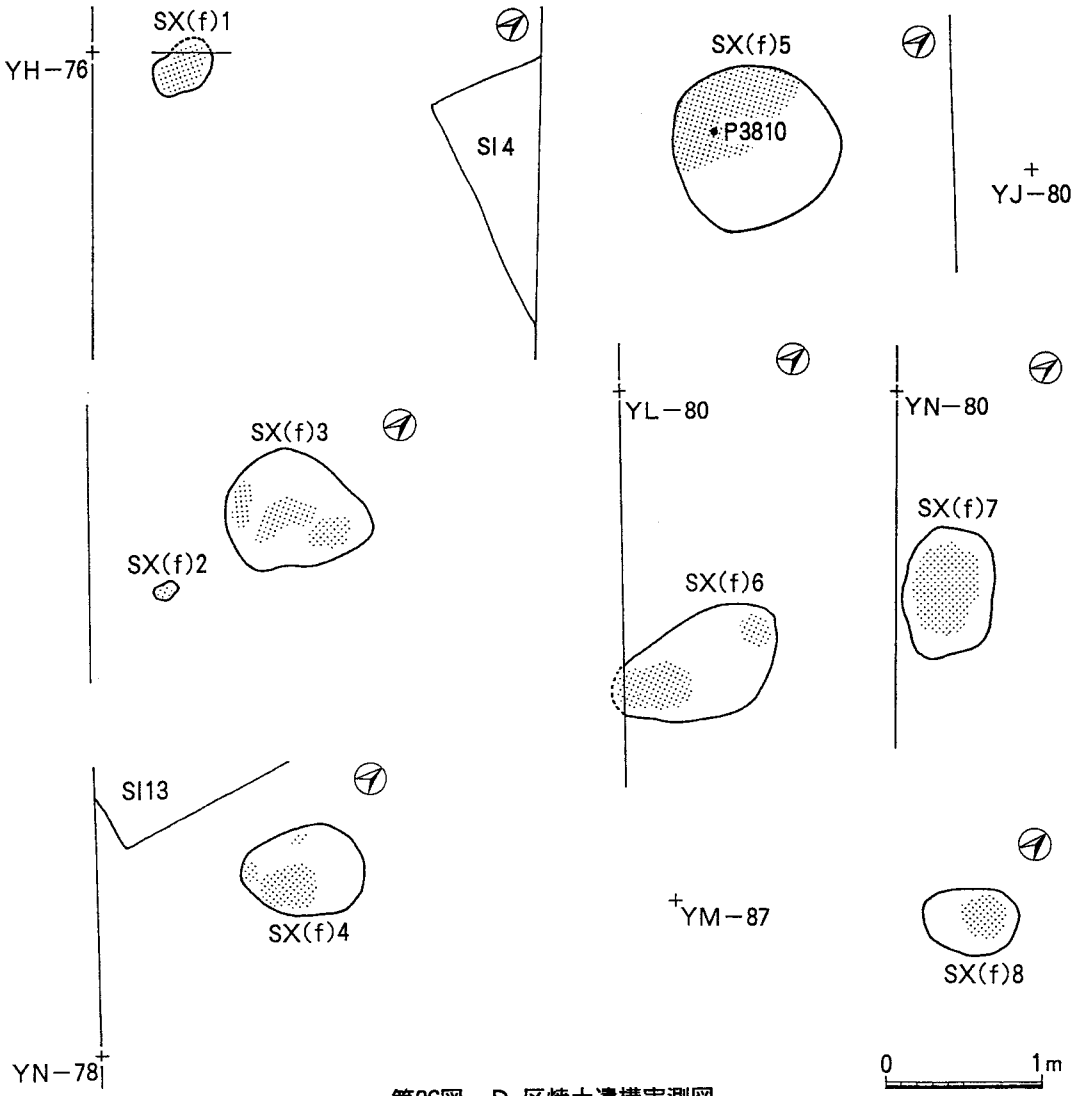
調査区中央部のＹＬ－80グリッド、Ⅲｂ層中面で確認。焼土範囲は(117)×66cmである。

第７号焼土遺構（第26図）

調査区西部中央寄りのＹＮ－80グリッド、Ⅲｄ層上面で確認。焼土範囲は86×63cmである。

第８号焼土遺構（第26図）

調査区北東部のＹＭ～ＹＮ－87グリッド、Ⅲｂ層下面上面で確認。焼土範囲は61×43cmである。



第26図　D₉区焼土遺構実測図

4．土　坑

(1)　Ｔピット

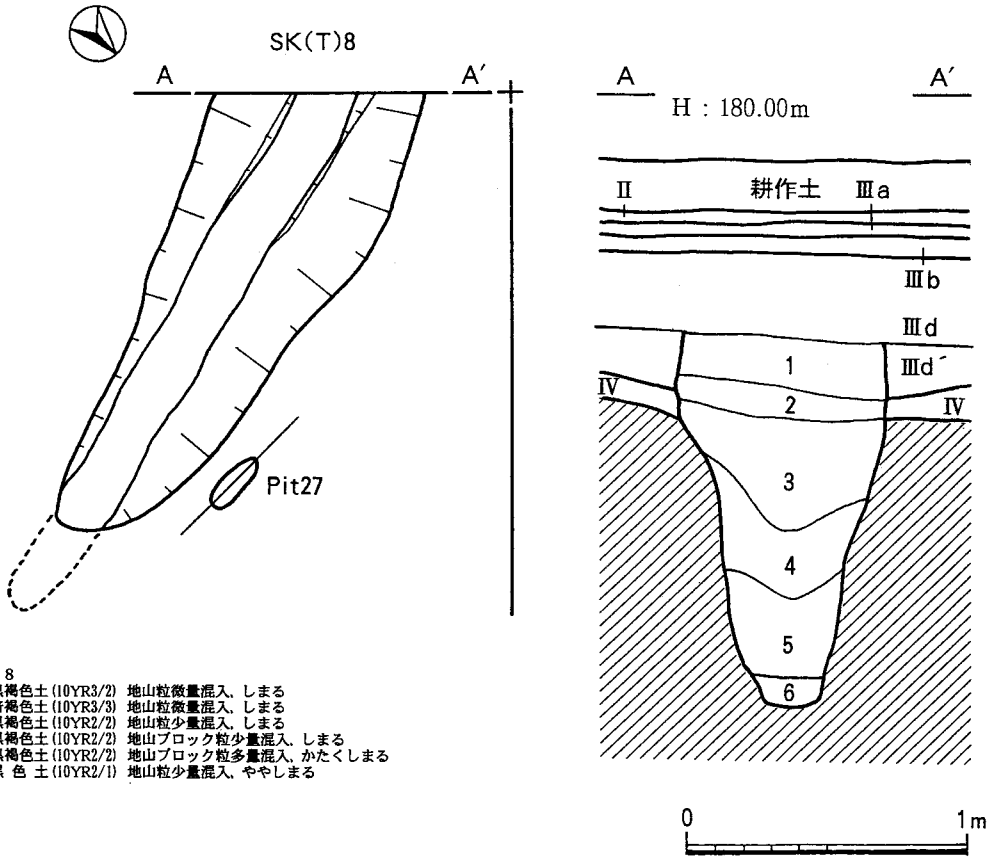
第８号Ｔピット（第27図）

調査区南西部中央寄りのＹＫ－78～79グリッドに位置する。Ｖ層上面で確認したが基本層序を含む土層断面から、Ⅲｄ'層上面が構築面であることが判明した。本遺構は、第５号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。深さは推定135cm、口縁部径は長軸は不明、短軸は74cm（推定値）、また、底部径は、短軸22cm（推定値）を測る。構築時期は、土層断面から縄文時代後期前葉以前であると思われる。

(2)　土　坑

第３号土坑（第29図）

調査区北東部のＹＭ～ＹＮ－86グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。第２号フラスコ状土坑、第４号フラスコ状土坑と重複し、本遺構がいずれより古い。規模は不明で、確認される



SK(T) 8
1．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、しまる
2．暗褐色土(10YR3/3)　地山粒微量混入、しまる
3．黒褐色土(10YR2/2)　地山粒少量混入、しまる
4．黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック粒少量混入、しまる
5．黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック粒多量混入、かたくしまる
6．黒 色 土(10YR2/1)　地山粒少量混入、ややしまる

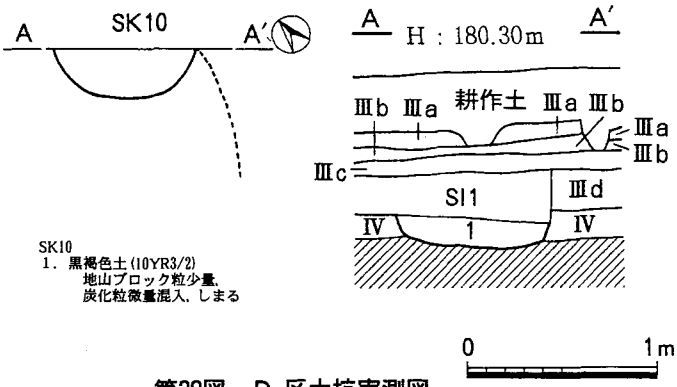
第27図　D_9区Ｔ－ピット実測図

底面は鍋底状になり、地山面まで掘り込まれている。堆積土は１ブロックで、人為堆積である。

構築時期は、周辺遺構及び出土遺物より縄文時代後期と判断される。

第10号土坑（第28図）

調査区北東部のＹＮ－88グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。第１号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。平面形は楕円形を呈し、径80cm、深さは40cm（推定）を測る。残存する堆積土は１層で、人為堆積と判断される。



第28図　D₉区土坑実測図

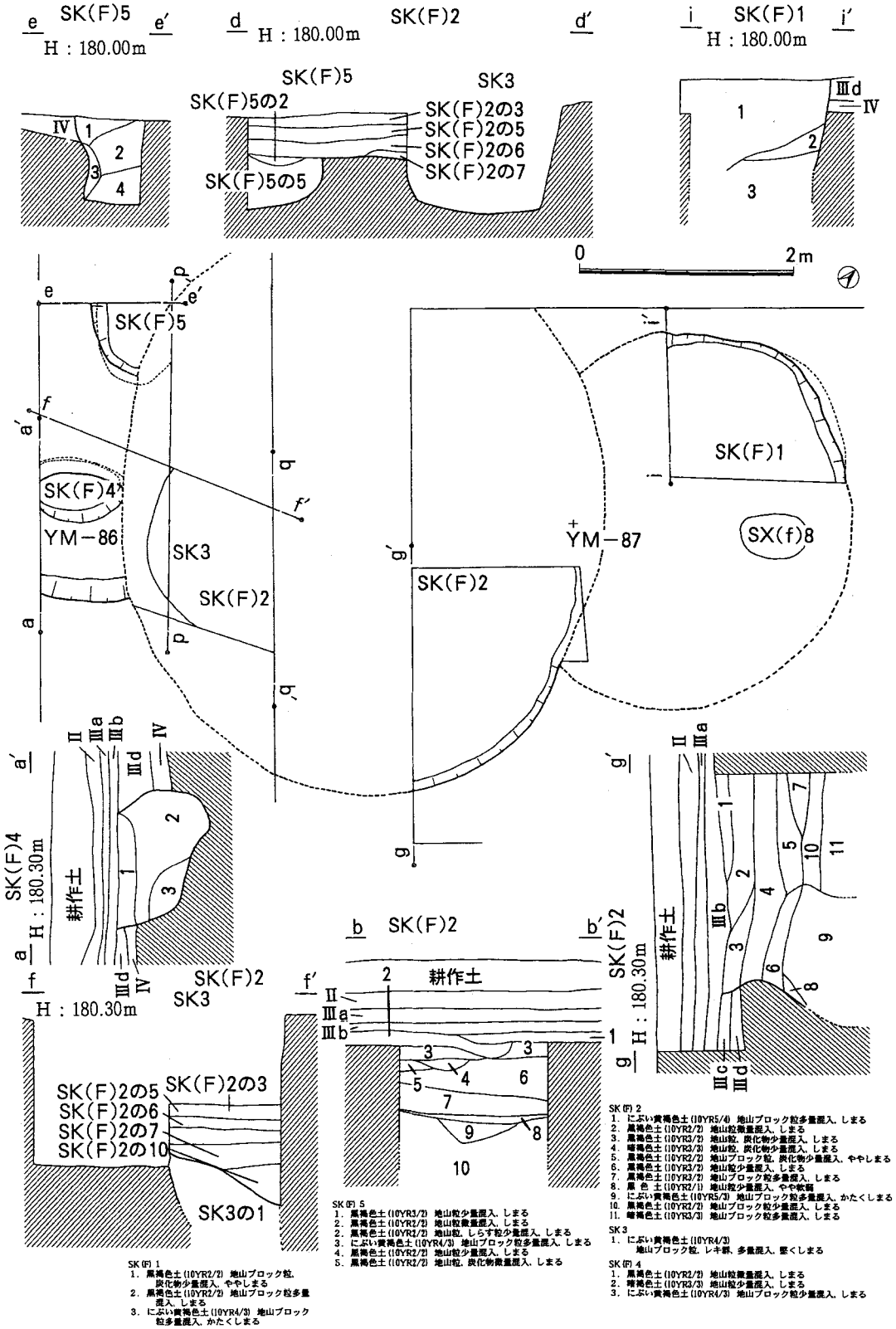
(3)　フラスコ状土坑

第１号フラスコ状土坑（第29図、31図～35図、38図、39図）

調査区北東部のＹＭ－86～87、ＹＮ－86～87グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。第２号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。口縁部径は長軸 365cm×短軸 320cm（推定値）、低部径は不明で、確認面からの深さは推定 135cmを測る。基本層序断面より本来の構築面はⅢｄ層上面である。確認される堆積土は３ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、復元可能土器６点、壺形切断土器１点、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片が940点、石鏃７点、石錐１点、掻器68点、磨石１点、敲石１点、凹石６点、剥片61点、土器破片利用土製品４点、軽石製石製品２点が出土している。第31図１は深鉢形土器で、胴部には、刺突文が付加された平行沈線文による縦位区画内に曲線文が充填されている。口径17.0cmを測り、色調はにぶい褐色である。第31図２は、壺形切断土器で器面上部には沈線文による波形文が、下部には変形波形文が施されている。切断面は細い棒状のもので切断された状態で、１カ所にＶ字状の切れ目が観察される。壺の口頸部は検出されなかった。胴部器高は4.5cm、切断部口径は11.6cm、底径3.5cmを測り、色調はにぶい黄橙である。第31図11、12は、いずれもＬ縄文による網目状撚糸文が施文された深鉢形土器である。11は器高34.2cm、口径32.2cm、底径12.0cmを測り、色調は黒褐色である。12は器高31.7cm、口径24.5cm、底径11.5cmを測り、色調は褐灰色である。ＰＬ19は入組文を主文様とする深鉢形土器である。ＰＬ19は主文様となるＳ字文に弧線文が付加した深鉢形土器である。ＰＬ19は４つの橋状抉手をもつ壺形土器で楕円形文を区画文としている。

構築時期は出土遺物および確認面より縄文時代後期前葉から中葉と判断される。



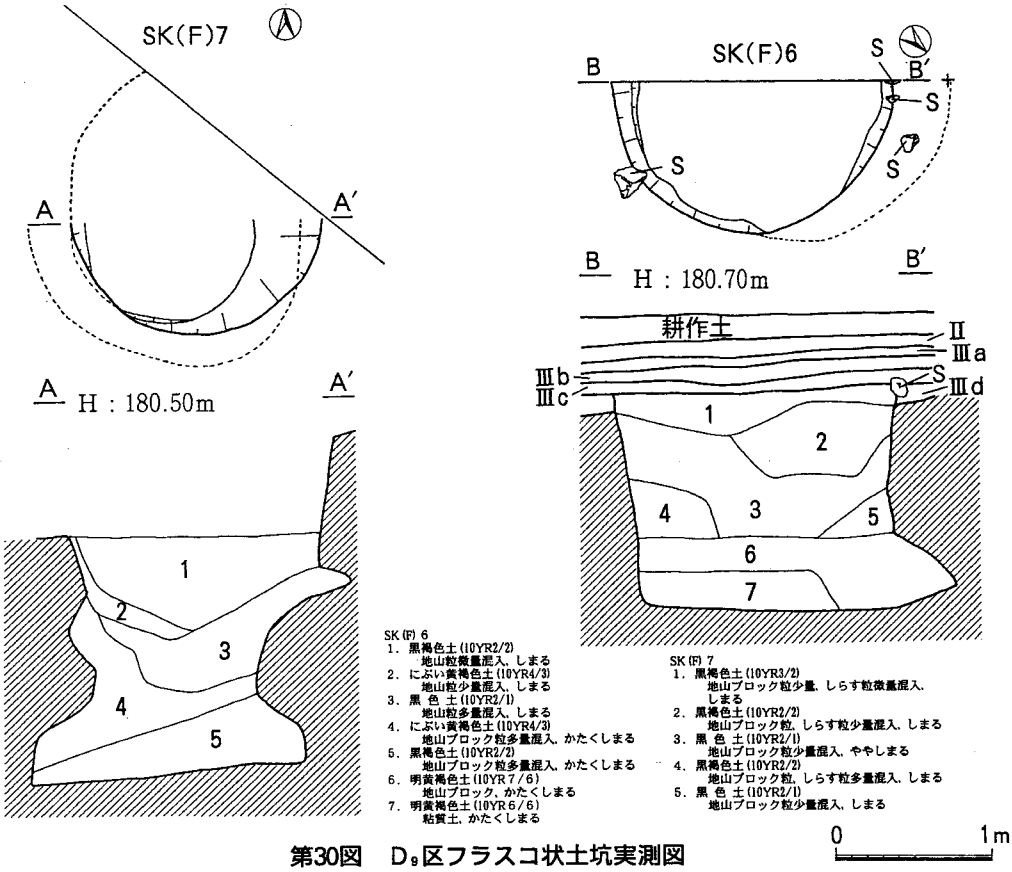
第29図　D_9区第１号、２号、４号、５号フラスコ状土坑、第３号土坑実測図

第２号フラスコ状土坑（第29図、31図、32図、35図～37図、39図～42図）

調査区北東部のＹＭ～ＹＮ－86グリッドに位置し、Ⅲｃ層上面で確認した。第１号フラスコ状土坑、第４号フラスコ状土坑、第５号フラスコ状土坑、第３号土坑と重複し、本遺構がいずれより新しい。確認面からの深さは推定 144cm、口縁部径は長軸 545cm×短軸 450cm（推定値）を測る。堆積土は11ブロックに分層され、人為堆積である。

遺構内より、復元可能土器９(2)点、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片976(484)点、石鏃７点、石錐１点、石匙１(1)点、掻器３点、磨製石斧３点、石皿(1)点、磨石１(1)点、敲石６(10)点、凹石28(31)点、剥片24点、土偶１点、鐸型土製品１(1)点、土器破片利用土製品14(3)点、板状石製品１点、軽石製石製品７(1)点が出土している。第32図12はいずれもＬ縄文による網目状撚糸文が施文された深鉢形土器である。14は器高16.1cm、口径14.5cm、底径6.4cmを測り、色調はにぶい褐色である。12は器高32cm、口径27.2cm、底径12（推定）cmを測り、色調はにぶい黄橙である。14は無文の深鉢形土器である。10は壺形土器で、隆沈文による入組状曲線文を主体とする文様が施文され、赤色顔料が付着している。器高は39.6、口径12.1cm、底径は推定８cmを測り、色調は明褐色である。３は小型の台付鉢形土器で、縦位に展開するＳ字文を主体とし、平行沈線文により５段の区画がなされている。器高は6.7cm、口径9.5cm、底径3.8cmを測り、色調は灰褐色である。４は小型鉢形土器で上部と底部を平行沈線文で区画し、上部は縦位の「Ｓ字」状文で区画がなされ、胴部には縦位の曲線文が主文様として施文されている。器高は6.7cm、口径10.4cm、底径4.6cmを測り、色調は明黄褐色である。５は、波状口縁の鉢形土器で上半部に平行沈線による区画がなされ、縦位の入組状曲線文が主文様として施文され、方形文が付加される。器高は24.6cm、口径29cm、底径15.4cmを測り、色調は橙色である。５は波状口縁の深鉢形土器で、口縁部に３条の平行沈線が施文されている。口径25cmを測り、色調はにぶい赤褐色である。８は壺形土器で、平行沈線により上部と下部が区画され、口頸部には隆沈による楕円形文が付加され、胴部には入組状曲線文が縦位の「Ｓ字」状文と連結され主文様となっている。底部に穿孔を有する。器高は24.2cm、口径９cm、底径9.8cmを測り、色調は橙色である。７と９は本遺構とＳＫ(F)４との供伴である。７は壺形土器で、口頸部に平行隆帯文が付加され、胴部には波状文が連結されている。色調は橙色である。９は波状口縁の深鉢形土器で、「∩字」文を主文様および区画文とし、弧線文によって連結している。口縁部には沈線間に円文が付加する。器高は20.3cm、口径15.2cm、底径8.3cmを測り、色調は明黄赤褐色である。48は土偶の脚部である。74は無文の鐸型土製品である。83は本遺構とＳＫ(F)４との供伴である。83は鐸型土製品で胴部に「Ｓ字」状文が施文され、沈線間にＲＬ縄文が充填される。つまみ部には貫通口が穿れ、楕円形文が付加されている。

本遺構の構築時期は、出土遺物および確認面より縄文時代後期前葉～中葉と判断される。



第30図　D_9区フラスコ状土坑実測図

第４号フラスコ状土坑（第29図、41図、42図）

調査区北東部のＹＭ～ＹＮ－86グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。第２号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。確認面からの深さは推定95cm、口縁部径は118cm、底部径は46cmを測る。底部北側には凹が確認される。堆積土は３ブロックに区分され、人為堆積である。

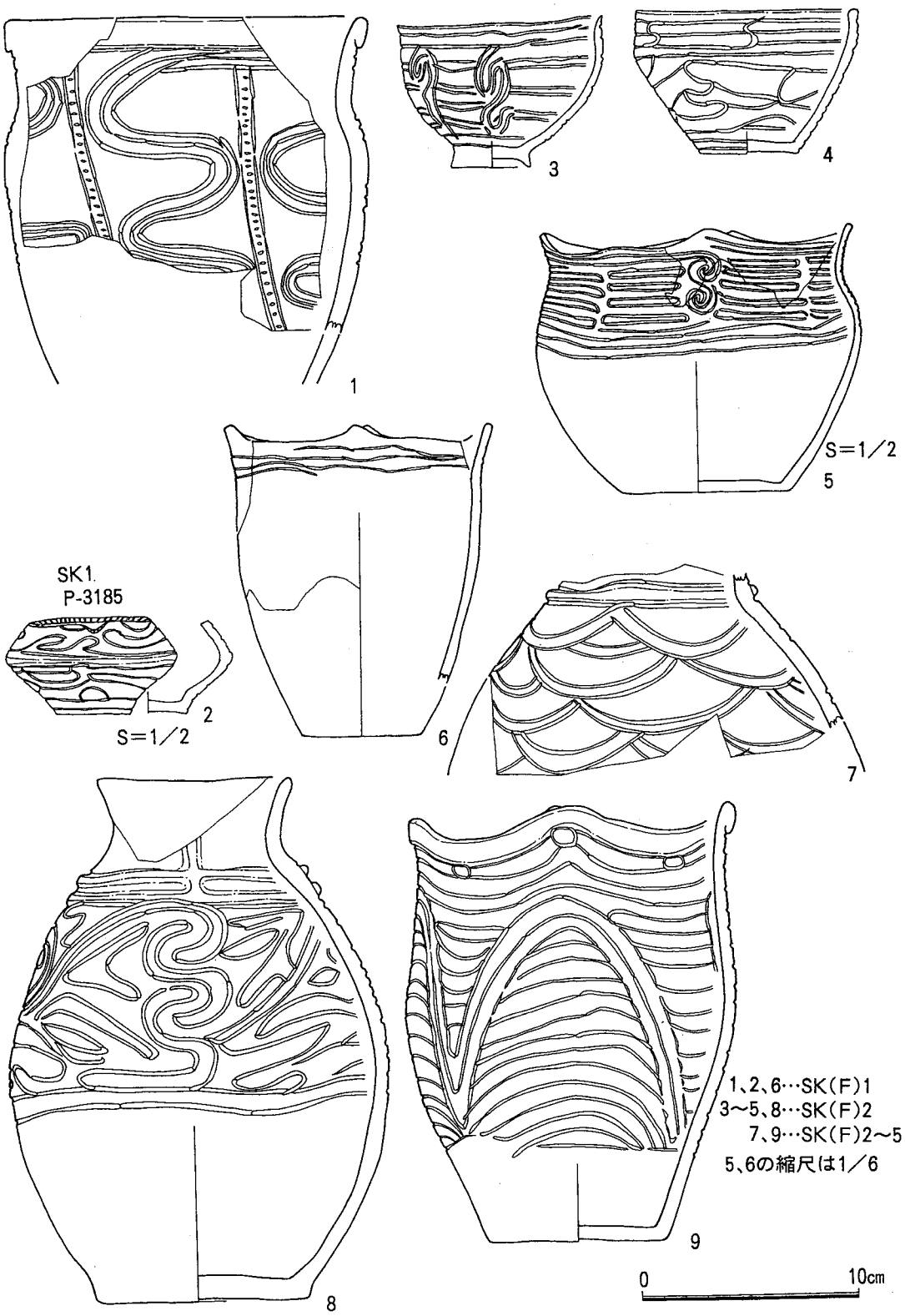
遺構内より、第２号フラスコ状土坑と合わせ復元可能土器２点、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片484点、石匙１点、石皿１点、磨石１点、敲石10点、凹石31点、鐸型土製品１点、土器破片利用土製品3点、軽石製石製品１点が出土している。

構築時期は、確認面より縄文時代後期と判断される。

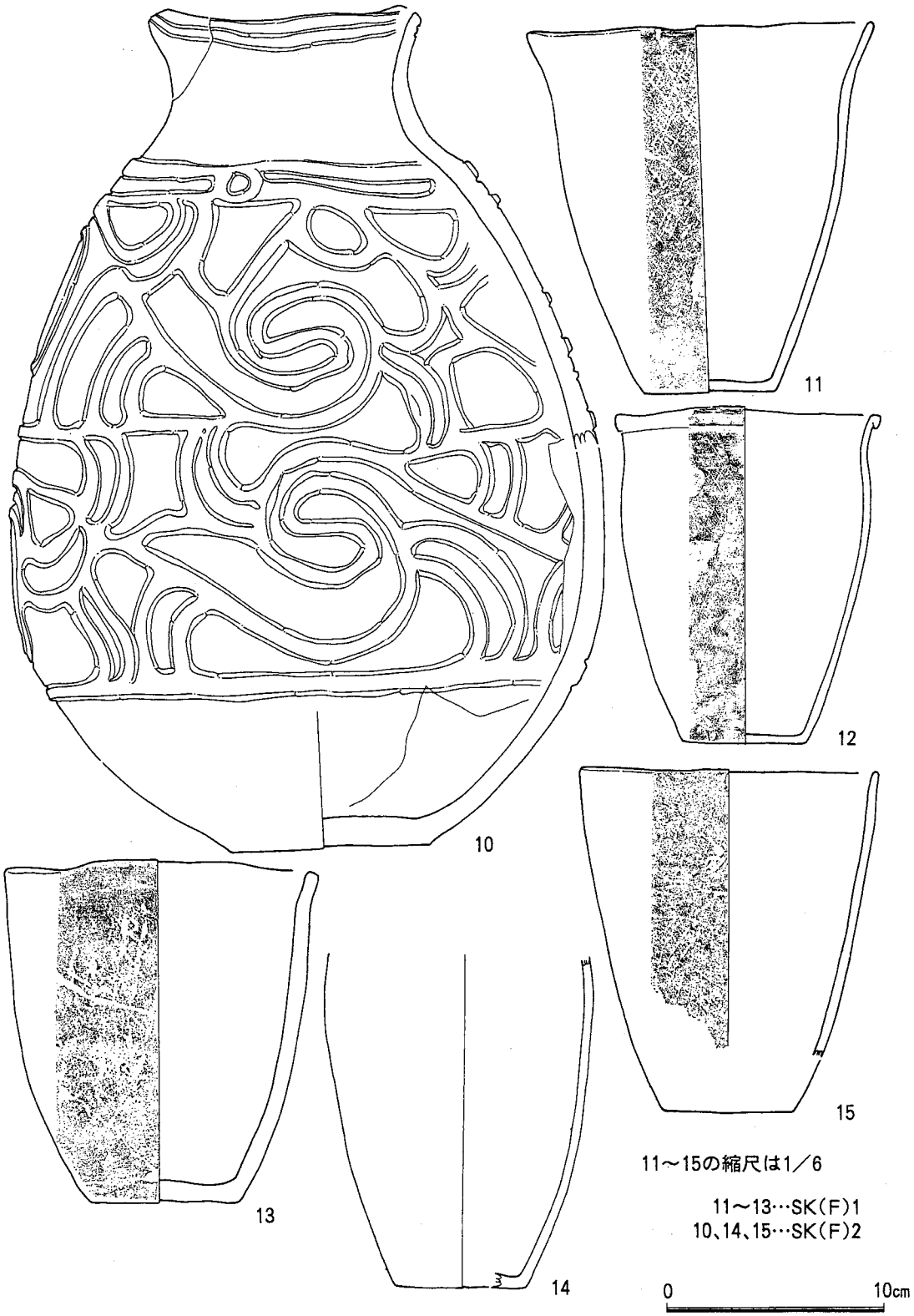
第５号フラスコ状土坑（第29図、31図、41図、42図）

調査区北東部のＹＮ－86グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。第２号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。確認面からの深さは推定80cmを測る。確認される堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積である。

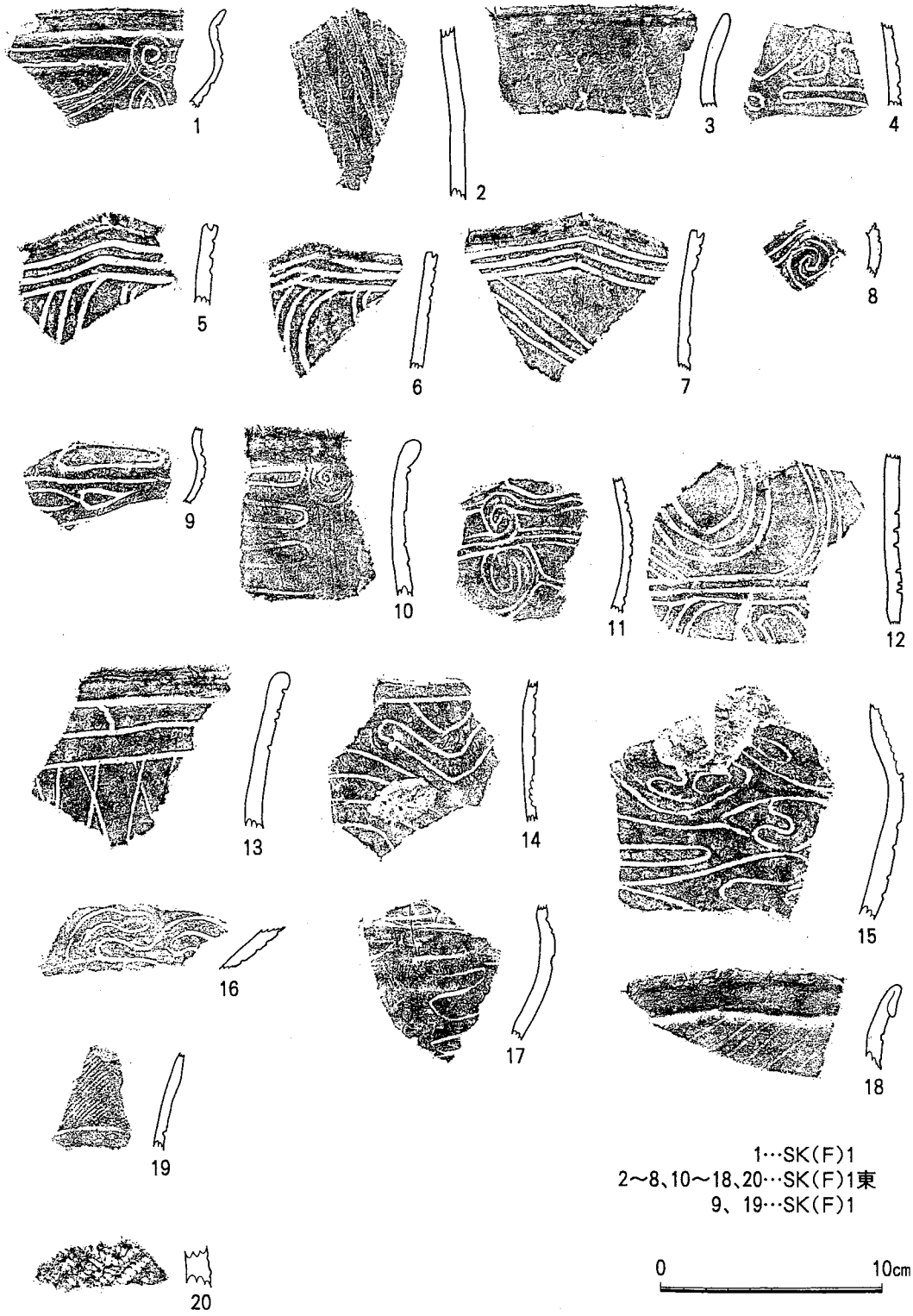
構築時期は、周辺出土遺物より縄文時代後期と判断される。



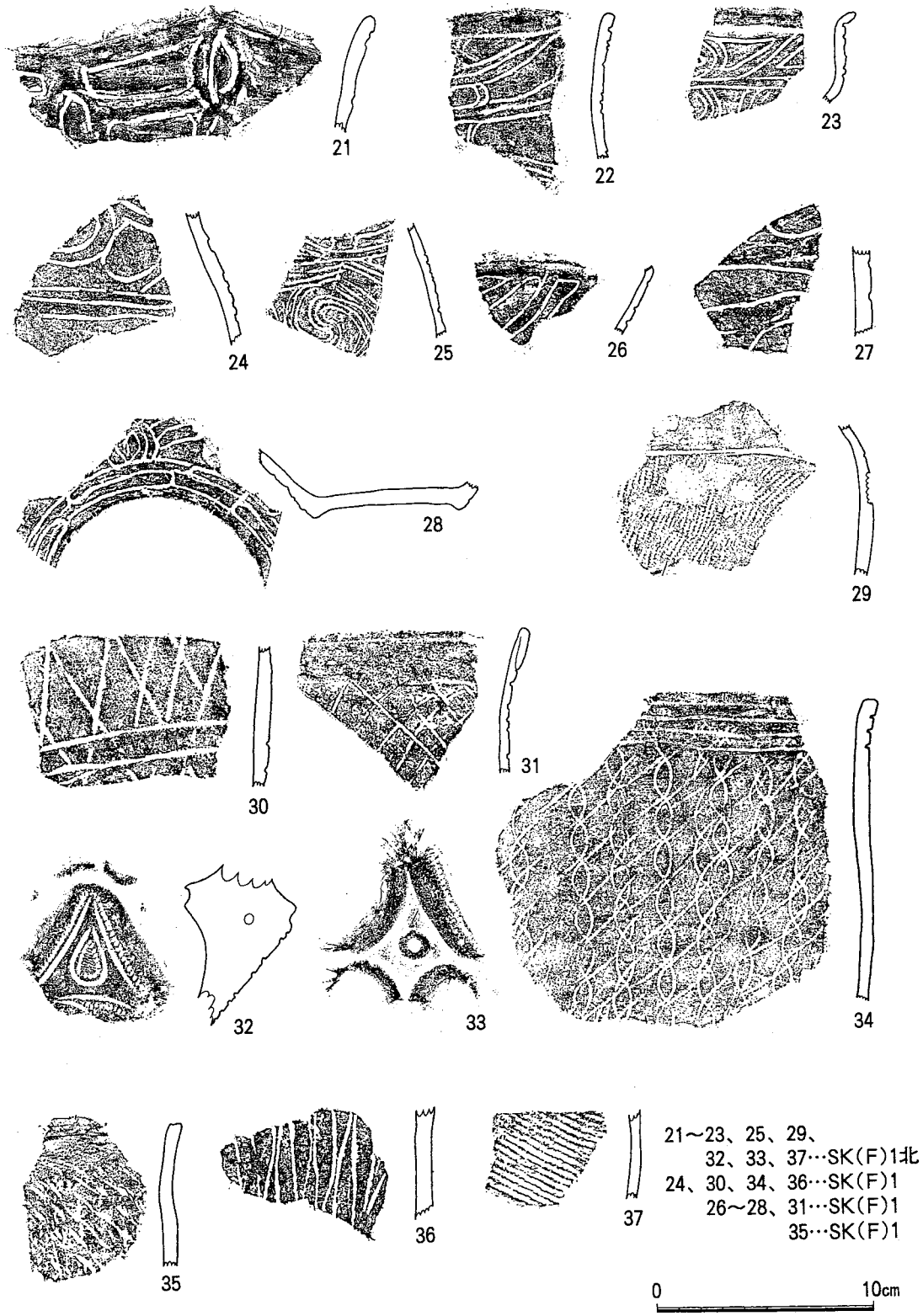
第31図　D_9区フラスコ状土坑出土土器実測図（1）



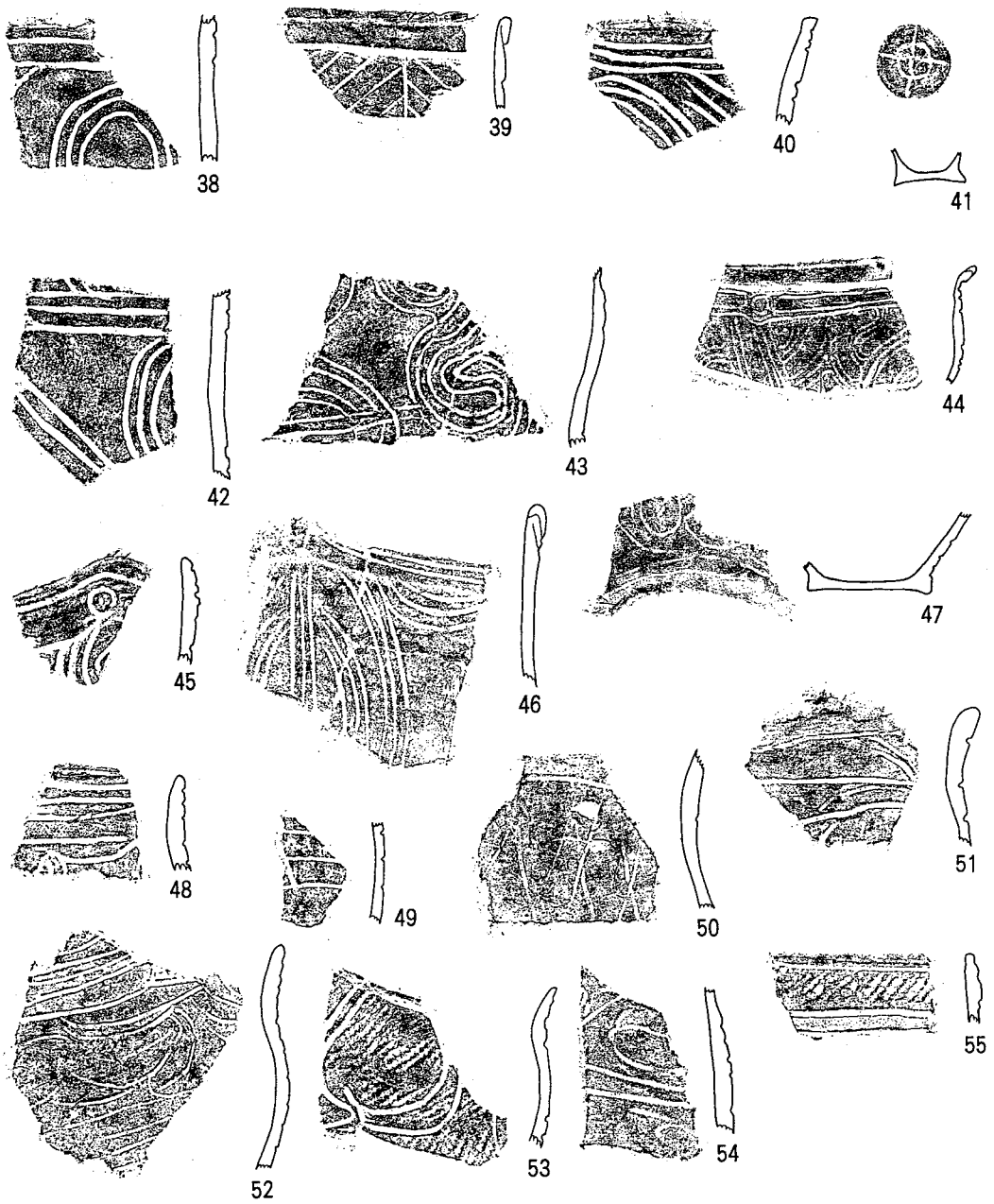
第32図　D₉区フラスコ状土坑出土土器実測図（2）



第33図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図（1）



第34図　D₉区フラスコ状土坑出土土器拓影図 (2)



38、39…SK(F)2
40、42…SK(F)1、2
41…SK(F)1、2
43…SK(F)2
44～55…SK(F)2

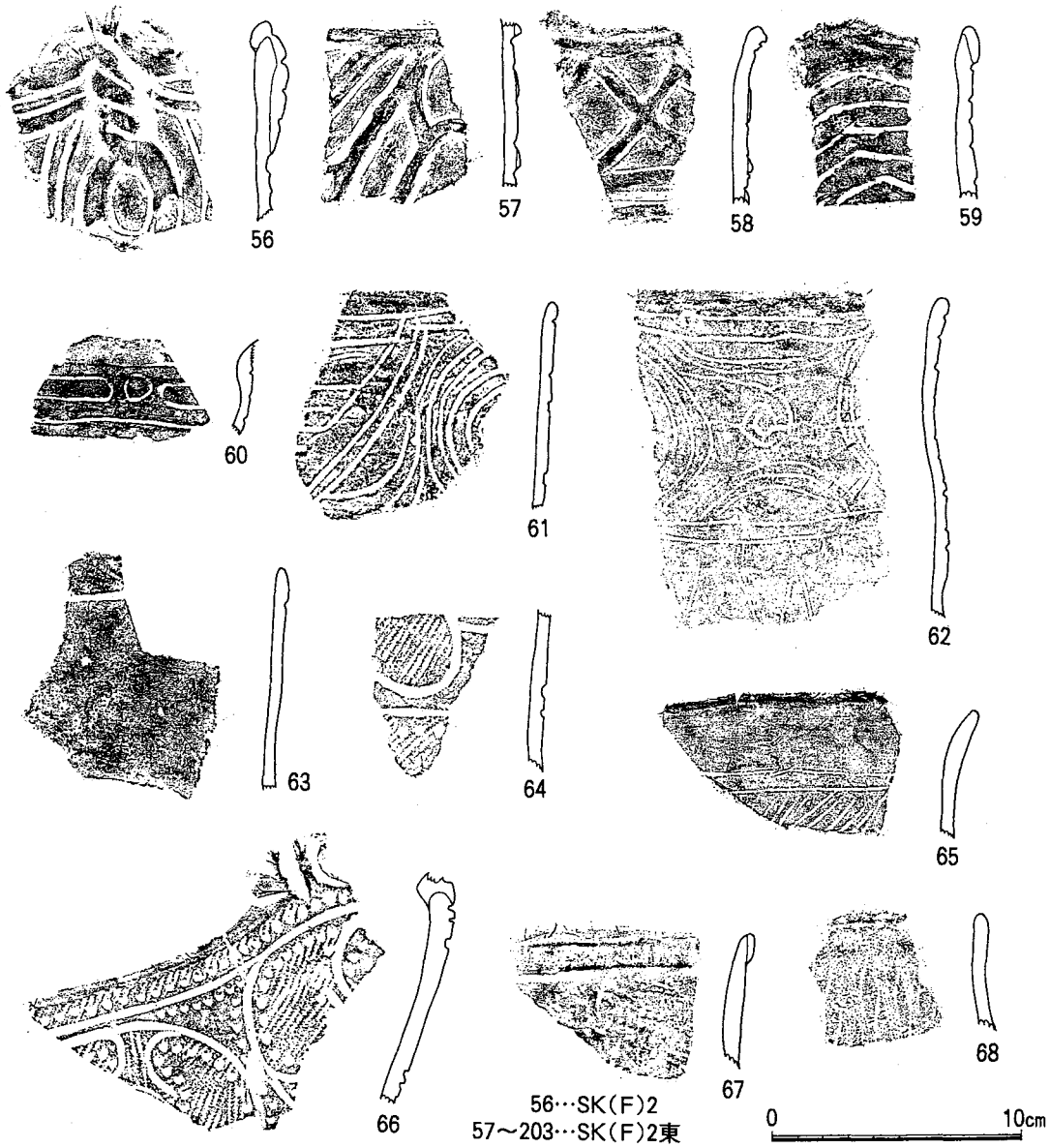
0　10cm

第35図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図 (3)

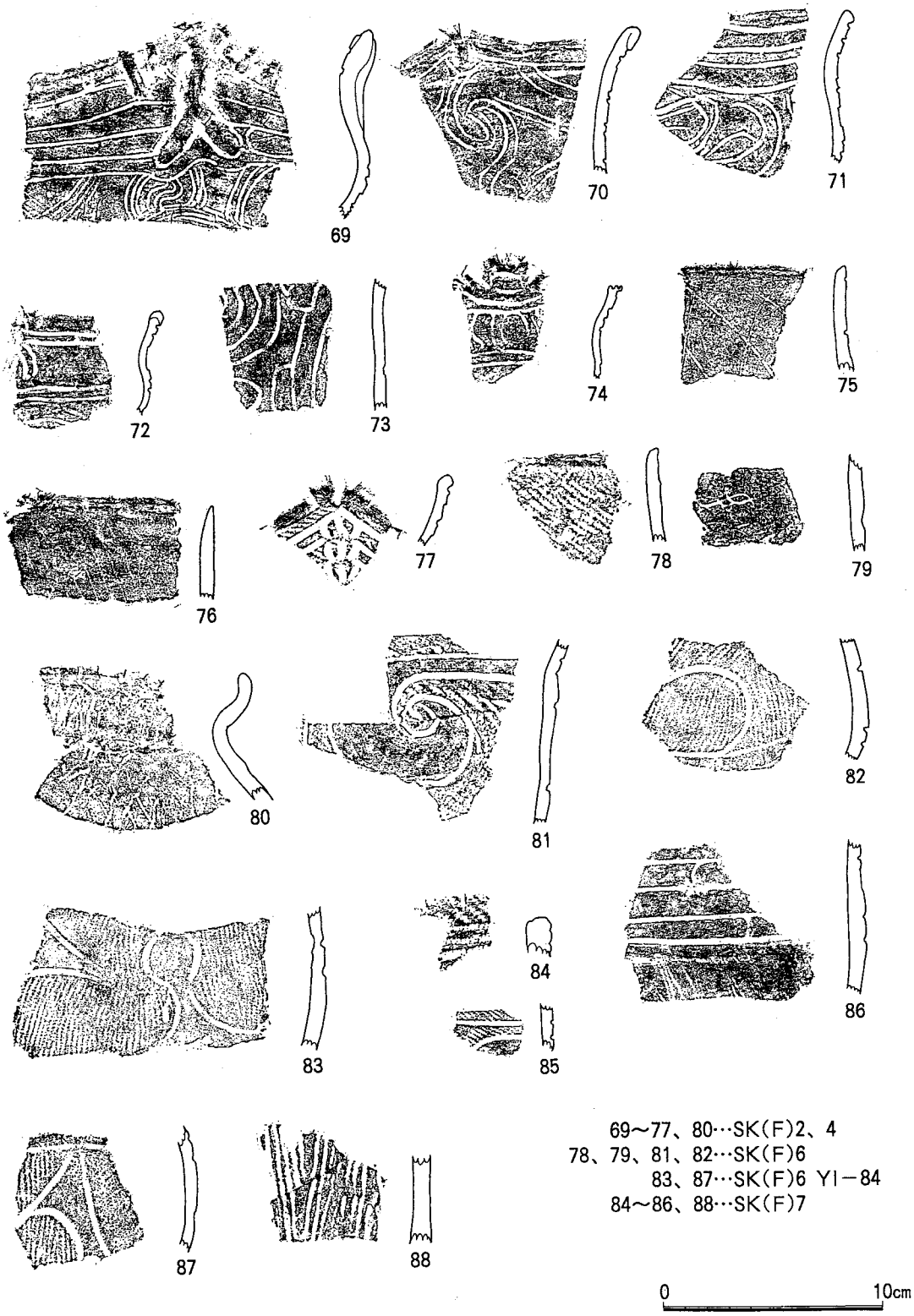
第６号フラスコ状土坑（第30図、37図、42図）

調査区西部のＹＩ－84グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。確認面からの深さは144㎝、口縁部径は181㎝、底径部径は 200㎝を測る。基本層序断面より本来の構築面はⅣ層上面である。底部北側は外側に張りでている。堆積土は７ブロックに区分され、人為堆積である。

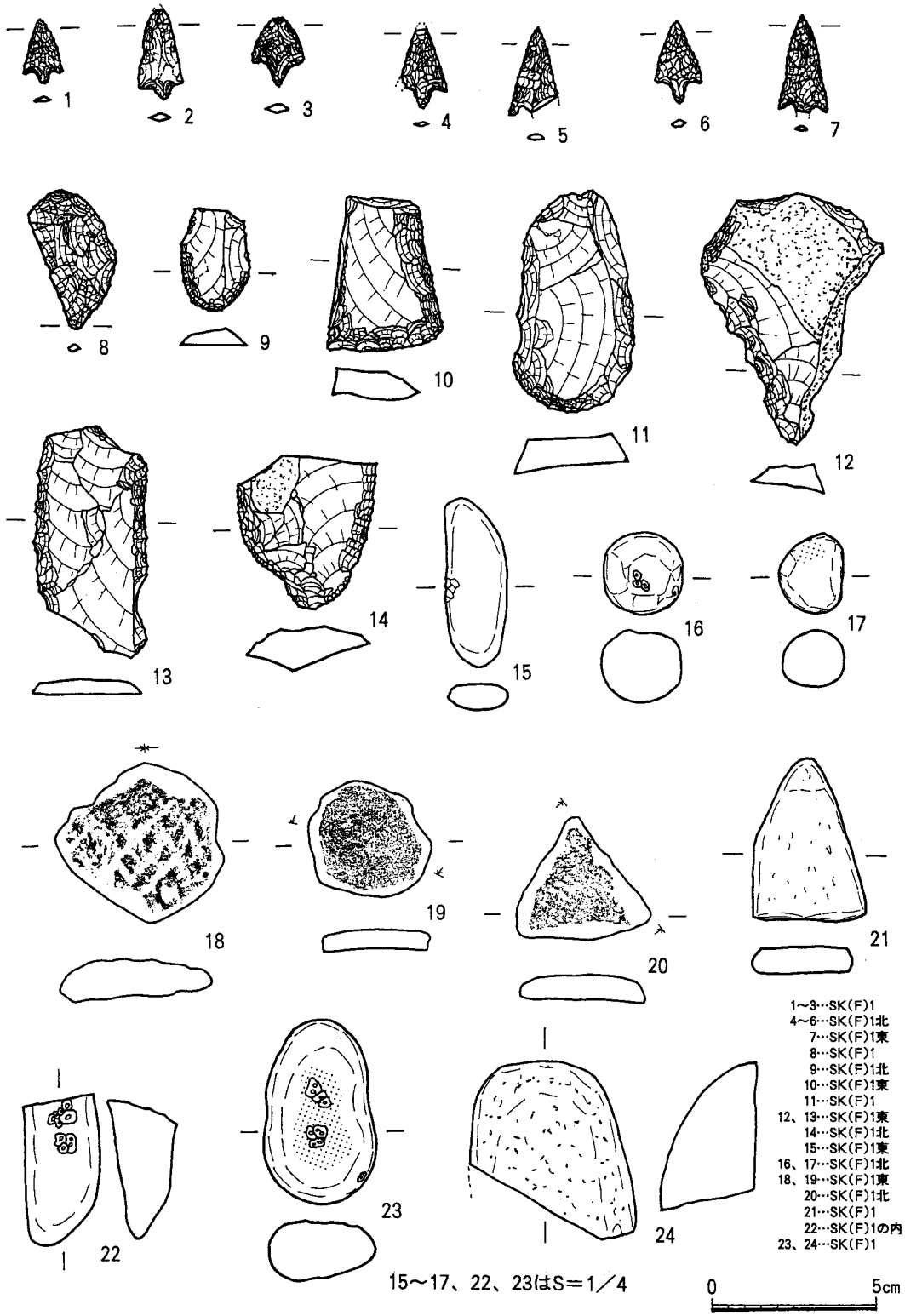
遺構内より、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片18点、敲石２点、土製品１点が出土している。93は、装飾品である。



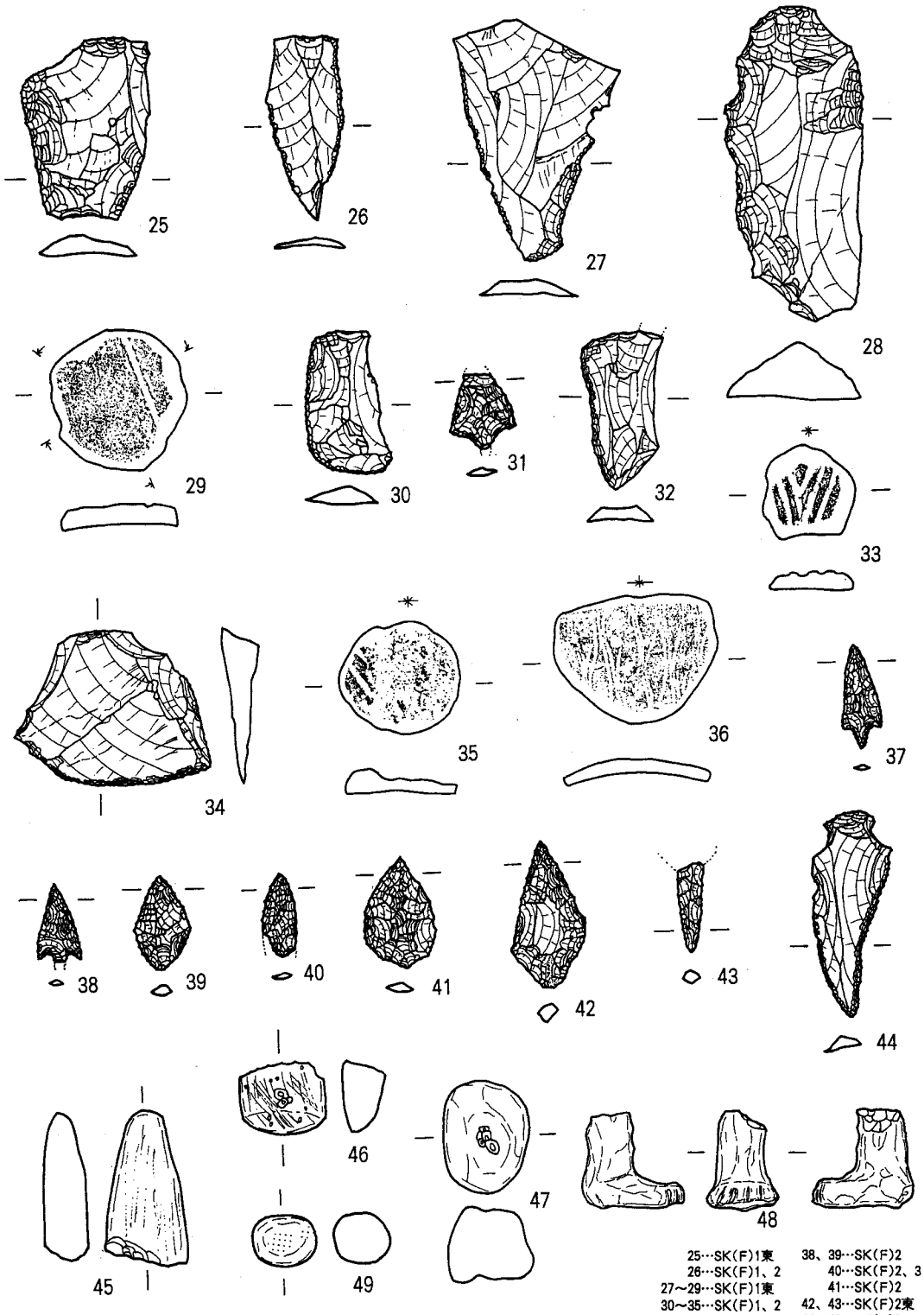
第36図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図（4）



第37図　D_9区フラスコ状土坑出土土器拓影図 (5)



第38図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図（1）

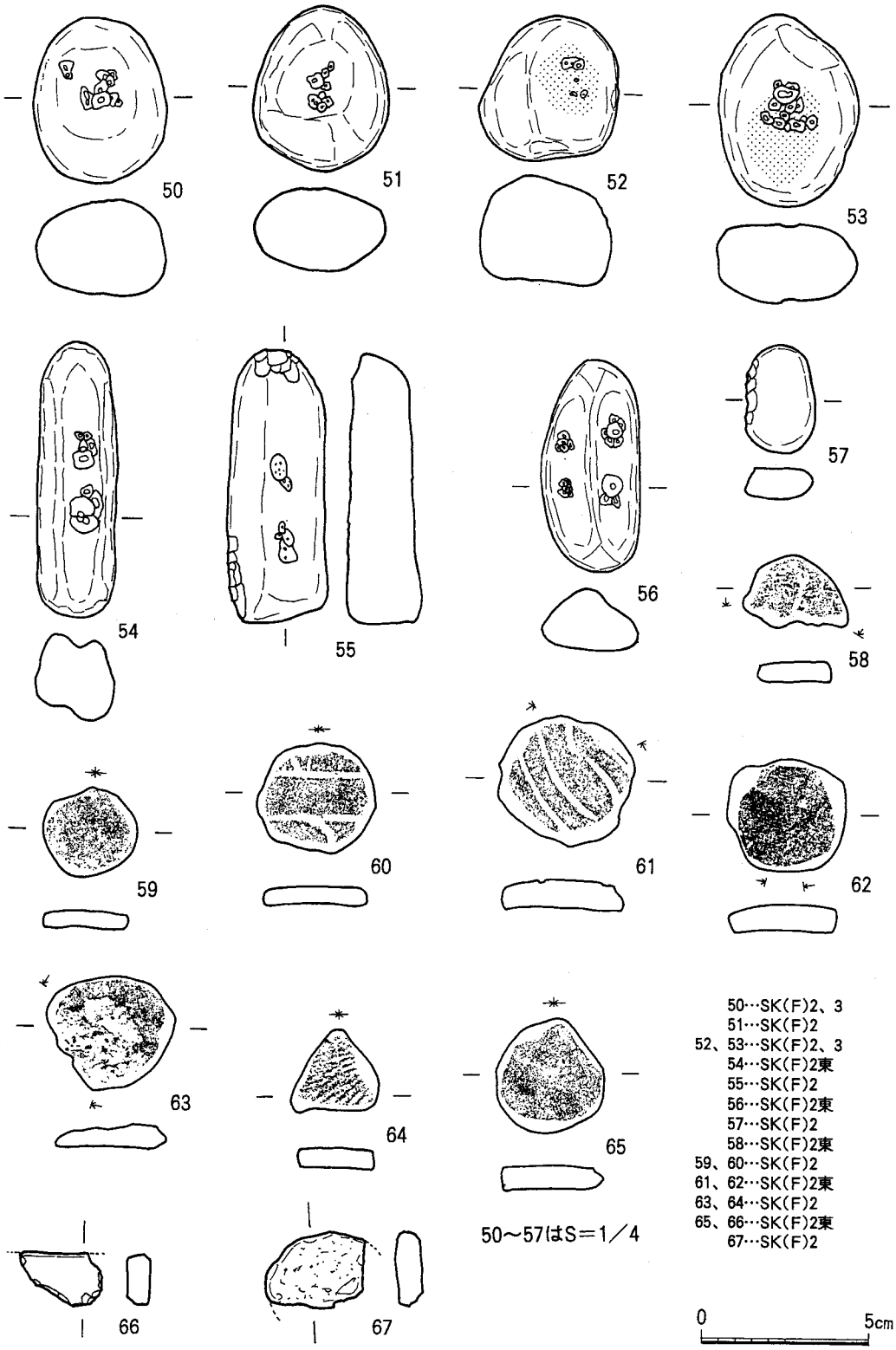


25…SK(F)1東
26…SK(F)1、2
27～29…SK(F)1東
30～35…SK(F)1、2
36…SK(F)1、2
37…SK(F)2
38、39…SK(F)2
40…SK(F)2、3
41…SK(F)2
42、43…SK(F)2東
44～48…SK(F)2
49…SK(F)2東

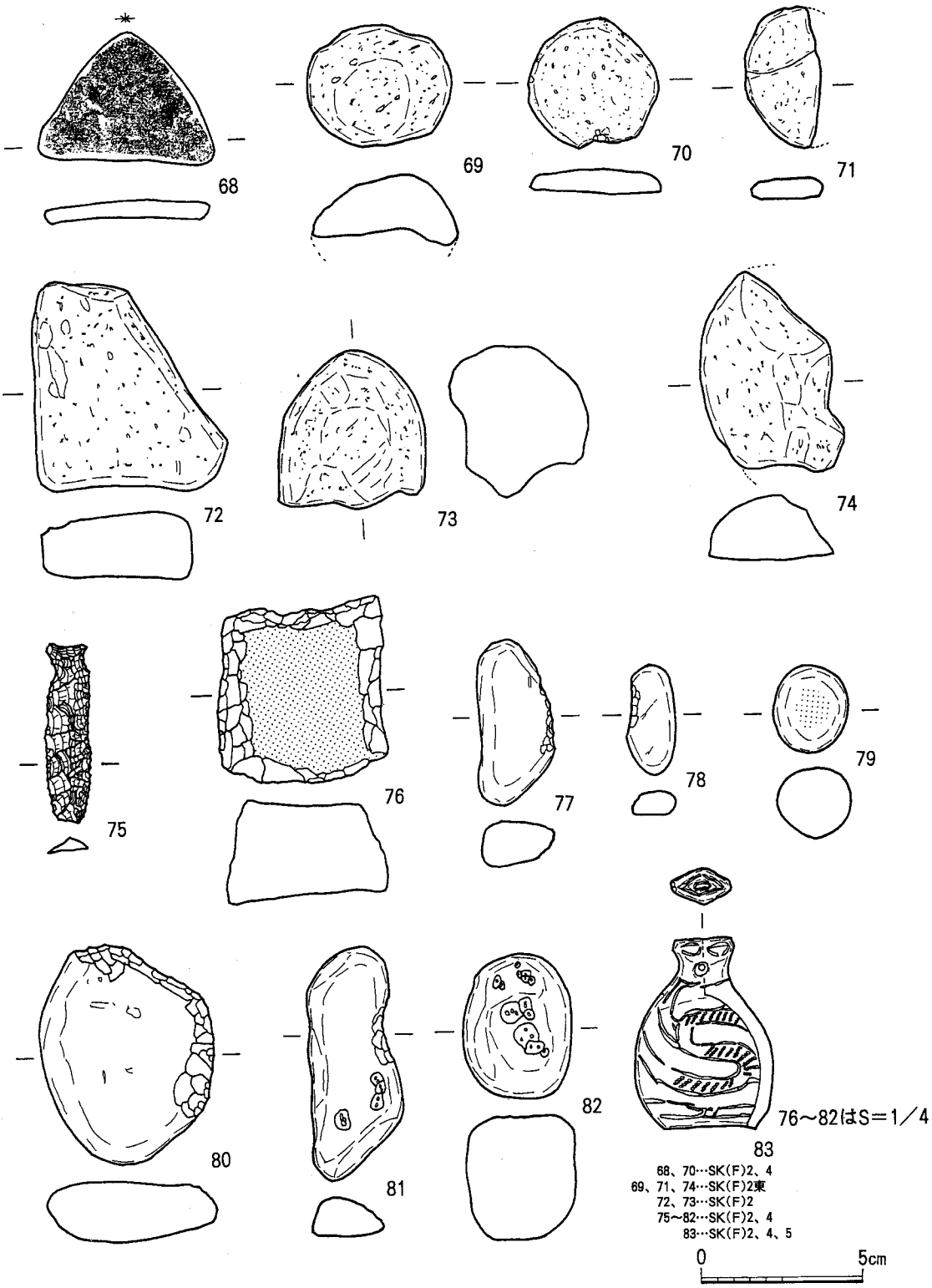
45～47、49はS＝1／4

0　5cm

第39図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図（2）



第40図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図 (3)



第41図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図（4）

構築時期は、出土遺物より縄文時代後期～中葉と考えられる。

第７号フラスコ状土坑（第30図、37図）

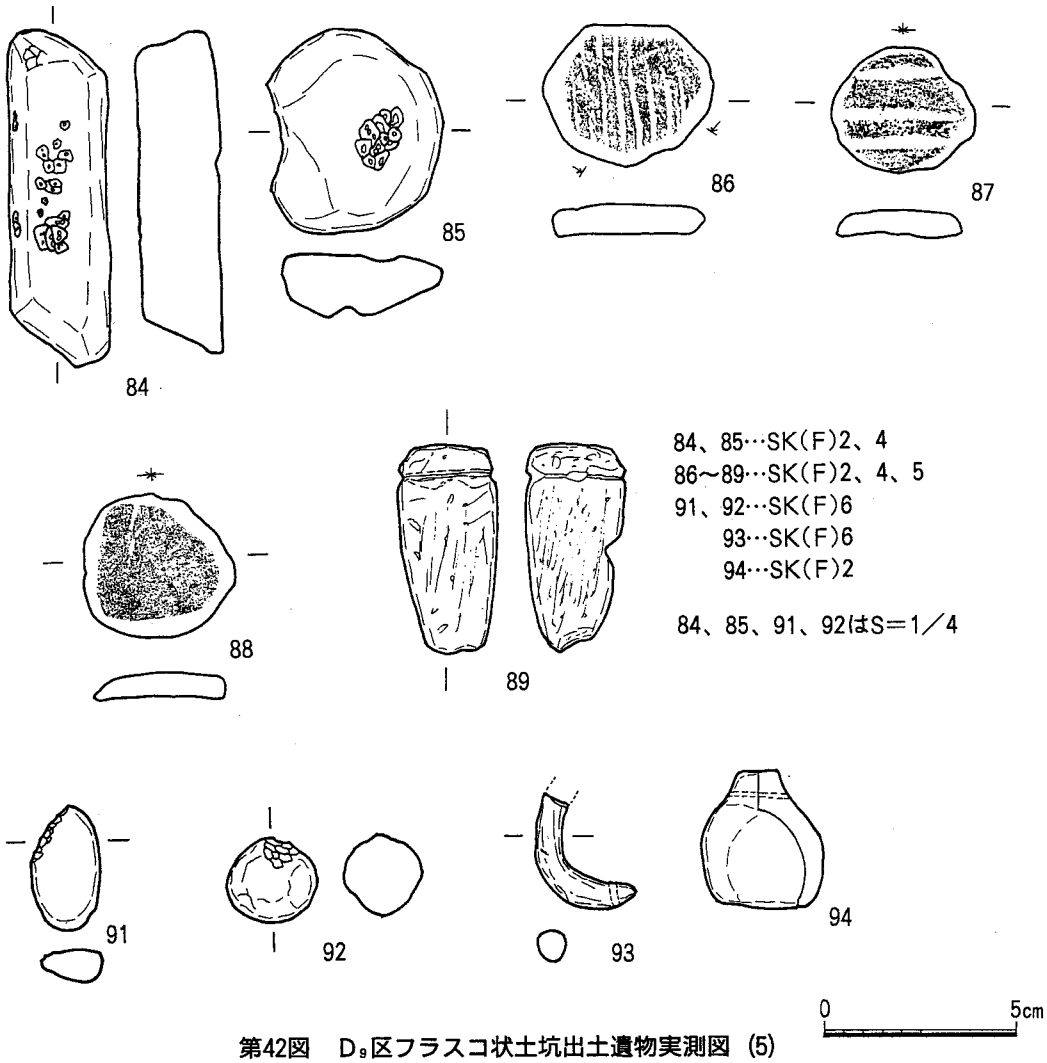
調査区南東部のＹＩ－80グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。第４号竪穴住居跡と重複し、新旧は不明である。確認面からの深さは180cm、口縁部径は長軸 169cm、底径部径は173cmを測る。確認される堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、縄文時代後期前葉の土器破片８点が出土した。

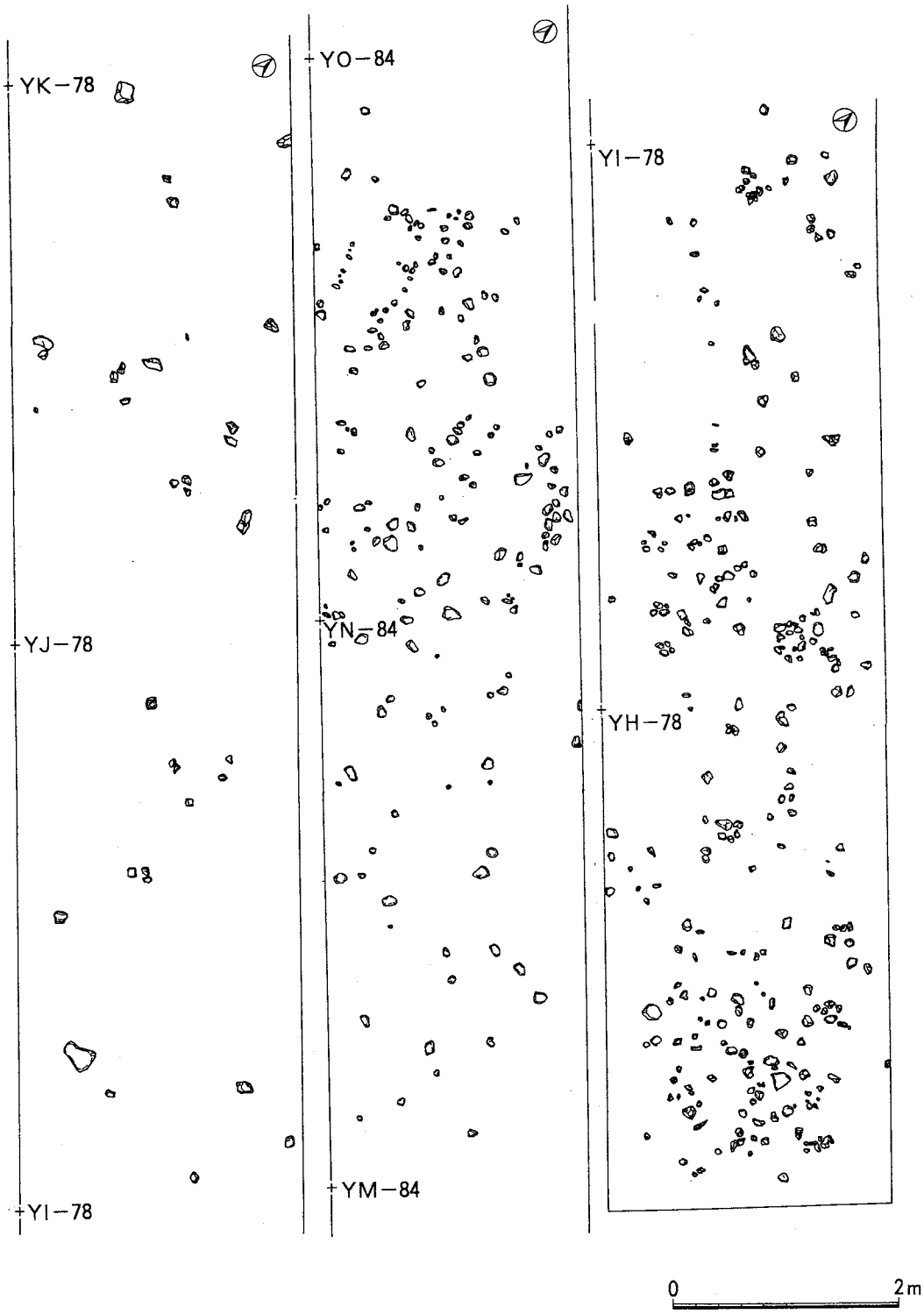
構築時期は、出土遺物より縄文時代後期と判断される。

(4) 礫　　群（第43図、44図）

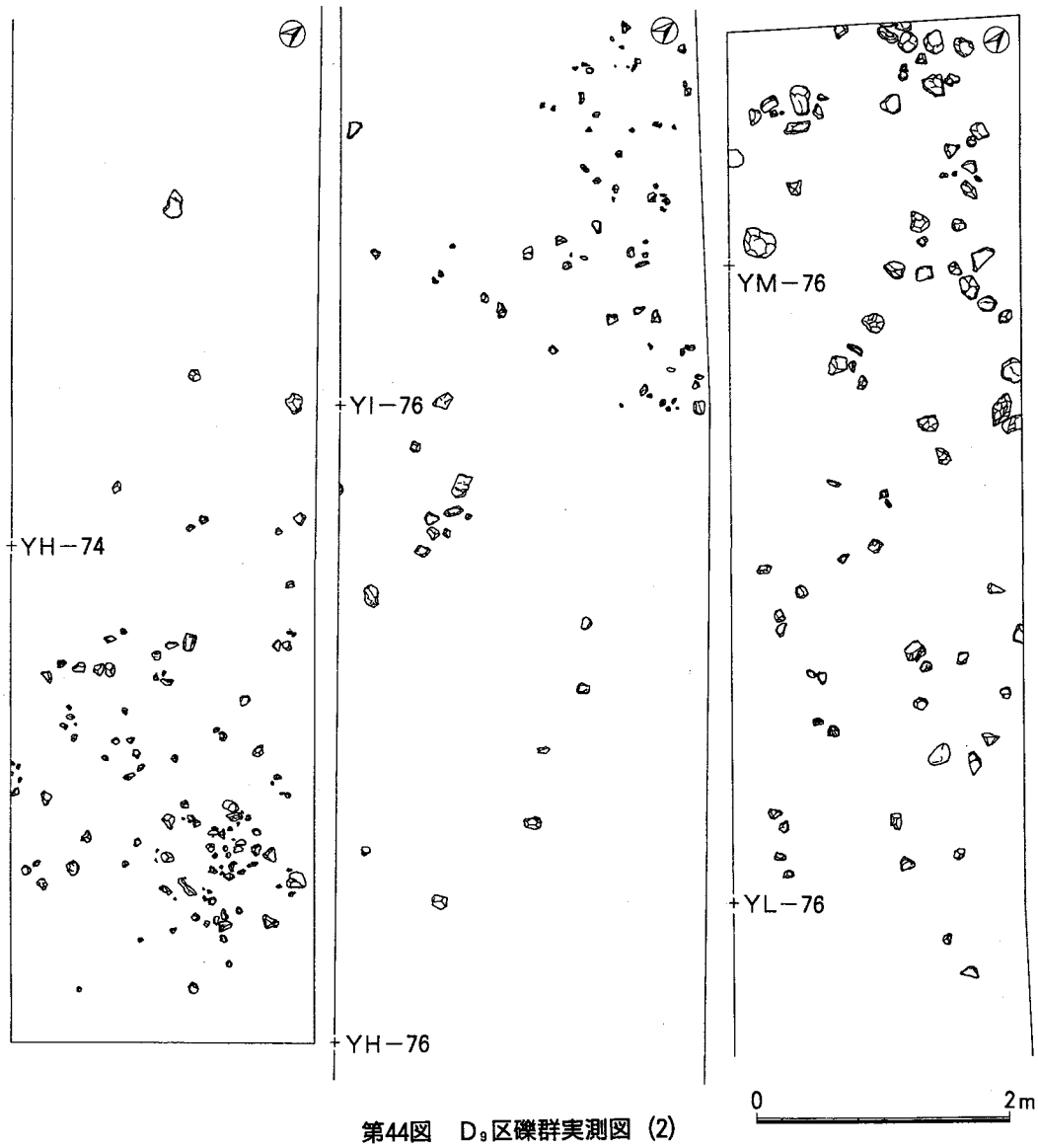
調査区北部、南東部から南西部にかけて拳大の礫の集中する区域が確認された。礫の確認面



第42図　D_9区フラスコ状土坑出土遺物実測図 (5)



第43図　D_9区礫群実測図（1）



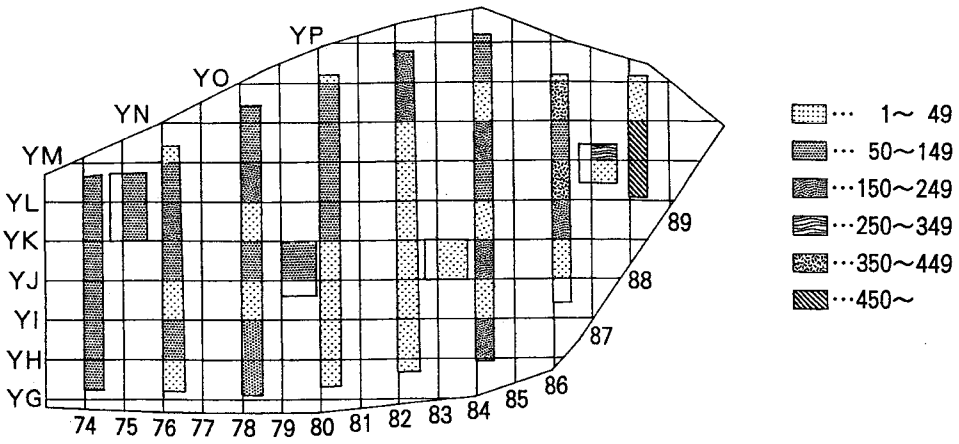
第44図　D_9区礫群実測図（2）

はⅢａ層～Ⅲｄ層で混在してみつかる。本調査区遺構外で検出した礫石器は、大半がこれらの礫群に混在してみつかっている。また、加熱された礫も観察された。

5．遺構外出土遺物

(1) 土　　器（第47図～58図）

D_9区遺構外からは、13個体の復元・図化土器と5,765点の土器破片が出土した。これらは縄文時代（早期・前期・中期・後期・晩期）、弥生時代の時期に位置づけられるものであるが、その大半を縄文時代後期のものが占めている。



第45図　D_9区土器片出土分布状況

各時代の土器分布をみると早期土器群は調査区西部～北西部の台地縁辺部・第Ⅲｄ層下位、前期土器群は分布密度が低いものの、ほぼ全域の第Ⅲｄ層中位～下位から出土している。第５次調査の分布状況と照合するとその分布範囲はさらに台地内側へ広がっている状況がみられる。中期土器群は本年度初めて出土したものであり、調査区中央のＹＫ－79・第Ⅲｄ層下位より一個体土器として出土した。後期土器群は密度の濃淡はあるがほぼ全域から出土している。その密度は竪穴住居の周辺グリッドからの出土量が多く、第Ⅲｄ層中位～第Ⅲｃ層から出土している。晩期土器群は点数も少ないが調査区北部より出土している。

土器の分類については、時期ごとに群分し、器形、文様や施文技法によって分類した。なお、分類に関しては発掘調査報告書(5)を基本とした。

第Ⅰ群土器　早期の土器（第50図１～11、15～17、51図18～23）

１類：貝殻文、貝殻沈線文の土器（50図１～３）

万座環状列石の西部～北西部台地縁辺部に集中して出土する傾向にある。50図１はＹＭ－86グリッド・Ⅲｄ層下位から出土したもので胴部上半～口縁部の破片である。器形は山形口縁を呈し、口縁部が僅かに内湾する。沈線によって幾何学文が施文され、それに沿って貝殻文が施文されている。口縁部内面上端にも沈線・貝殻文が施文されている。胎土に砂粒を含み、焼成は極めて良好である。色調は浅黄褐色～褐灰色を呈する。

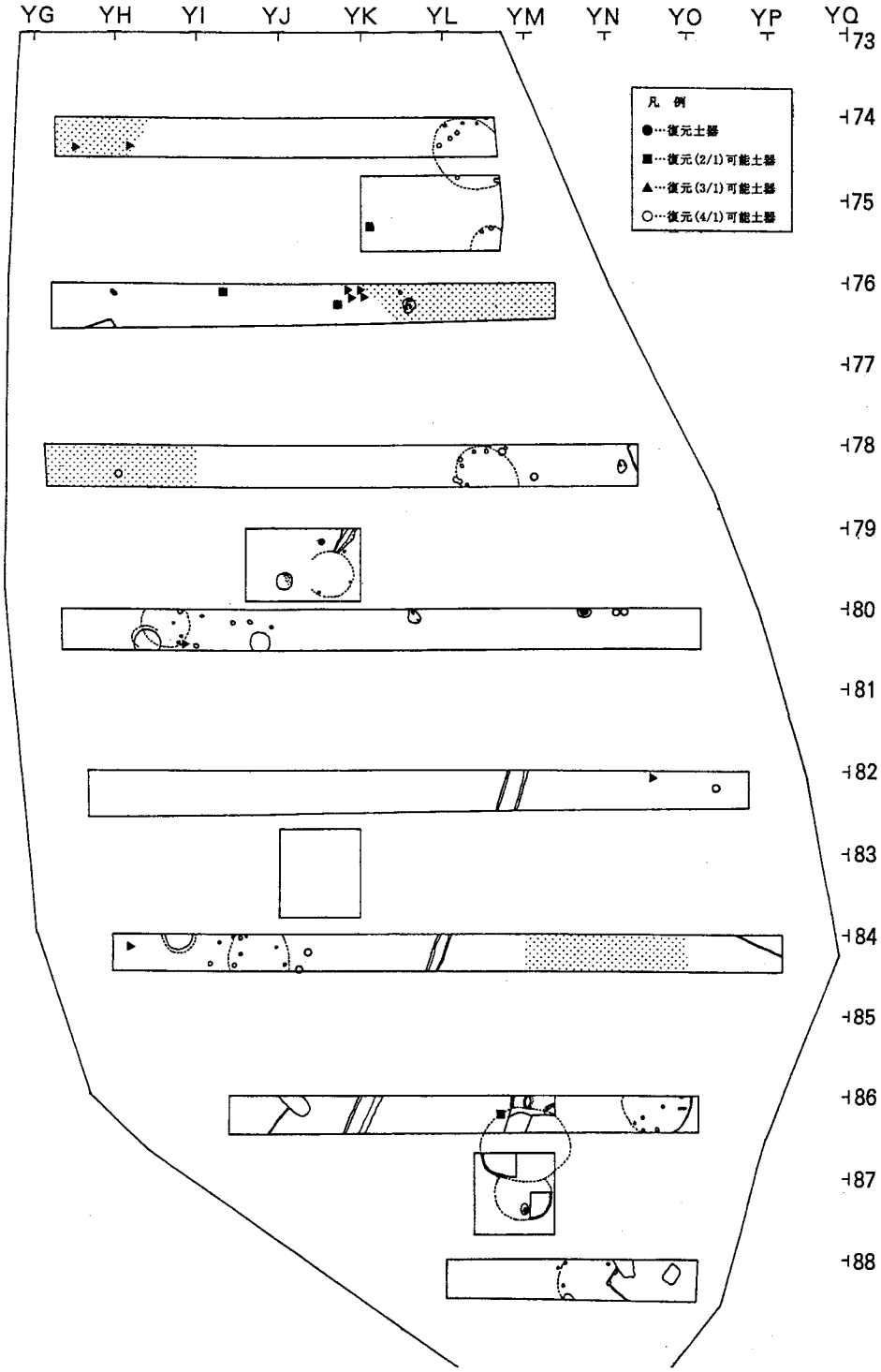
２類：沈線文の土器

本調査区からは出土していない。

３類：縄文の土器（第50図４～11、15～17、51図18～23）

ａ－１：羽状縄文が施文された土器（第50図５～11）

羽状縄文が施文され、平底を呈する土器を一括した。4～11は同一個体である。ＲＬ縄文を



第46図　D_9区復元可能土器出土分布状況

原体とした結節の羽状縄文が施文されている。11は底部破片で底面にも縄文が施文されている。胎土には細かな砂粒を多く含んでいることからいわゆる「粉ふき芋」のように粉を吹いている

状況である。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

a－2：羽状縄文が施文された土器（51図18～23）

本類a-1と胎土が異なることから細分した。胎土に多量の植物繊維を含む。平口縁を呈する深鉢形土器で胴部上半に僅かにくびれを持つ。器面に複節（ＲＬＲ）により羽状縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐色～黒褐色を呈する。

b：縄文が施文された土器（第50図４、15～17）

単節の斜縄文を施文した土器を一括した。平口縁または緩やかな波状口縁を呈し、口唇部の断面が丸みを帯びるものと尖り気味のもの（4）がみられる。器形は、15・16から尖底または丸底を呈するものと考えられる。器面にＲＬ縄文を施文され、口縁部内面には指頭による圧痕が僅かながら認められる。胎土に砂粒のほか少量であるが植物繊維を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色～褐色を呈する。

本群土器１類は早期中頃の物見台式に、３類は早期後半の土器に比定され、a-1は早稲田５類に、a-2は早稲田６c類に比定される。bは赤御堂式に比定が可能である。

第Ⅱ群土器　前期の土器（第50図12～14、51図24～34）

１類：地文上に沈線文、押引き沈線文が施文された土器

本調査区からは出土していない。

２類：連続刺突文が施文された土器

本調査区からは出土していない。

３類：縄文または特殊な縄文が施文された土器（第50図12～14）

組紐縄文が施文され、胴部に膨らみを持つ土器である。内面は光沢を帯びるほどに調整がされている。胎土には植物繊維は含まれず、焼成は良好で、極めて堅固である。色調は橙色～にぶい橙色を呈する。

４類：単軸絡状体の圧痕文が施文された土器（第51図24～34）

幅の狭い口縁部文様帯に単軸絡状体による３～８条の平行圧痕文が施文されるもので、口唇部及び口縁部と胴部の境界に巡らした隆起帯には竹管や棒状工具により刺突文が施文されている。胴部には木目状撚糸文、結節の羽状縄文が施文されている。胎土にはほとんど植物繊維の混入はみられない。内面は光沢を帯び、焼成はよく、色調は橙色、にぶい赤褐色を呈する。

本群土器４類は円筒下層ｄ式に比定される。また３類は胎土にほとんど植物繊維を含んでいないことから円筒下層ｄ式の土器に伴った胴部破片と思われる。

第Ⅲ群土器　中期末～後期初頭の土器（第47図１、58図185～187）

１類：磨消縄文の土器

これまでの調査では、出土していなかった土器群である。

47図１は、大小の山形口縁を持つ深鉢型土器で器高30.8cmを測る。ＹＫ－79・第Ⅲｄ層下位より一個体土器として出土した。口縁部と胴部文様帯に分けられる。口縁部上端に２条の縄文圧痕文を施文し、大小の山形口縁部直下より２条の刺突文を胴部上端まで垂下している。胴部文様はさらに２段に区画され、上部・下部文様はボタン状貼付文直下より「ノ」字状文を垂下させ、その先端に隆線が貼り付けて主文様としている。58図186～188は口縁部が内湾する深鉢形土器破片で、中期末の土器の様相を示している。

第Ⅳ群土器　後期初頭から前葉の土器（第47図２～49図、52図～56図139）

１類：隆線文、隆沈文が施文された土器（第52図37～48）

隆線文、隆沈文が施文されている土器を一括した。深鉢形土器、壺形土器がみられる。

いわゆる十腰内Ｉ式、それ以前の後期初頭の土器に施文された隆線文については幅広で、厚みのないものが一般的であったように思うが、43、47、４８を除いたものは、幅も狭く、隆線に丸みを帯びており、後期の隆線や隆沈文と趣を異にしている。

37、38は、小さな山形口縁を呈する深鉢形土器で隆線文によって文様が施文される。文様帯は、胴部中程まで達するものと考えられる。42は、粘土紐貼り付けの上さらに棒状工具で押捺している。46は胴部上半に隆線で区画された内部に沈線を施文したものであり、東北地方中部の後期初頭～前葉土器の様相を持っている。

隆沈文の施文された土器は、波状口縁を呈する深鉢形土器、壺形土器がみられる。文様帯は両者とも胴部下半まで及ぶものが多い。深鉢形土器は口縁部・胴部文様帯に区画され、口縁部文様帯には楕円形文や円形文が多用される。壺形土器は口縁部が無文となる。胴部文様帯は幅広となり、主文様として波状文（巴文）を縦位連結させ、楕円形文・円形文・幾何学文を付加するものがみられる。

胎土に大きめの砂粒を含むものが多い。焼成は良好で、堅固なものが多く、色調は浅黄橙色、褐灰色、橙色を呈する。

２類：地文上に沈線文が施文された土器（第47図２、52図49～56）

地文上に沈線によって文様を施文したものを一括した。山形口縁を呈する深鉢形土器が主体となる。地文としてはＬＲ縄文、ＲＬ縄文、Ｌ撚糸文が施文される。地文上に引かれる沈線は幅の広いものが多い。47図２は山形口縁を呈するもので、文様帯は胴部中程まで及び、平行沈線で区画された上下の文様帯内には波状曲線文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶ

い赤褐色を呈する。

3類：沈線が施文された土器（第47図３、53図57～54図100）

a：主文様が縦位に施文される土器（第53図57～66、54図78～81）

主文様が縦位に施文された土器を一括した。波状口縁を呈した深鉢形土器、壺形土器、鉢形土器が主体となる。なお、第２号土坑から出土した鉢形土器は、器高24.4cm、口径29.3cmを測る極めて大型ものである。深鉢形土器の文様帯は胴部中程まで、壺形土器は胴部が最も膨大した胴部下半まで、鉢形土器は胴部上半や底部まで及部ものがある。深鉢形土器は、主文様として垂下する平行沈線によって区画された文様帯内に楕円形文や弧線文、曲線文が施文されるほか、31図９は逆「U」字文を等間隔に配置し、弧線文で連結するものもある。壺形土器は胴部上端に隆沈文を配し、胴部文様帯と口縁部無文帯を区画しているものがみられる。重層・ウロコ状に配置された弧線文や縦位に連結された「S」字文を主文様に弧線文・楕円形文が付加されるものもある。鉢形土器では文様帯は底部まで及び、縦位の連結「S」字文や曲線文が施文されている。焼成は良好で、色調は黄橙色、明赤褐色、明黄褐色、浅黄橙色、褐灰色、橙色、にぶい褐色を呈する。

b：主文様が横位に施文された土器（第53図67～77）

主文様が横位に施文される土器を一括した。波状・平口縁を呈する深鉢形土器、山形口縁を呈する鉢形土器が主体となるほか、壺形土器や蓋形土器もみられる。深鉢形土器では、隆沈文で文様帯を区画するものがあるほか、波状・山形口縁の頂部に粘土紐の装飾的貼り付けが行われるものもある。文様帯は深鉢形土器で胴部中程～下半に、壺形土器で胴部上半に区画される。主文様として入組文がされて、連結文として弧線文や曲線文が付加されている。

焼成は良好で、色調はにぶい褐色、にぶい橙色、暗赤褐色などを呈する。77には赤色顔料の塗布が認められる。

c：幾何学的な文様が施文される土器（第47図３、54図84～95）

幾何学的な文様が施文される土器を一括した。平口縁、山形口縁を呈する深鉢形土器、鉢形土器が主体となるほか、浅鉢形土器、壺形土器が伴う。文様帯は深鉢形土器で胴部中程まで、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器は底部付近まで及ぶものがある。文様は、楕円形文を重層させ三角形文とするものや楕円形文を組み合わせて幾何学的な文様とするものがある。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄褐色、褐灰色、にぶい褐色を呈する。

47図３は平口縁を呈すね深鉢形土器で、文様帯は口縁部・胴部に区画されている。口縁部文様帯に等間隔に粘土紐の貼り付けが行われる。胴部文様帯は楕円形文を重層させ、三角形文としている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、灰褐色、橙色、にぶい褐色を呈する。本類土器の中には色彩の施されたものが認められる。

d：格子目状、斜行平行沈線が施文された土器

格子目状、斜行平行沈線が施文された土器を一括した。平口縁の深鉢形土器が主体となる。口縁部は無文となり、文様帯は胴部下半まで及んでいる。最も見受けられる文様は格子目状であるが、これまでの調査では、矢羽根状の文様が施文されるものもみられた。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、にぶい褐色、暗褐色を呈する。

4類：帯縄文が施文された土器（第47図4、48図5～6、55図101～112）

本来ならば遺跡の時期を示す土器であるが、本調査区からの出土は少なかった。

a：主文様が横位に施文される土器（第47図4、48図5～6、55図104・107～109）

帯縄文が横位方向に展開する土器を一括した。深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が主体となるほか肩口土器がみられる。深鉢形土器は平口縁・波状口縁を呈し、口縁部文様帯には楕円形文、長方形文が多くみられる。胴部文様帯は中程～下半に及ぶ。鉢形土器は波状口縁を呈するものが多く見受けられるほか、つまみ出しによった小さな突起を持つものもある。焼成は良好なものが多く、色調は褐色、褐灰色、にぶい橙色、にぶい褐色などを呈する。

48図5は平口縁の深鉢形土器で胴部文様帯は下半まで及ぶ。主文様として入組文が施文され、沈線間にはＬＲ縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。48図6は平口縁の深鉢形土器で、胴部の最大張部付近で文様帯が上下に二分されている。上部文様帯には入組文が施文され、三角形文がその隙間に付加されている。下部文様帯には入組文（巴文）が主文様として施文され、波頭文が付加されている。沈線間にはＲＬ縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。48図6の上部文様帯と48図5の文様はネガティブな関係にある。第47図4は装飾的な突起を捻り出した鉢形土器で、主文様として未発達な入組文が施文されている。沈線間にはＬＲ縄文が施文されている。色調は橙色を呈する。

b：幾何学的な文様が施文される土器（第55図106・110）

階段状文や幾何学的な文様が施文された土器を一括した。平口縁・小さな山形口縁を呈する深鉢形土器が主体となる。山形口縁を呈する土器にはその頂部からＳ字文などを垂下するものもある。階段状文の施文される土器は文様帯が胴部中程まで及び、１～２段となる。焼成は良好なものが多く、色調は黒褐色、にぶい橙色を呈する。

c：幅の広い帯状文が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

後期前葉から中葉をつなぐ土器に位置づけられるものである。

本群土器は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものを一括した。１類には東北南部の土器様式を持ったものもあり、強いて比定するならば後期初頭の宮戸Ⅰ式、南境式や袖窪式

土器に類似性を見いだすことができる。２類は東北北部の前十腰内式、３類は十腰内Ｉａ式に比定される。４類は広義の十腰内Ｉｂ式に比定され、そのうち４類ａが大湯式に比定できよう。

第Ⅳ群土器　後期中葉の土器（第55図115～139）

１類：口縁部に幅の狭い平行沈線が施文された土器（第55図115～121）

口縁部に幅の狭い平行沈線文を施文した土器を一括した。深鉢形土器、鉢形土器、台付土器が主体となる。深鉢形土器は胴部から大きく「朝顔」に内湾気味に開く口縁が特徴的であり、口唇部は肥大化する。これら口縁部には３～７条の平行沈線が施文され、弧線文、刺突文、Ｓ字文で連結されている。沈線間には節の細かなＲＬ・ＬＲ縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、赤褐色、褐灰色を呈する。

48図７は山形口縁を呈する台付土器で、底部から僅かに内湾気味に口縁部まで立ち上がっている。口縁部上端と胴部中程に２条の平行沈線を施文し、頂部から向かい合う弧線文を付加している。沈線間にはＬＲ縄文が施文されている。焼成はよく、色調は橙色を呈する。

２類：磨り消し縄文が施文された土器

アメーバー的な幾何学文を施文したものを一括した。口縁部が「朝顔」状に開く台付深鉢形土器、平口縁を呈する広口壺が主体となる。沈線内には節の細かなＲＬ縄文が多用される。127～136は同一個体である。焼成はよく、色調は褐灰色、橙色を呈する。

３類：磨り消し縄文に刺突が伴う土器（第56図122～126）

アメーバー的な幾何学文を施文し、沈線の内側に沿って刺突文が連続して連なるものを一括した。これまでの出土例から台付土器で、口縁部が「朝顔」状に開くものである。口唇部は肥大化し装飾突起（55図139）が付けられる。沈線間には節の細かなＬＲ縄文が多用される。焼成は良好で、色調は灰黄褐色、にぶい褐色、黒褐色、赤褐色などを呈する。

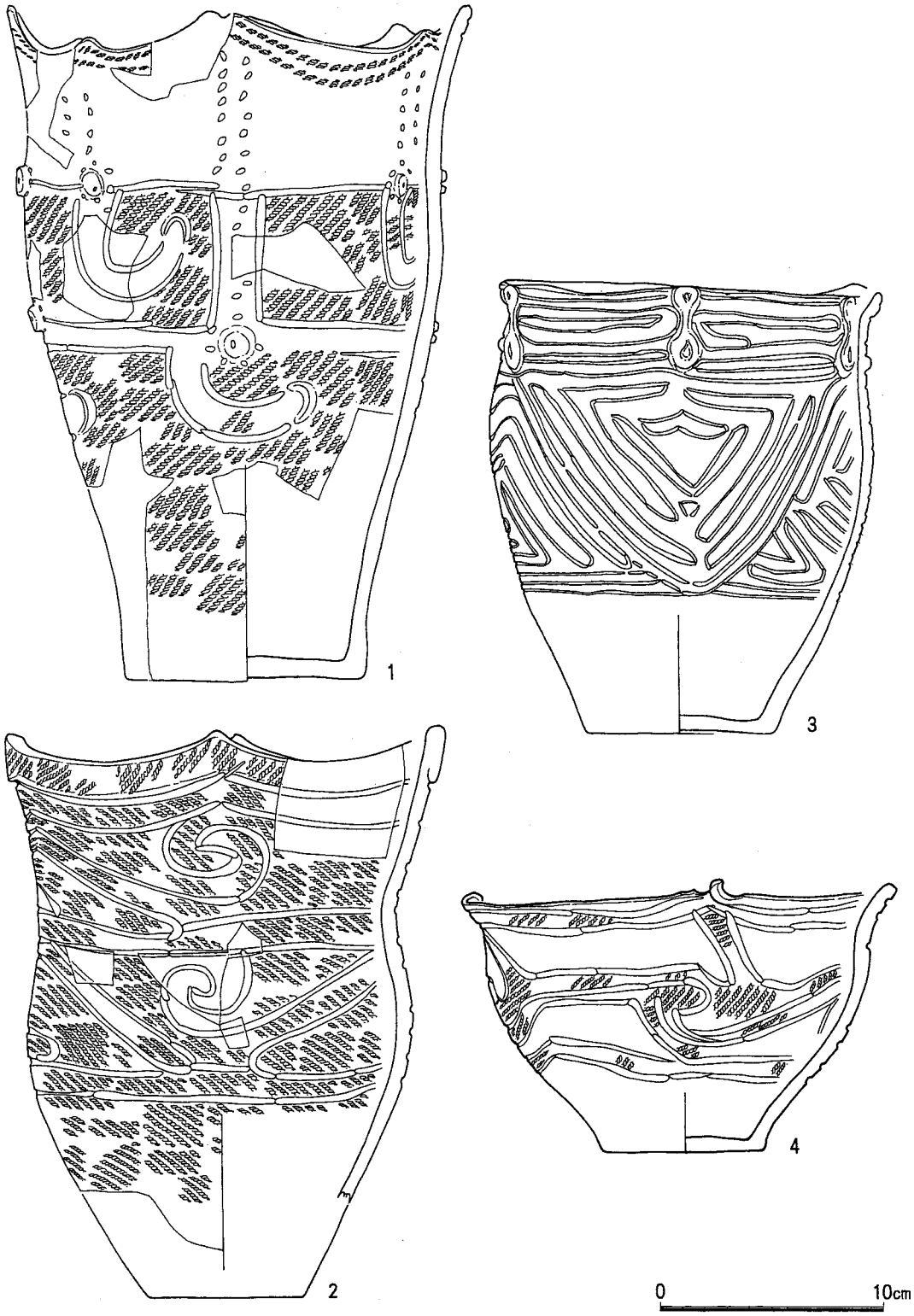
４類：沈線文系の土器

文様構成は本類ａと類似するものである。55図121は縄文が施文されず、丁寧な磨きが行われている。沈線の下二段を連結するように斜位の刻みが連続して施されている。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。

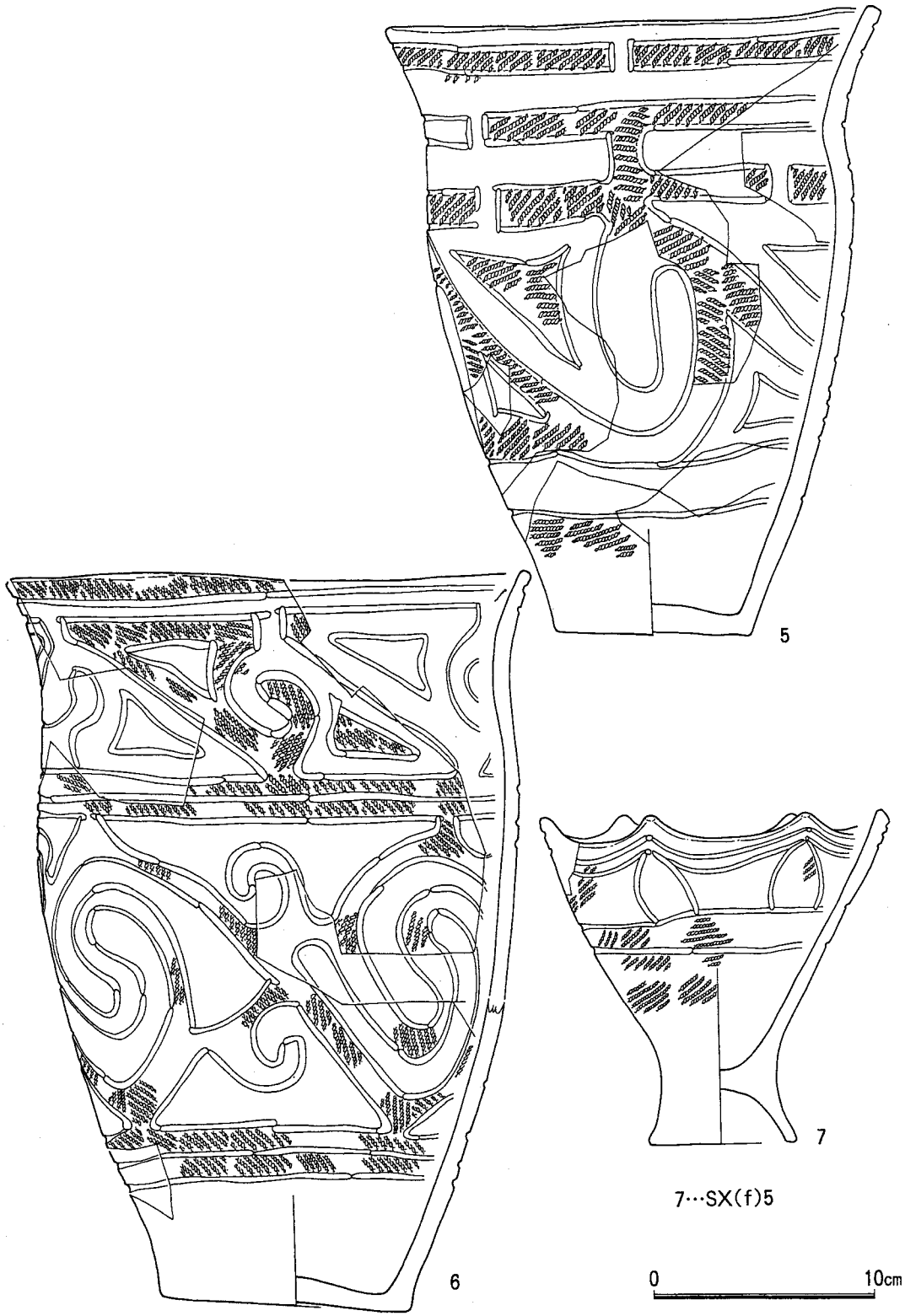
本群土器は、縄文時代後期中葉に位置づけられるもので、東北地方北部の十腰内Ⅱ式、Ⅲ式に、東北南部の宝ヶ峯式土器に比定される。本群土器については第２号竪穴住居跡からまとまった資料が出土している。

第Ⅴ群土器　晩期の土器

１類：雲形文が施文された土器（56図140～144）



第47図　D_9区遺構外出土土器実測図（1）

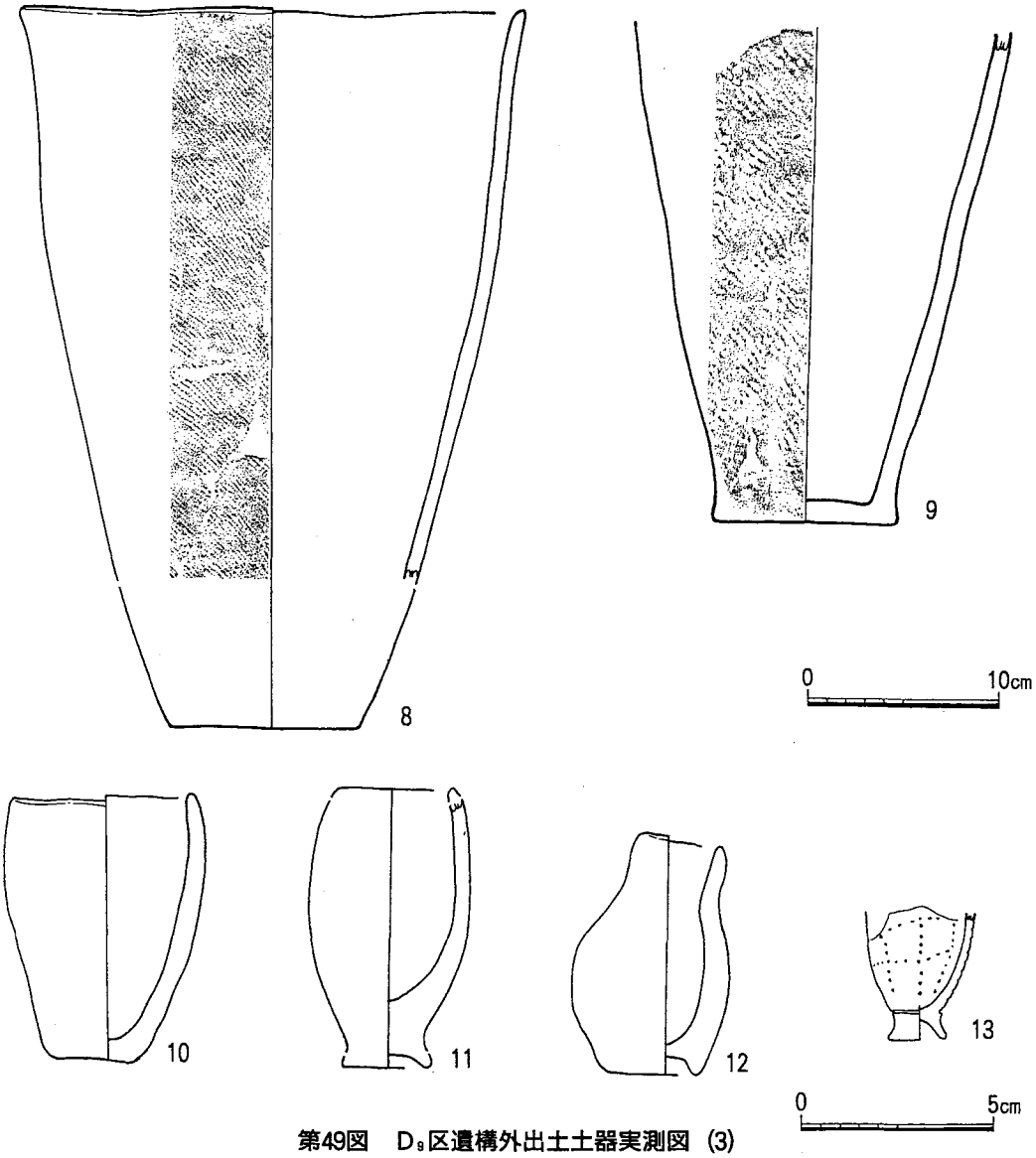


第48図　D_9区遺構外出土土器実測図（2）

調査区のほぼ中央から出土した。同一個体の浅鉢形土器で上部を欠いている。口縁部に羊歯状文、胴部に雲形文が施文されている。ＬＲ縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐色～暗褐色を呈する。

本群土器は、縄文時代晩期の大洞ＢＣ式に比定することができる。

第Ⅵ群土器　後期から晩期の土器（第57図144～169、58図170～177）



第49図　D_9区遺構外出土土器実測図（3）

第２表　遺構外出土土器（復元・図化土器）観察表

図・番号	出土位置	法量（器高×口径×底径）	文様	色調その他
４７図１	ＹＫ－７９ Ⅲｄ層中位	３０．８×２１．０ ×１０．９	「ノ」字状文、 ＲＬ縄文	にぶい黄褐色 ８つの山形口縁
４７図２	ＹＯ－８６ Ⅲｄ層下位	１９．７×２６．０ ×（７．０）	渦巻文 ＬＲ縄文	にぶい赤褐色 ４つの山形口縁
４７図３	ＹＭ－８６ Ⅲｄ層中位	２０．８×１７．３ ×８．５	三角形区画文	にぶい黄褐色 平口縁
４７図４	ＹＪ－７６ ⅢＣ層下位	１２．４×１９．６ ×７．０	波状文 ＬＲ縄文施文	橙色
４８図５	ＹＨ－７８ Ⅲｂ層下位	２９．２×２１．７ ×８．９	入組文（巴文） ＬＲ縄文	にぶい橙色 平口縁
４８図６	ＹＭ－７８ Ⅲｂ層下位	３４．４×２４．０ ×１１．４	入組文（巴文） ＲＬ縄文	にぶい赤褐色 平口縁
４８図７	ＹＫ－７９ Ⅲｄ層上位	１５．２×１６．０ ×６．８	弧状文付加 ＬＲ縄文	橙色 ６つの山形口縁
４９図８	ＹＫ－７６ Ⅲｂ層下位	（　）×２６．０ ×（　）	ＬＲ縄文	にぶい赤褐色 平口縁
４９図９	ＹＬ－７５ Ⅲｄ層上位	（　）×（　） ×９．８	ＲＬ縄文	灰褐色
４９図１０	ＹＪ－７８ ⅢＣ層中位	７．１×４．６ ×２．２	無文	浅黄橙色
４９図１１	ＹＭ－８６ Ⅲｄ層上位	７．３×３．０ ×２．３	無文	褐灰色
４９図１２	ＹＭ－７５ Ⅲｄ層中位	６．４×２．３ ×２．４	無文	にぶい黄褐色
４９図１３	ＹＭ－８７ ⅢＣ層中位	（　）×（　） ×１．６	刺突文	赤褐色

本群には、縄文（無節・単節）、撚糸文、条痕文、無文、刺突文の土器を一括した。数量的には非常に多く出土している。

１類：無文の土器（第49図10～13、57図144～146）

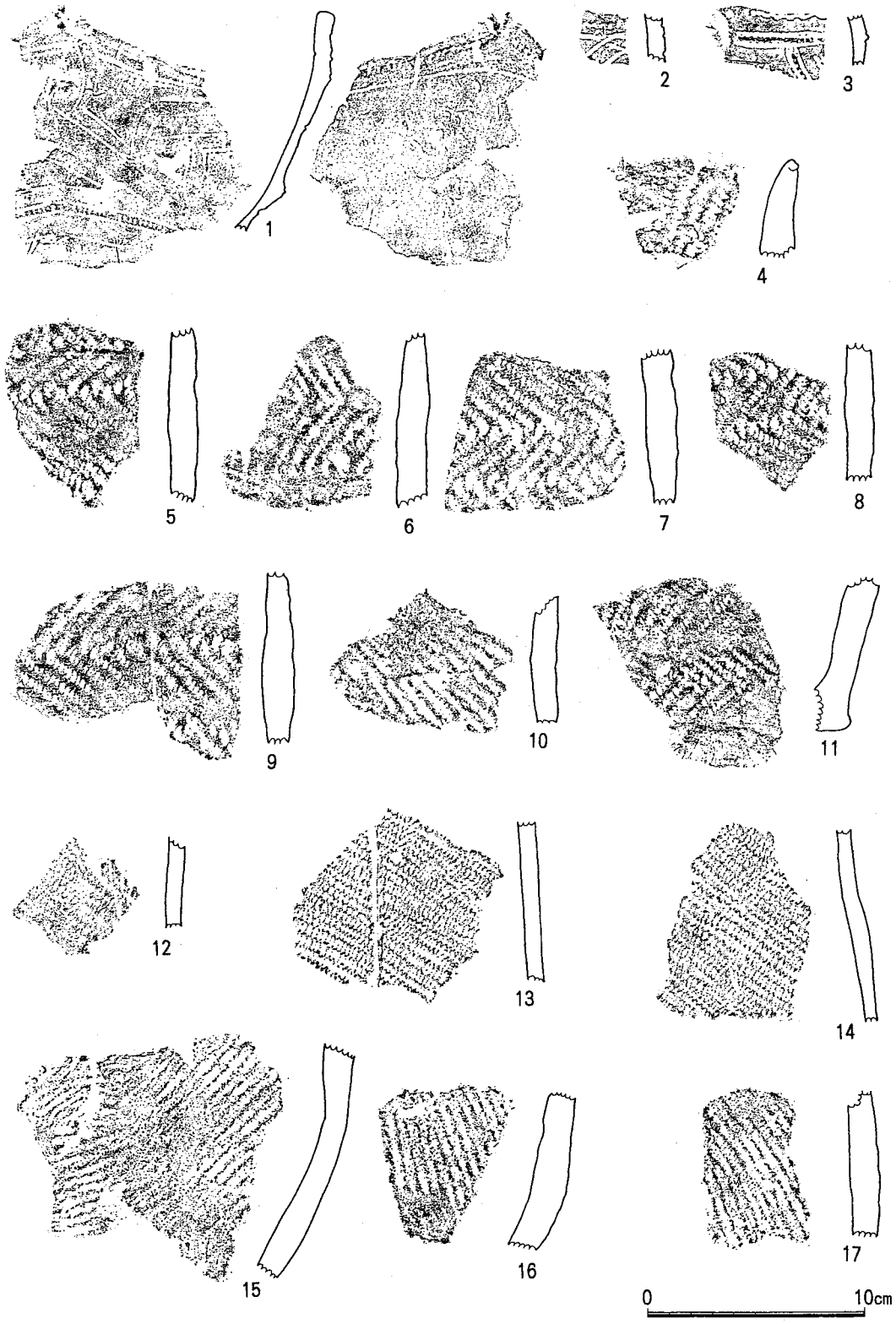
深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器のほかミニチュア土器がみられる。深鉢形土器は平口縁、波状口縁を呈し、口唇部に刻みを有するものもある。器外面は調整が施されている。焼成は良好なものが多く、色調は褐灰色、にぶい黄橙色、黒褐色などを呈する。

２類：縄文が施文された土器（第57図147～162）

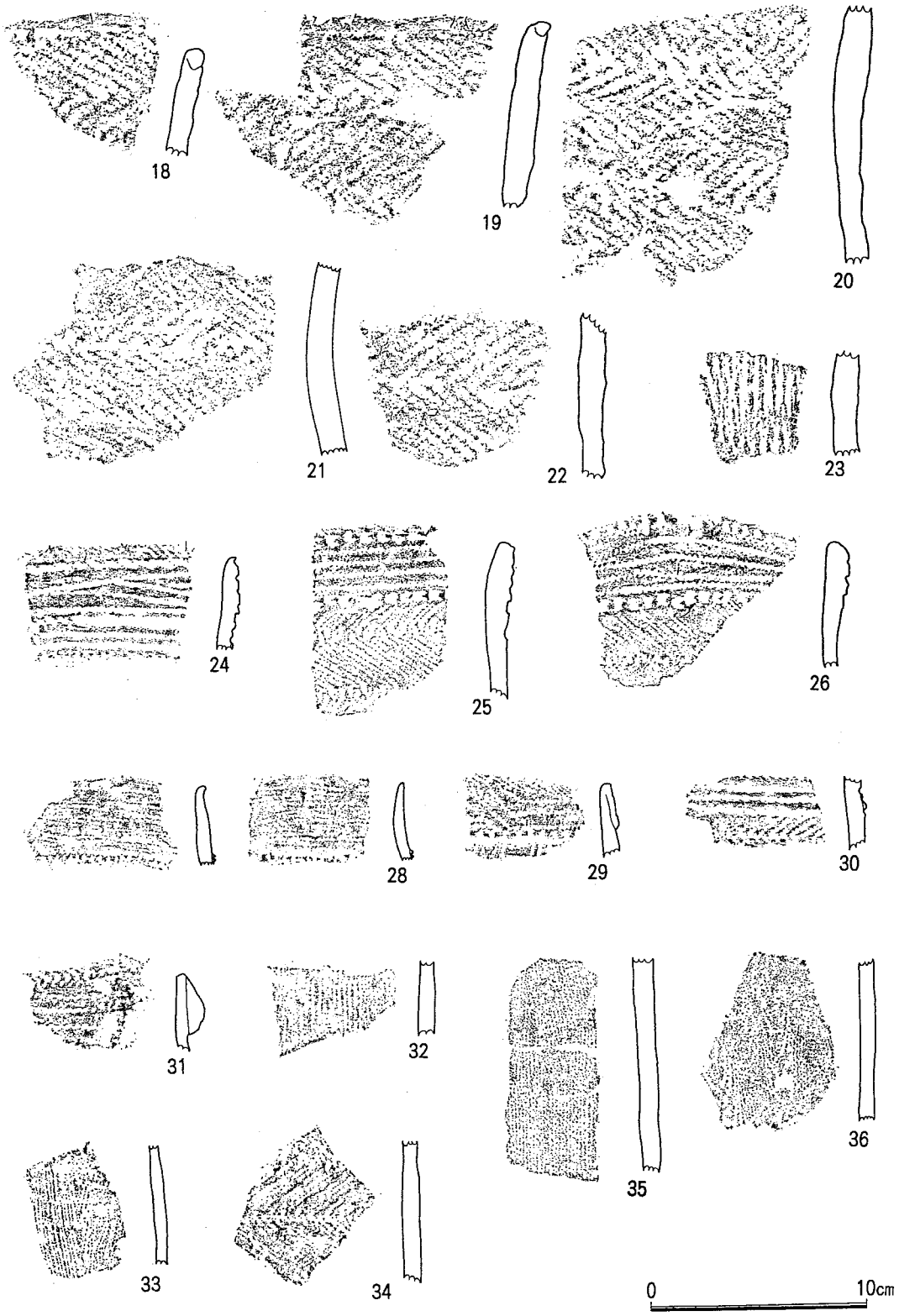
本類には無節、単節、複節の縄文が施文されたものを一括した。

ａ：無節の縄文が施文された土器（第57図147）

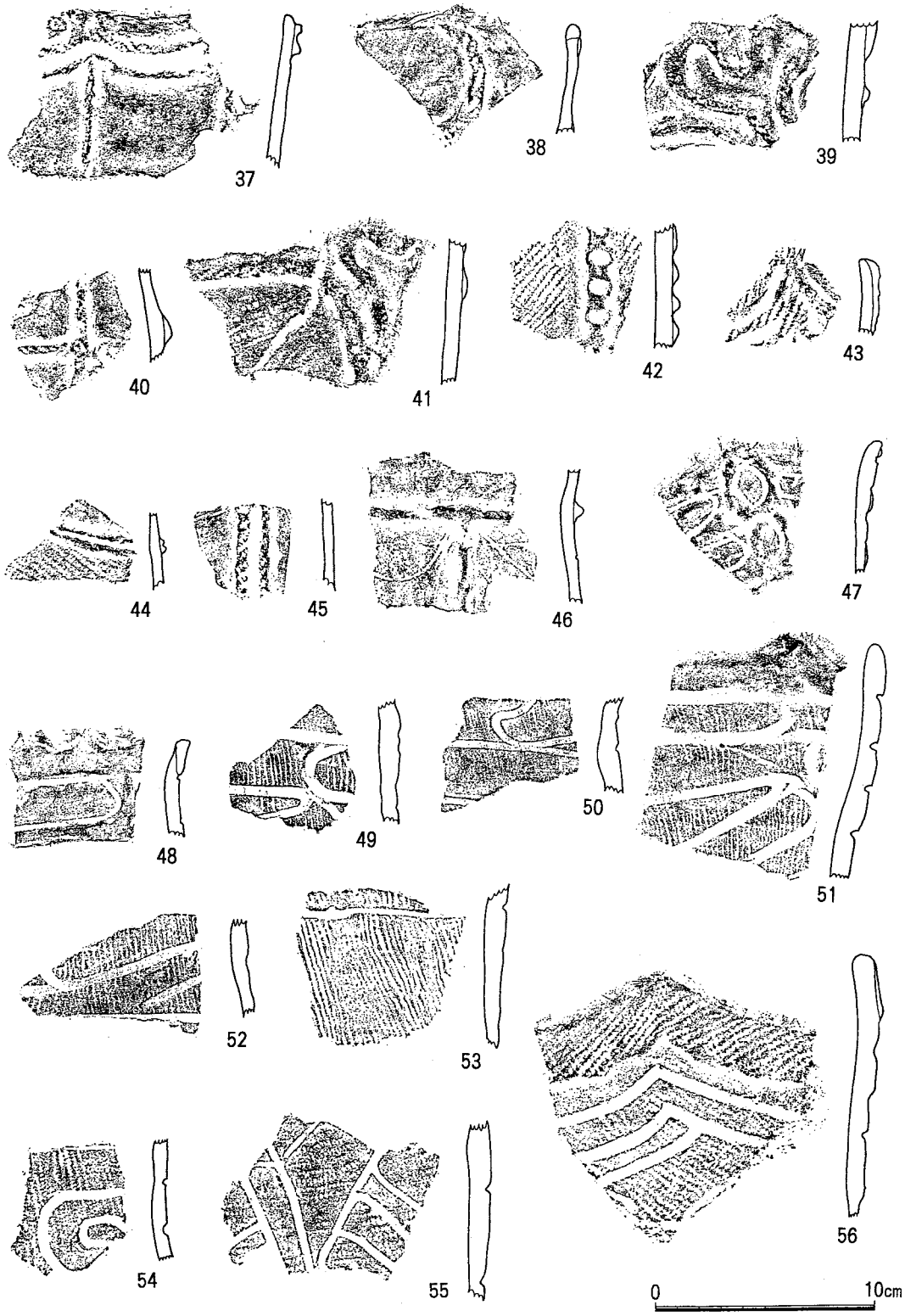
無節の縄文が施文された土器を一括した。平口縁を呈した深鉢形土器が多い。このほかに壺



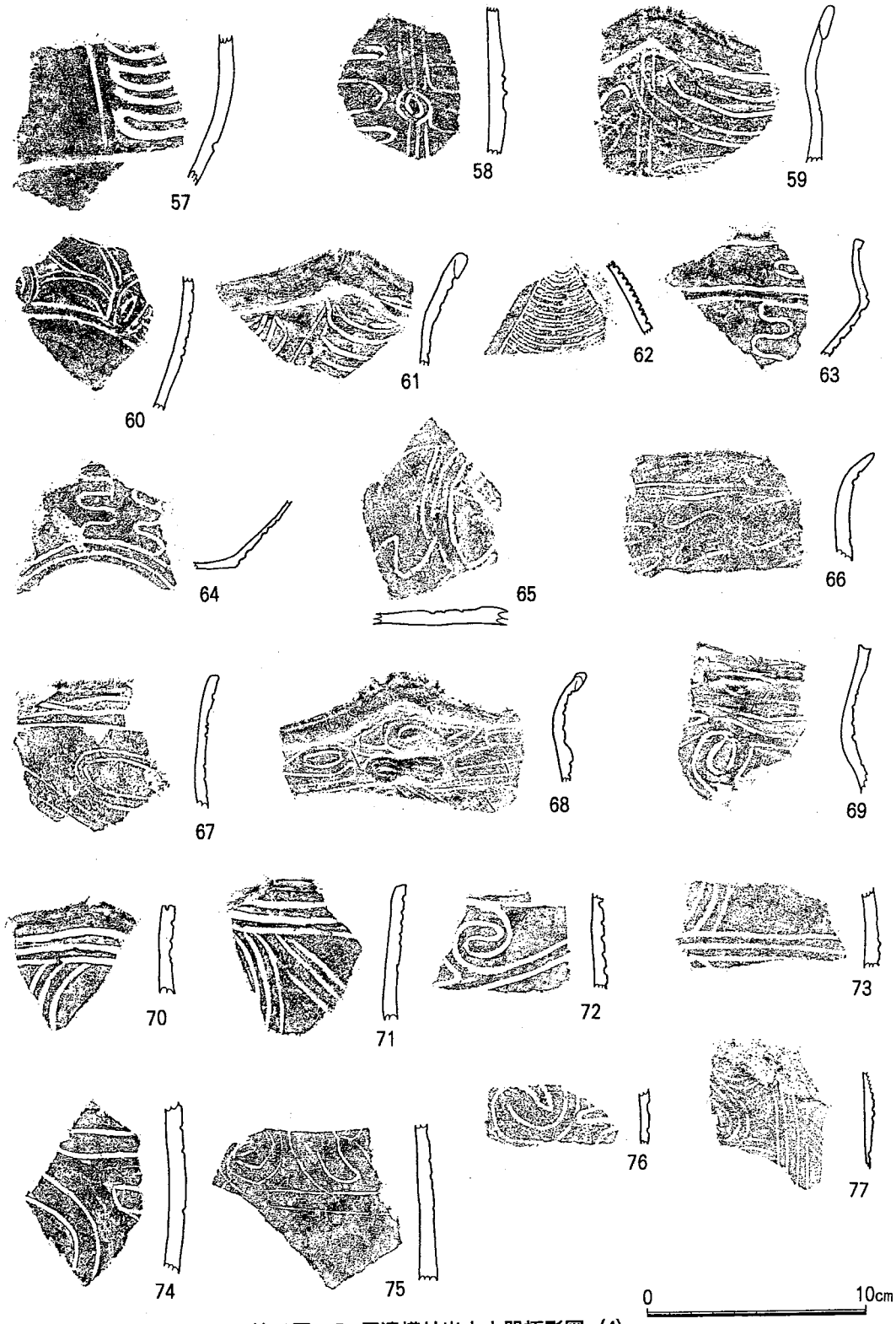
第50図　D_9区遺構外出土土器拓影図（1）



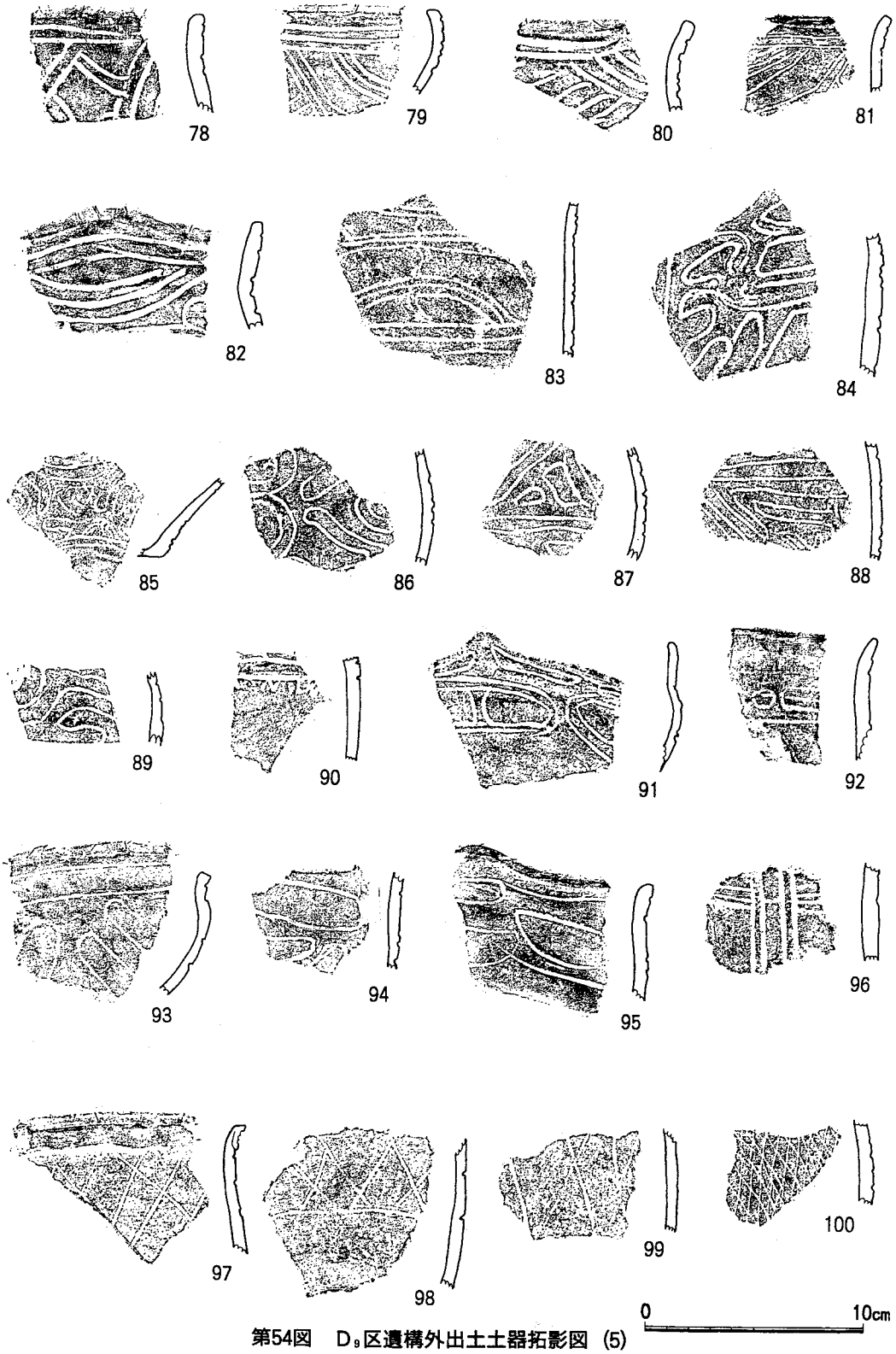
第51図　D_9区遺構外出土土器拓影図（2）



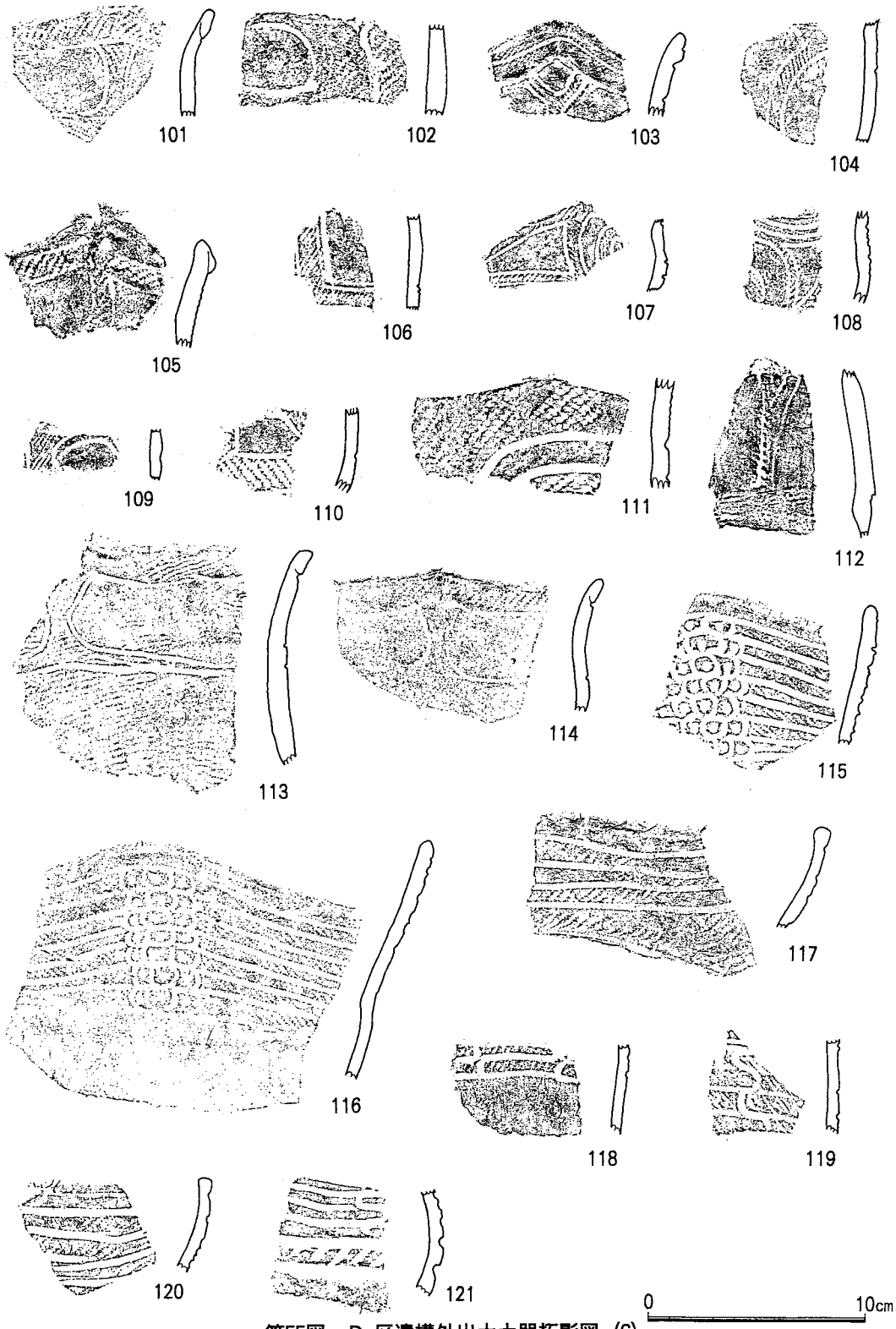
第52図　D_9区遺構外出土土器拓影図 (3)



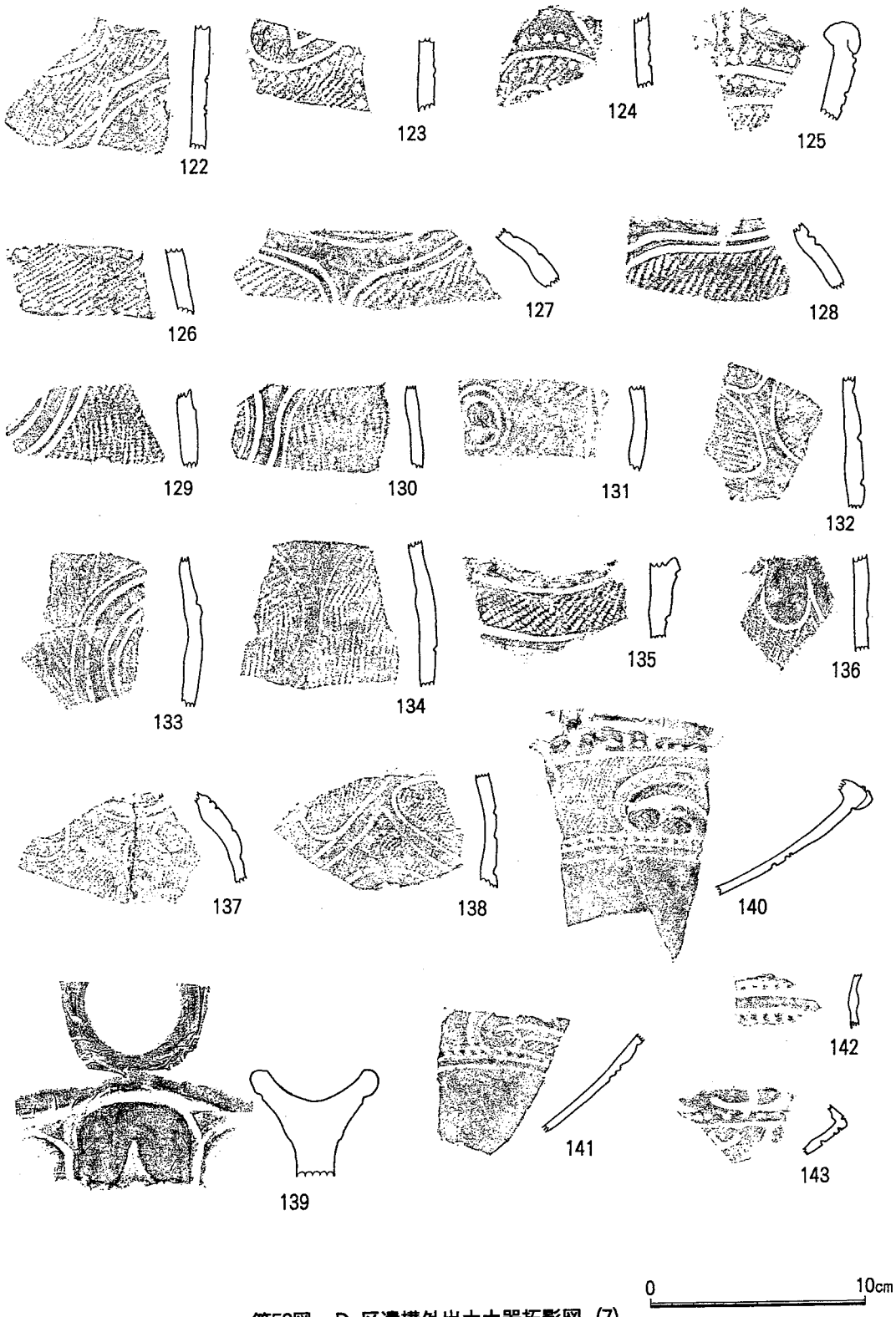
第53図　D_9区遺構外出土土器拓影図（4）



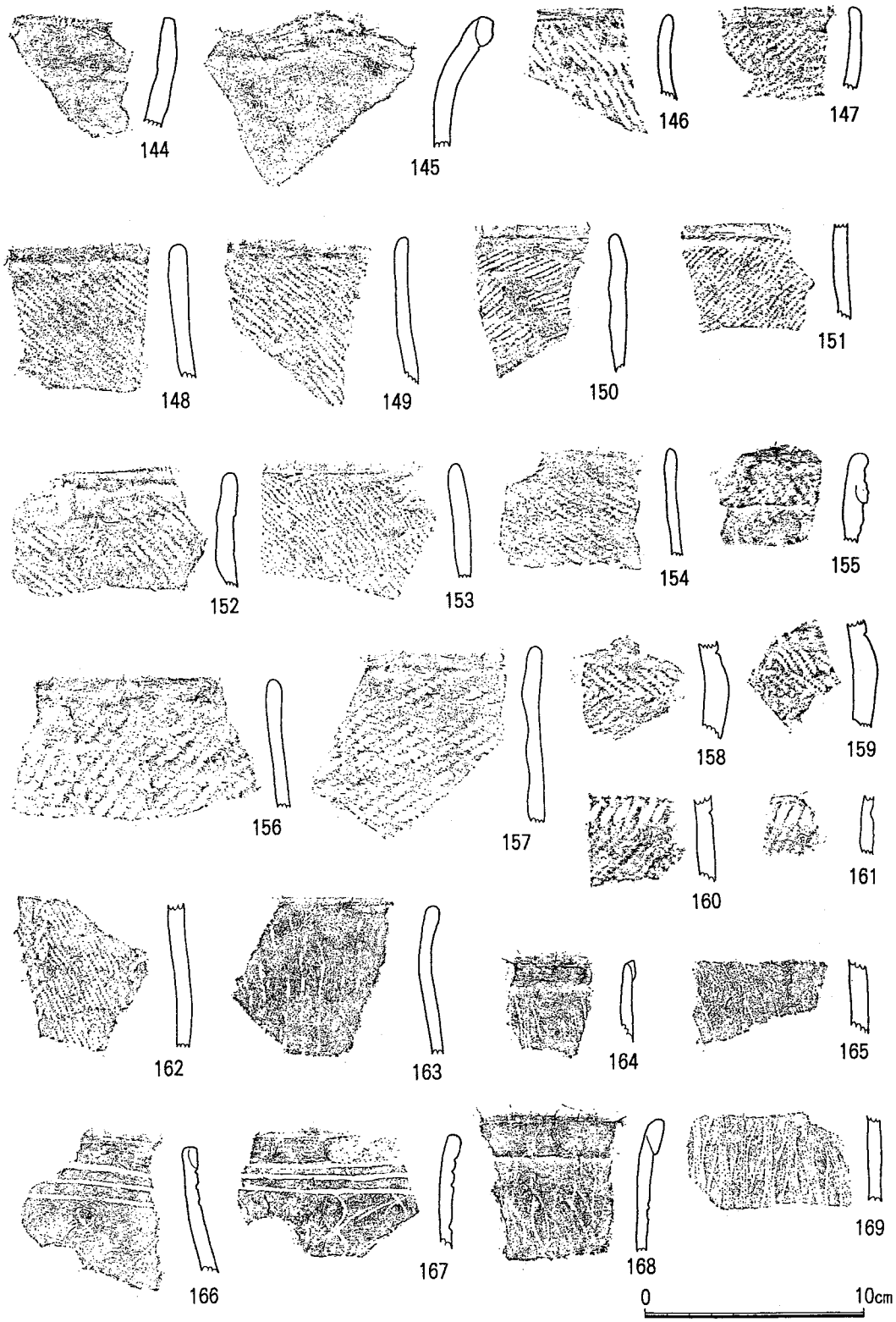
第54図　D_9区遺構外出土土器拓影図 (5)



第55図　D_9区遺構外出土土器拓影図（6）



第56図　D_9区遺構外出土土器拓影図（7）

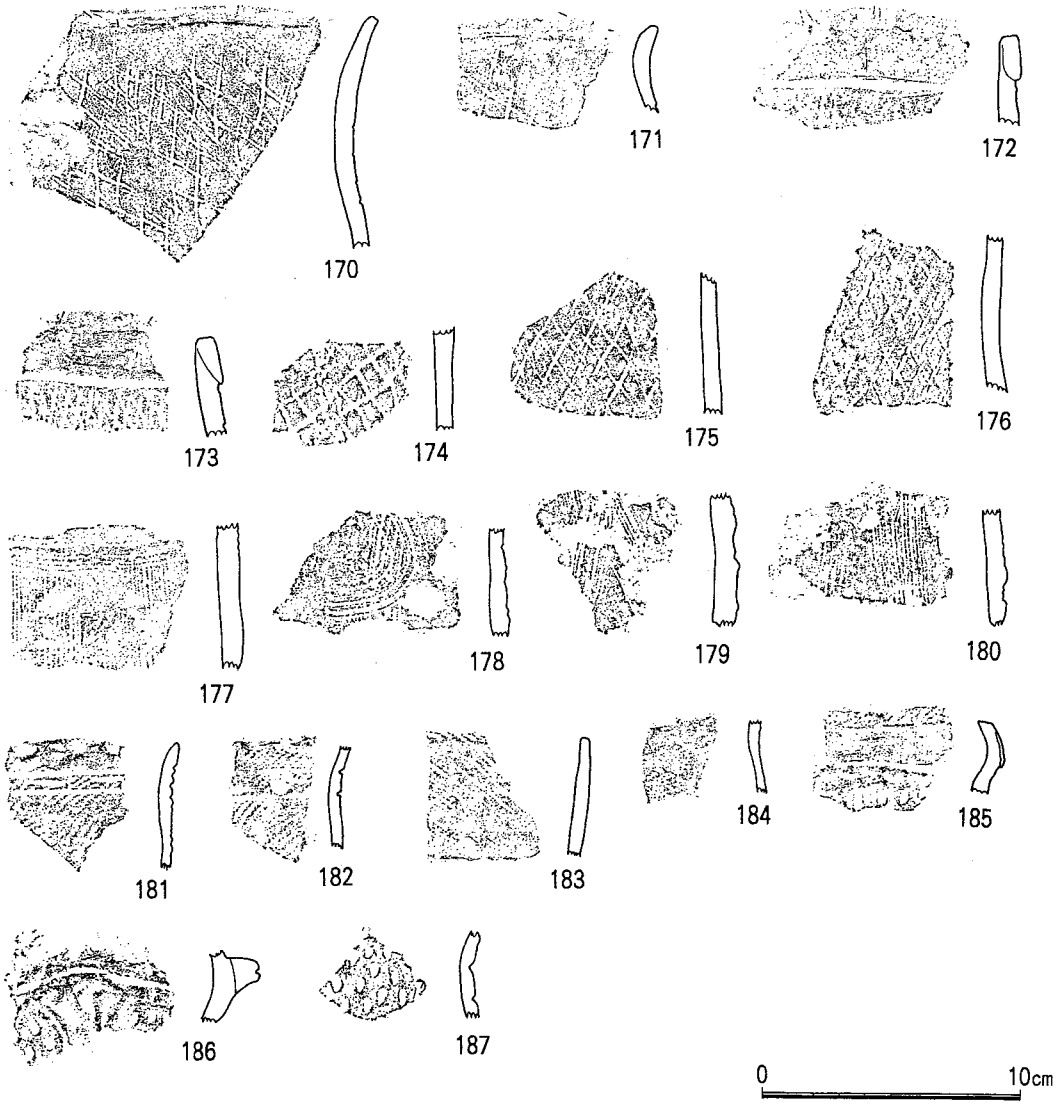


第57図　D_9区遺構外出土土器拓影図 (8)

形土器がみられる。口縁部が直線的に立ち上がるものと、外反して立ち上がるものがみられる。壺形土器においては大きく外反するものもある。焼成は良好で、色調は褐灰色、にぶい褐色を呈する。

b：単節の縄文が施文された土器（第49図８～９、第57図148～162）

単節の縄文が施文された土器を一括した。節の大きいもの、細かなものがみられる。ＬＲ・ＲＬ縄文のいずれもみられ、ＬＲ縄文が多用される。57図162には綾くり文が、57図159～162には竹管や篦状工具による刺突文がみられる。平口縁を呈する深鉢形土器が主体を占め、このほかに壺形土器や鉢形土器がみられる。深鉢形土器の口縁部は直線的に立ち上がるもの、外反



第58図　D_9区遺構外出土土器拓影図（9）

して立ち上がるもの、内湾気味に立ち上がるものがみられる。器外面に煤状炭化物が付着するものが多くみられる。焼成は良好のものが多い。

49図８は、平口縁を呈するもので、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。器全面にＲＬ縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は呈する。49図９は、口縁部を欠く深鉢形土器で、器面に撚りのあまいＲＬ縄文が施文されている。

181図181～182は鉢形土器で、地文上に平行沈線が施文後、短刻線が付加されるものである。晩期土器に伴う粗精土器である。

３類：撚糸文が施文された土器 (第57図164～58図177)

短軸絡条帯、網目状撚糸文が施文されたものを一括した。平口縁を呈する深鉢形土器が主体となり、壺形土器もみられる。口縁部上端に沈線文を施文し、縄文帯と区画するものがある。口縁部が折り返しとなるものが多く見受けられる。無節のＬ縄文が多用される。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、橙色、にぶい褐色、黒褐色などを呈する。

４類：条痕文が施文された土器 (第58図178～181)

平口縁を呈した深鉢形土器が圧倒的に多い。条痕は器面に対して縦位、横位、斜位に施文される。焼成は良好で、色調は明褐色、橙色を呈する。

５類：刺突文が施文された土器 (第49図13)

49図13は、口縁部を欠くミニチュア土器で、格子目状に刺突文が施文されている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

第Ⅶ群土器　弥生時代の土器

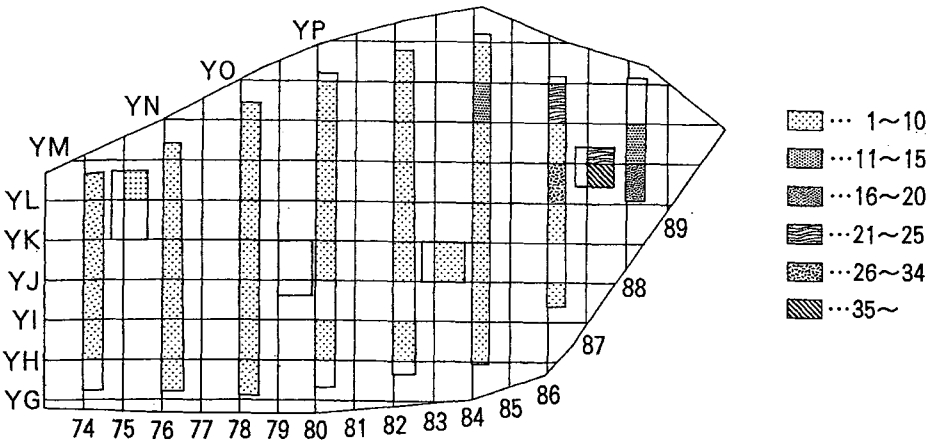
１類：撚糸文が施文された土器 (第58図183～184)

調査区北部・ＹＭ―86グリッド・Ⅲｂ層上位より出土した。Ｌ縄文の撚糸文・綾くり文を伴う撚糸文が施文されている。焼成はよく、色調は橙色を呈する。

本群土器は、弥生時代後半のいわゆる小坂Ｘ式に比定することができる。

(2) 石　　器

Ｄ$_9$区遺構外より出土した石器は、剥片石器81点、礫石器が129点の総計210点である。遺物は調査区の北部に集中する傾向がみられる。遺物の大半は遺物包含層Ⅲａ～Ⅲｄ層からの出土である。なお、遺構検出区域と遺物の分布が集中する区域が重複する部分については、遺構確認面及び構築面の上面からの層位のものをグリッド出土量とした。石器の分類については、これまでの調査に準じ、形態別に類別・細分した。



第59図　D_9区石器出土分布状況

石　鏃（第60図）

形態から２群６類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、黒・赤色頁色と続く。

１群…有茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基有茎石鏃で、本調査区からは３点出土した。
剥離調整はていねいである。（１～３）

b…凹基有茎石鏃で、本調査区からは出土しなかった。
基部に抉れをもつものである。

c…凸基有茎石鏃で、本調査区からは２点出土した。
基部は細長く、全体的に厚みがある。（４、７）

２群…無茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基無茎石鏃で、本調査区からは出土しなかった。
全体的に薄く、調整は丁寧である。

b…凹基無茎石鏃で、本調査区からは２点出土した。
全体的に薄く、調整は丁寧である。（５、６）

c…尖基石鏃で、本調査区からは１点出土した。
基部は細長く、全体的に厚みがある。（８）

石　錐（第60図）

形態から３群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩である。

１群…つまみ部と錐部の境が明確なもので、本調査区からは１点出土した。錐部、つまみ部に丁寧な剥離調整がなされている。（９）

２群…つまみ部と錐部の境が明確でないもので、本調査区からは出土しなかった。つまみ部から錐部にかけて逆三角形状になり、比較的に丁寧な剥離調整がなされている。

3群…剥片の一部に錐部を作り出しているもので、本調査区からは1点が出土した。錐部には破損や摩耗が著しい。(10)

石　匙（第60図）

形態から2群に分け、さらにつまみ部を上にして主要刃部が作り出される位置から、5類に細分した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。

1群…縦型石匙である。刃部先端が破損しているものがみられる。

a…主要刃部が、一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは、1点出土した。(11)

c…主要刃部が先端部に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

2群…横型石匙である。刃部の作りはていねいである。

a…主要刃部が一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

c…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

石　箆（第60図）

形態別に2群に分類した。石材は硬質頁岩である。

1群…基部に対して刃部の幅が広くなる、撥状のものである。本調査区からは出土しなかった。

1群…基部に対して刃部の幅がやや広くなる、台形状のものである。本調査区からは、3点出土した。(12、13)

掻　器（第60図、61図）

打面を上にして、主要刃部が作り出される位置および、刃部の形態別に5群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩が大半を占め、黒色頁岩もみられる。

1群…主要刃部が左、右、先端いずれか一側縁に作り出されるもので、33点出土した。(14、15)

2群…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、13点出土した。(16、17)

3群…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、5点出土した。(18、19)

4群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、2点出土した。(20)

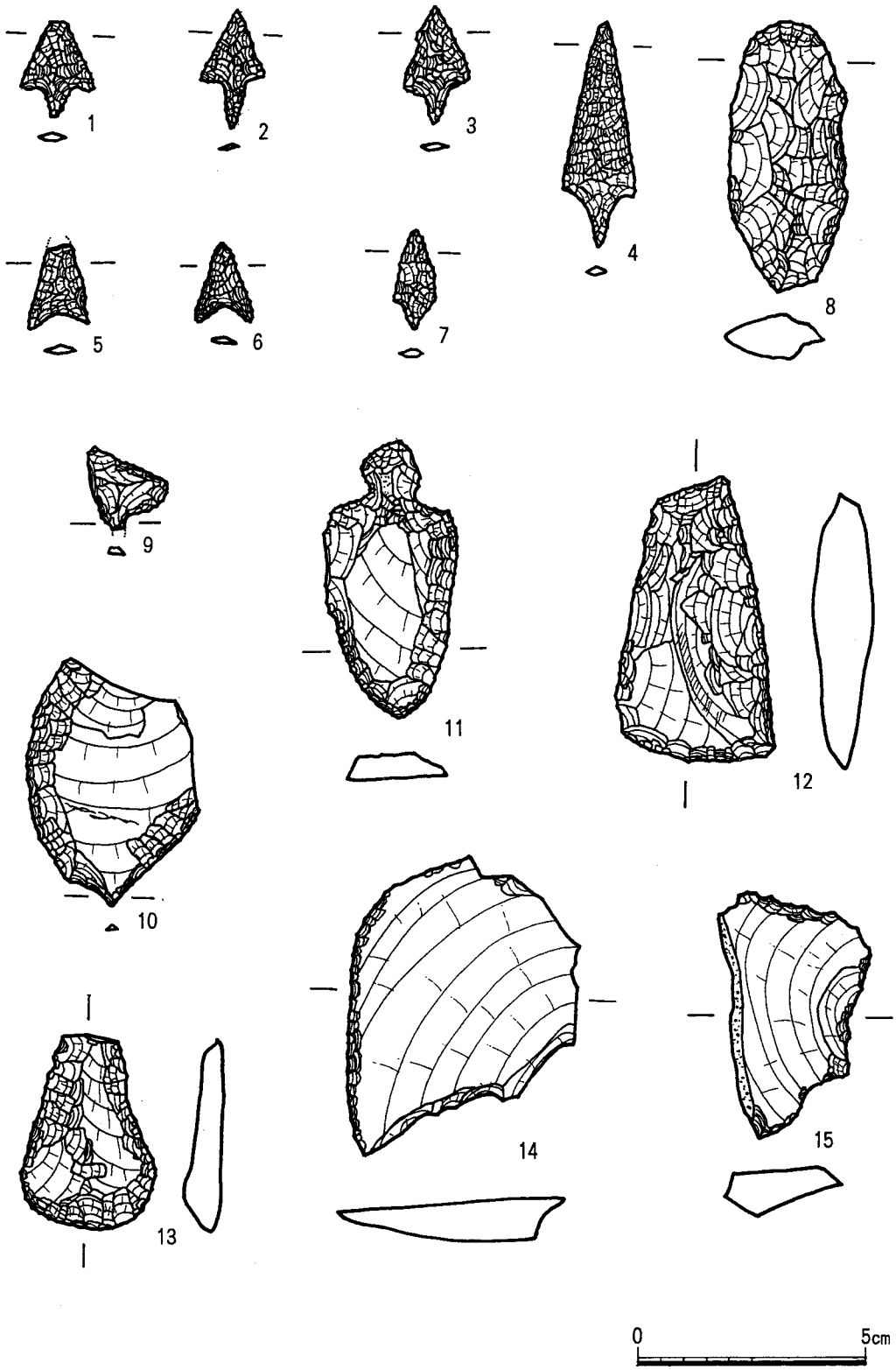
5群…刃部に抉れをもつもので、本調査区からは13点出土した。(21)

石　斧（第61図）

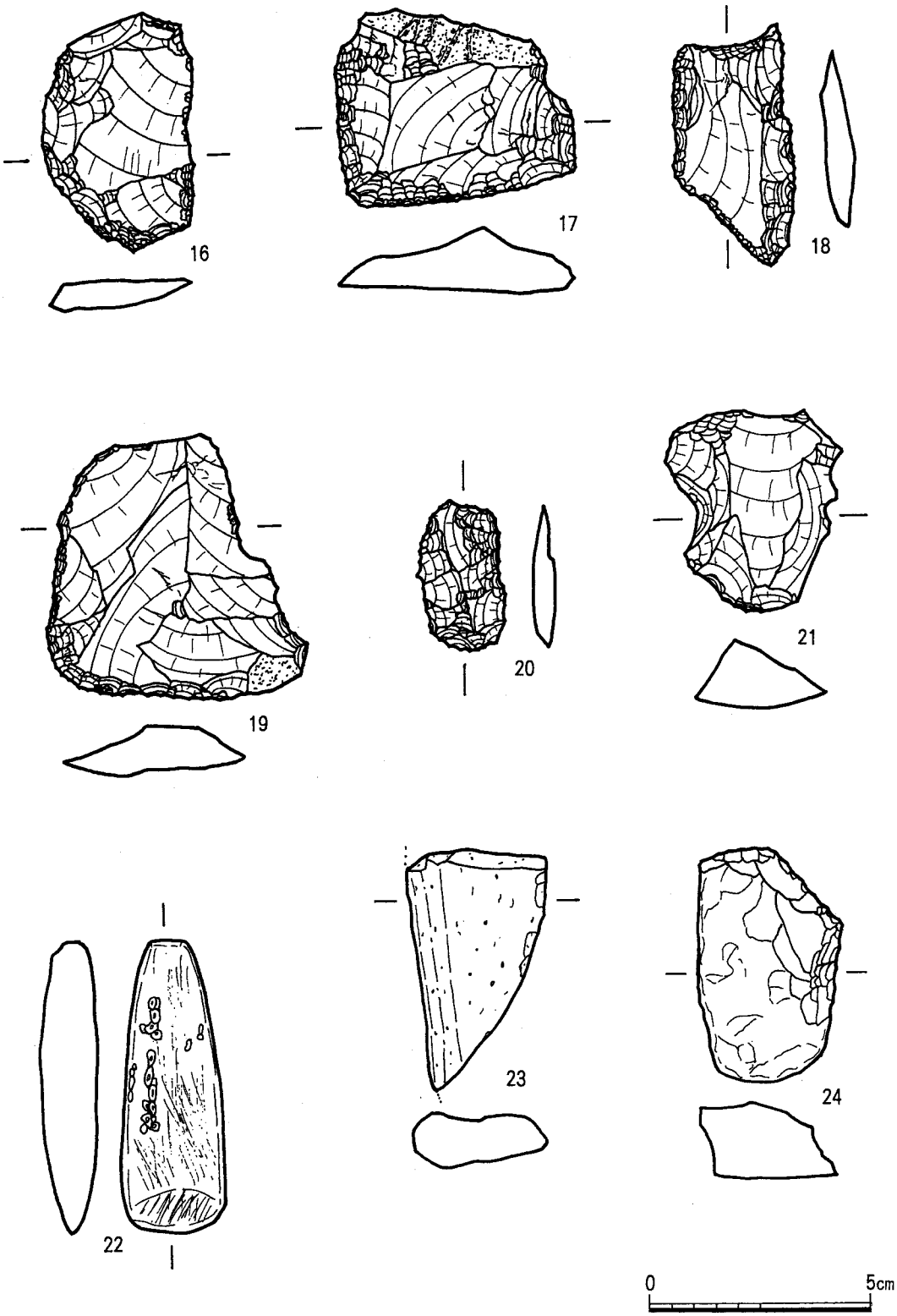
定角式磨製石斧が、1点出土し、基部は凹石として転用されている。石材は蛇紋岩である。(22)

石　錘

扁平な川原石の一部が打ち欠かれているもので、本調査区からは出土しなかった。



第60図　D_9区遺構外出土石器実測図（1）



第61図　D_9区遺構外出土石器実測図（2）

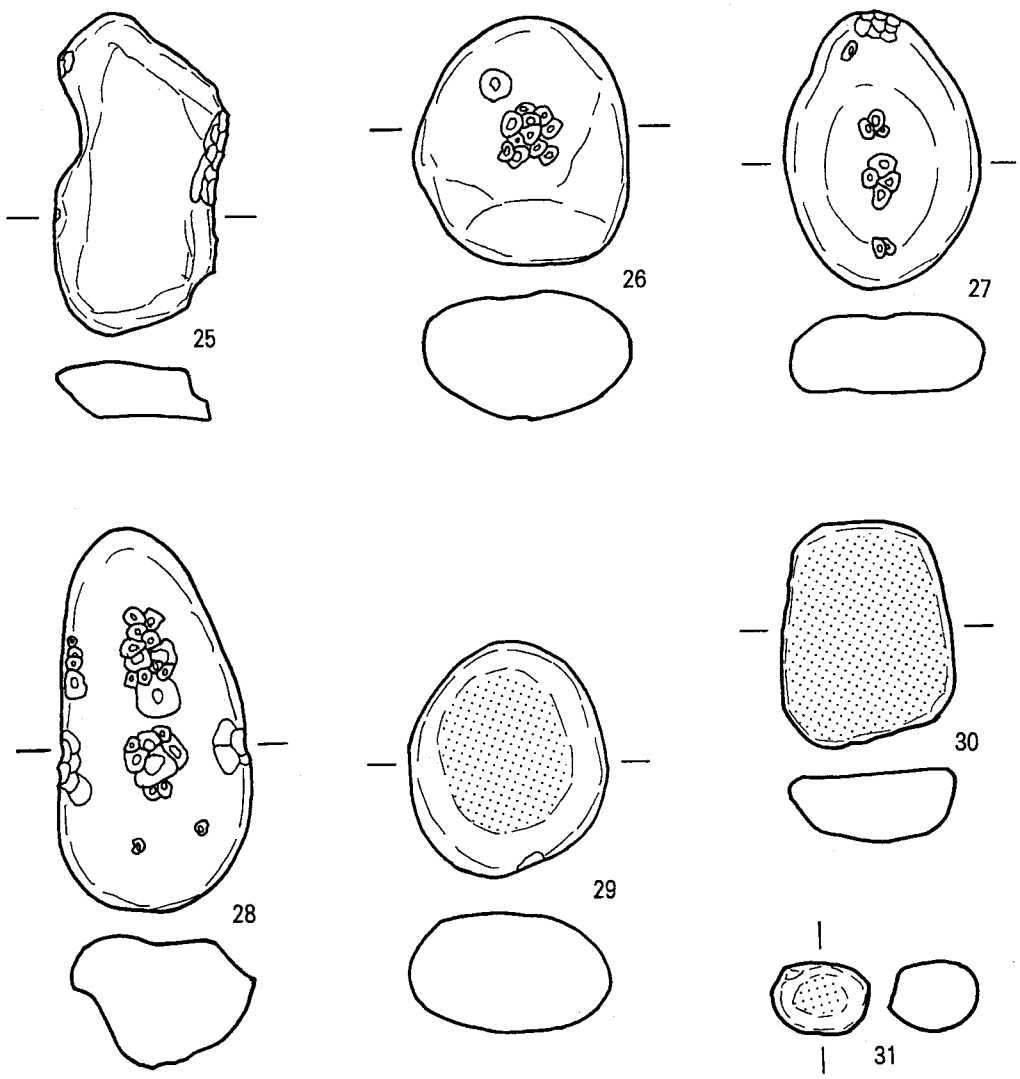
敲　　石（第62図）

円礫、扁平な川原石の一部が打痕によって打ち欠かかれているもので、本調査区からは30点出土した。石材は凝灰質泥岩、泥質凝灰岩が多く、安山岩、石英安山岩、泥岩もみられる。

(25)

凹　　石（第62図）

円礫、棒状の礫、扁平な川原石に使用痕として凹が観察されるもので、84点出土した。両面を使用しているものがほとんどである。磨面が観察されるものもみられる。石材は石英閃緑王分岩、凝灰質泥岩、泥質凝灰岩、砂質凝灰岩、石英安山岩、泥岩である。(26～28)



第62図　D_9区遺構外出土石器実測図（3）　0　10cm

磨　　石（第62図）

円礫、扁平な川原石に磨痕が観察されるもので、12点出土した。石材は石英閃緑王分岩、凝灰質泥岩、石英安山岩、凝灰質泥岩泥岩、砂質泥岩、瑪瑙である。(29～31)

石　　皿（第61図）

１点出土した。欠損品で、石材は軽石質凝灰岩である。(23)

(3) 土 製 品

D_9区遺構外より出土した土製品は、土偶３点、三角形土製品１点、板状土製品１点、土器片利用土製品29点が出土した。調査区の北部から南部にかけてままばらに出土した。

土　　偶（第64図）

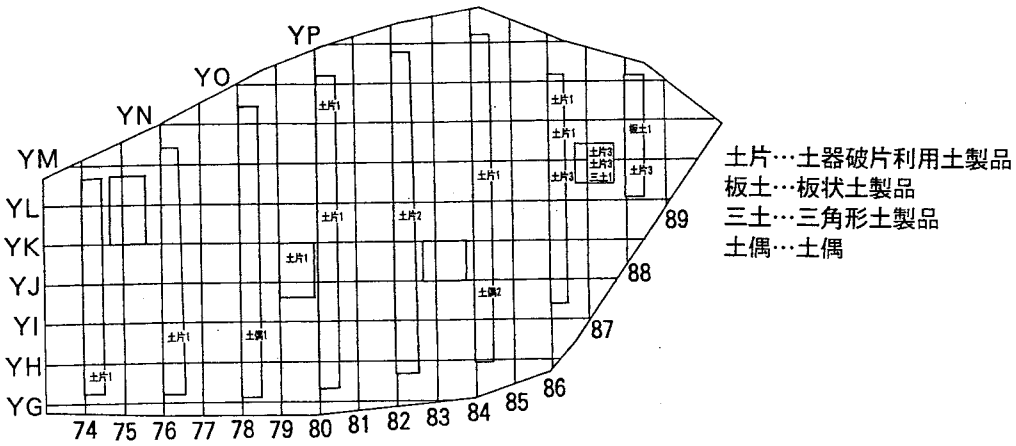
３点出土し、いずれも板状土偶である。１は土偶の胴部下半で、格子状の沈線文が施文され突起状のヘソが表現されている。また、胴部中央には単刻沈線による菱形状文で正中線が表現されている。２は胴部下半部の破損品で、腰部と思われる張出しをもつ。脚部は省略されているが、連続する刺突により胴部と脚部とが区画され、股部には陰部と思われる深さ1.8cmの穿孔が観察される。中央には沈線により正中線が表現され、腰部側面にも穿孔が観察される。３は破損品の胴部である。突起状の乳房とヘソが表現され、前面には二重の連結する刺突により、背面には細い沈線による単刻文により胴部形の輪郭が描かれている。

三角形状土製品（第62図４）

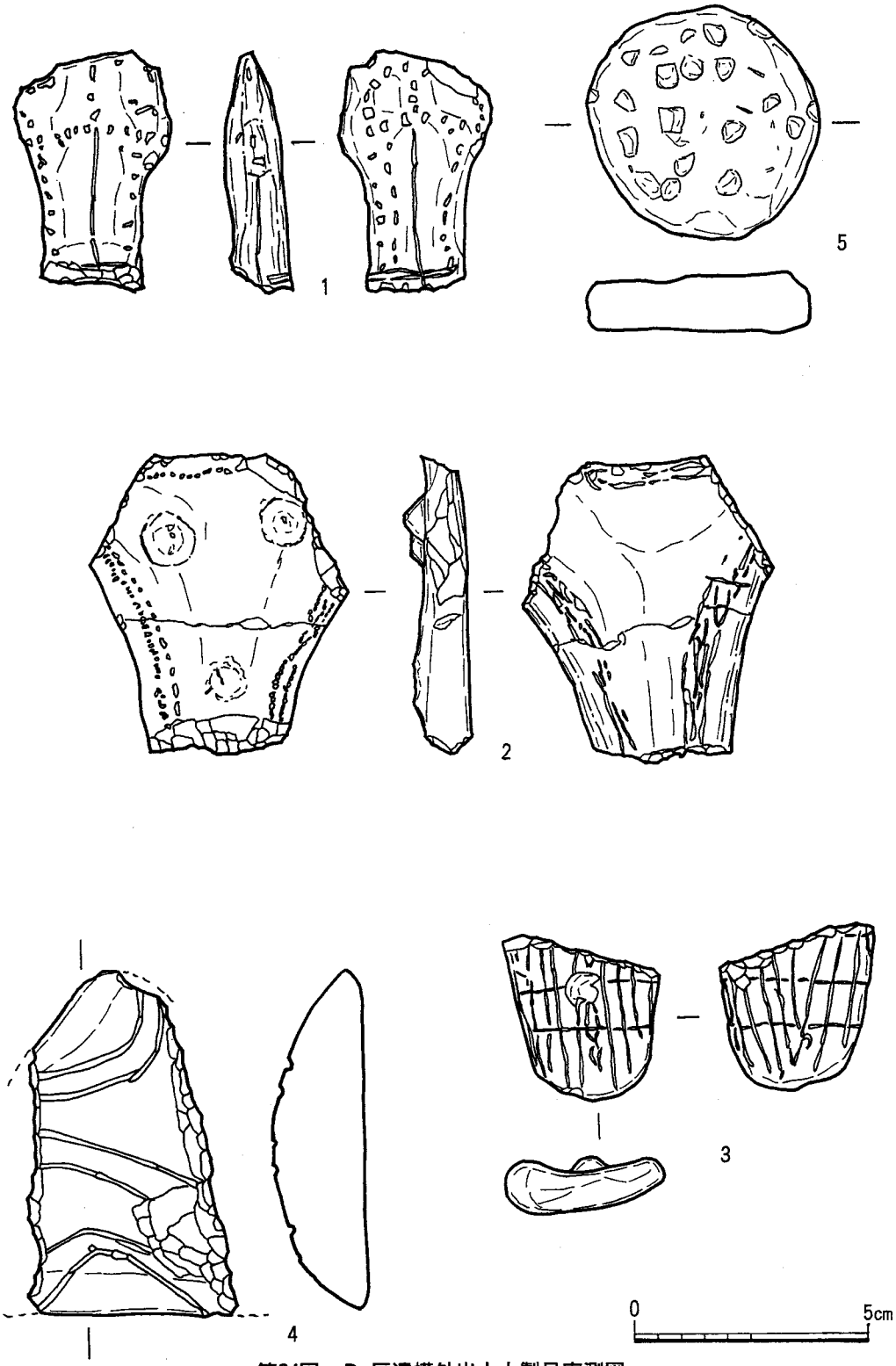
１点出土し、破損品であるが残存部の形状から三角形状土製品と判断した。沈線による文様が観察される。

板状土製品（第62図５）

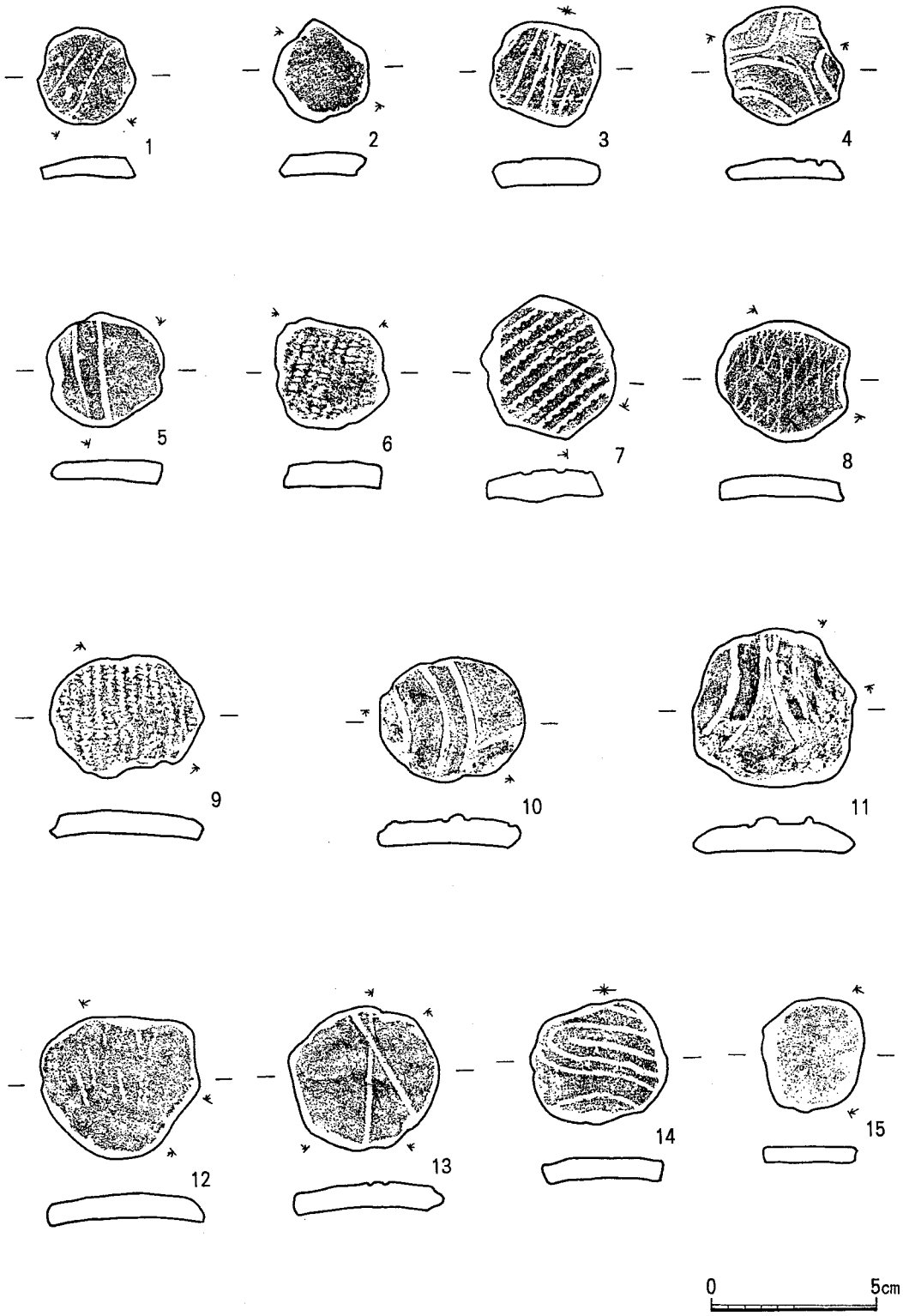
円形に作成された板状土製品で１点出土した。器面には竹管による押し厚痕が充填されてい



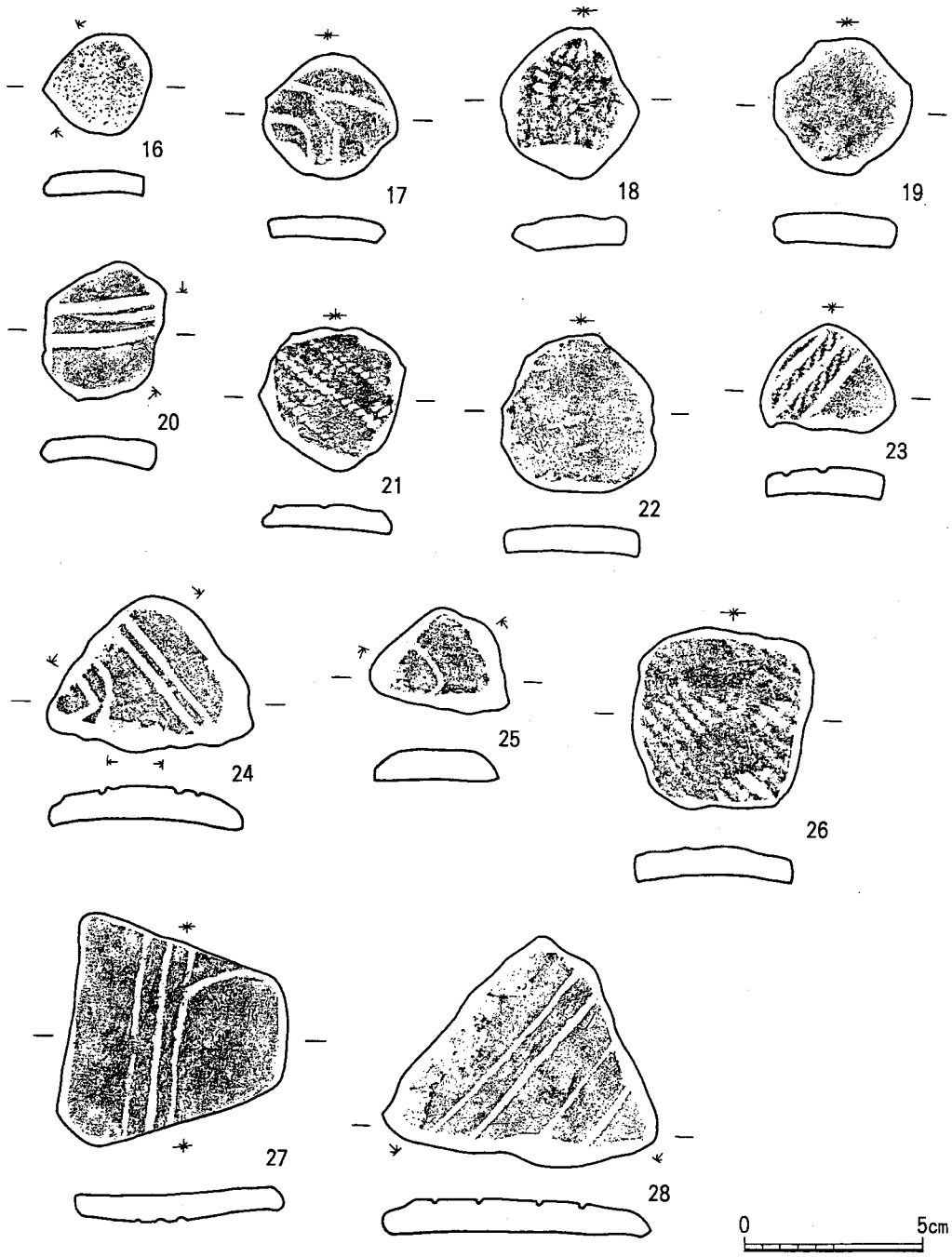
第63図　D_9区土製品出土分布状況



第64図　D_9区遺構外出土土製品実測図



第65図　D_9区遺構外出土土器片利用土製品拓影図



第66図　D₉区遺構外出土土器片利用土製品拓影図

第Ⅳ章　G_3区縄文時代検出遺構と出土遺物

G_3区において、確認された縄文時代の遺構は、焼土遺構３基、Ｔピット５基、フラスコ状土坑２基が検出された。また、遺構外より縄文土器破片83点、石器８点、土製品１点が出土した。

１．焼土遺構（G_3区）

焼土遺構は、調査区南端部、南西部及び北東部に点在している。本調査区では４基が確認された。

第１号焼土遺構（第69図）

調査区北東端部ＺＷ－70グリッド、Ⅲｂ層上面で確認。焼土範囲は68×51cmである。

第２号焼土遺構（第69図）

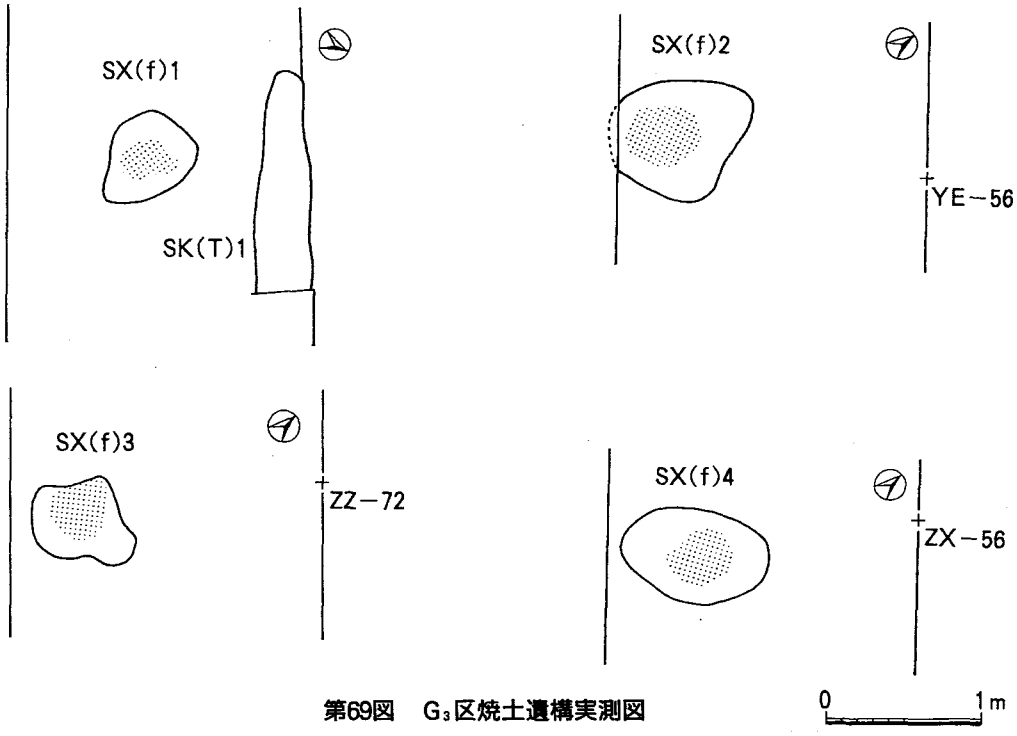
調査区西端部のＹＥ～ＹＦ－55グリッド、Ⅲａ層上面で確認。焼土範囲は75×58cmである。

第３号焼土遺構（第69図）

調査区北東端部のＺＺ～ＹＡ－71グリッド、Ⅲｃ層上面で確認。焼土範囲は75×58cmである。

第４号焼土遺構（第69図）

調査区南端部のＺＸ－55グリッド、Ⅲｄ層上面で確認。焼土範囲は94×60cmである。



第69図　G_3区焼土遺構実測図

2．土　坑

(1)　Ｔピット

Ｔピットは、調査区内の南西部より延びる沢頭部に構築されている。

第１号Ｔピット（第70図）

調査区北東端部のＺＷ－70～71グリッドに位置し、Ⅲｄ層中位で確認した。確認面からの深さは推定114cm、口縁部径は長軸306cm×短軸42cm（推定値）を測る。本遺構北側一部は未発掘である。確認された堆積土は３ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、確認面より縄文時代後期と考えられる。

第２号Ｔピット（第70図）

調査区中央部のＺＺ－64グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。本来の構築面は基本層序断面よりⅢｄ´層上面である。深さは推定157cm、口縁部径は長軸225cm（推定値）を測り、短軸は不明である。本遺構北側半部は未発掘である。確認された堆積土は４ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、構築面より縄文時代後期と考えられる。

第３号Ｔピット（第70図）

調査区中央部のＹＡ－62～63グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。本来の構築面は基本層序断面よりⅢｄ´層上面である。深さは推定193cm、口縁部径は短軸140cm（推定値）を測り、長軸は不明である。本遺構北西側半部は未発掘である。確認された堆積土は７ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、構築面より縄文時代後期と考えられる。

第４号Ｔピット（第70図）

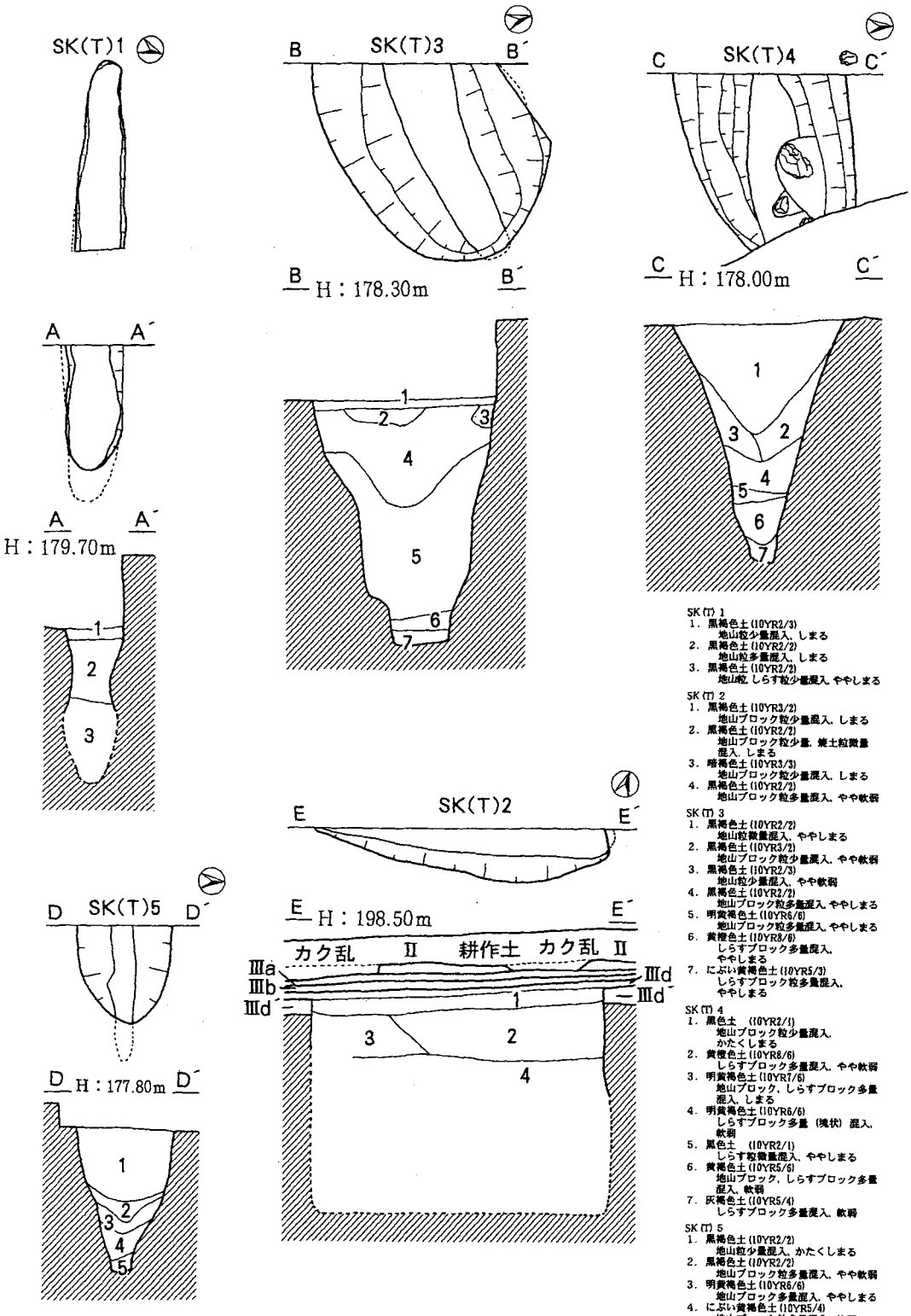
調査区北西部中央寄りのＹＢ－64グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。本来の構築面は基本層序断面よりⅢｄ´層上面である。深さは推定183cm、口縁部径は短軸49cm（推定値）を測り、長軸は不明である。本遺構南東側及び北西側一部は未発掘である。確認された堆積土は７ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、確認面より縄文時代後期と考えられる。

第５号Ｔピット（第70図）

調査区南東部のＺＶ～ＺＷ－59グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。深さは推定108cm、口縁部径は短軸71cm（推定値）を測り、長軸は不明である。本遺構西側半部は未発掘である。確認された堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、周辺構築Ｔピットと同様の縄文時代後期と考えられる。



SK(T) 1
1. 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒多量混入、しまる
3. 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒、しらす粒少量混入、ややしまる

SK(T) 2
1. 黒褐色土(10YR3/2)
地山ブロック粒少量混入、しまる
2. 黒褐色土(10YR2/2)
地山ブロック粒少量、焼土粒微量混入、しまる
3. 暗褐色土(10YR3/3)
地山ブロック粒少量混入、しまる
4. 黒褐色土(10YR2/2)
地山ブロック粒多量混入、やや軟弱

SK(T) 3
1. 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒微量混入、ややしまる
2. 黒褐色土(10YR3/2)
地山ブロック粒少量混入、やや軟弱
3. 黒褐色土(10YR2/3)
地山粒少量混入、やや軟弱
4. 黒褐色土(10YR2/2)
地山ブロック粒多量混入、ややしまる
5. 明黄褐色土(10YR6/6)
地山ブロック粒多量混入、ややしまる
6. 黄橙色土(10YR8/6)
しらすブロック多量混入、ややしまる
7. にぶい黄褐色土(10YR5/3)
しらすブロック粒多量混入、ややしまる

SK(T) 4
1. 黒色土 (10YR2/1)
地山ブロック粒少量混入、かたくしまる
2. 黄橙色土(10YR8/6)
しらすブロック多量混入、やや軟弱
3. 明黄褐色土(10YR7/6)
地山ブロック、しらすブロック多量混入、しまる
4. 明黄褐色土(10YR6/6)
しらすブロック多量（塊状）混入、軟弱
5. 黒色土 (10YR2/1)
しらす粒微量混入、ややしまる
6. 黄褐色土(10YR5/6)
地山ブロック、しらすブロック多量混入、軟弱
7. 灰褐色土(10YR5/4)
しらすブロック多量混入、軟弱

SK(T) 5
1. 黒褐色土(10YR2/2)
地山粒少量混入、かたくしまる
2. 黒褐色土(10YR2/2)
地山ブロック粒多量混入、やや軟弱
3. 明黄褐色土(10YR6/6)
地山ブロック多量混入、ややしまる
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
地山ブロック粒多量混入、軟弱
5. 黒 色 土(10YR2/1)
地山粒微量混入、軟弱

0　1m

第70図　G₃区Tーピット実測図

⑵ フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は、調査区北部内の小丘部に集中している。

第６号フラスコ状土坑（第71図）

調査区北東部北寄りのＹＤ－67～68グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。深さは推定157cm、口縁部径は長軸101cm（推定値）を測り、短軸は不明である。底部径は、短軸168cm（推定値）を測り、長軸は不明である。本遺構北側半部は未発掘である。確認される堆積土は６ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、遺物は出土しなかった。

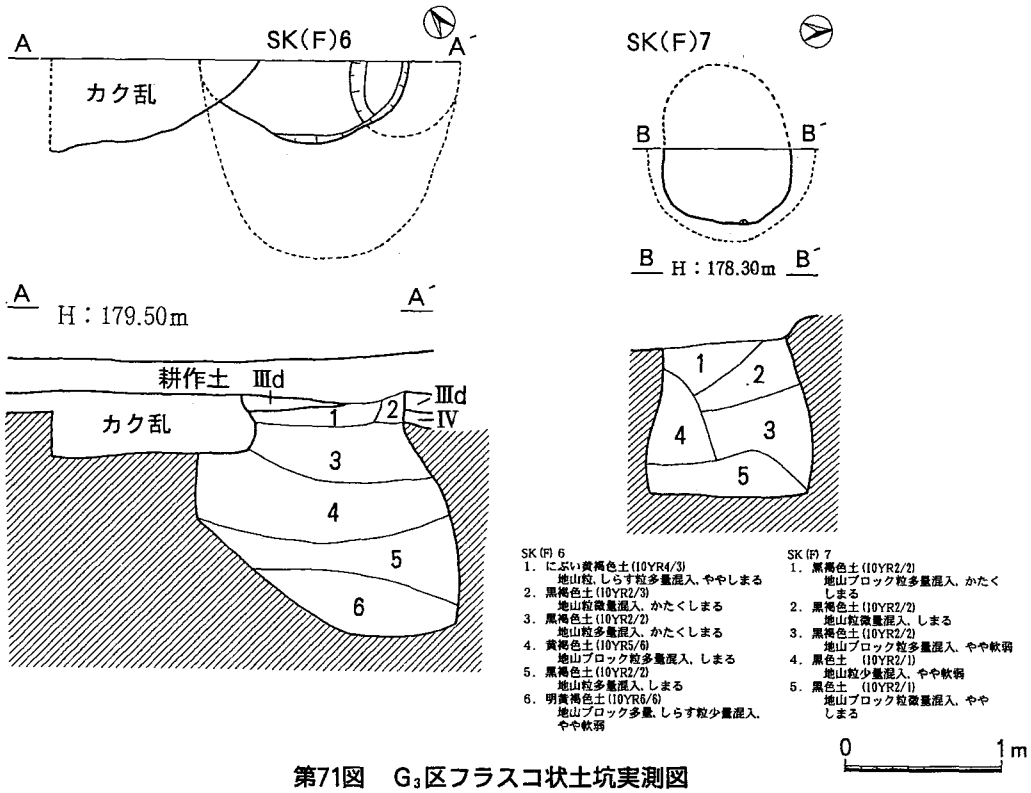
構築時期は確認面より縄文時代後期と判断される。

第７号フラスコ状土坑（第71図）

調査区北西部のＹＣ～ＹＤ－65グリッドに位置し、Ⅳ層中面～下面で確認した。確認面からの深さは推定102cm、口縁部径は長軸103cm×短軸81cm（推定値）、なお底部径は短軸108cm（推定値）を測り、長軸は不明である。確認される堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、遺物は出土しなかった。

構築時期は、第７号フラスコ状土坑と同様な縄文時代後期と判断される。



第71図　G_3区フラスコ状土坑実測図

3．遺構外出土遺物

(1) 土　　器（第72図）

G_3区遺構外からは、83点の土器が出土した。これらの土器は縄文時代後期に位置づけられるものである。土器の出土状況はまとまって出土することはなかった。

土器の分類については、D_9区と同じ基準で行った。なお、出土しなかった土器群・類については記載していない。

第Ⅰ群土器　早期の土器

本調査区からは出土していない。

第Ⅱ群土器　前期の土器

本調査区からは出土していない。

第Ⅲ群土器　中期末～後期初頭の土器

本調査区からは出土していない。

第Ⅳ群土器　後期初頭から前葉の土器（第72図）

1類：隆線文、隆沈文が施文された土器（第72図１～３）

隆線文、隆沈文が施文されている土器を一括した。深鉢形土器、壺形土器がみられる。

隆沈文により主文様が施文されるもの（２～３）、区画文（１）となるものがある。区画文となるものには単節の斜縄文が施文されている。

焼成は良好で、堅固なものが多く、色調は浅黄橙色、明赤褐色を呈する。

2類：地文上に沈線文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

3類：沈線が施文された土器（第72図４～８、12）

a：文様が縦位に施文される土器（第72図12）

文様が縦位に施文された土器を一括した。12は平口縁を呈する深鉢形土器で、口縁部文様帯内には弧線文が、胴部にはRL縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

b：文様が横位に施文された土器（第72図４～８）

文様が横位に施文される土器を一括した。小破片であり全体の器形は不明であるが、これまでの調査では波状・平口縁を呈する深鉢形土器、山形口縁を呈する鉢形土器が主体となるほか、

壺形土器や蓋形土器がみられた。４～８はいずれも深鉢形土器の破片で、横位の展開する沈線文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色、にぶい橙色を呈する。

c：幾何学的な文様が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

d：格子目状、斜行平行沈線が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

４類：帯縄文が施文された土器（第72図９～10）

本来ならば遺跡の時期を示すキーポイント的な土器であるが、本調査区からの出土は少ない。

a：文様が横位に施文される土器（第72図９～10）

帯縄文が横位方向に展開する土器を一括した。これまでの調査では深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が主体となるほか肩口土器がみられた。72図９は深鉢形土器の胴部破片で、入組文が施文されている。地文としてＲＬ縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄褐色を呈する。

b：幾何学的な文様が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

c：幅の広い帯状文が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

本群土器は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものを一括した。本群３類は十腰内Ｉａ式に比定される。４類は広義の十腰内Ｉｂ式に比定され、そのうち４類ａが大湯式に比定できよう。

第Ⅳ群土器　後期中葉の土器（第72図11）

１類：口縁部に幅の狭い平行沈線が施文された土器

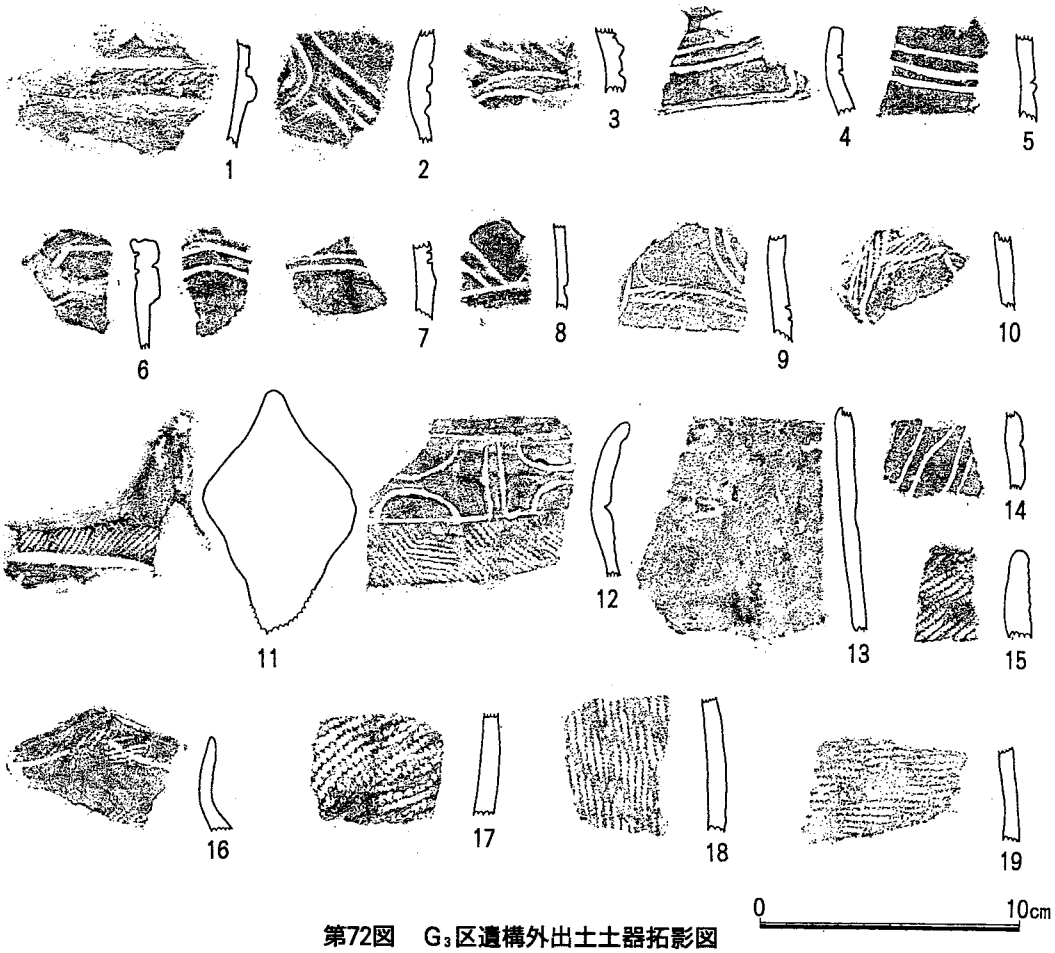
本調査区からは出土しなかった。

２類：磨り消し縄文が施文された土器（第72図11）

アメーバー的な幾何学文を施文したものを一括した。これまでの調査では口縁部が「朝顔」状に開く台付深鉢形土器、平口縁を呈する広口壺が主体となっている。第72図11は装飾突起の破片で、沈線内には節の細かなＲＬ縄文が施文されている。焼成はよく、色調は良好で、色調は褐灰色を呈する。

３類：磨り消し縄文に刺突が伴う土器

本調査区からは出土しなかった。



第72図　G_3区遺構外出土土器拓影図

4類：沈線文系の土器

本調査区からは出土しなかった。

本群土器は、縄文時代後期中葉に位置づけられるもので、東北地方北部の十腰内Ⅱ式、Ⅲ式に、東北南部の宝ヶ峯式土器に比定される。

第Ⅴ群土器　晩期の土器

本調査区からは出土しなかった。

第Ⅵ群土器　後期から晩期の土器（第72図13～19）

本群には、縄文（無節・単節）、撚糸文、条痕文、無文、刺突文の土器を一括した。数量的には非常に多く出土している。

1類：無文の土器 (第72図13)

深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器がみられる。これまでの調査では深鉢形土器は平口縁、波状口縁を呈するものがみられた。器外面は調整が施されている。72図13の焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。

2類：縄文が施文された土器 (第72図15～19)

本類には無節、単節、複節の縄文が施文されたものを一括した。

a：無節の縄文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

b：単節の縄文が施文された土器 (第72図15～19)

単節の縄文が施文された土器を一括した。節の大きいもの、細かなものがみられる。ＬＲ・ＲＬ縄文のいずれもみられる。72図16は山形口縁を呈する深鉢形土器である。焼成は良好で、色調は浅黄色、にぶい黄橙色を呈する。

3類：撚糸文が施文された土器 (第72図14)

網目状撚糸文が施文されたものを一括した。14は深鉢形土器の胴部破片でＬ縄文を使用した撚糸文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色～褐灰色を呈する。

4類：条痕文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

5類：刺突文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

第Ⅶ群土器　弥生時代の土器

本調査区からは出土しなかった。

(2) 石　　器

G_3区遺構外より出土した石器は、剥片石器５点、礫石器が３点の総計８点である。遺物の大半は調査区の北部に集中し、西部に点在する。遺物の大半は遺物包含層Ⅲａ～Ⅲｄ層からの出土である。石器の分類については、形態別に類別細分した。

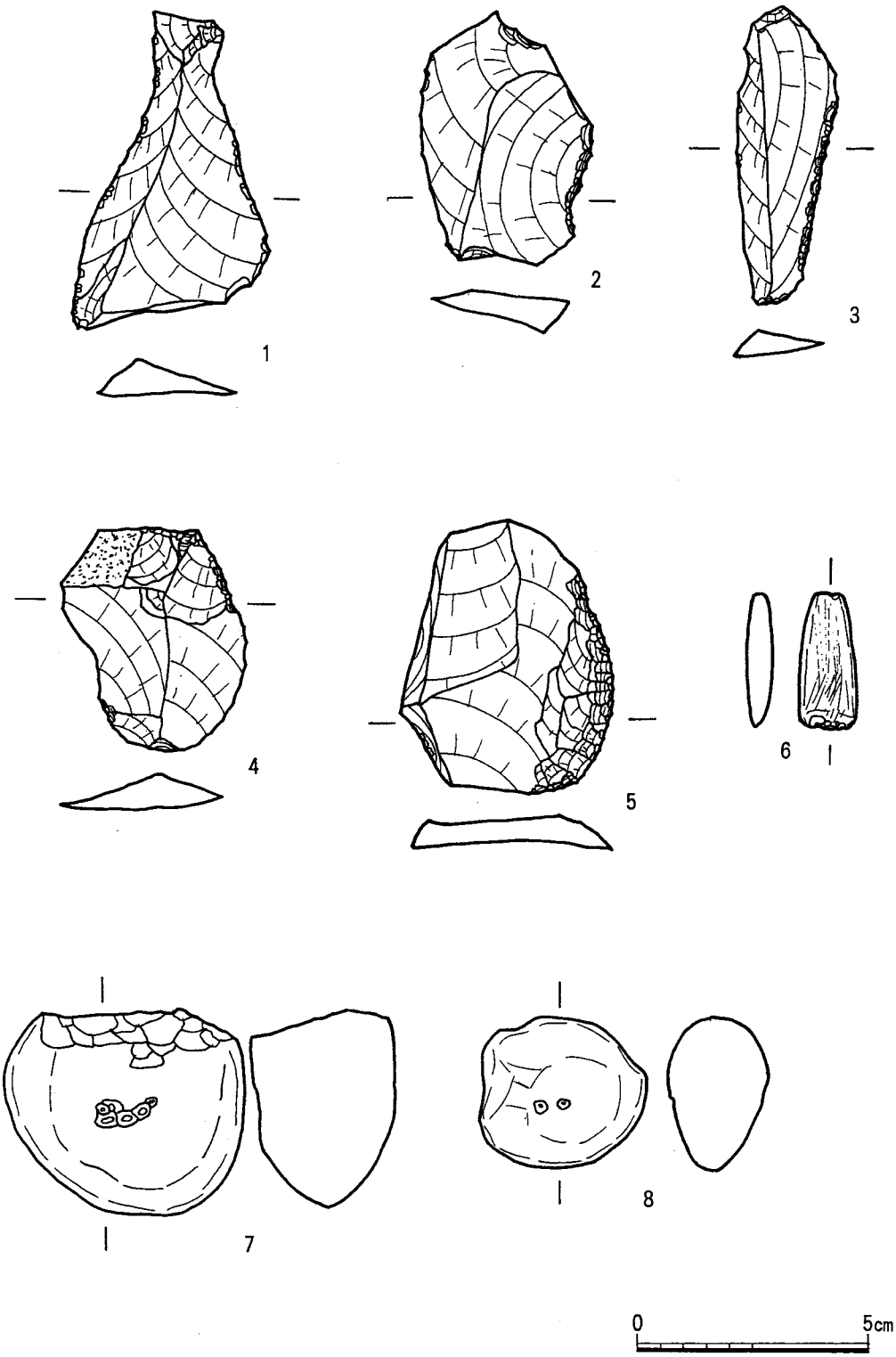
石　　鏃

本調査区からは出土しなかった。

石　　錐

本調査区からは出土しなかった。

石　　匙 (第73図)



第73図　G_3区遺構外出土石器実測図

形態から２群に分け、さらにつまみ部を上にして主要刃部が作り出される位置から、５類に細分した。石材は、珪質頁岩である。

１群…縦型石匙である。

ａ…主要刃部が、一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

ｂ…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは、１点出土した。（1）

ｃ…主要刃部が先端部に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

２群…横型石匙である。刃部の作りはていねいである。

ａ…主要刃部が一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

ｂ…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

ｃ…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

掻　　器（第73図）

打面を上にして、主要刃部が作り出される位置および、刃部の形態別に５群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。

１群…主要刃部が左、右、先端いずれか一側縁に作り出されるもので、４点出土した。（2～5）

２群…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

３群…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

４群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

５群…刃部に抉れをもつもので、本調査区からは出土しなかった。

石　　斧（第73図）

定角式磨製石斧が、１点出土し、刃部、基部ともに破損部が確認される。石材は緑色片岩である。（6）

石　　錘

扁平な川原石の一部が打ち欠かれているもので、本調査区からは出土しなかった。

敲　　石

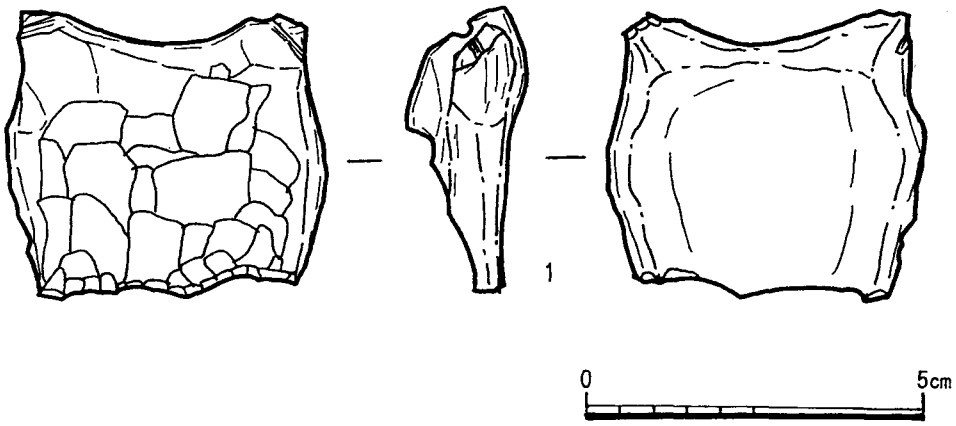
円礫、扁平な川原石の一部が打ち欠かかれているもので、本調査区からは出土しなかった。

凹　　石（第73図）

円礫、扁平な川原石に使用痕として凹が観察されるもので、２点出土した。両面を使用しているものもある。石材は石英安山岩、凝灰質泥岩である。（7、8）

石　　皿

本調査区からは出土しなかった。



第74図　G₃区遺構外出土土製品実測図

(3) 土 製 品

G₃区遺構外より出土した土製品は、用途不明な土製品１点が出土した。調査区南端部のＺＸ－55グリットから出土している。

その他の土製品 (第74図)

破損品の一部である。残部は扁平な方形状を呈し、両面には浅い凹状の丁寧な調整が施されている。表面と考えられる部分には剥落痕が確認でき、本来は凹凸のある器形であった可能性も考えられる。器面上部両端には耳状のつまみによる整形がなされ、斜状に貫通孔を有している。

(4) 石 製 品

本調査区からは出土しなかった。

第Ⅴ章　歴史時代の遺構

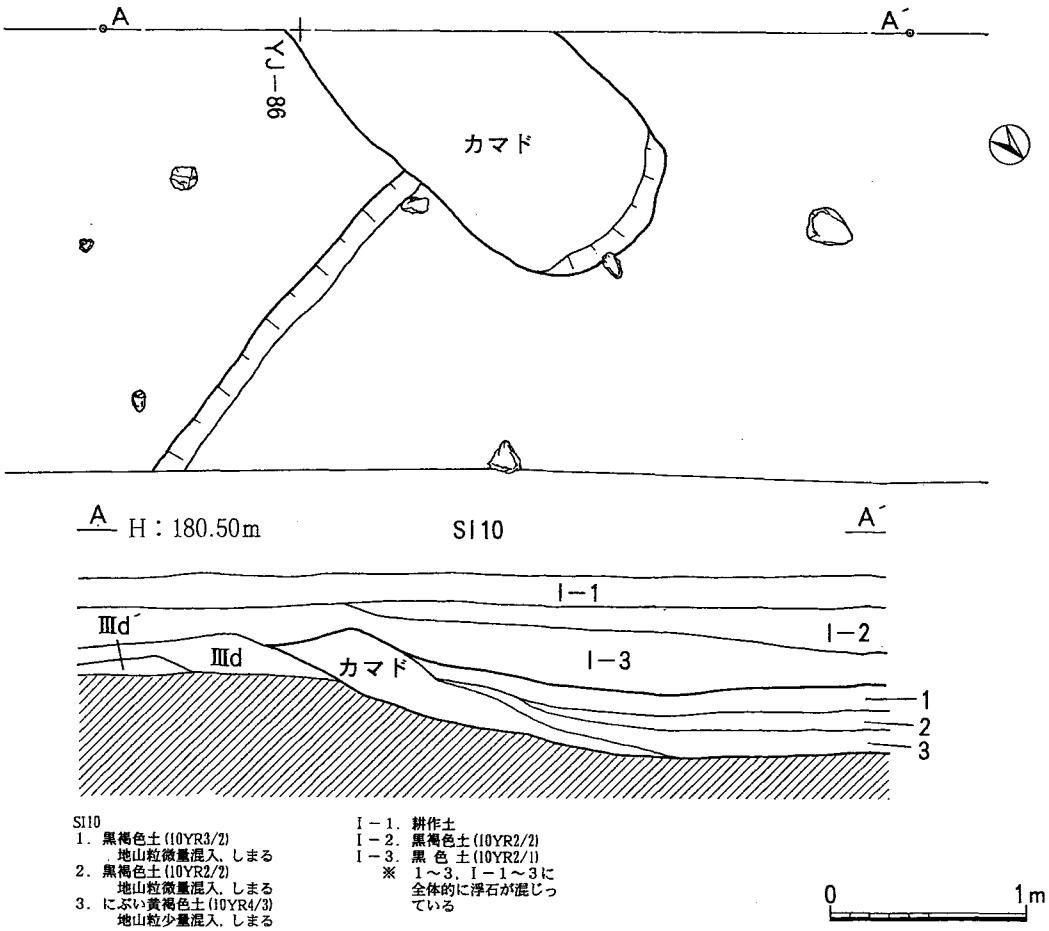
G_3区、D_9区において確認された歴史時代の遺構は、G_3区では溝状遺構２条、D_9区では竪穴住居跡５軒、土坑１基、溝状遺構１条である。遺物では遺構内・外より復元可能土師器１点土師器破片56点が出土した。

１．竪穴住居跡

竪穴住居跡はD_9区の北部から西部にかけて確認されている。

第10号竪穴住居跡（第75図）

調査区北東部ＹＫ－86グリットでの確認である。確認面はⅡ層までの攪乱のため不明である。大半が未発掘であるが、平面形は方形プランと判断される。住居内南側にカマドが付設されて



第75図　D_9区第10号竪穴住居跡実測図

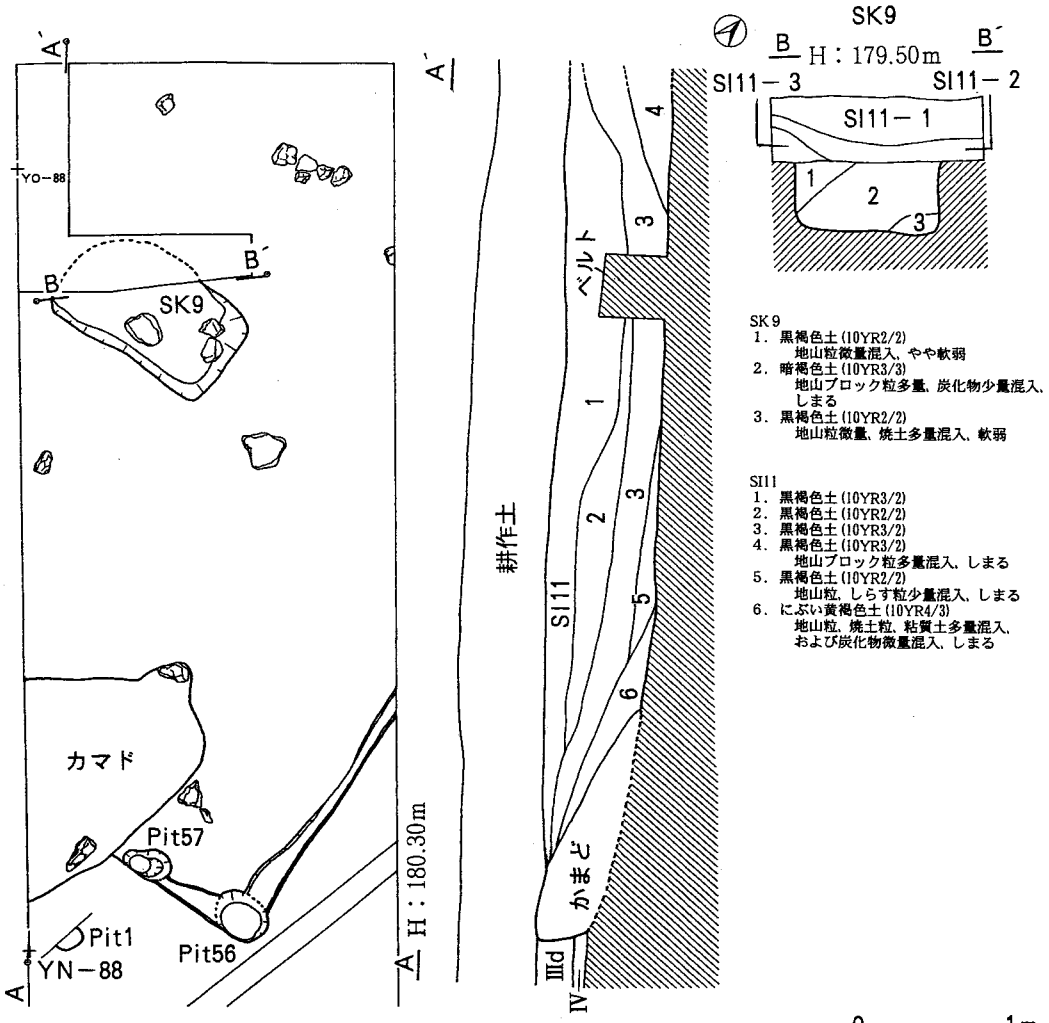
いる。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は34cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。堆積土は３層に区分され自然堆積と考えられる。

出土遺物は床直より土師器破片24点、覆土中より縄文土器破片18点が出土した。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層及び出土遺物よりより、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

第11号竪穴住居跡・第９号土坑（第76図）

調査区北端部ＹＰ・ＹＯ－88グリットでの確認である。確認面はⅡ層までの攪乱のため不明である。一部未発掘であるが、平面形は方形プランと判断される。住居内南側にカマドが付設されている。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は70cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。壁に沿って幅10～20cm、深さ10～15cmの壁溝が存在し、壁際・壁溝内に柱穴状ピッ



第76図　D₉区第11号竪穴住居跡実測図

トが確認される。堆積土は６層に区分され自然堆積と考えられる。また、住居内ほぼ中央部に土坑（ＳＫ09）が付設され、規模は長軸120cm×短軸70cmを測る方形プランである。堆積土は３ブロックに区分され、人為堆積である。

出土遺物は床直より土師器破片27点、覆土中より縄文土器破片47点、石器12点が出土した。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層及び出土遺物よりより、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

第12号竪穴住居跡（第77図）

調査区北西部ＹＱ・Ｐ－84グリットでの確認である。確認面はⅡ層までの攪乱のため不明である。一部確認したのみで、規模、平面形は不明である。確認された壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は68cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。壁に沿って幅12cm、深さ12cmの壁溝が存在する。堆積土は１層で人為堆積と考えられる。

出土遺物はない。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

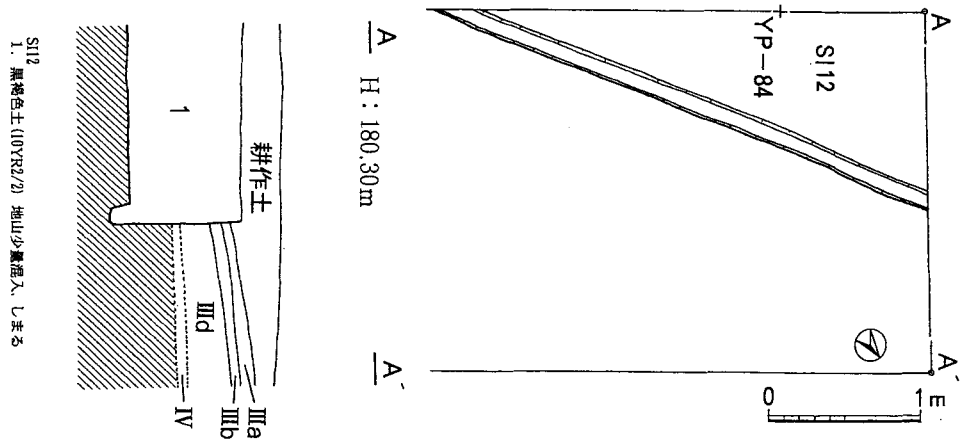
第13号竪穴住居跡（第78図）

調査区西端部ＹＯ－78グリット、Ⅱ層上面での確認である。一部確認したのみで、規模、平面形は不明である。確認された壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は80cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。堆積土は１層で人為堆積と考えられる。

出土遺物はない。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

第14号竪穴住居跡（第78図）



第77図　D_9区第12号竪穴住居跡実測図

調査区南端部ＹＨ・ＹＩ－76グリット、Ⅱ層上面での確認である。一部確認したのみで、規模、平面形は不明である。確認された壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は66cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。堆積土は１層で人為堆積と考えられる。

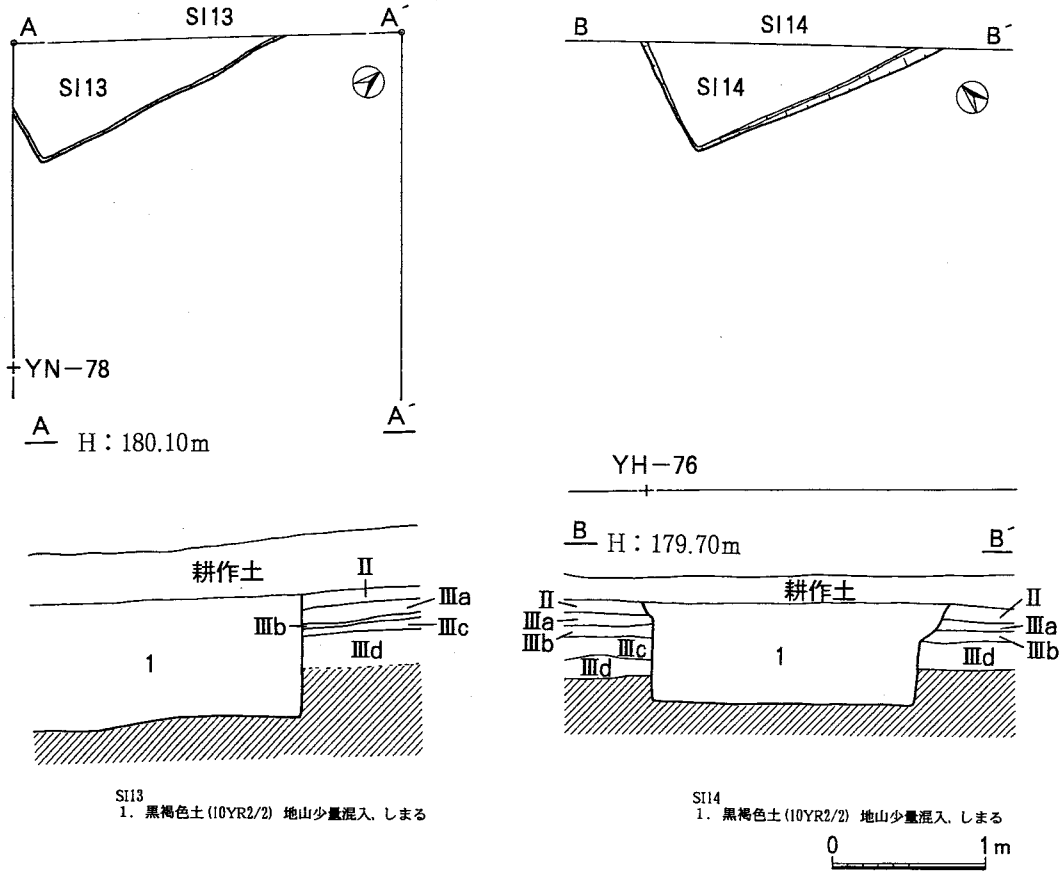
出土遺物はない。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

２．溝状遺構（第79図）

溝状遺構はG_3区、D_9区において計３条がみつかっている。いずれの溝状遺構もⅢａ層上面において、非常に堅いしまりのある幅70～125cmの凹が確認された。G_3区では、調査区北西側から南西側へ１条と南部で１条、D_9区では調査区頭部から西部へ横断するように連続して確認された。道路状の遺構になる可能性が高い。

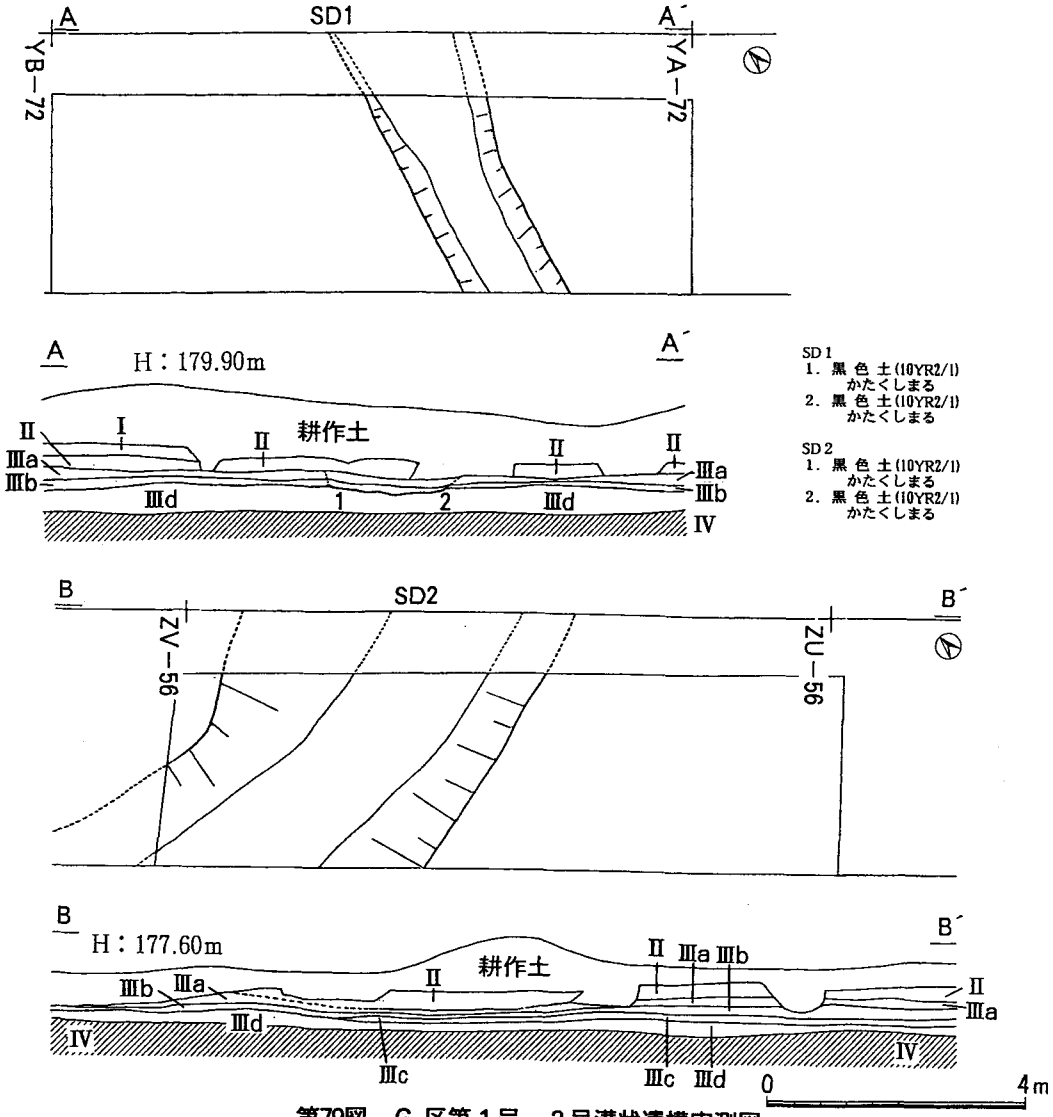
構築時期は、確認面から大湯浮石層降下直前と考えられる。



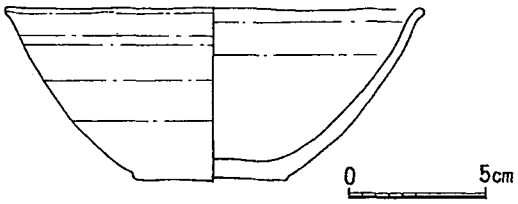
第78図　D_9区第13号、14号竪穴住居跡実測図

3．遺構外出土遺物（第80図）

遺構外より出土した遺物は、D_9区からのみの出土で、復元可能土師器１点、土師器破片７点である。第80図は調査区南端部ＹＫ－74グリットから、土師器破片は調査区南西部ＹＬ－78グリットからの出土である。



第79図　G_3区第１号、２号溝状遺構実測図



第80図　D_9区遺構外出土土器実測図

第Ⅵ章　自然科学的調査

定 性 分 析 結 果 報 告 書

【特別史跡大湯環状列石第19次発掘調査出土土器破片及び史跡周辺粘土の胎土分析】

株式会社　大館分析センター

分析技術課 主任　　田 村 英 雄

「特別史跡大湯環状列石第19次発掘調査出土土器破片及び史跡周辺粘土の胎土分析」２試料についてＸ線回折及び鉱物鑑定試験を下記のとおり実施した。

記

1．試料調整

・全試料につき鉄板上で１㎝角まで粗砕し、室内にて自然乾燥。

・粗砕試料から約100ｇを分取し、震動ミルにて約30秒間磨砕。

・磨砕試料から約30ｇを分取し、メノウ乳鉢にて指頭に感じない程度まで磨砕。

・下記の条件によりＸ線回折に供した。

2．測定条件

Ｘ線回折装置	‥	理学電機㈱　ガイガーフレックス
対陰極	‥	Cu
フィルター	‥	Ni
管電圧	‥	40 KV
管電流	‥	20 mA
カウントフルスケール	‥	1000 cps
時定数	‥	1 sec
走査速度	‥	2° min／
記録紙速度	‥	2 cm／min
デバージェンススリット	‥	1°
スキャッタースリット	‥	1°
レシービンクスリット	‥	0.3 mm
走査範囲	‥	$2\theta = 2° \sim 40°$

解 析

別表の鉱物鑑定表は全試料にわたる鉱物別相対強度として下表の基準により作成した

〔 Ｘ線回折強度分類基準 〕

鉱　物	(d値)	バックグランドからのピーク高　(出位 チャート目盛り)			
		◎ (多量)	○ (中量)	△ (少量)	(微量)
石英	(3.34)				
クリストバル石	(4.05)	100以上	99～50	49～10	10未満
トリデマイト	(4.27)				
斜長石	(3.17)	40以上	39～20	19～10	10未満
カリ長石	(3.30)	20以上	19～10	9～ 5	5未満
曹長石	(3.20)				
黒雲母	(10.10)				
緑泥石	(7.10)				
カオリン	(7.18)	20以上	19～10	9～ 5	5未満
スメクタイト	(15.15)				
葉蝋石	(3.04)				
ハロイサイト	(4.42)				
斜プチロル沸石	(8.93)				
モルデン沸石	(3.48)	20以上	19～10	9～ 5	5未満
輝沸石	(4.16)				
方沸石	(3.43)				
角閃石	(8.40)				
普通輝石	(3.00)	20以上	19～10	9～ 5	5未満
斜方輝石	(3.18)				
鉄鉱柘榴石	(2.58)				
明ばん石	(2.99)				
石膏	(2.87)	45以上	44～20	19～10	10未満
重晶石	(3.45)				
ジャロサイト	(3.08)				
方解石	(3.03)				
アンケライト	(2.90)	45以上	44～20	19～10	10未満
菱鉄鉱	(2.80)				
菱苦土石	(2.74)				
黄鉄鉱	(2.71)				
赤鉄鉱	(2.70)				
鉛丹	(3.52)	10以上	9～ 5	4～ 3	3未満
ルチル	(3.25)				
針鉄鉱	(4.18)				
白鉄鉱	(2.69)				

3．解　　析

(1)　鉱物鑑定表は全試料にわたる鉱物別相対強度として次表の「Ｘ線回折強度分類基準」により作成した。

4．分析結果

大湯環状列石第19次発掘調査出土土器破片及び史跡周辺（黒森山）粘土の胎土は、成分比較において相違すると判断される。

分析結果

No.	試料名	Li (ppm)	Be (ppm)	B (ppm)	Na (ppm)	Mg (ppm)	Al (ppm)	SiO2 (%)	K (ppm)	Ca (ppm)	Sc (ppm)	Ti (ppm)	V (ppm)	Cr (ppm)	Mn (ppm)	Fe (ppm)	Co (ppm)	Ni (ppm)	Cu (ppm)
1	大湯 黒森山 出土粘土	19	< 1	240	10700	8300	168000	53.1	3300	4400	16	5100	118	20	480	45000	6	8	34
2	02 大D9 P－1203	33	< 1	220	9600	8300	182000	51.96	5800	2200	15	4800	70	39	280	36000	4	8	45

No.	試料名	Zn (ppm)	Ga (ppm)	Ge (ppm)	As (ppm)	Se (ppm)	Br (ppm)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Nb (ppm)	Mo (ppm)	Ru (ppm)	Rh (ppm)	Pd (ppm)	Ag (ppm)	Cd (ppm)	In (ppm)
1	大湯 黒森山 出土粘土	123	19	0.85	4	< 10	19	27	113	32	78	4	<0.1	< 1	< 2	< 1	< 1	< 1	<0.5
2	02 大D9 P－1203	107	22	0.45	4	< 10	6	63	91	18	78	8	0.6	< 1	< 2	< 1	< 1	< 1	<0.5

No.	試料名	Sn (ppm)	Sb (ppm)	Te (ppm)	I (ppm)	Cs (ppm)	Ba (ppm)	La (ppm)	Ce (ppm)	Pr (ppm)	Nd (ppm)	Sm (ppm)	Eu (ppm)	Gd (ppm)	Tb (ppm)	Dy (ppm)	Ho (ppm)	Er (ppm)	Tm (ppm)
1	大湯 黒森山 出土粘土	2	1	< 2	3	3	380	14	32	5	20	6	2	7	1	7	1	4	< 1
2	02 大D9 P－1203	6	1	< 2	< 1	7	390	17	45	5	22	5	1	5	< 1	5	< 1	3	< 1

No.	試料名	Yb (ppm)	Lu (ppm)	Hf (ppm)	Ta (ppm)	W (ppm)	Re (ppm)	Os (ppm)	Ir (ppm)	Pt (ppm)	Au (ppm)	Hg (ppm)	Tl (ppm)	Pb (ppm)	Bi (ppm)	Th (ppm)	U (ppm)
1	大湯 黒森山 出土粘土	3	< 1	4	1	1	< 2	< 5	< 2	< 1	< 1	< 1	< 1	18	< 2	5	1
2	02 大D9 P－1203	2	< 1	5	2	2	< 2	< 5	< 2	< 1	< 1	< 1	< 1	19	< 2	11	3

＊SiはSample溶解にHFを使用するため揮散。

X線鉱物鑑定一覧表

No.	試料名	珪酸塩鉱物																							硫酸塩鉱物				炭酸塩鉱物				その他の鉱物				備考	処理	
		珪酸			長石			粘土鉱物							沸石						その他																		
		石英	クリストバライト	トリデマイト	斜長石	カリ長石	曹長石	絹雲母	緑泥石	カオリン	スメクタイト	葉蝋石	ハロイサイト	S/S	C/S	斜プチロル沸石	モルデン沸石	濁沸石	束沸石	方沸石	ワイラカイト	角閃石	普通輝石		明ばん石	石膏	重晶石		方解石	ドロマイト	菱鉄鉱	アンケライト	黄鉄鉱	赤鉄鉱	鋭錘石	針鉄鉱		EG	塩酸
1	大湯 黒森山 出土粘土	○	△	・	△								・		・														・										
2	02 大D9 P－1203	○					◎							○															・				・						

◎：多量　○：中量　△：少量　・：微量　？：不明
S／S：絹雲母ースメクタイト混合層粘土鉱物
C／S：緑泥石ースメクタイト混合層粘土鉱物

第Ⅶ章　調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部、大湯川の左岸に形成された標高180m前後の舌状台地上に位置し、万座・野中堂環状列石を中心とする縄文時代後期の大規模な「祭祀場」である。

本年度第19次調査からは、昨年度第18次調査において史跡の主要部である野中堂・万座環状列石隣接地の調査をほぼ終了したことから、今後は史跡全体の「場の使われ方」を解明する目的を前提に調査を行うこととした。

第19次調査は、万座環状列石南西側約70mの区域（G_3区）及び同西側50mの区域（D_9区）の遺構・遺物分布状況の把握と地形の把握を目的に行った。

1．D_9、G_3区遺構・遺物について

D_9区の調査では、縄文時代の竪穴住居跡８軒、柱穴状ピット４個、焼土遺構８基、Ｔピット１基、フラスコ状土坑遺構３基、土坑２基、礫群が確認された。

竪穴住居跡は、いずれもⅢｄ層上面から掘り込まれ、石囲炉をもつ。主柱穴と明確に判断されるピットを確認することはできなかったが、おおよそ円形のプランのものである。炉は川原石によって円形に作られ、強い焼痕が認められ、鑑定の結果、かなり使い込まれたものと判断されたことから、生活の痕跡を伺わせる。第２号竪穴住居跡以外は全て縄文時代後期前葉の構築期と考えられる。

遺構保存を最優先と考え、トレンチ掘りを多用した調査であったため、住居跡の数は更に増えるものと予想される。調査区内での住居跡の分布は台地縁辺部下の湧水地を囲むように半円形に配置され、中央部は空洞化する傾向にある。構築条件については、これまで大湯環状列石周辺で確認されてきた大半の遺構は地形を考慮して小丘部に構築される傾向にあったが、本調査区で確認された竪穴住居跡は、この小丘部に限定されず、そのため遺構確認に苦慮した。

竪穴住居跡は、これまでの調査から本調査地北東側（F_1区・第６次）区域で７軒、第17次野中堂環状列石周囲で確認された２軒の計９軒が存在は知られていた。野中堂環状列石周囲で検出した竪穴住居跡は１軒が縄文時代後期中葉のものである。また、F_1区で確認された竪穴住居跡のうち３軒は炉跡や焼土を伴わず、規模も大きいことから住居跡とは性格を異にする可能性が強いものとされているため、本来F_1区域では４軒の竪穴住居跡の存在を考えることが妥当であろう。さらに、同区域では、調査区内の一部区域に住居跡が集中し、重複関係もみられ、住居内には「コ」の字型の石組の特殊施設を持つなど、F_1区域は生活区域とは性格が異なる地域であると判断できる。また、F_1区域の住居跡はその後の調査で北側に広がらないこ

とが判明している。これらのことから、史跡内での本来の性格を意味する竪穴住居跡群とよばれるものの検出は本調査区が初といえる。しかし、大湯環状列石を構築している夥しいほどの配石の数に見合う住居跡数が確認できなかったことから、本調査区で確認された住居跡は、大湯環状列石を作り始めた人々、若しくは、万座環状列石を構成する一小塊のグループの生活の場である可能性が強いと考えられる。今後は史跡内・外を問わず、大湯環状列石を構築した人々の集落解明のための調査も必要となる。

調査区内で比較的多く確認された焼土遺構は、住居跡と近接する場所や構築時期を異にして住居跡堆積土上部で確認される特徴を示した。また、完形復元土器を伴う遺構や近接して復元可能土器を伴う遺構が目立った。このことから、住居跡廃棄以降もこの区域が利用されていたことを示唆する。また、後期中葉の構築時期の第２号竪穴住居跡の近接地に構築された大型の第１、２、４号フラスコ状土坑は後期前葉から中葉の土器が出土したことから長期間にわたり同区域が利用されていたものと判断できる。

礫群の分布は、住居跡、遺構と関連（セット）する様相を示すと思われる。遺構構築時期に投げ捨てられた可能性が考えられ、通常は沢部分を捨て場にすると考えられるが、湧水地の保護を考慮に入れていたことを伺わせる。

昨年度に続き、大半の遺物に関しては、レベル測量を行い、出土状況を図化して取り上げ、調査区一部での基本層序ごとの土器編年を試みた。明確な成果を得ることができなかったが、今後も粘り強く継続することで好結果を見いだすことができると考える。なお、 遺物では、第６次調査でもその傾向はあったが、縄文時代前期の復元可能土器・土器破片がまとまって出土している。また、鐸型土製品に「人体文」状の文様を施文したものが出土している。

G_3区では、旧地形の確認を主な目的に調査を行った。その結果、西側台地縁辺部からのびる大きな沢とそれに平行するように小沢が確認された。旧地形は全体的に波状の起伏のある地形であることが判明した。また、Ｔピット、フラスコ状土坑が確認され、フラスコ状土坑は小丘部に集中し、Ｔピットは沢部に構築されている。特に、第７次F_2区で確認されたＴピットは沢部の流れる方向に対して平行に構築されるのに対し、本調査区では、沢部に対し直交する状況で構築されている。規模もこれまで検出した中で最大のものである。構築法、規模の違いは狩猟目的動物の違いを示すものであろうか。

遺物の出土は少量であったが、遺物集中分布域は２区域に区分される傾向にある。１区域は調査区北東端で、この区域は万座環状列石の遺物廃棄域（環４）の境界部分である。もう一方は南西部端である。この区域の遺物集中要素としては、台地縁辺部に竪穴住居跡域が広がることを伺わせるものであろう。

2．歴史時代の遺構について

D_9・G_3区で検出した歴史時代の遺構は、竪穴住居跡、溝状遺構である。溝状遺構は堅さ形態から古代の道路の可能性が高いものである。住居跡はD_9区で台地縁辺部の沢部を取り囲むように検出した。これまでの調査からも数多くみつかっており、台地縁辺部付近に比較的大きな平安時代の集落があり、D_9区、G_3区双方で検出した溝状遺構により当時の人々の流動を垣間見ることができる。

3．D_9区出土土器破片及び史跡周辺出土粘土の胎土分析について

本調査では、調査によって土器・土器破片が出土して以来、課題であった、土器製作用の粘土産地確定のため自然科学的分析による同定を試みた。同定のための試料としては、調査地（D_9区）出土の土器破片と史跡周辺産出の土器製作に適すと思われる粘土について分析を試みた。

粘土は、史跡より北側約１㎞にある黒森山より流れ出る小川から採取したものである。分析の結果は、第Ⅵ章で記したが、本分析に使用した粘土は調査出土の土器破片の胎土と違うことが判明した。

粘土の特徴としては、水分を多くふくみ、乾きが早いという点があげられる。また、土器破片胎土の成分と比較し鉄が多く、粘土鉱物が少なく、通常「焼き物」に利用される良質の粘土に多くふくまれる長石が少ないこと等が挙げられる。これらのことから、今回分析を試みた粘土は、土器製作に適さないことが判明した。

分析を行った田村氏によれば、通常、「焼き物」に利用される粘土にはＸ線鉱物鑑定一覧表にある絹雲母が多くふくまれているものが多く、これらの粘土は鉱山地帯に多くみられるという。このことからすれば、大湯環状列石を構築する石（石英閃緑玢岩）の産出地である安久谷川付近が偶然ながら鉱山地帯であるため、今後は同付近に粘土の産出地を求めていきたいと思う。

本分析を行ったことにより、これまで全く不明であった粘土の産地のめどが多少ながら明確となってきたことは、今後の大湯環状列石解明と史跡活用にむけて大きな成果であったといえる。

来年度で大湯環状列石の調査も20年目という節目を迎えるにあたって、今後はこれまでの膨大な資料の再考・再分析を行い、調査のまとめを行っていく方針である。併せて史跡外の関連遺跡も視野にいれていきたいと思う。

参 考 文 献

文化財保護委員会　『大湯町環状列石』　1953年

青森県教育委員会　『中の平遺跡発掘調査報告書』　1975年

『長七谷地貝塚』　1980年

青森市教育委員会　『小牧野遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅶ　1996年～

岩手県教育委員会　『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書　西田遺跡』　1980年

大迫町教育委員会　『立石遺跡　昭和52年・53年度発掘調査報告書』　1979年

鷹巣町教育委員会　『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書(1)～(3)』　1998年～

秋田県教育委員会　『高屋館跡発掘調査報告書』　1988年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ―歌内遺跡―』　1982年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ

―鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡―』　1982年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ

―上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡・案内Ⅱ遺跡・猿ヶ平Ⅰ遺跡―　1982年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ

―猿ヶ平Ⅱ遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡―』　1983年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ

―館平館Ⅰ遺跡・館平館Ⅱ遺跡・白長根館Ⅰ遺跡・白長根館Ⅱ遺跡・丑森遺跡・道合Ⅰ遺跡・道合Ⅱ遺跡・大岱Ⅱ遺跡・大岱Ⅲ遺跡・円川原遺跡・大岱Ⅳ遺跡―』　1984年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ

―はりま館遺跡・横館遺跡・大岱Ⅰ遺跡―』　1984年

『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅠ

―孫右エ門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡―　1984年

『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ

―上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡―』　1989年

『東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書ⅩⅢ

―茂竹沢遺跡―』　1993年

『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅧ―小田Ⅳ遺跡―』　1994年

『潟前遺跡（第２次）』　2000年

『上野遺跡』　2000年
『竜毛沢館跡発掘調査報告書』　1990年茱
『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
　　一上野遺跡一』　1992年
『桐内Ｃ遺跡』　2000年
『根下戸道下遺跡』　2000年
『八木遺跡発掘調査報告書』　1989年
『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｖ
　　一中山遺跡一』　1994年
『はりま館遺跡発掘調査報告書』　1990年
『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
　　一寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡一』　1988年
『国道103号大館南バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査概報
　　一山王岱遺跡一』　1988年
二ツ井町教育委員会『東北電力（株）北奥幹線新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　一茱萸ノ木遺跡・加世神館遺跡・竜毛沢Ⅲ遺跡・竜毛沢Ⅳ遺跡・
　　竜毛沢Ⅴ遺跡一』　1996年
『鳥野遺跡第４次発掘調査概報』　1993年
阿部義平　「日時計の考察　大湯環状列石の配石類型の意味」
　　『よねしろ考古　第２号』　よねしろ考古学研究会　1986年
小林達雄　『縄文人の世界』朝日選書557 朝日新聞社　1996年
「縄文時代の自然の社会化」『季刊考古学・別冊６』雄山閣　1995年
『縄文土器の研究』小学館1994
小林達雄ほか　『縄文時代の考古学』学生社　1998年
岡村道雄　『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店　1997年
冨樫泰時　「秋田県大湯遺跡」　『季刊考古学・別冊６』雄山閣　1995年
『日本の古代遺跡24　秋田県』　保育社　1985年
林　謙作　「Ⅱ　縄文時代　３マツリと記念物」
　　『発掘が語る日本史１　北海道・東北編』新人物往来社　1986年
戸沢充則編　『縄文時代研究事典』東京堂出版　1994年
浅川滋男編　「先史日本の住居とその周辺」
　　『奈良国立文化財研究所シンポジウム』　同成社　1998年

成田滋彦　「青森県の土器」『縄文文化の研究　4』　雄山閣　1984年
小林　克　「東北地方北部縄文時代の墓制」『月刊考古学ジャーナル 422』
ニュー・サイエンス社　1997年
葛西　励　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化11』
北奥古代文化研究会1980年
鈴木克彦　『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣　2001年
『日本の古代遺跡29　青森』保育社　1986年
水野正好　「環状組石墓群の意味するもの」『信濃20－4』1968年
村越　潔　『円筒土器文化』雄山閣　1974年
『土偶とその情報』研究会
『東北・北海道の土偶Ⅰ』　土偶シンポジウム２秋田大会　1994年
玉川時雄・小金井靖『土師器・須恵器の知識』東京美術　1984年
麻生　優・白石浩之『縄文土器の知識Ⅰ』東京美術　1986年
藤村東男　『縄文土器の知識Ⅱ』東京美術　1984年
江坂輝彌　『石神遺跡』　ニューサイエンス社　1970年
岩手県立博物館　『岩手の土器　県内出土資料の集成』　1982年
野村　崇・宇田川洋『旧石器・縄文文化』北海道新聞社　2001年

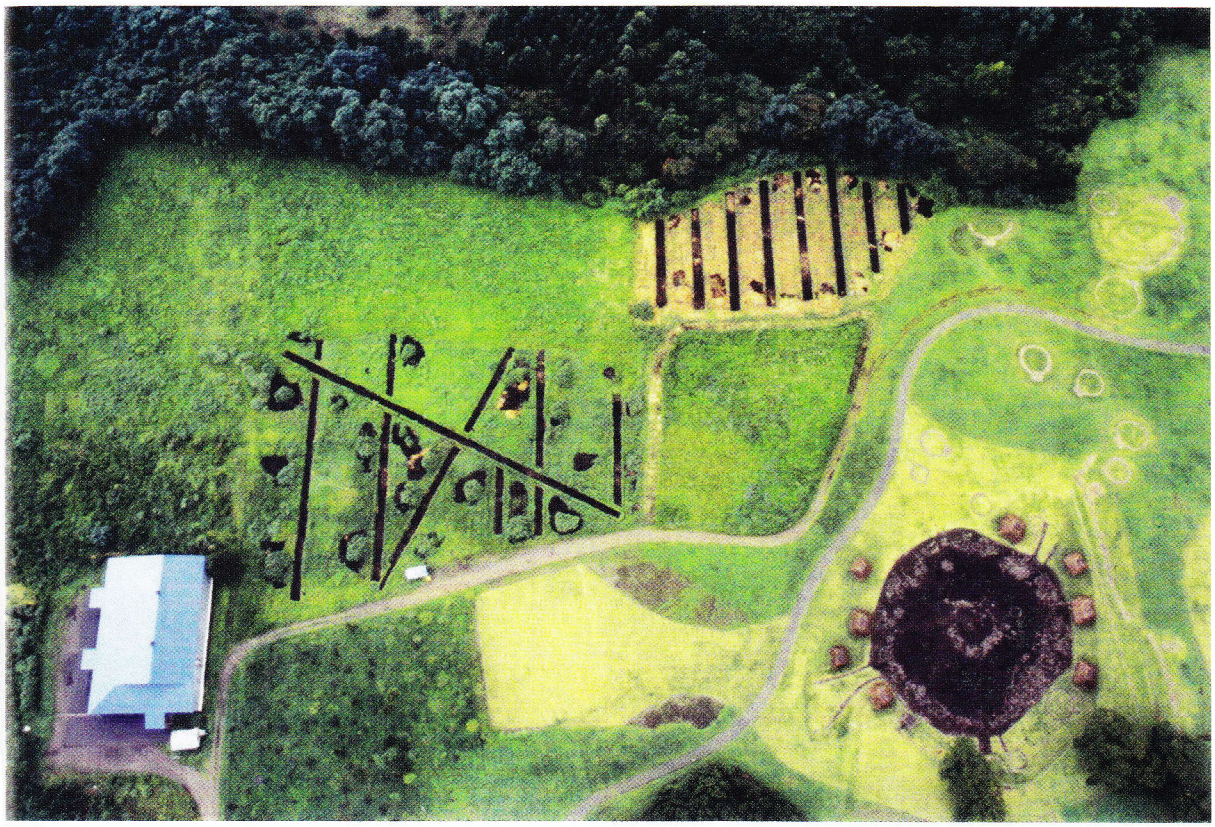
上記の他に多くの研究論文，報告書を活用させていただいた。

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきおおゆかんじょうれっせきはっくつちょうさほうこくしょ (19)
書名	特別史跡　大湯環状列石発掘調査報告書 (19)
副書名	
巻次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	
編著者名	鹿角市教育委員会（生涯学習課）
編集機関	鹿角市教育委員会
所在地	〒018－5292　秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
発行年月日	西暦2003年３月31日

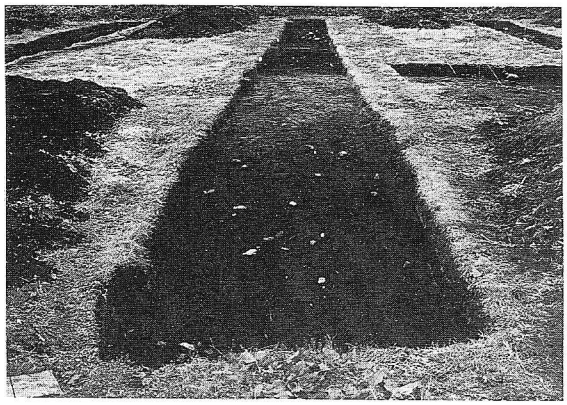
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座 字野中堂 字一本木 後口	05209	123	40度 16分 20秒	140度 48分 49秒	2003. 5.21 ～ 2003.11. 6	1,545㎡	万座環状列石西側台地縁辺部、西側周辺の遺構分布、地形の把握

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期 (平安)	竪穴住居跡 土坑 フラスコ状土坑 焼土遺構 Tピット など	縄文土器 石器 石製品 土製品	環状列石周辺で竪穴住居跡域がみつかる。

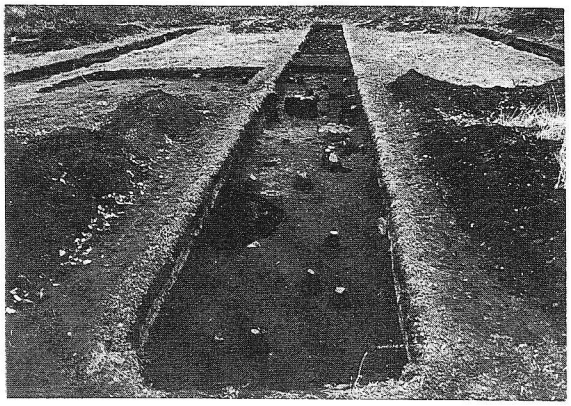


ＰＬ２　万座環状列石、Ｇ$_3$区、Ｄ$_9$区全景

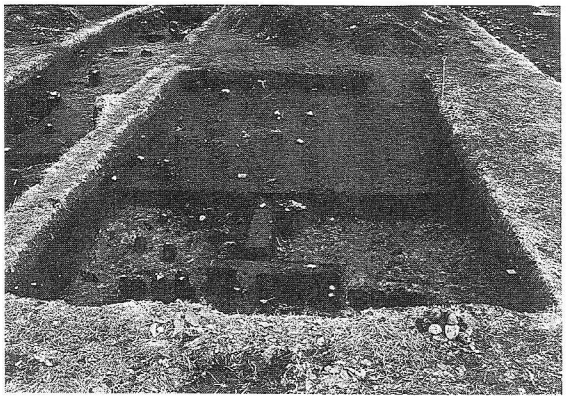
ＰＬ３　Ｇ$_3$区、Ｄ$_9$区全景



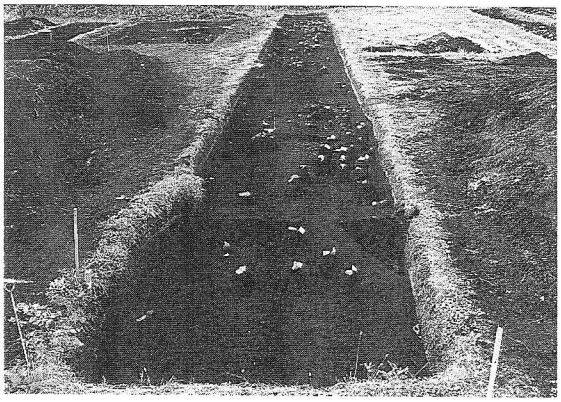
fトレンチ　SE→NW



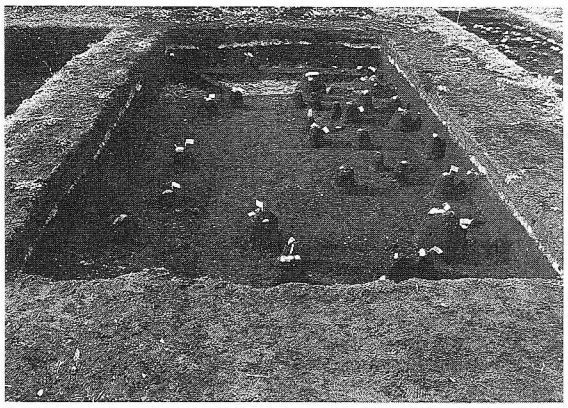
dトレンチ　SE→NW



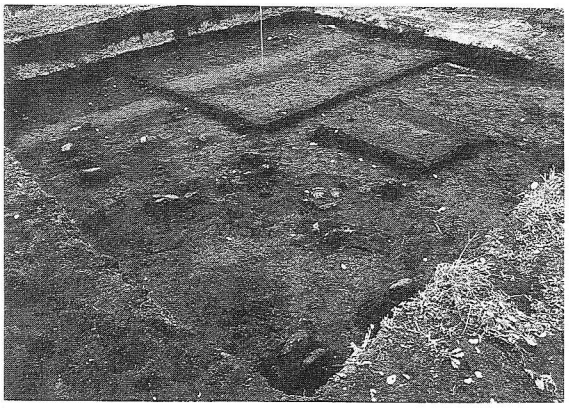
hトレンチ　NW→SE



jトレンチ　SE→NW

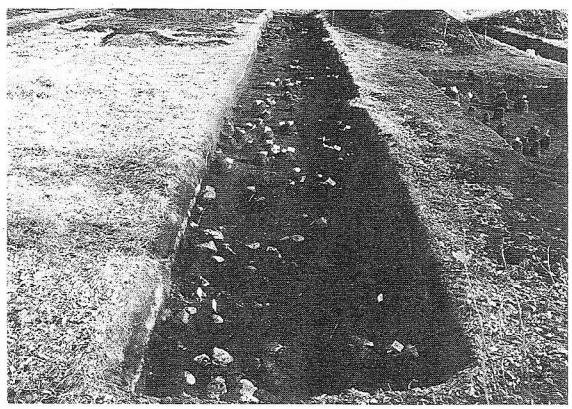


kトレンチ　SE→NW

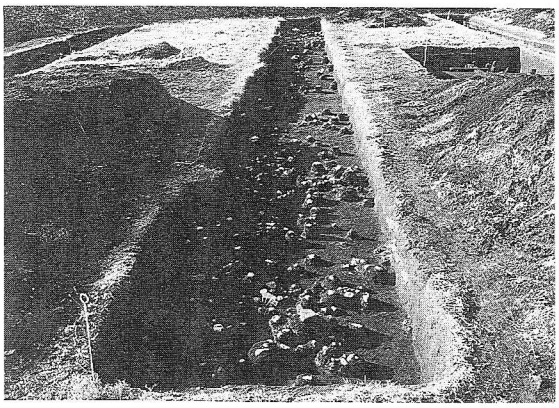


bトレンチ　E→W

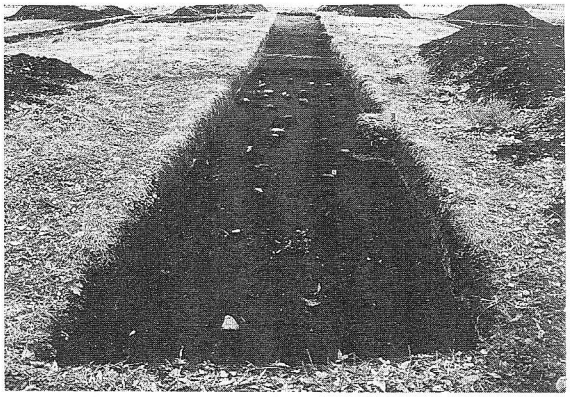
PL4　D_9区遺構確認状況



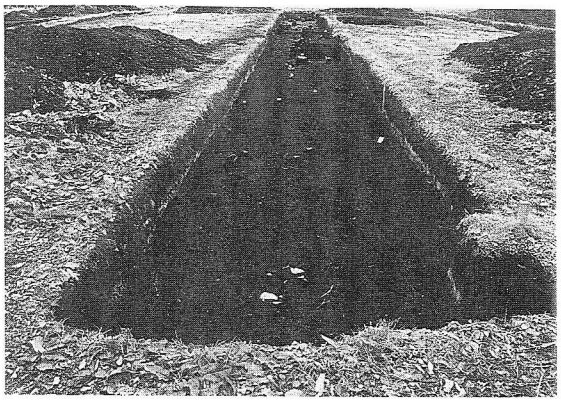
jトレンチ　NW→SE



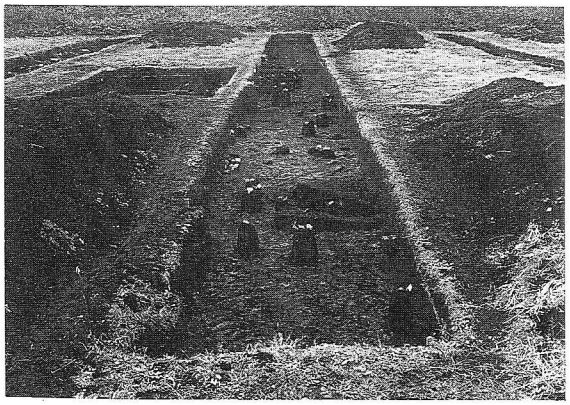
iトレンチ　SE→NW



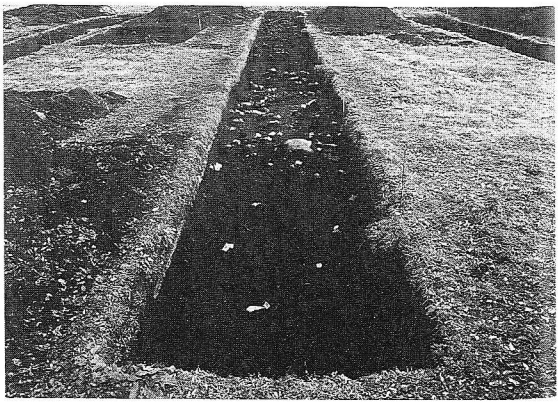
fトレンチ　NW→SE



gトレンチ　NW→SE

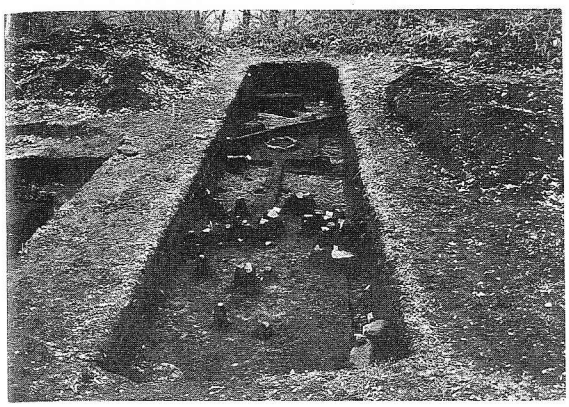


gトレンチ　SE→NW

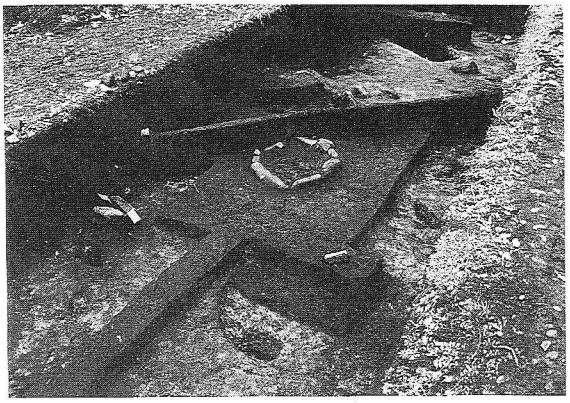


iトレンチ　NW→SE

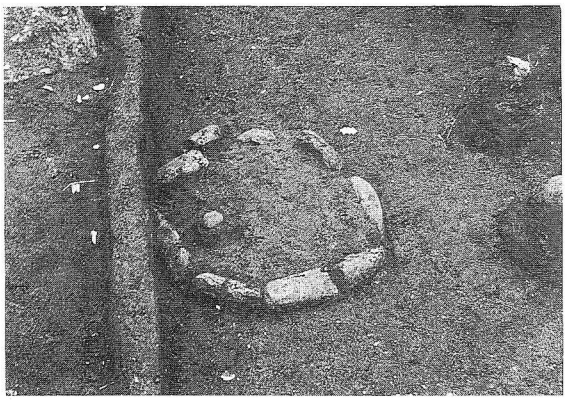
PL5　D_9区遺構確認状況



Aトレンチ　SE→NW



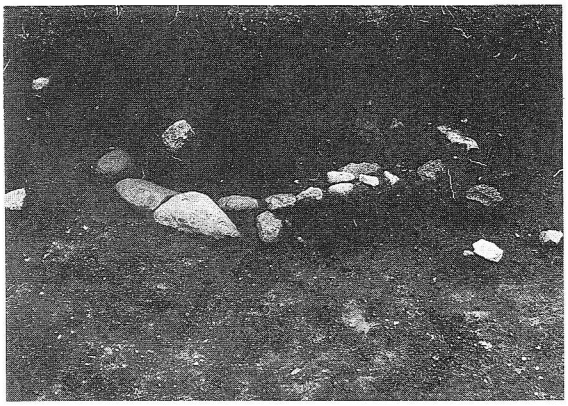
第１号竪穴住居跡



第１号竪穴住居跡

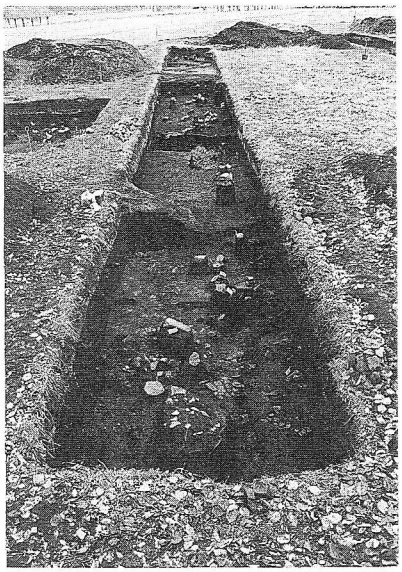
第４号竪穴住居跡

第４号竪穴住居跡、炉（1）



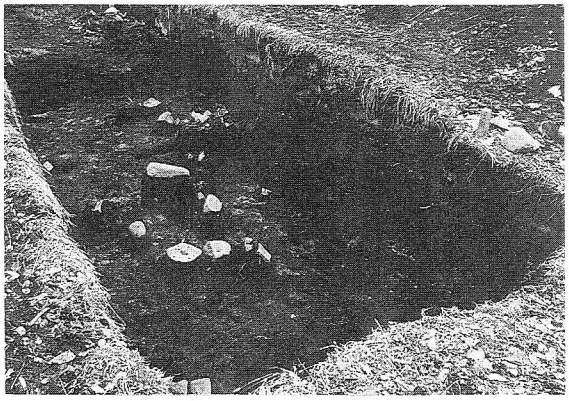
第４号竪穴住居跡、炉（2）

ＰＬ６　D_9区Ａトレンチ、第１・４号竪穴住居跡

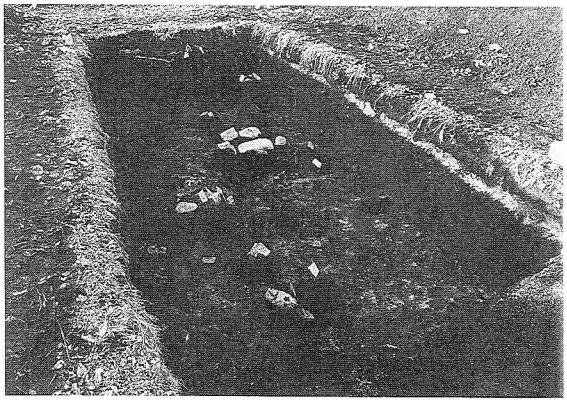


Cトレンチ　NW→SE

Cトレンチ　NW→SE



第2号竪穴住居跡　N→S



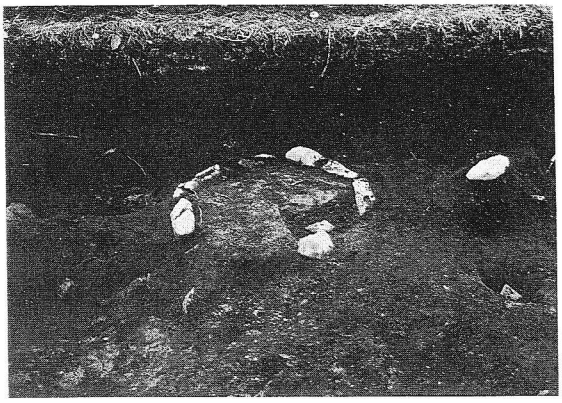
第2号竪穴住居跡　S→N

第2号竪穴住居跡

第2・3・4・5号　土坑

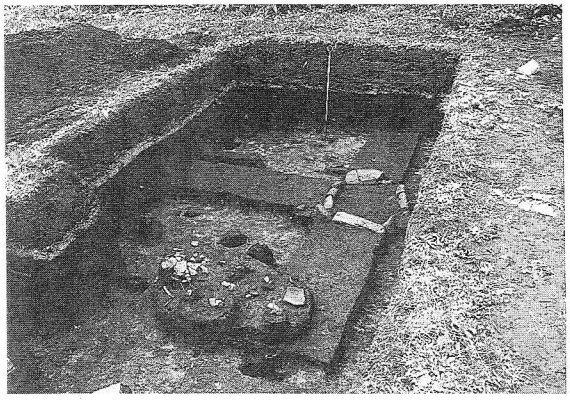
PL7　D_9区Cトレンチ、第2号竪穴住居跡、土坑遺構確認状況

第３号竪穴住居跡

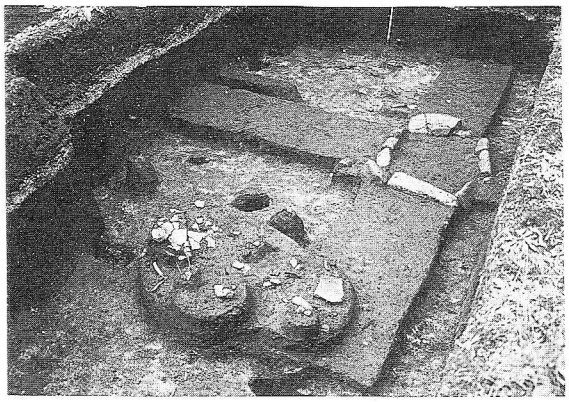


第３号竪穴住居、炉

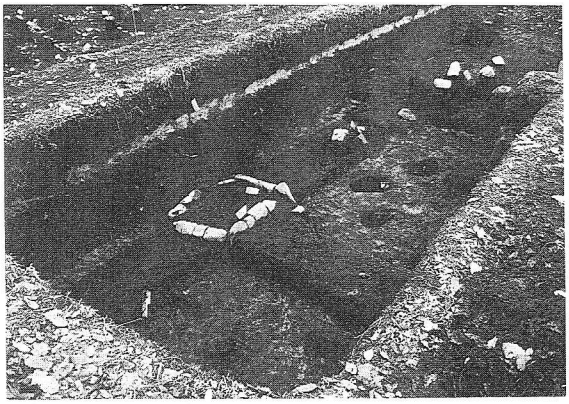
Ｉトレンチ　NW→ＳＥ



第７号竪穴住居跡（1）

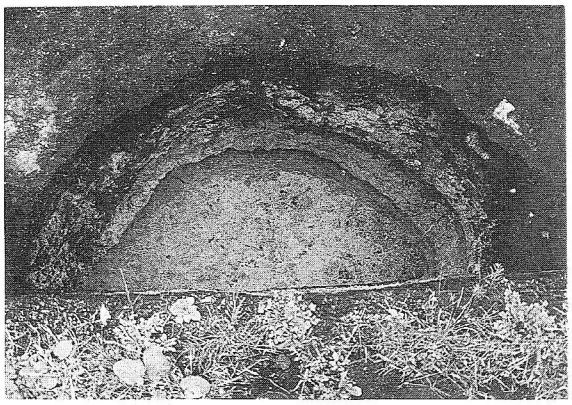


第７号竪穴住居跡（2）



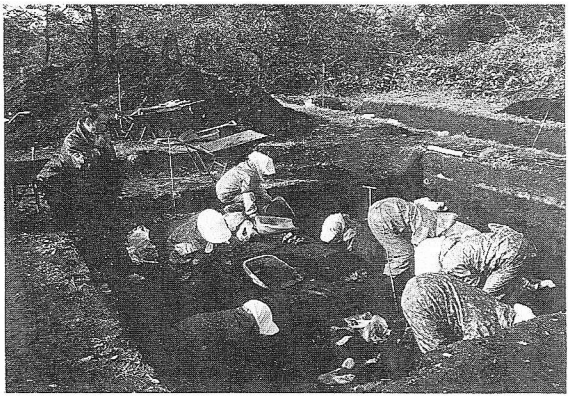
第７号竪穴住居跡（3）

ＰＬ８　D_9区Ｉトレンチ、第３・７号竪穴住居跡

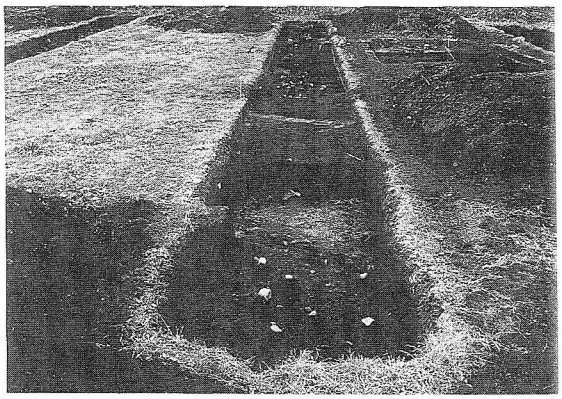


第６号フラスコ状土坑

第７号フラスコ状土坑

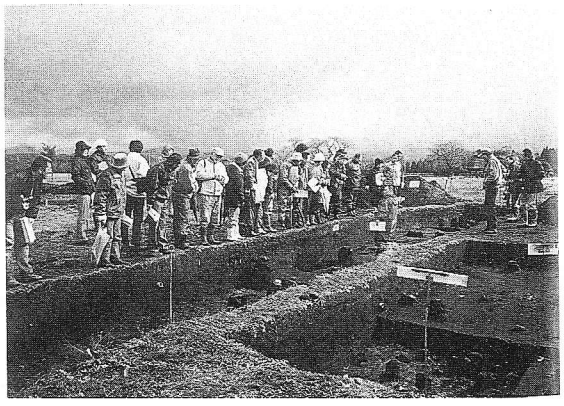


佐藤調査員による調査指導



Ｃトレンチ　ＳＥ→ＮＷ

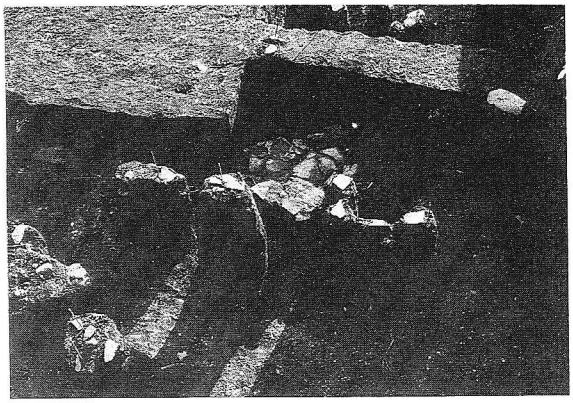
第10号竪穴住居跡（平安）



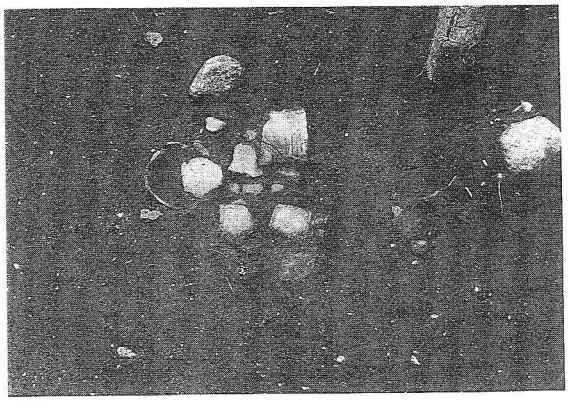
第19次発掘調査現地説明会風景

ＰＬ９　D_9区Ｃトレンチ、フラスコ状土坑、竪穴住居跡、作業風景、現地説明会風景

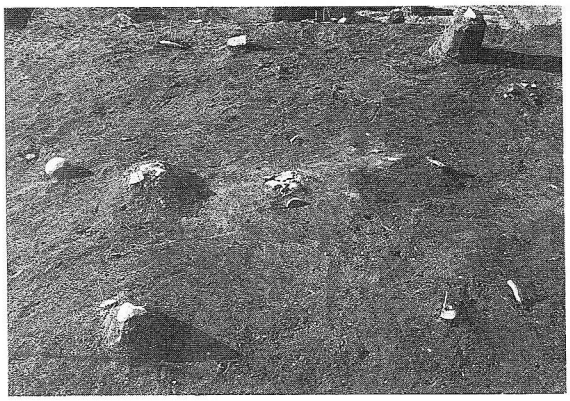
第６号竪穴住居跡



第７号竪穴住居遺物出土状況

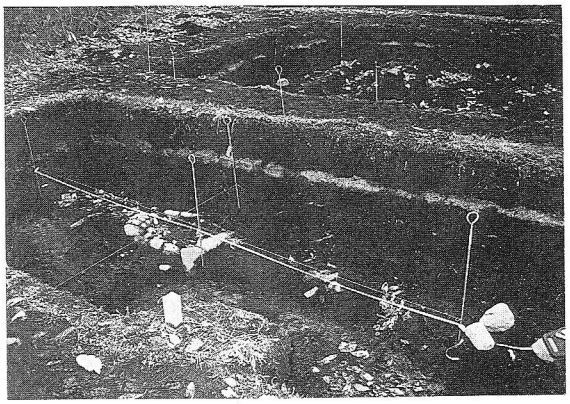


遺物出土状況



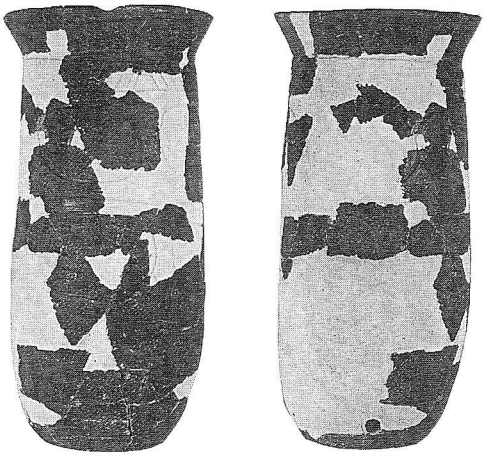
第５号焼土跡遺物出土状況

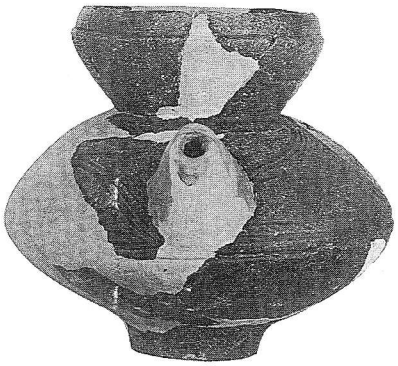
遺物出土状況

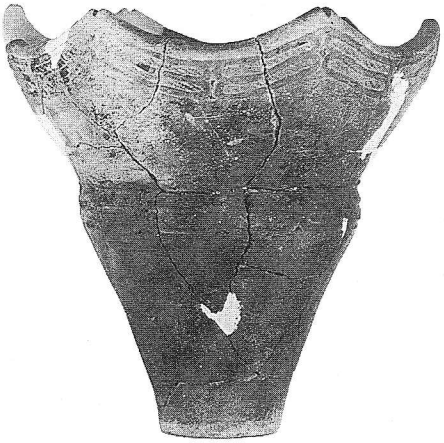


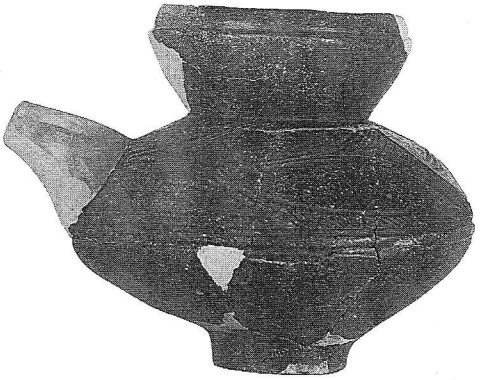
住居跡実測状況

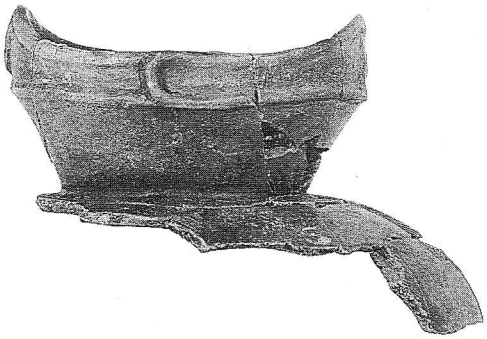
ＰＬ10　Ｄ$_9$区第６号竪穴住居跡遺物出土状況、実測状況

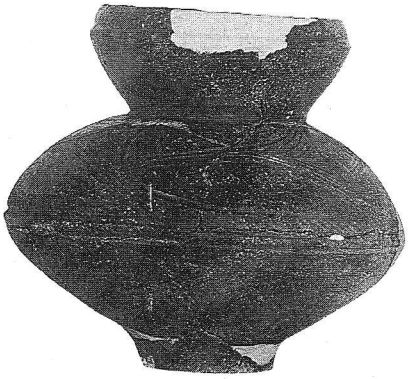




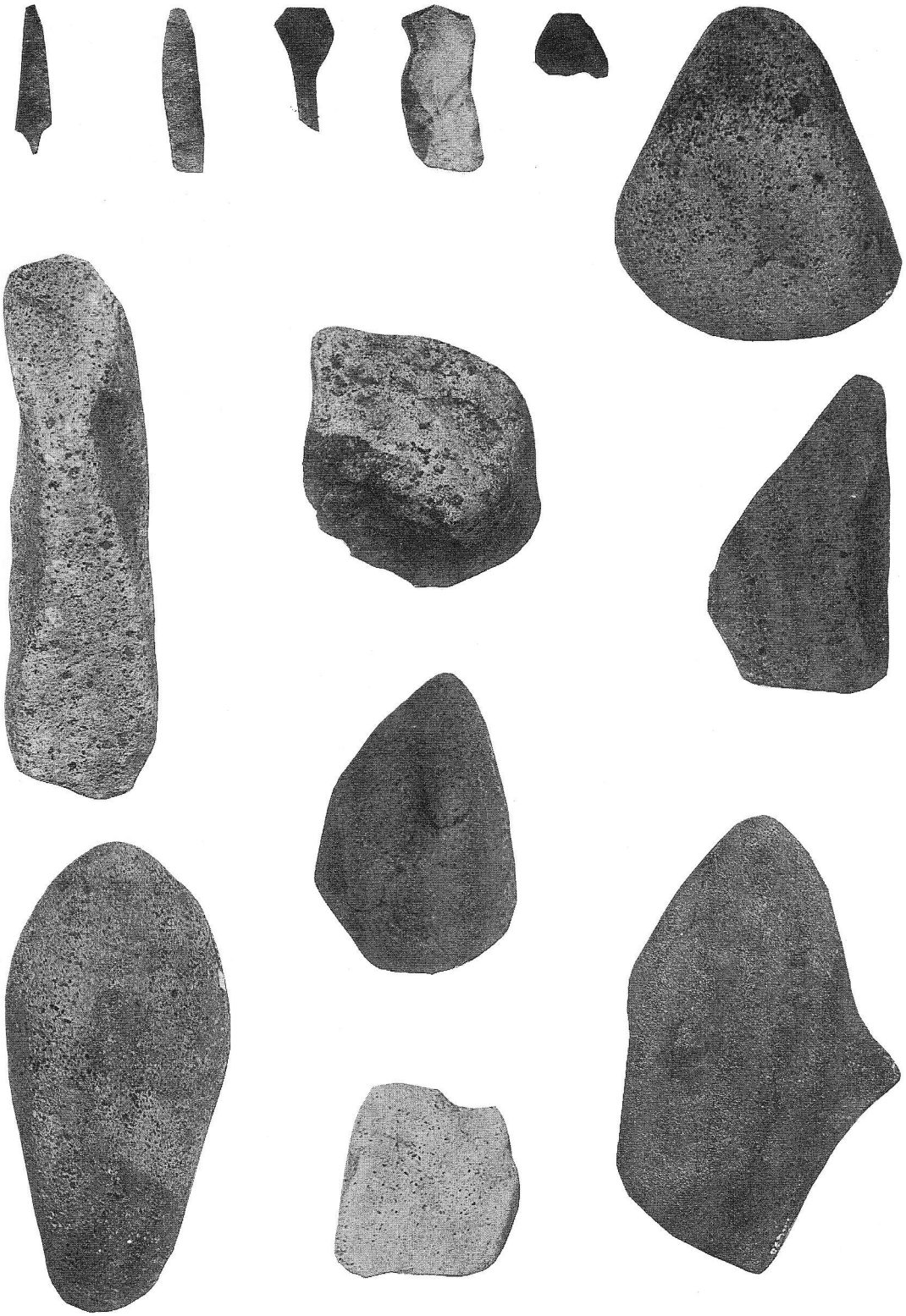




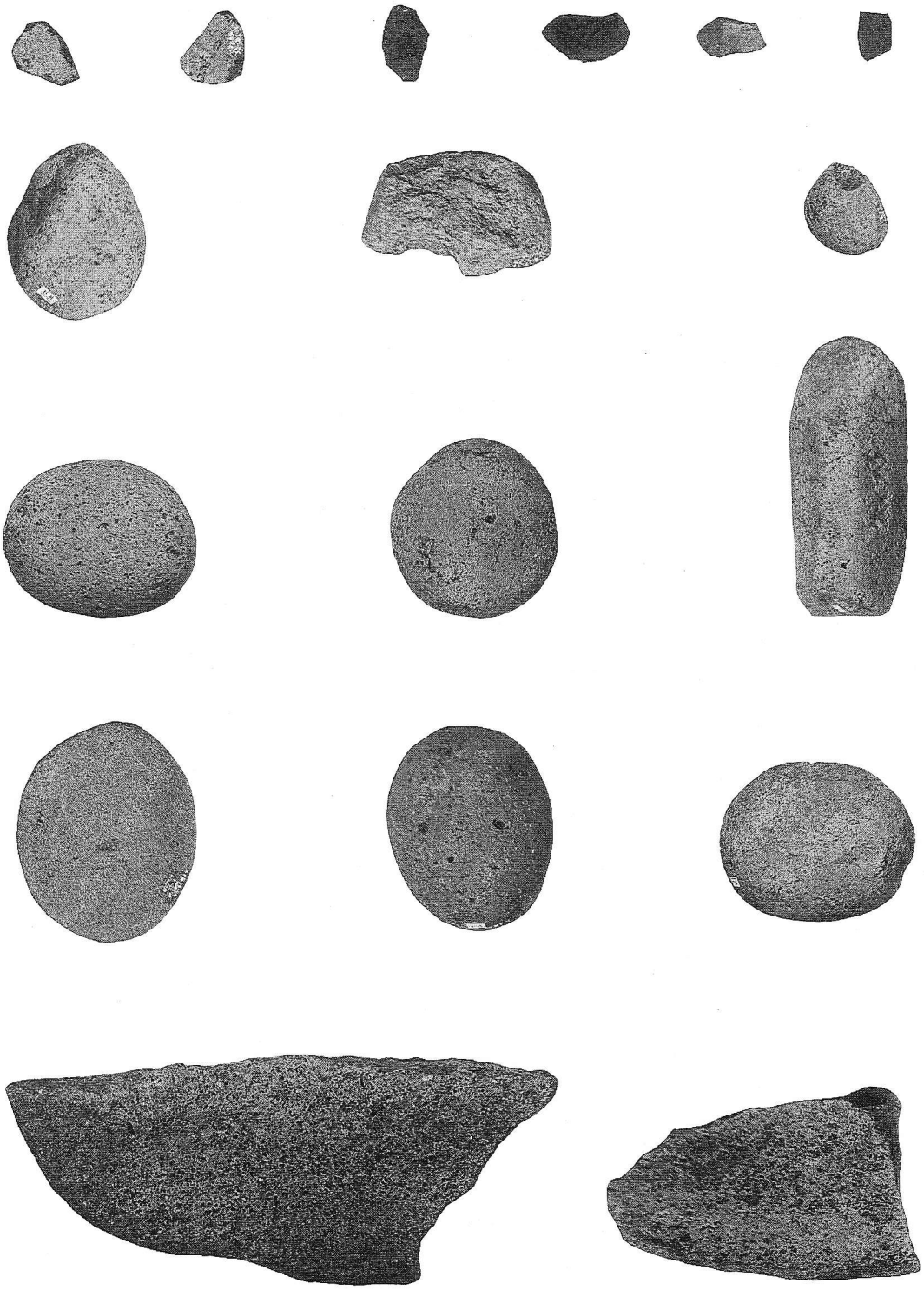




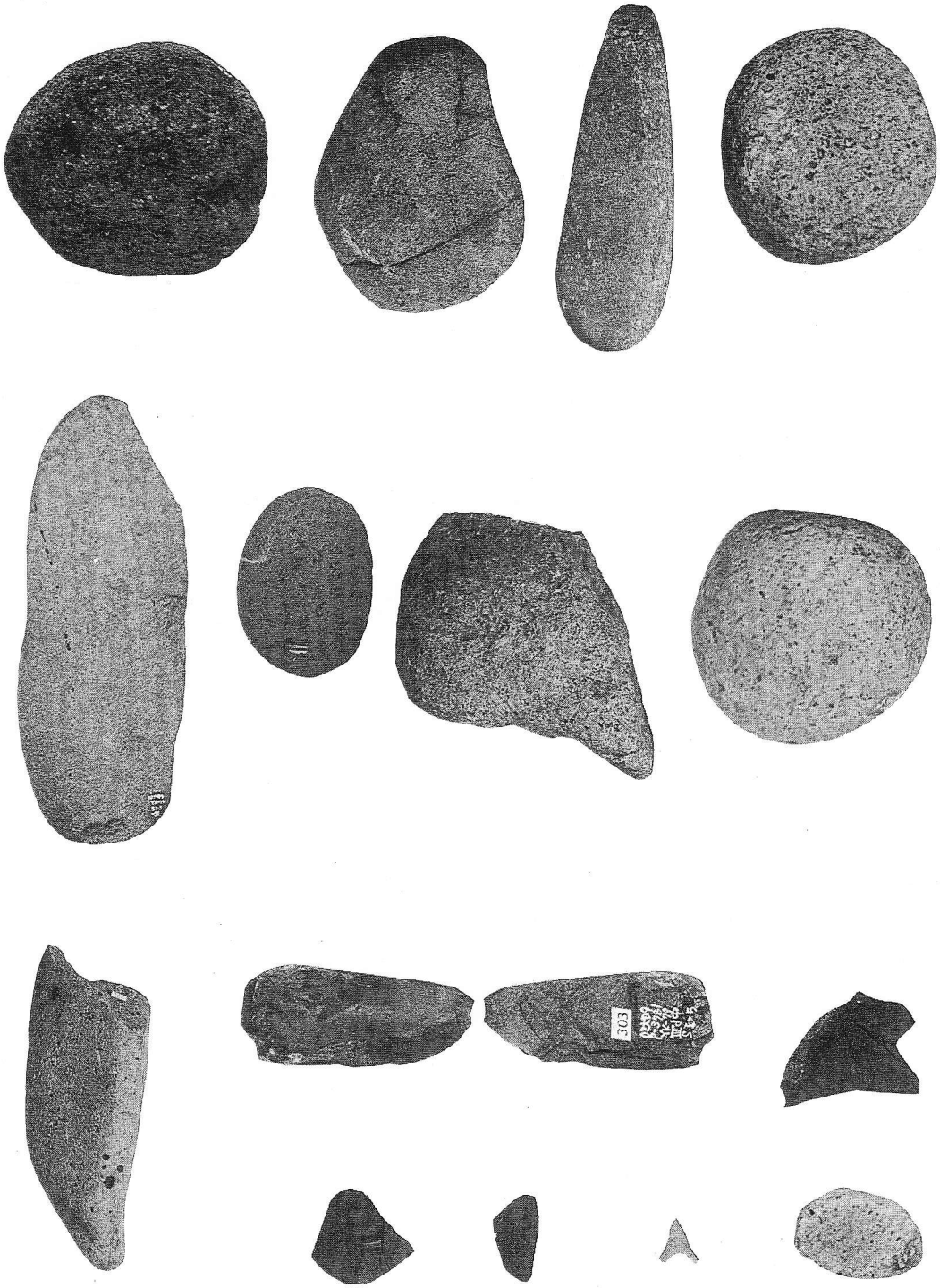
ＰＬ11　Ｄ₉区第２号竪穴住居跡出土土器（1）



ＰＬ12　Ｄ₉区第１・２号竪穴住居跡出土石器

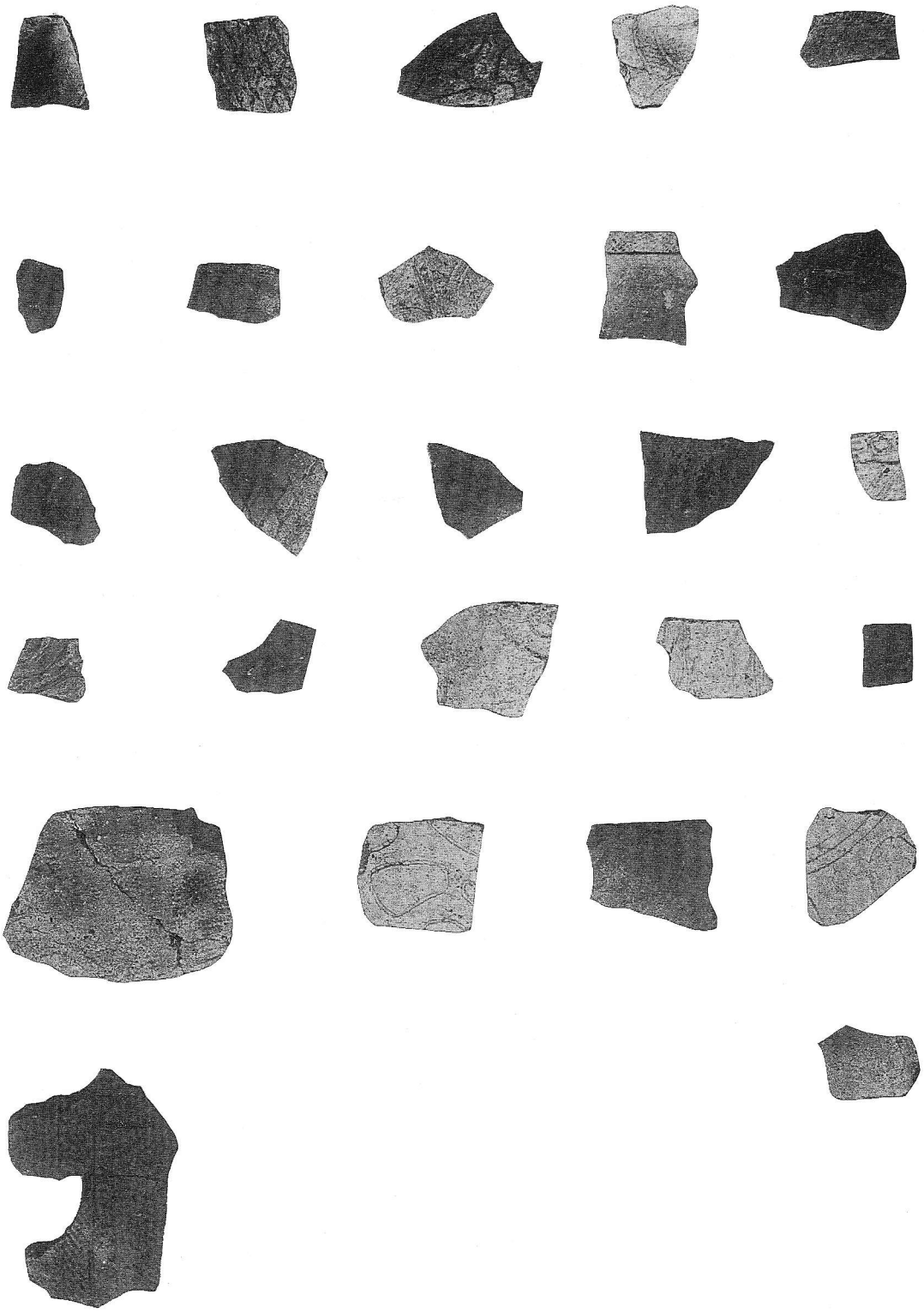


PL13　D₉区第2号竪穴住居跡出土石器

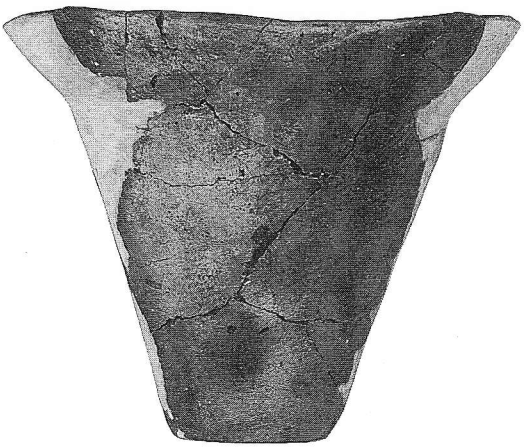
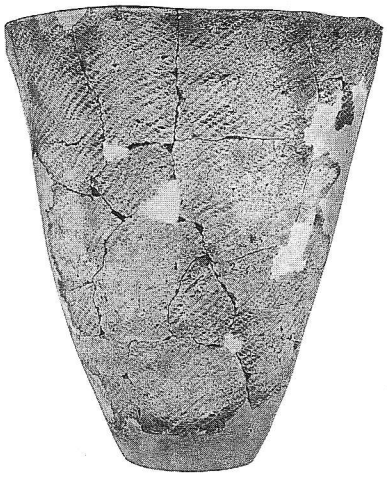
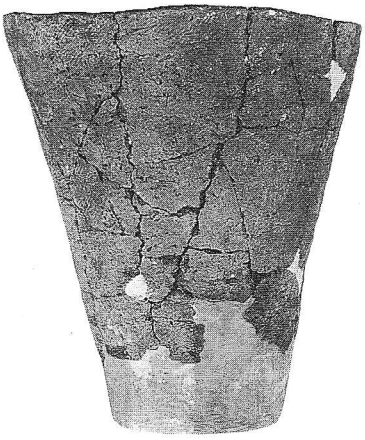


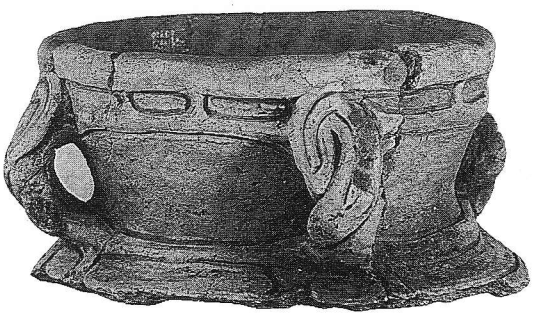
ＰＬ14　Ｄ₉区第３・４・５号竪穴住居跡出土石器

ＰＬ15　Ｄ$_9$区第２・５号竪穴住居跡出土土器、石器

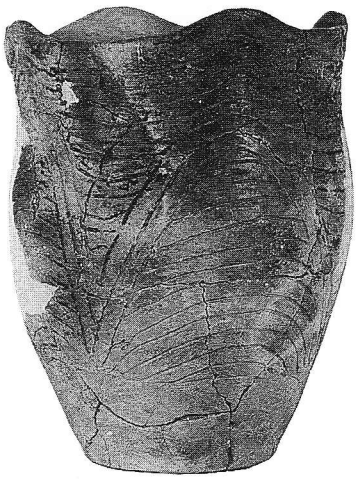


ＰＬ16　Ｄ₉区第１・２号竪穴住居跡出土土器

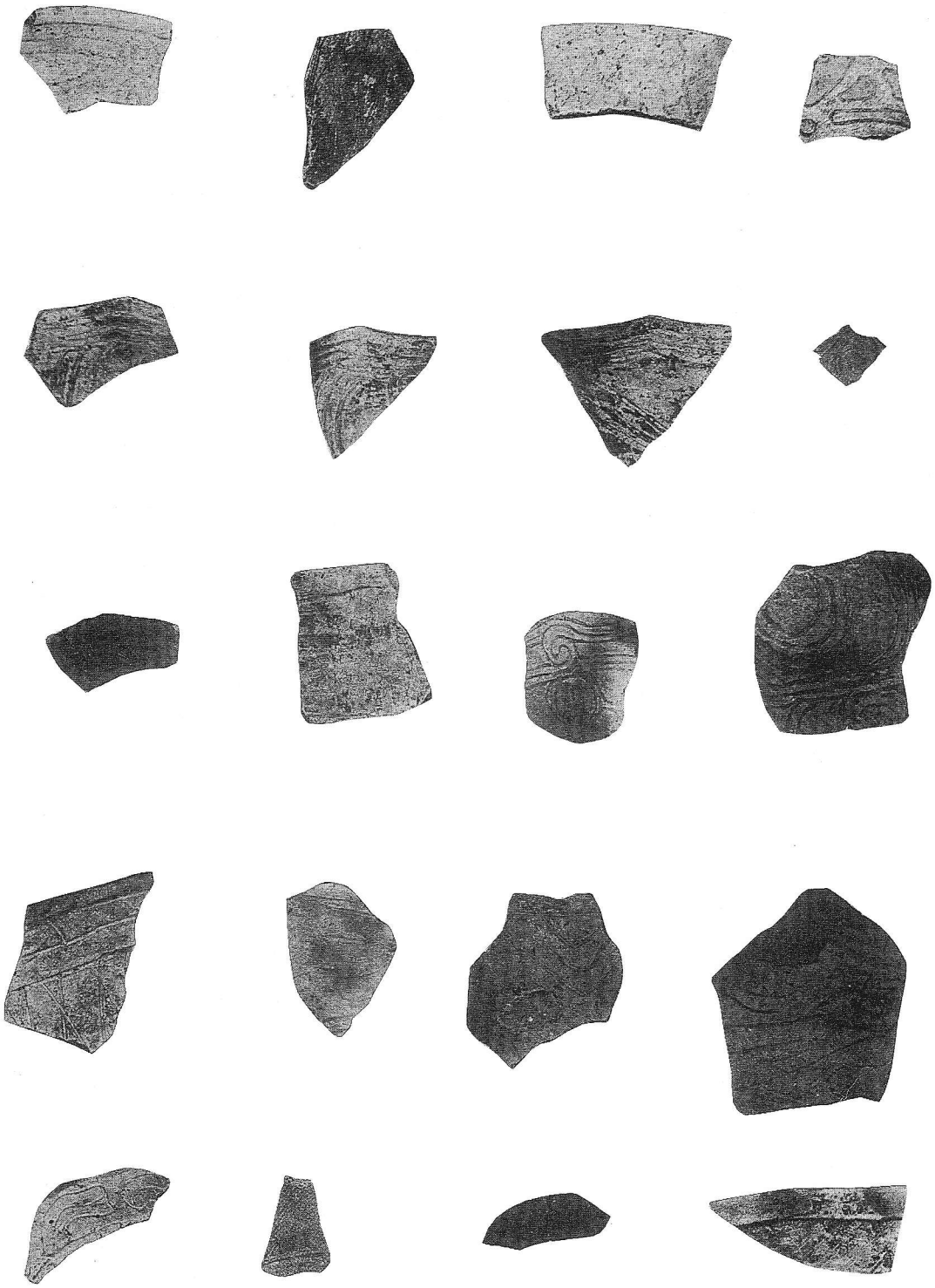


ＰＬ17　Ｄ₉区第２号竪穴住居跡、第１号土坑、遺構内出土土器（2）



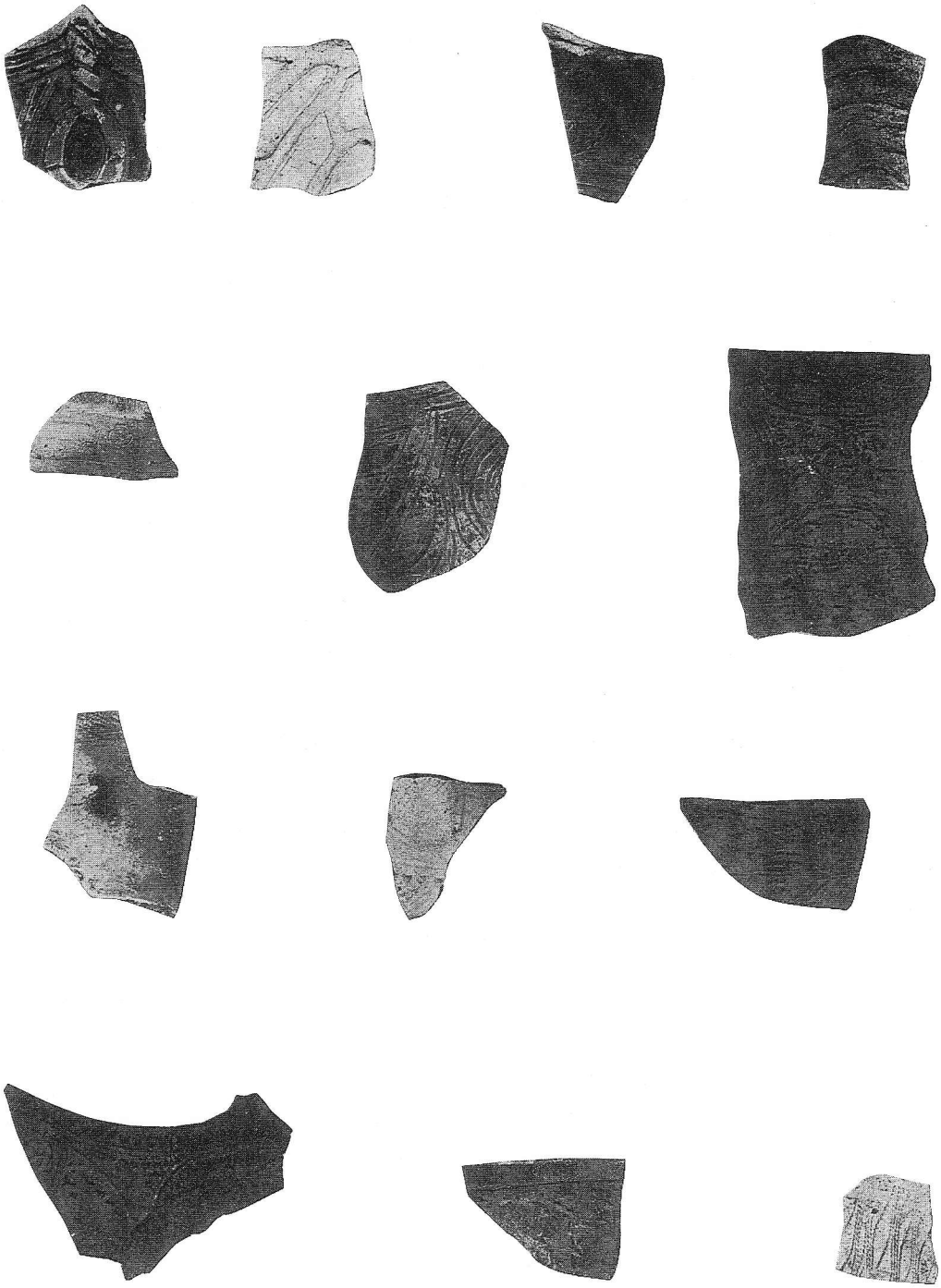
ＰＬ18　Ｄ$_9$区第２号土坑出土土器（4）

ＰＬ19　Ｄ₉区第２号土坑出土土器 (3)

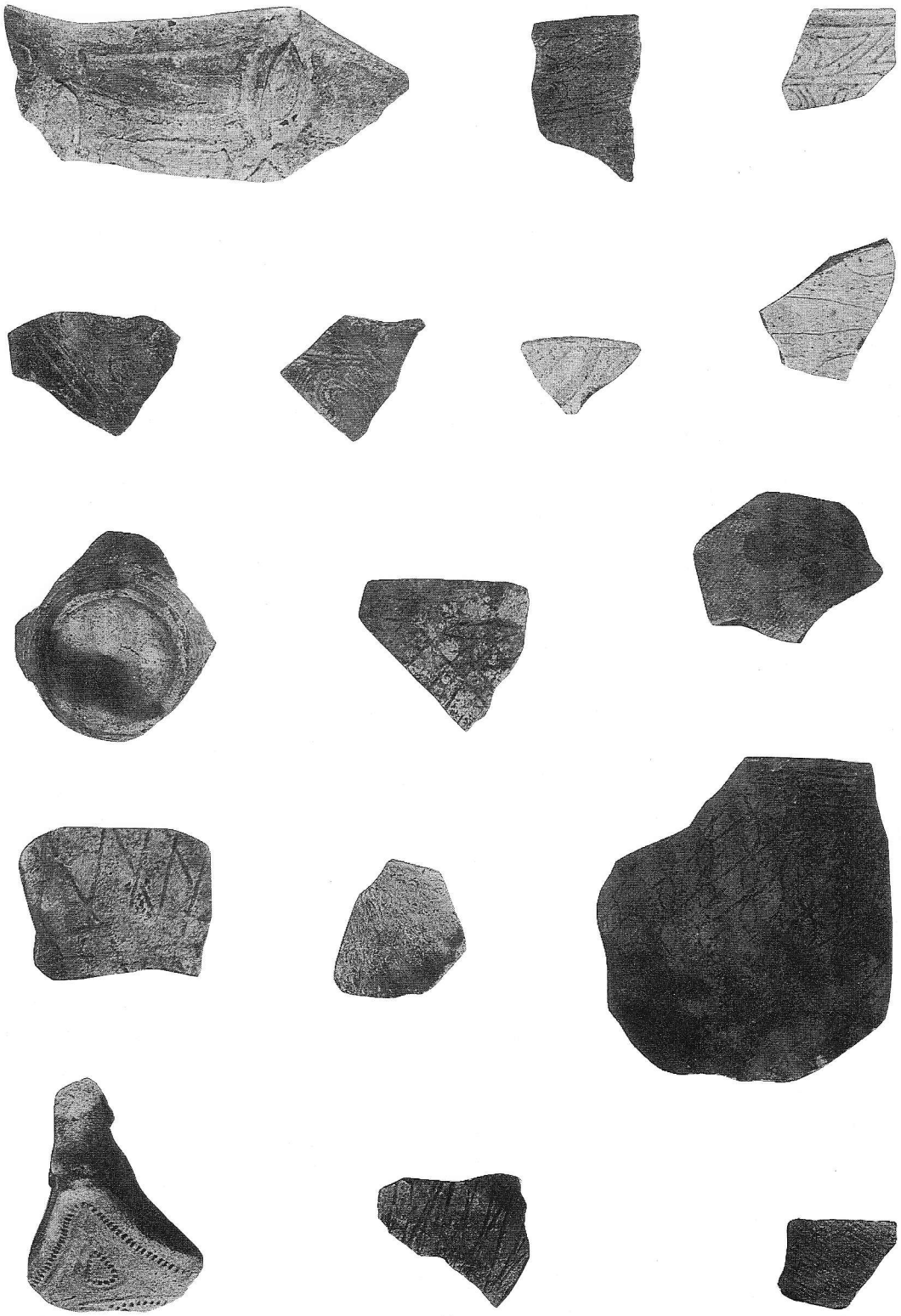


ＰＬ20　Ｄ$_9$区第１号土坑出土土器

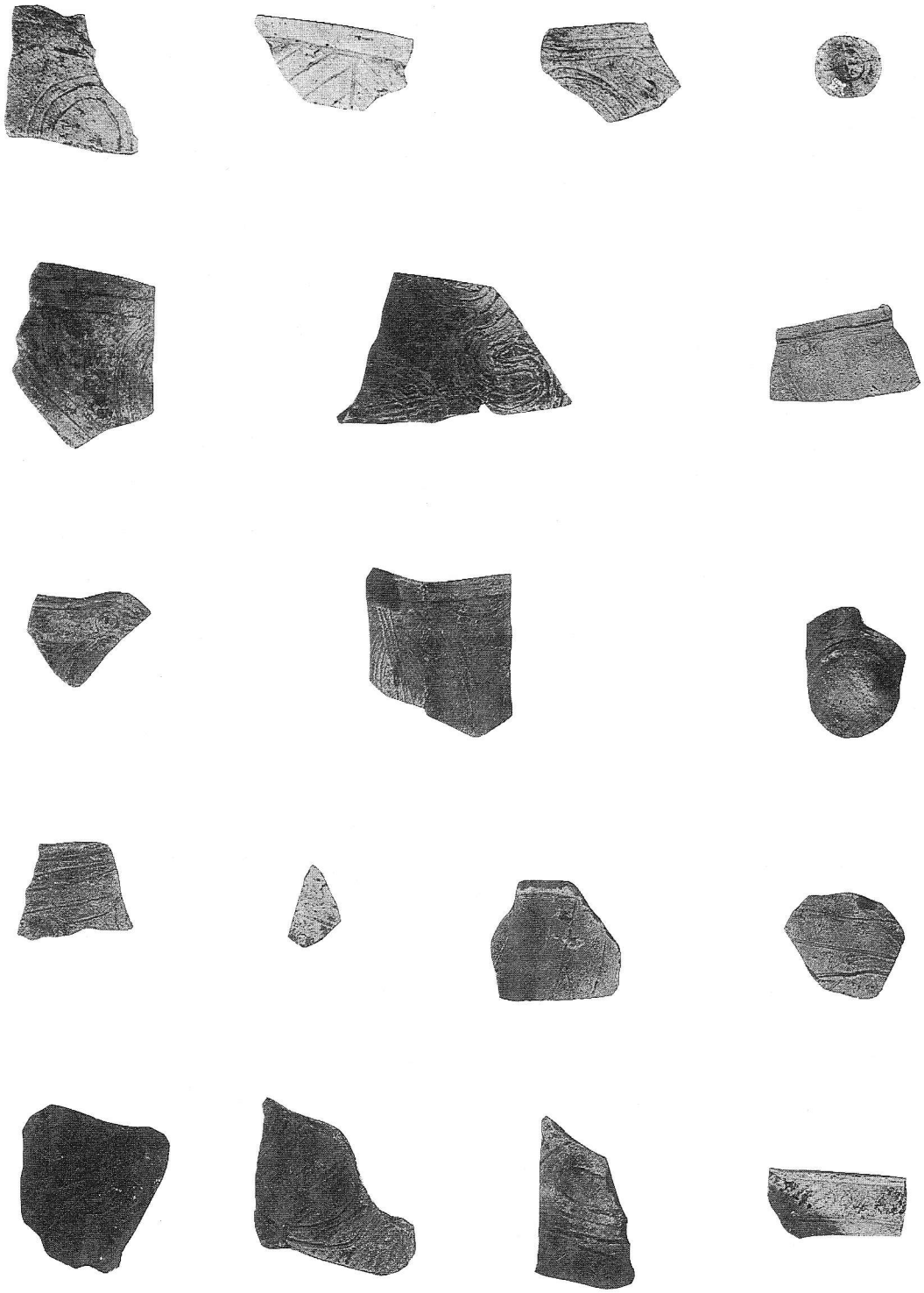
ＰＬ21　Ｄ₉区第１号土坑出土土器、石器



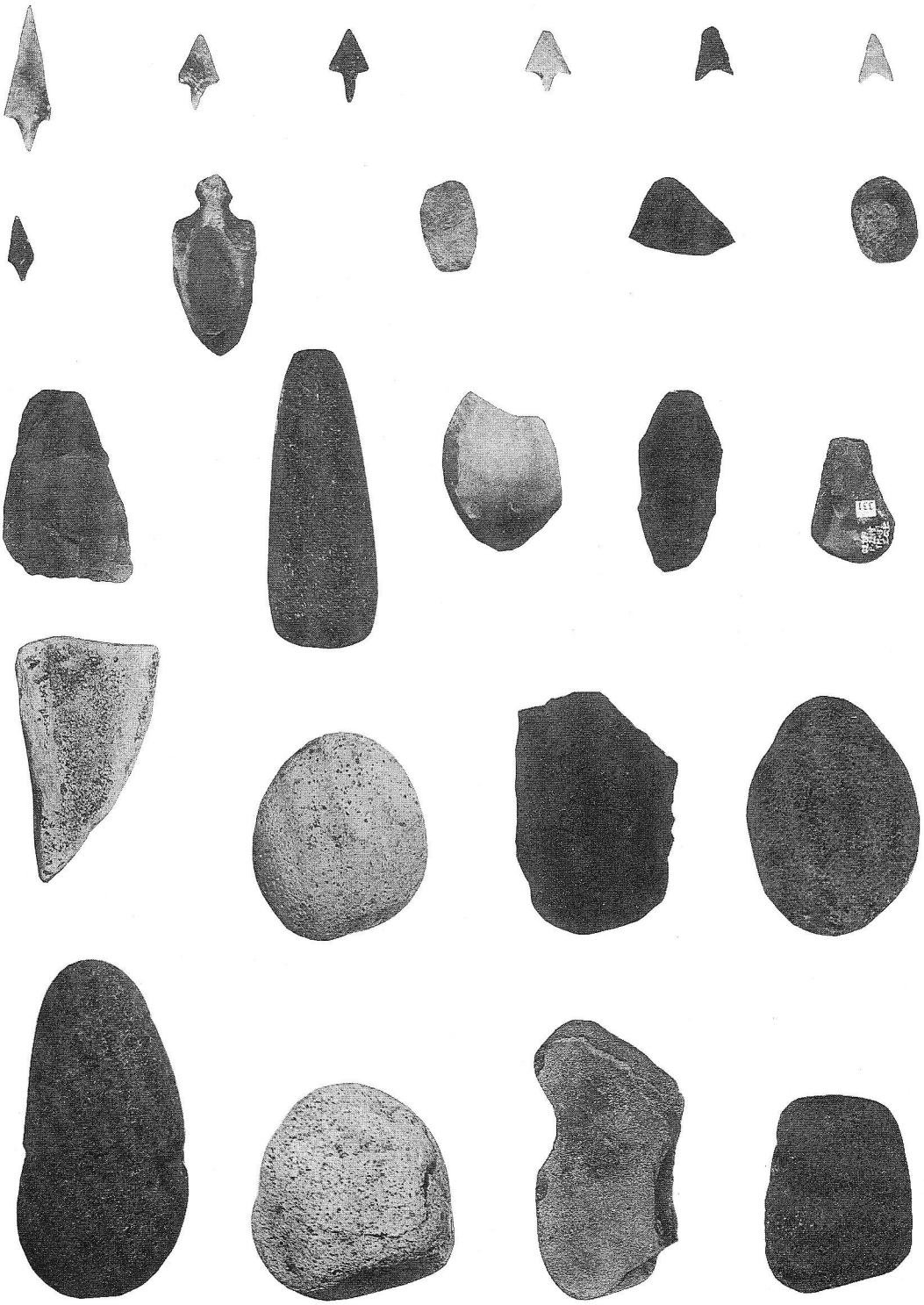
ＰＬ22　Ｄ₉区第２号土坑出土土器



ＰＬ23　Ｄ$_9$区第１号土坑出土土器

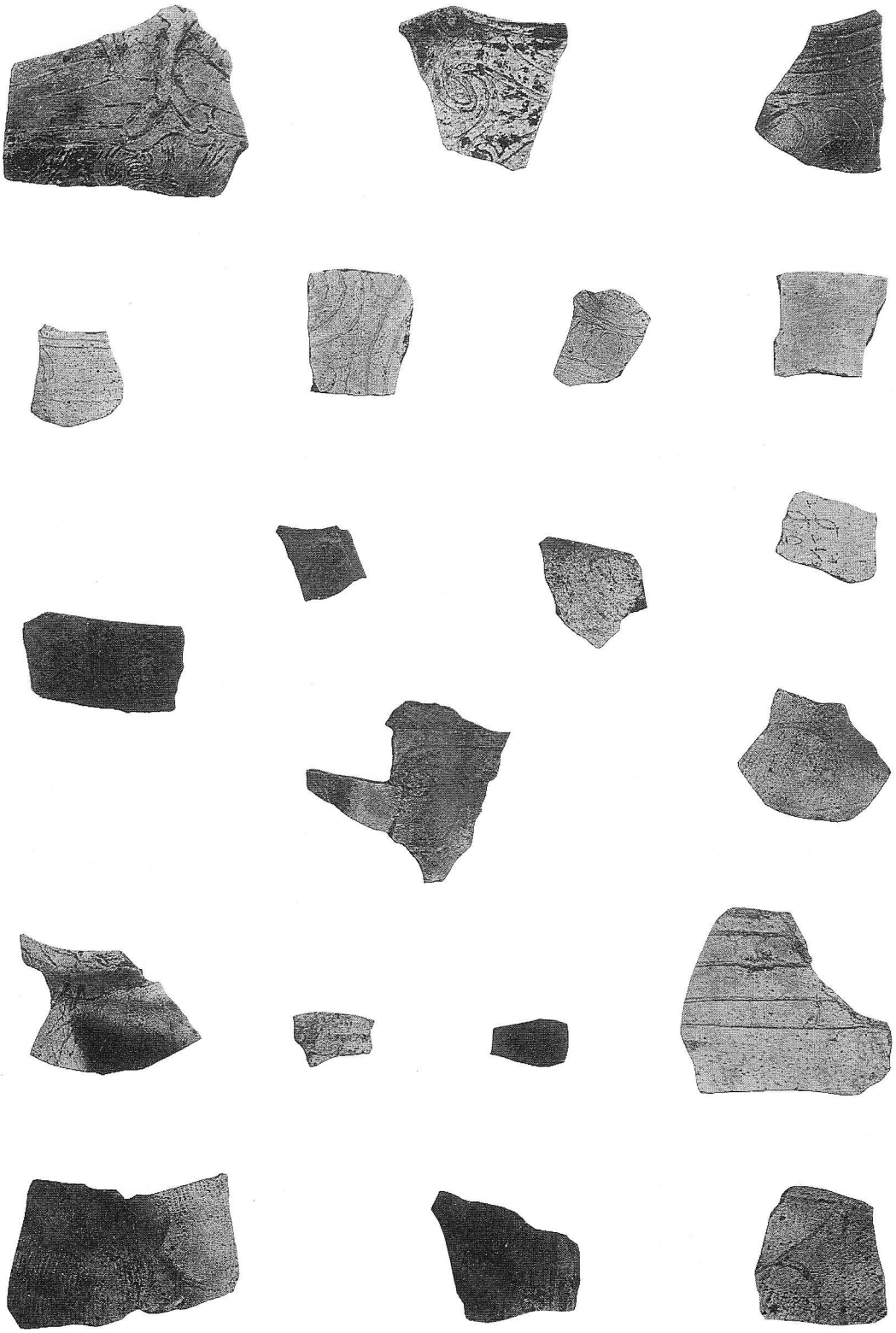


ＰＬ24　Ｄ$_9$区第１・２号土坑出土土器

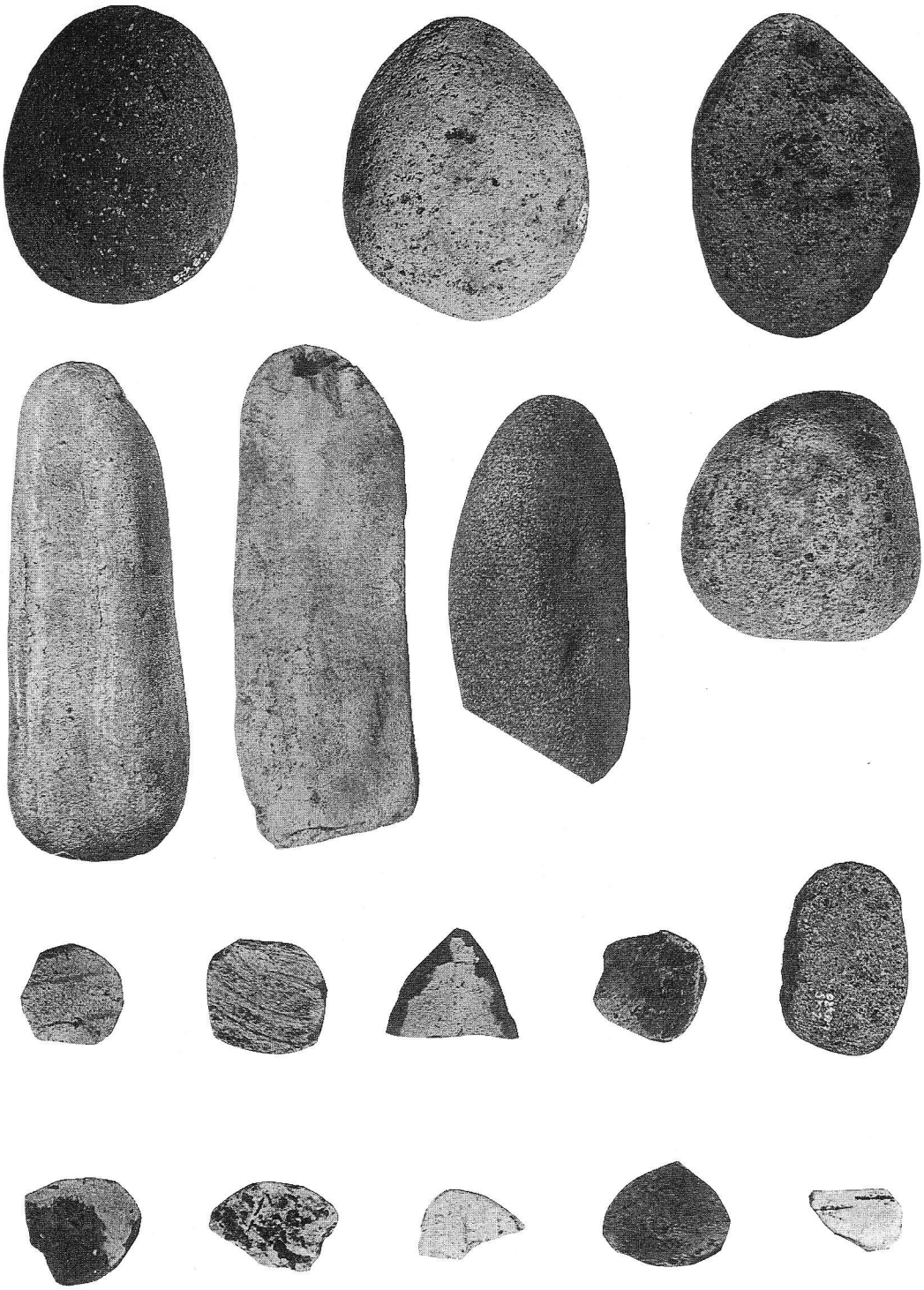


ＰＬ25　Ｄ₉区第２号土坑、遺構外出土石器

ＰＬ26　Ｄ₉区第２号土坑、遺構内出土土器、石器、土製品



ＰＬ27　Ｄ$_9$区第２・４号土坑、第６・７号フラスコ状土坑出土土器

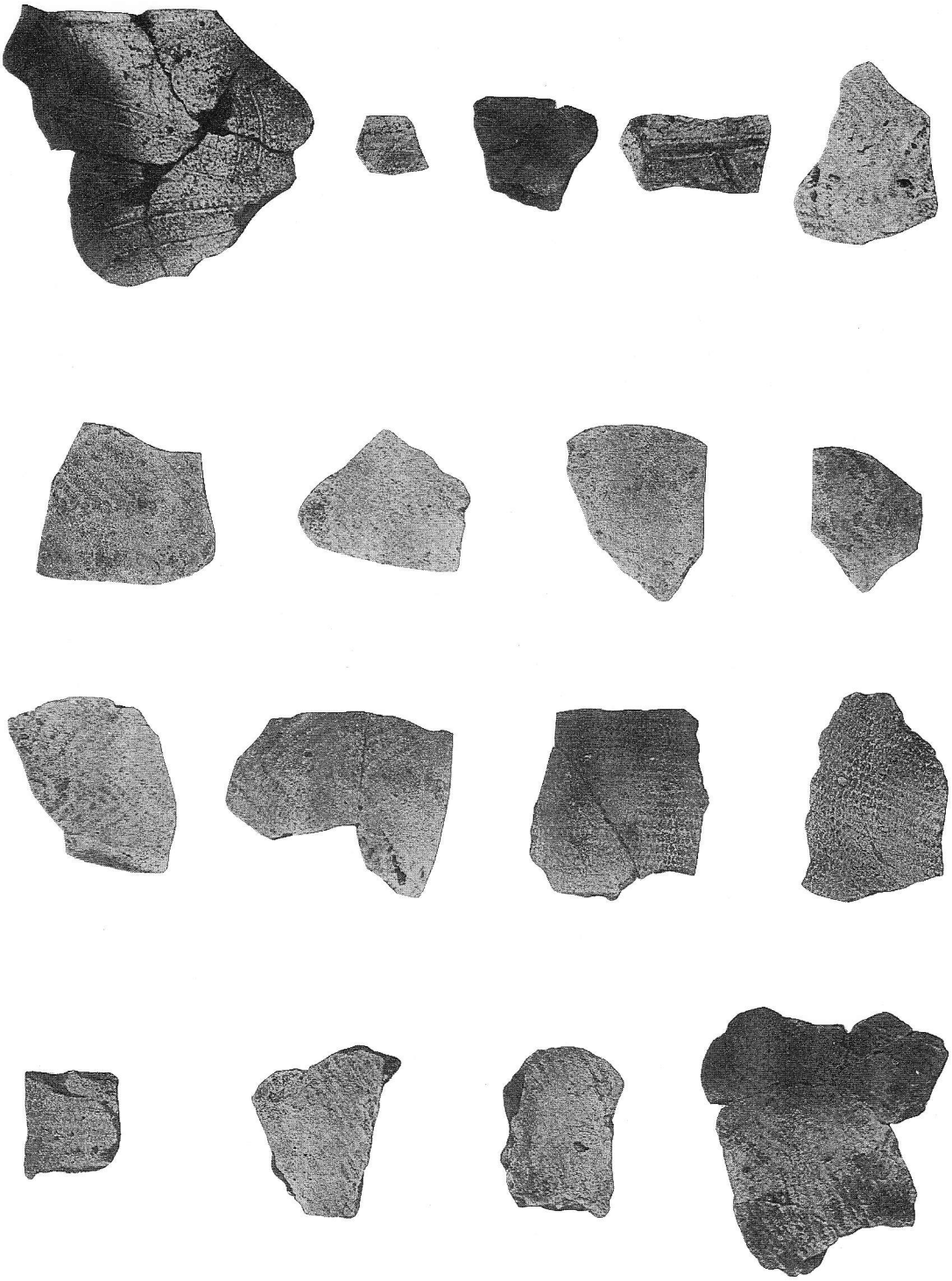


ＰＬ28　Ｄ₉区第２号土坑出土石器、土製品

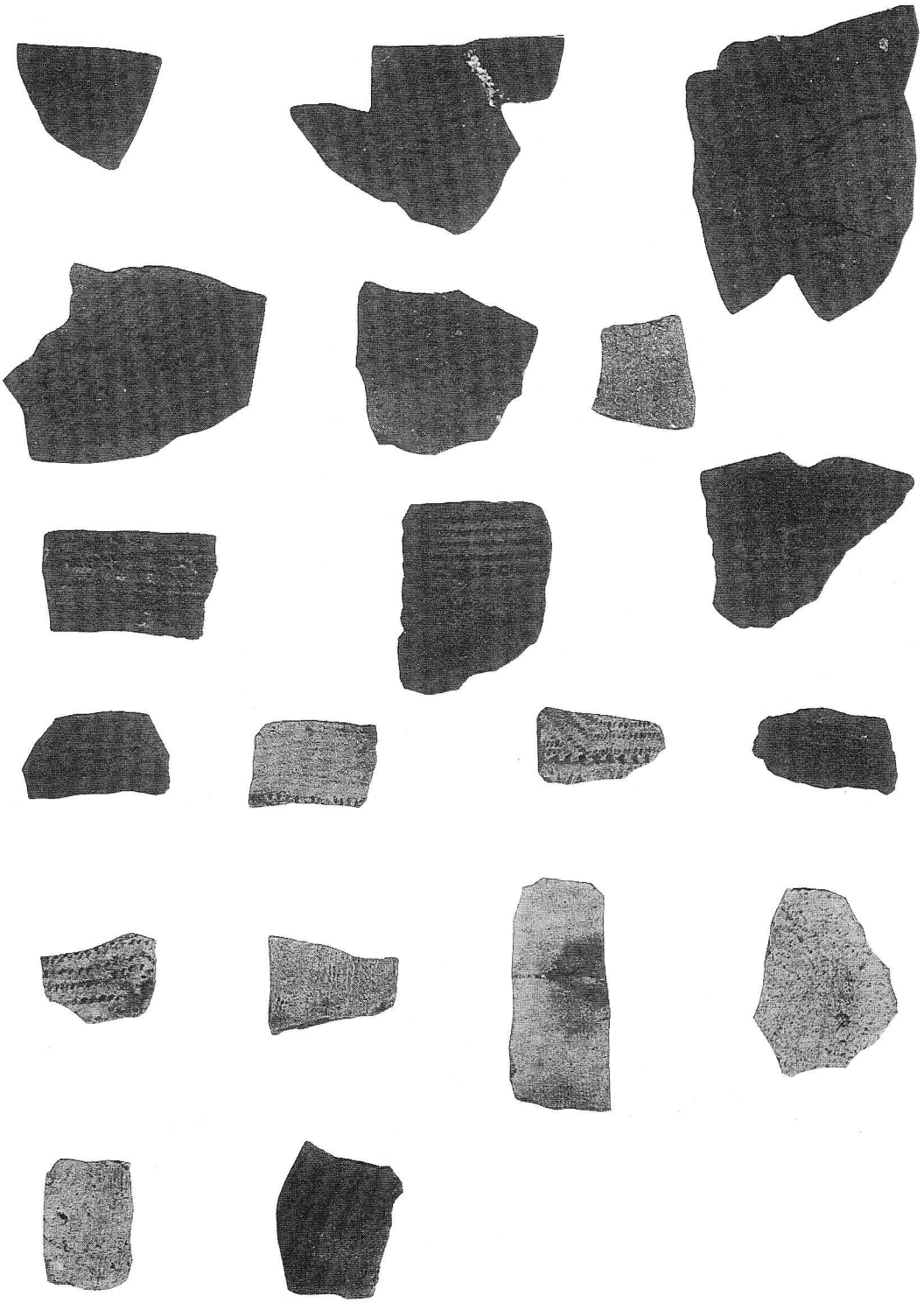
ＰＬ29　Ｄ９区土坑出土土製品、石製品

ＰＬ30　Ｄ₉区遺構外出土土器

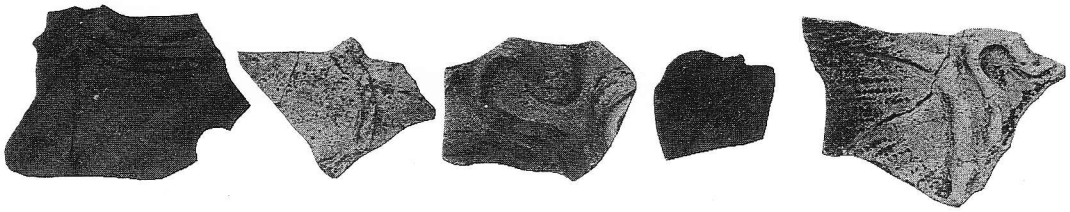
PL31　D_9区遺構外焼土跡出土土器

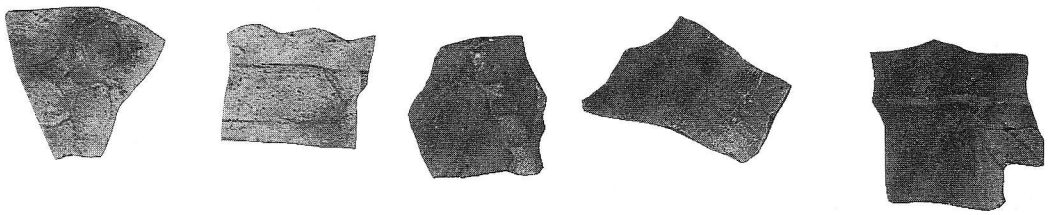


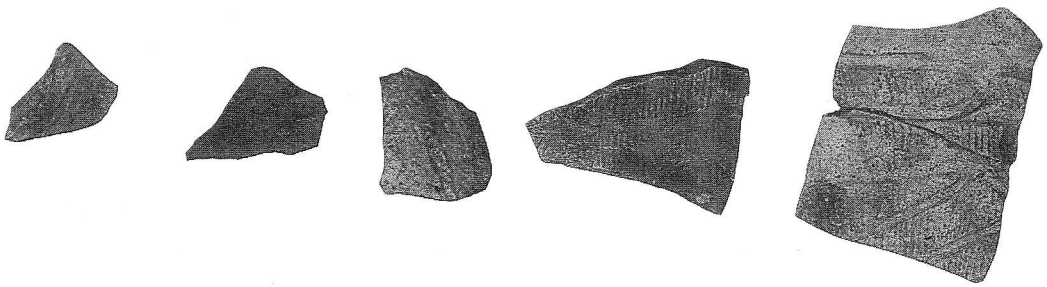
ＰＬ32　Ｄ₉区遺構外出土土器（1）

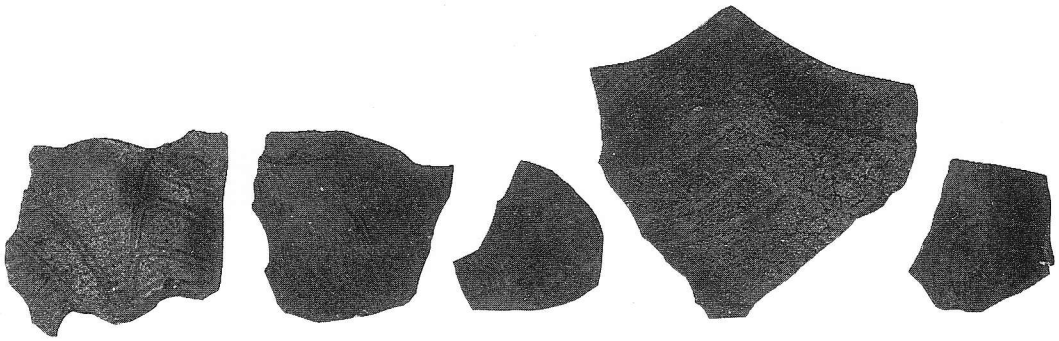


ＰＬ33　Ｄ$_9$区遺構外出土土器（2）

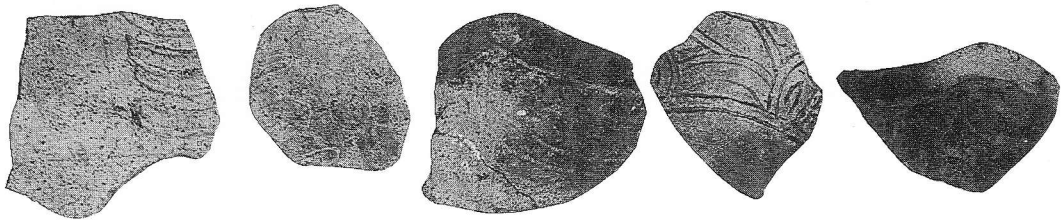


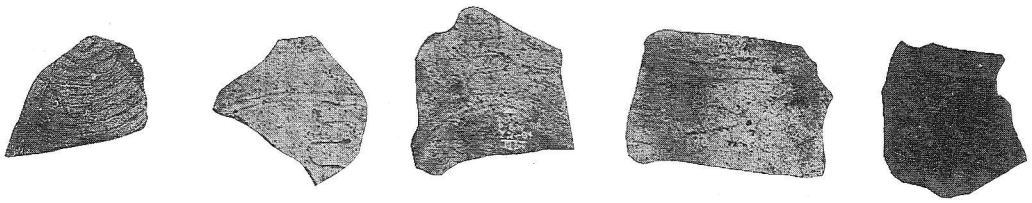


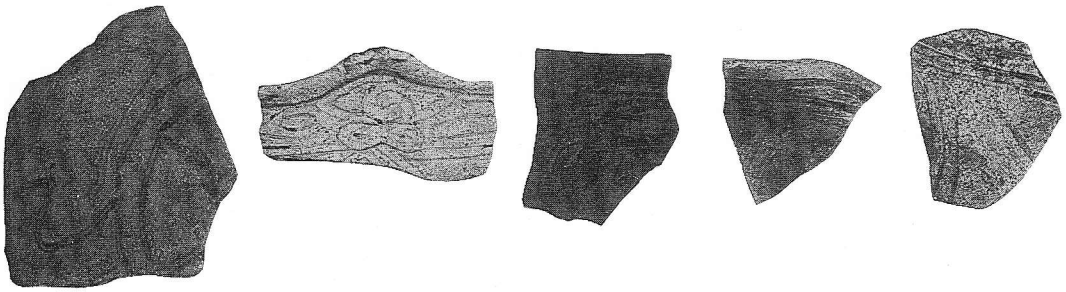


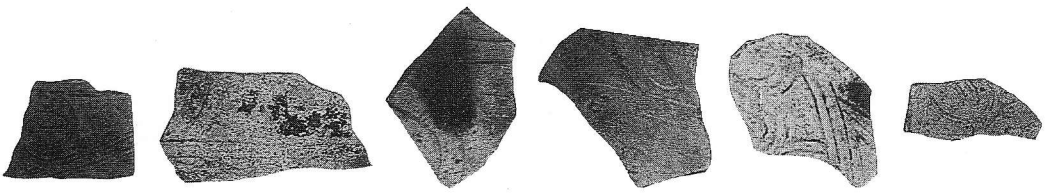


ＰＬ34　Ｄ$_9$区遺構外出土土器（3）

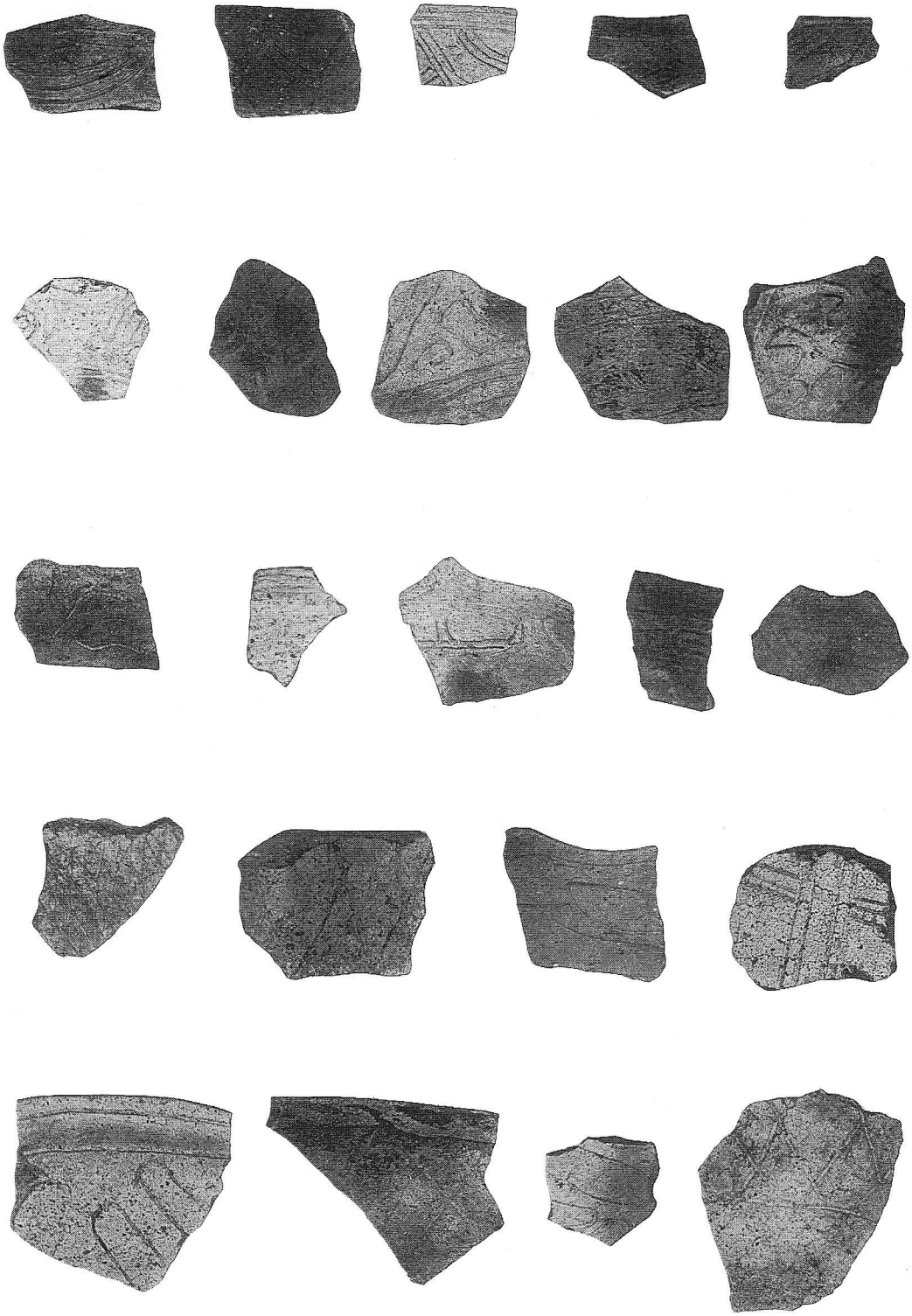




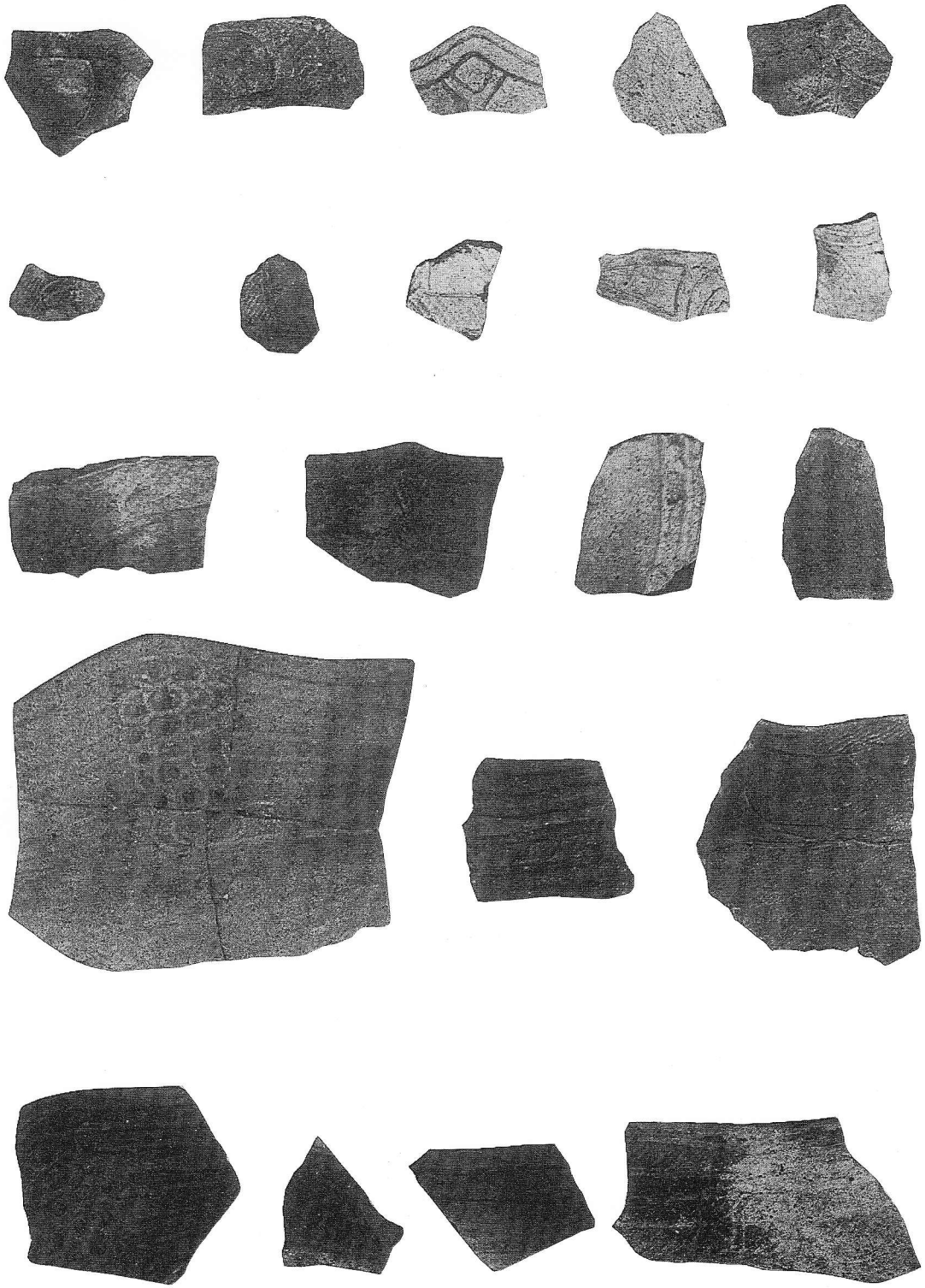




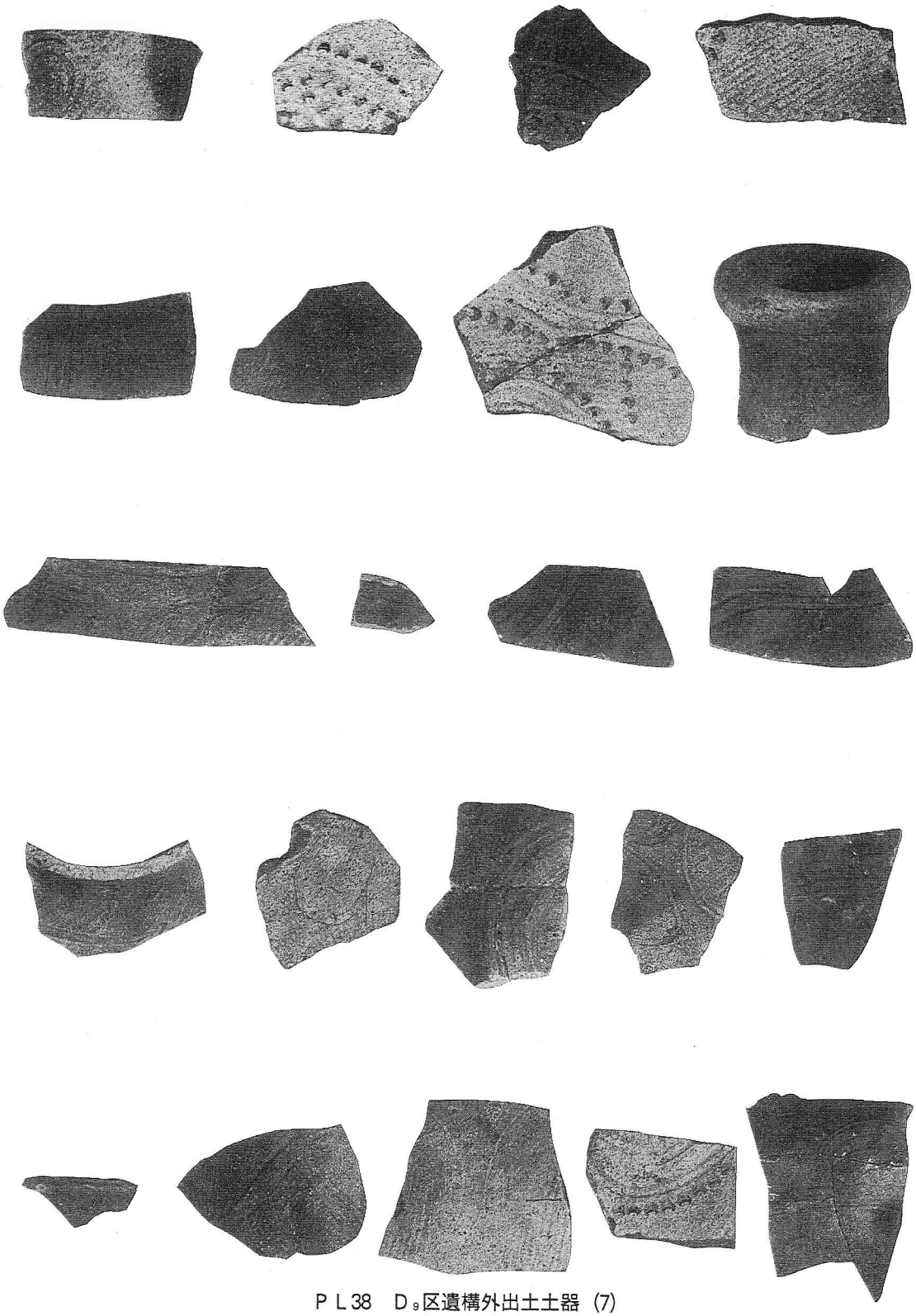
ＰＬ35　Ｄ₉区遺構外出土土器（4）



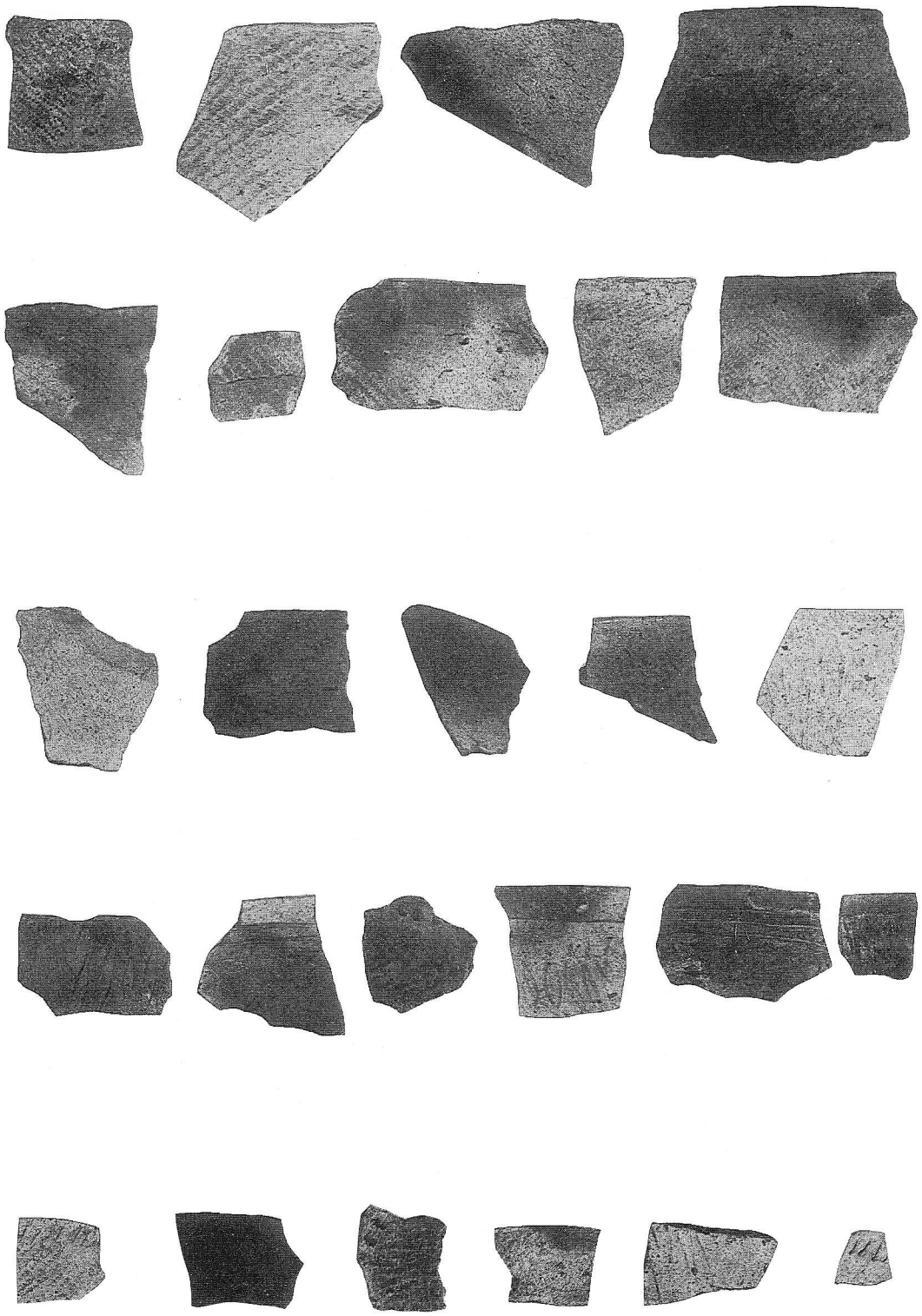
ＰＬ36　Ｄ$_9$区遺構外出土土器（5）



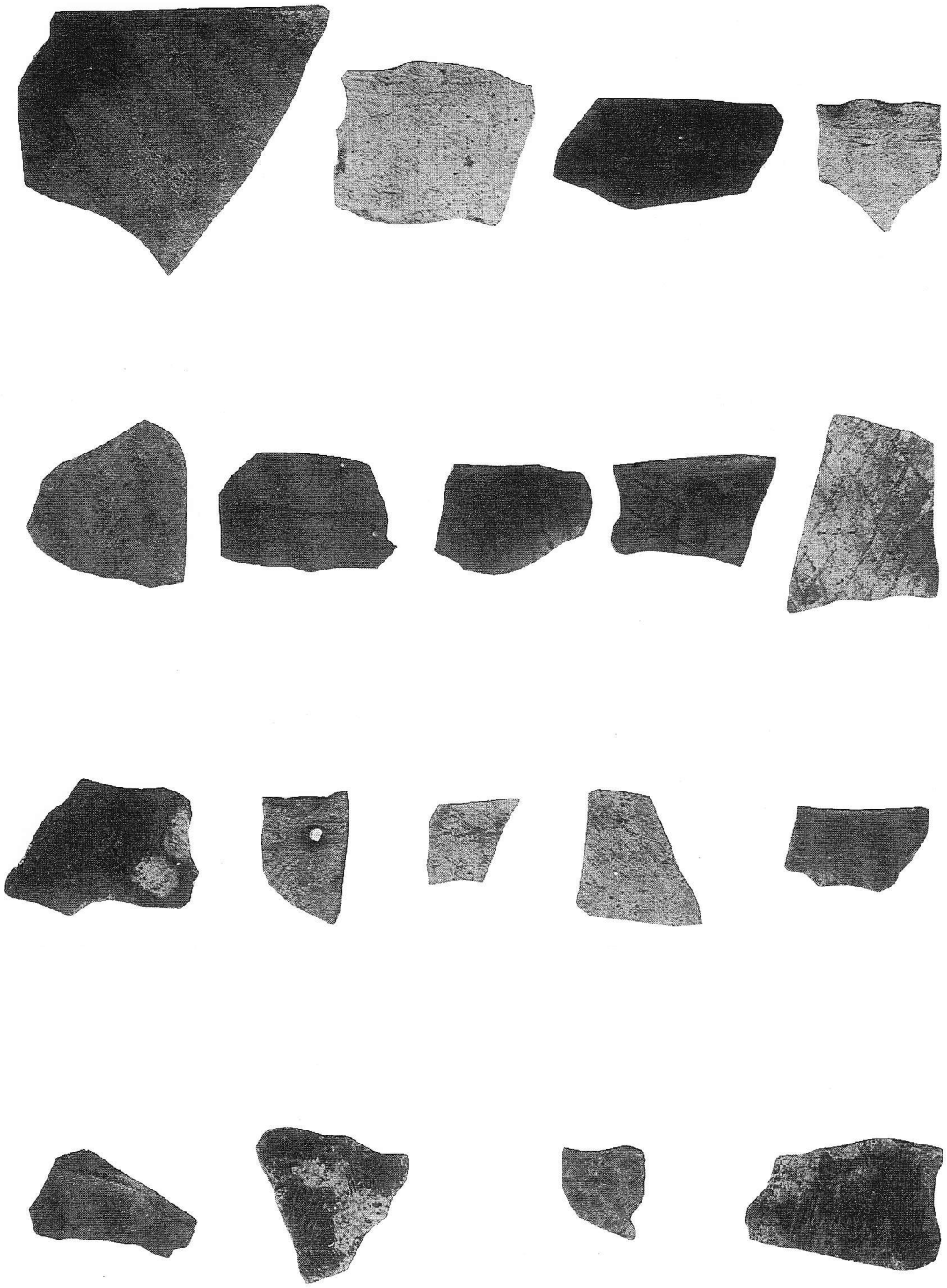
ＰＬ37　Ｄ₉区遺構外出土土器 (6)



ＰＬ38　Ｄ９区遺構外出土土器（7）

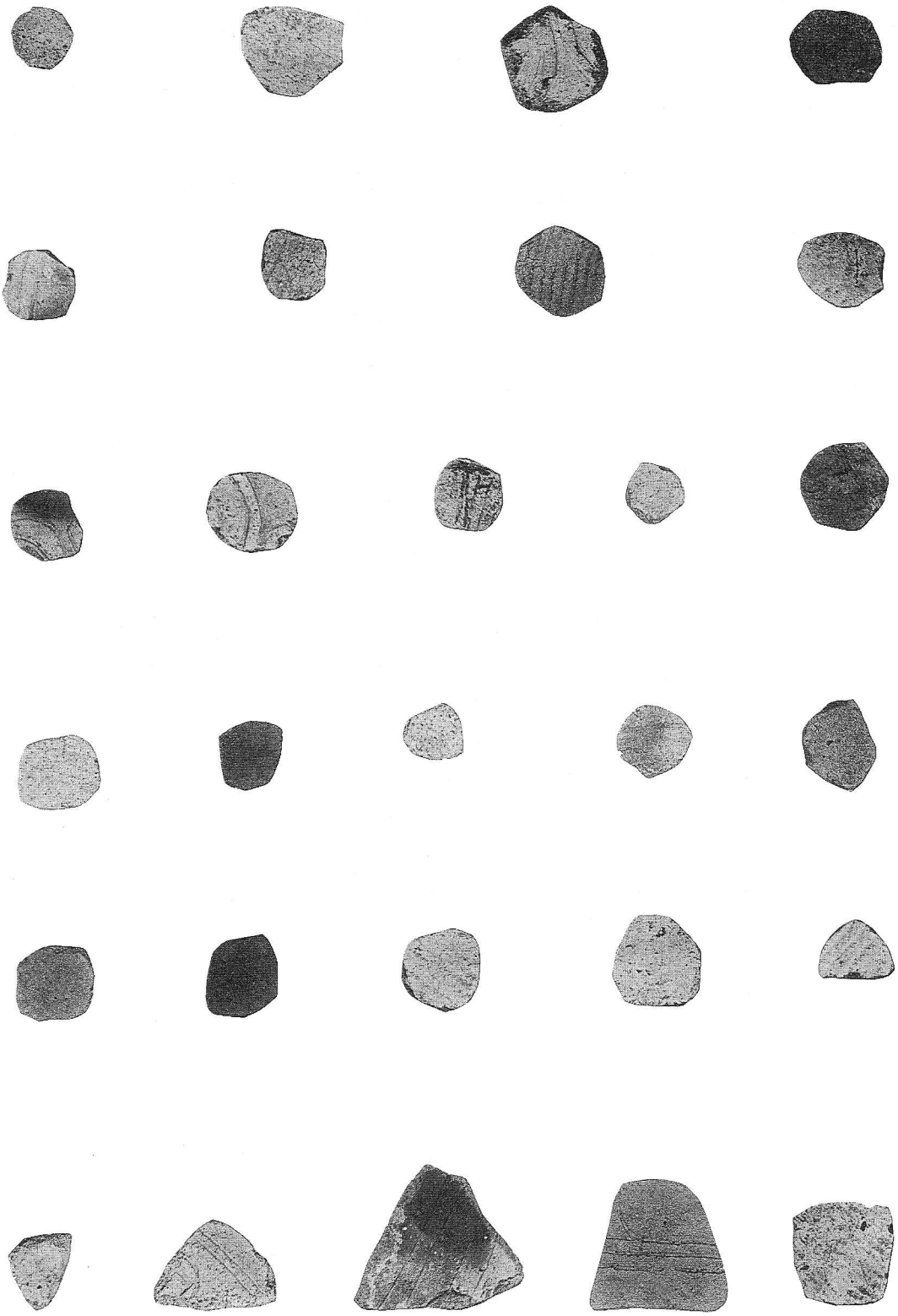


P L 39　D$_9$区遺構外出土土器 (8)

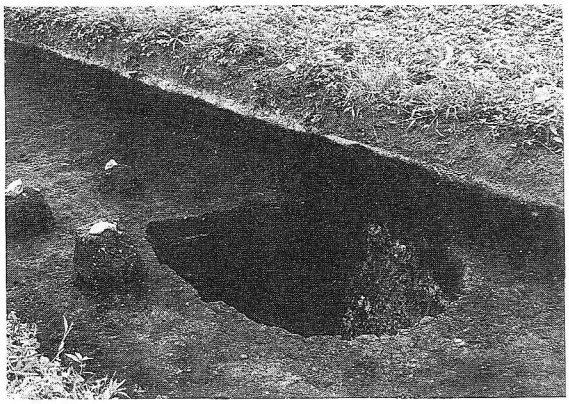


ＰＬ40　Ｄ９区遺構外出土土器（9）

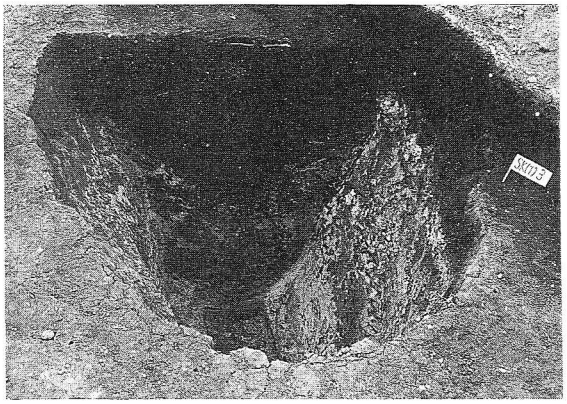
P L 41　D₉区遺構外出土土製品、石製品



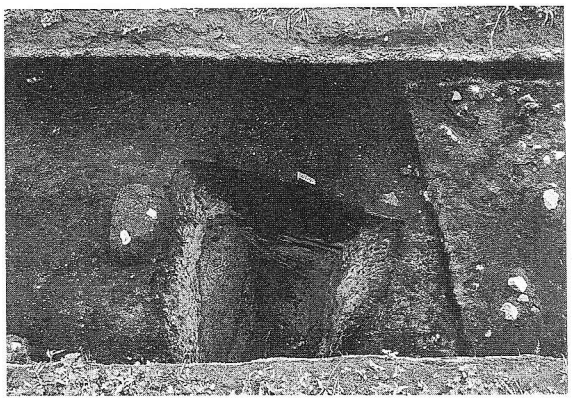
ＰＬ42　Ｄ₉区遺構外出土土器片利用土製品



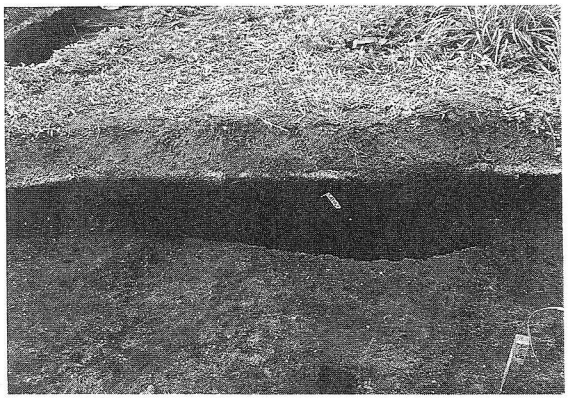
第３号Ｔ－ピット



第３号Ｔ－ピット土層断面

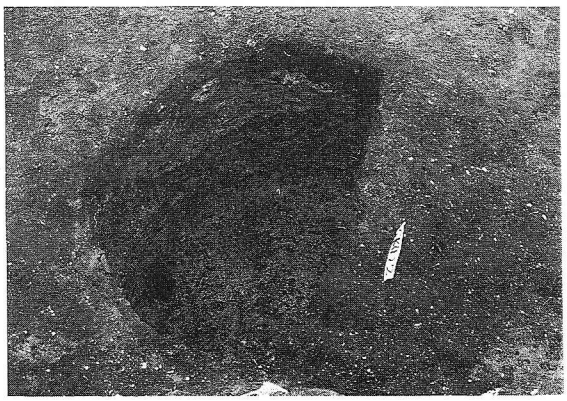


第４号Ｔ－ピット



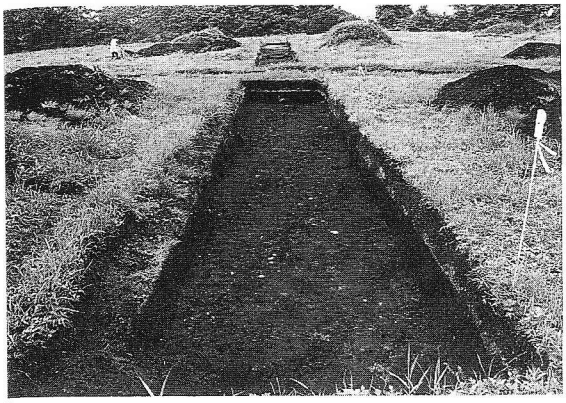
第２号Ｔ－ピット

第６号フラスコ状土坑

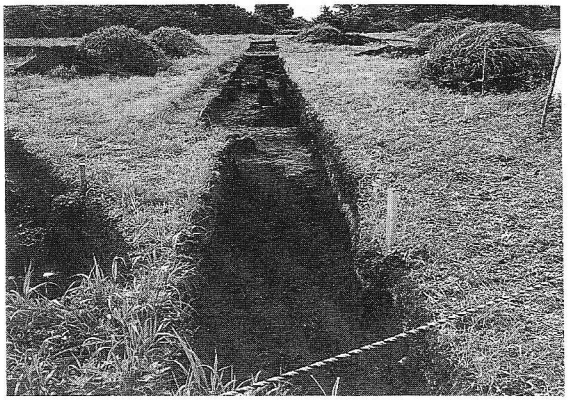


第７号フラスコ状土坑

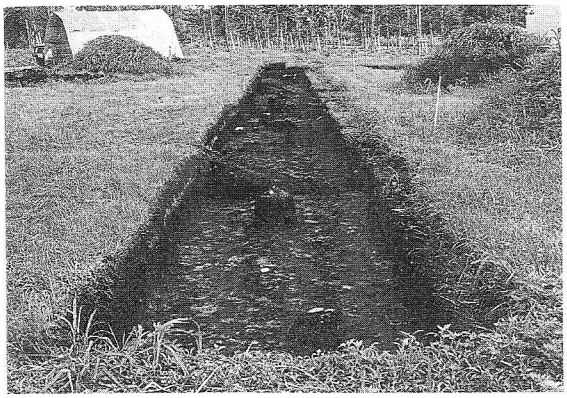
ＰＬ43　G_3区フラスコ状土坑、Ｔ－ピット



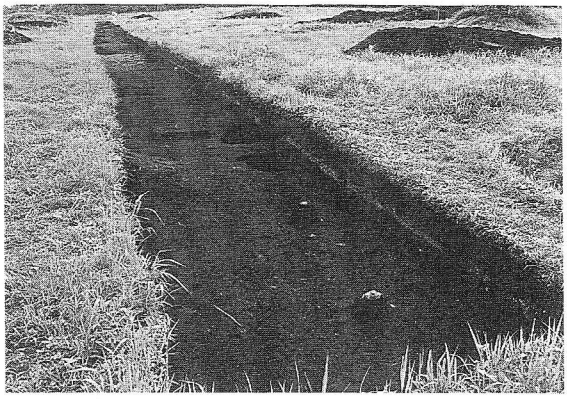
fトレンチ　SE→NW



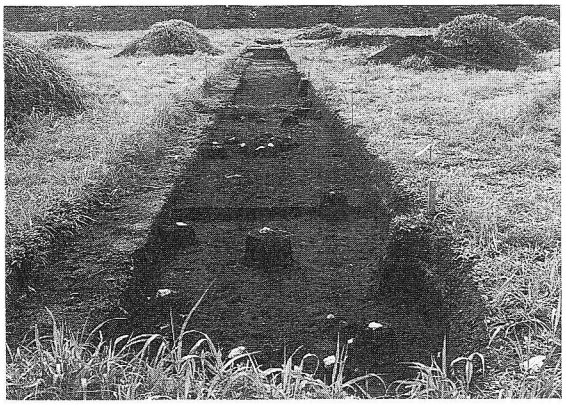
hトレンチ　S→N



hトレンチ　N→S



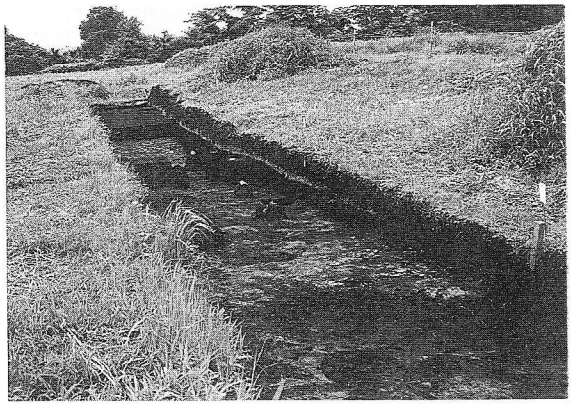
iトレンチ基本層序　E→W



jトレンチ　SE→NW

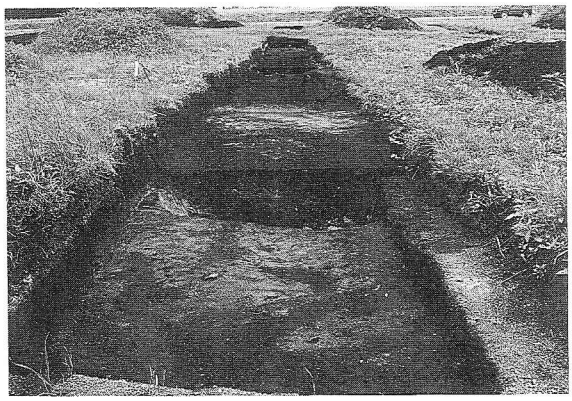
SK（T）1

PL44　G_3区遺構確認状況、Tーピット



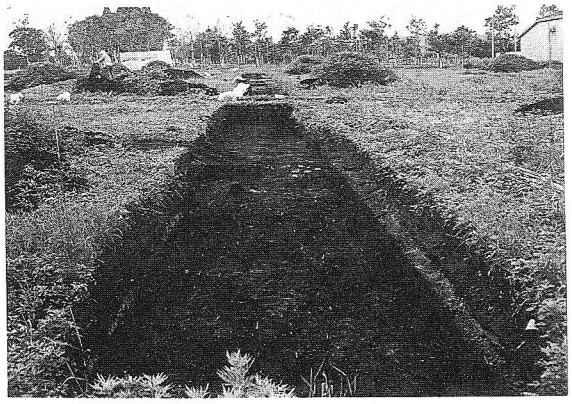
aトレンチ　S→N

aトレンチ　W→E

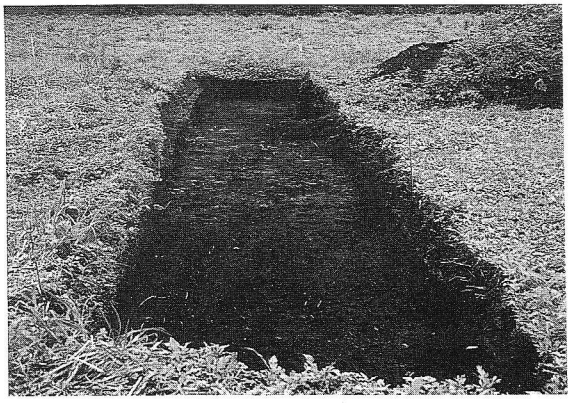


bトレンチ　NW→SE

Cトレンチ　NW→SE



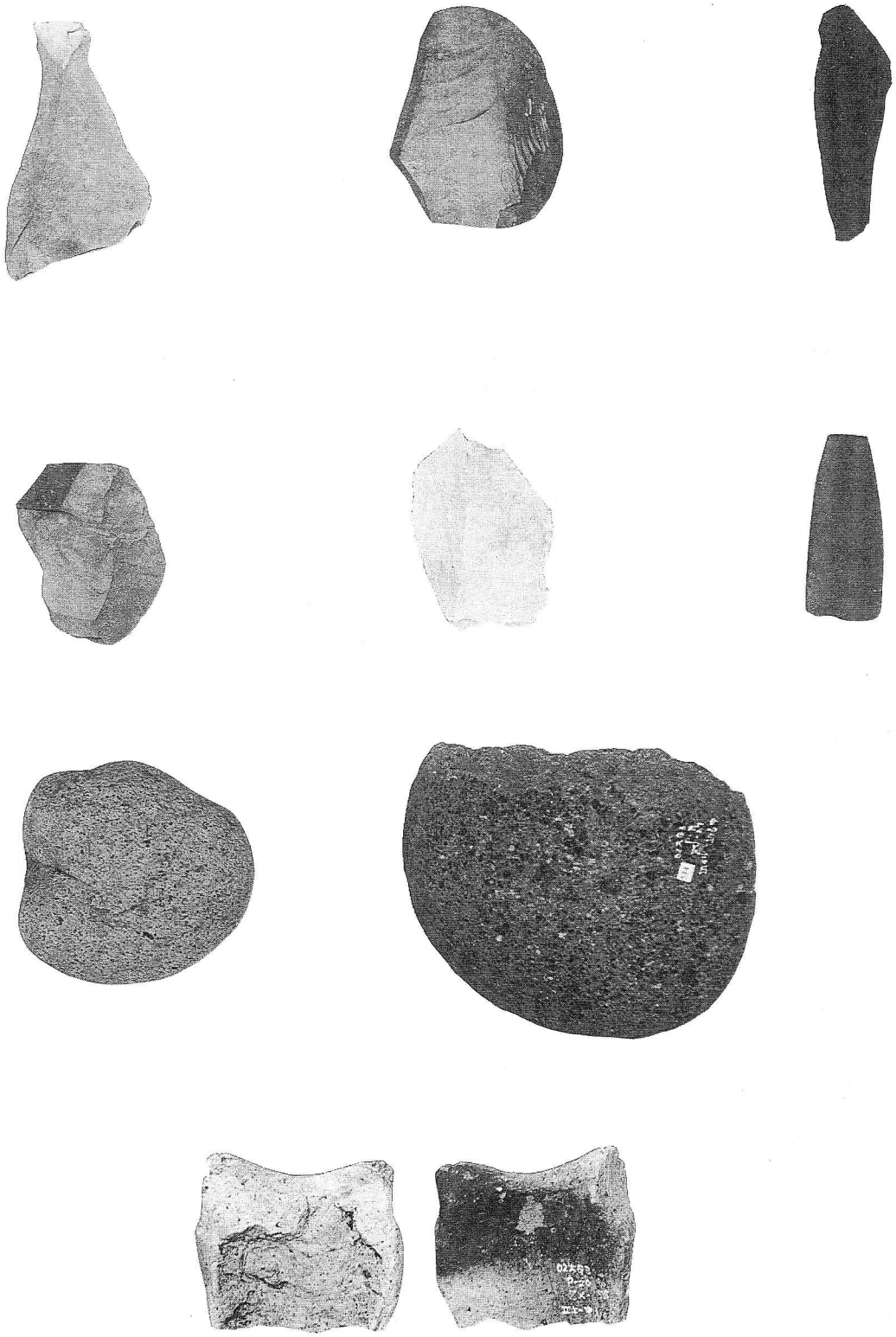
dトレンチ　NW→SE



dトレンチ　SE→NW

PL45　G_3区遺構確認状況

ＰＬ46　Ｇ₃区遺構外出土土器



ＰＬ47　Ｇ$_3$区遺構外出土、石器、土製品

鹿角市文化財調査資料72

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（19）

発行年月日　平成15年３月28日
発　行　者　鹿角市教育委員会
〒018－5292
秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
☎　0186－30－1111
印　刷　所　㈲大館孔版社
〒017－0042
秋田県大館市字観音堂316－1